THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿五年　第十二號

第二百六十一號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

六千萬同胞必讀の雜誌

主筆山路愛山

國民雜誌

第一卷第一號　十二月一日發行

世界は何日でも凡人の世界であります。英雄豪傑は此凡人を基礎として色々の働をしたのであります。此雜誌は片假名と平假名の讀める外、何等に特權のない凡人即ち最大多數の日本國民の立場から最大多數の日本國民の利益の爲めに世界と日本の政治、風俗、文學、宗教、歷史、傳記、實業、何くれとなく趣味のあり意義のある、評論と記述をする爲めに生れたのであります文章は日本人の普通に話す日本語で書きまして、始から終りまで振假名つきに致しました。（愛山生記す）

目次概要

民の聲　世と戰ふ可き我々の軍旗　たつた二百萬圓の問題

人の噂　山縣有朋　若尾逸平　下田歌子　教育界の人物

爲になる話

書界放談（中村不折）其他有益記事雲の如し

張扇　大ナポレオンと織田信長

世界の心　世界に於ける重要思潮の紹介及摘錄

影芝居　貧民病院の十分間　木賃宿の物語　東京より長濱へ

我々の戰場　長野縣治及び長野縣人　愛知縣、千葉縣、新潟縣たより

▲四六二倍版紙數約百頁表紙色刷不折意匠口繪コロタイプ寫眞版三枚挿畫數十個
一冊定價十五錢郵稅一錢　半ケ年定價八十五錢郵稅六錢　一ケ年定價一圓六十五錢郵稅十二錢

發賣元　東京神田區雉子町　振替第七九九五番　玄黃社　電話本局四四二二

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告は謝絕す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文壇翹望の三大小説

好評第五版
田山花袋先生著

妻

定價金壹圓五拾錢
郵税金拾貳錢
◉菊判箱入美本 紙數五百廿頁◉

▲わが文壇「妻」あるを誇れ!!

「妻」は花袋先生の最近思想を忌憚なく流露せる未曾有の長篇にして、著者自らも其描寫法に於て飽まで印象的に且つ客觀的の手法を試みたるを誇とせり。思ふに本書は自然主義作品中の最高位に位するものなるべし。

▲わが文壇「妻」あるを誇れ!!

田山花袋先生著
（和田英作先生畫）

縁

定價金壹圓五拾錢
（郵税金拾貳錢）
◉菊判箱入美本紙數五百七十頁◉

●花袋先生の三部作『縁』を得て始めて完し！

『生』に次ぐに『妻』あり『妻』の後『縁』出てたり。花袋先生が半生の心血を傾注せる長篇三部作は。この『縁』を得て始めて完し『生』『妻』に熟せし印象的手法が此篇に試み『妻』に於て更に新に更に鋭く新時代の男女を描出して餘すなきを見よ。

●花袋先生の三部作『縁』を得て始めて完し！

新刊
中村星湖先生作
長篇小説

影

定價金壹圓
郵税金八錢
◉菊判箱入美本 紙數三百十頁◉

▲新人の苦悶と奮鬪と戀愛とを經とし、數四の家族の遺傳と生活と運命とを緯とす、幹枯れて種子殘る悲み、花咲けども光無き恨み、狂人叫び童貞泣く。著者の靈筆や奕々、物心兩面より人間を描破して其眞實相を示さずんば已まず執筆推叩正に二箇年此書出でゝ新興文學の意義始めて明かなり

東京日本橋區
馬喰町三丁目

今古堂

振替口座九四〇七
電話浪花四六五九

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

農學博士 法學博士 新渡戸稲造先生序

巖谷小波先生序

最新刊

現代名士學修法

中學世界記者 大岳小峽先生編

四六判洋裝
頗る優美
紙數二百五十頁餘
定價五拾錢
郵稅四錢
郵券代用一割增

本書は現代名士が青年期に於ける學生生活を語つて遺憾なく其人の趣味境遇性行等各面目を發揮せり故に學修と修養に心掛くる諸士は本書に依りて勉學の方法を講ずべし

大學豫備門時代 法學博士 添田壽一
洋學校及同志社時代 法學博士 浮田和民
學生時代の勉强法 法學博士 高根義人
學生時代の勉强方針 文學博士 加藤玄智
私の學生時代 巖谷小波
英語學校及高等學校時代 文學士 上田敏
海軍兵學寮時代 海軍少將 井上敏夫
私の青年時代 島崎藤村
海軍豫備校時代 海軍少尉 市川惠治
予が動物學に志せし動機 理學博士 石川千代松
金澤專門學校及高等學校時代 法學博士 清水澄

大學豫備門時代 理學博士 丘淺次郎
私の中學時代 理學博士 寺田寅彥
第一高等學校時代 法學博士 美濃部達吉
過去は失敗の歷史 代議士 竹越與三郎
私塾及豫備門時代 文學士 夏目金之助
加納塾在學時代 法學士 杉村陽太郎
我輩の學生時代 男爵 後藤新平
私の高等中學時代 文學士 佐々醒雪
第三高等中學時代 文學博士 喜田貞吉
熊本洋學校時代 農學博士 横井時敬

發行所 東京市京橋區南紺屋町 振替東京貳〇五五四番 一星社

賣捌 目黒書店、東京堂、六合館、三省堂、東海堂、至誠堂

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



中村不折氏装釘　菊版六百餘頁

定價壹圓卅五錢　送料十二錢

小說 枯木

森鷗外博士感想文

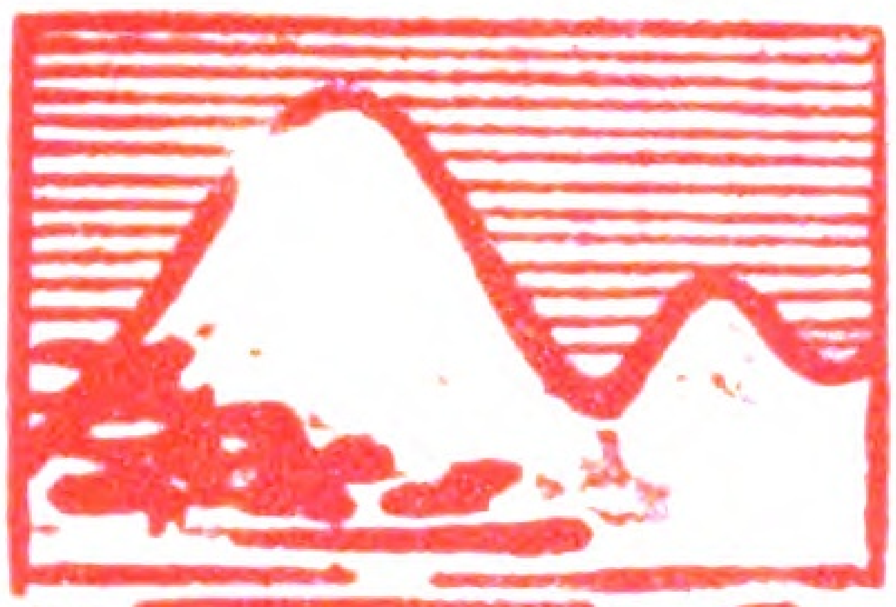
德富蘆花氏感想文

馬場孤蝶氏感想文

天馬桃太氏感想文

本間久氏著

彗星出づ!!!彗星出づ!!!▲『枯木』は全く軌道を逸したる小說界の彗星也見よ東天の怪妖星!!!徹頭徹尾酸味を帶べる好箇のノーベルにして現社會偽善の假面を剝がんとす▲有ゆる方面に徹底せざる人物を描けり、現今の學術宗教道德は徹底せざる新人を救ふの力無きを悲しむ▲享樂主義か否、自然主義か否、浪漫主義か否、主義好きの我文壇は此の妖星に對して如何の命名を附せんとするか▲『寄生木』一度出づるや新潮流を作せり、新青年氣質『枯木』は如何なる影響を生ぜしむべきか▲子女の教育に腐心する父兄は須く本書を精讀して覺醒せざる可からず▲本書の一齣野球武者修業の如き活氣縱横血沸き肉躍る、學生諸君當に讀むべし。



遲塚麗水著 山水往來

四六版装釘頗美　定價七十錢送料四錢

著者麗水氏は現時我文壇に於ける紀行文の大家なること世の既に知る處なり觀察の超越文辭の豐富、行文の流麗他に匹儔を見ず、こゝに氏が近什拾種を收めて世に公にす。旅行家の好友愛文家の良師。切に世の愛讀を冀む。



田寺寛二氏著 花ことば

中村不折氏外數畫伯挿畫

定價壹圓廿錢　送料八錢

本書は一面より見れば理學書にして一面より見れば文學書なり花につきて嚴正なる理學的解説を施すと共に東西古今花によりて現はされたる意味を説明し時に詩歌あり俳句あり英詩あり引證頗該博行文極めて流麗、文士、學生、畫家、美術家等の好參考書なり

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告は掲載を謝絶す

中央公論新年號

發刊以來、年を累ぬること二十有六、改善進步の跡年毎に著く、材料の精選、内容の豐富、今や何人も本誌を推して、海内最も讀むべきの雜誌となさゞるなし。然かれども我等の所期は未だ遙かに遠し。爲駘に鞭て明春更らに一段の發展を遂げん。乞ふ、之を己亥文壇の劈頭を飾るべき新年號に徴せよ。

本號締切までに論說及び說苑に寄稿を依賴したる大家は

丘淺次郎
三宅雪嶺
杉村楚人冠
金子筑水
竹越與三郎
福本日南
大谷繞石

の諸氏にして尚續々依賴中也。人物評論には

戸田海市
鎌田榮吉
池邊吉太郎
青柳有美
和田垣謙三
黑頭巾
魏昌卿

大隈伯論……………………朝野名士二十餘氏

あつて一代の名物伯の眞面目を躍如たらしめ又最も面白き讀物としては

酒十題…………………十名家

あり、各種の方面より酒に對する興味多き研究及び感想を集めんとす。若し夫れ小說に至ては、著者が半年の間、靜かに想を錬り、三月の間專心勞作せる二百枚の

長篇小說『犧牲』…………………島崎藤村

の外、

小栗風葉　森田草平

森鷗外　上司小劍

德田秋聲　眞山靑果

等の苦心の作を揭載すべし。此新年號が如何なる光彩を放つて世に出て、又如何に我文壇の視聽を聳かすべきは、我等の讀者と共に喜んで見んと欲する所也。

中央公論新年號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

理學博士横山又次郎新著

新刊

人文地學講話

泰西輓近の地學は總論と特論とに分ちて研究するを常とす、特論とは我國にて稱する地誌に相等するものにして、總論とは地誌の全體に通じて學術的説明を與ふるものなれば、我國にて地文學と稱するものに大略相當せり、然るに所謂地文學は主として氣界、陸界、水界、の自然顯象を説明するに過ぎずして、吾人に最も重大の關係ある人界の諸顯象に就ては、殆と全く其研究を缺きたり、是れ人文地學と題する一新科學の出でざるを得ざる所以なり、人文地學は人類の地球面に於ける分布と、人類活動の結果として地球上に現出したる諸顯象とに就て學術的解説を與ふるものなれば、以て文野の生ずる所以を解すべく、以て交通の便否、殖産の振否、國家の貧富强弱を生ずる原因を知るべし、蓋し人文地學は地學研究の效果を收むるに於て必ず缺くことを得ざる一新科學なり、教育家は言ふを要せず、苟も經世に意ある者の必讀を要するものたり

總洋布美本 全壹冊 木版挿圖及び地圖數葉入 正價金壹圓五十錢 郵税十錢

横山博士著述

天文講話 總布製全一冊 正價一圓十錢 郵税十錢

天文地學講話 總布製全一冊 正價一圓三十錢 郵税十錢

地學概論 總布製全一冊 定價九十錢 郵税十錢

地史學講話 總布製全一冊 正價壹圓六十錢 郵税十錢

發行所 東京牛込 早稻田大學出版部 振替口座一一二三

發賣所 東京日本橋本町 博文館 振替口座二四〇〇

信用なき商舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新渡戸博士序
南條博士序
實業之日本社編纂

東西名士 發奮の動機

◎國難を憂へて發奮せるもの侮辱を憤慨し發奮せるもの慈悲恩愛に感激して發奮せるもの貧困を憤慨して發奮せるもの等東西名士數十人が奮起せる動機と徑路とを雄健の筆鋒を以て記述せるもの一たび之を繙かば懦夫も決然蹶起するに至らん

上製紙 金文字入 七百頁
價壹圓拾錢 (郵稅八錢)

雨宮敬次郎翁著述

奮鬪吐血錄

◎雨宮敬次郎翁は明治實業界の一大怪傑也翁の生涯は波瀾重疊千變萬化實に小說よりも奇なり本書は即ち翁が少時より病氣吐血する昨今に至るまでの經歷を敍せる奮鬪實錄にして一讀血湧き肉躍るの感あらしむ誠に當代稀に見るの快著也

全一冊美本
價六拾錢 (郵稅八錢)

發行所 東京京橋南紺屋町 實業之日本社 振替貯金參六番 賣捌 全國各地書店

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

出廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

歳晩號の振躍

文藝倶樂部

十二月一日發行 第拾六號 正價廿五錢 税二錢半

◎演藝界 △▲△

◎長廣舌 △▲△

◎活社會 △▲△

◎忙中閑 △▲△

◎新流行 △▲△

◎落語 △▲△

■小説 前へ 生田葵山

■小説 夢の一生 小川集川

■喜劇 やきもち 田村俊子女史

■講談 二人長兵衛 神田松鯉

■劇談 演藝當座帳 岡鬼太郎

◎懸賞俳句 ◎句相撲

◎滑稽問答 ◎端唄

◎小品文 ◎新流行

其他の材料悉く天下一品
趣味横溢して歳晩の文壇
の寂寞を破る

東京 博文館 本町

[illegible]猥褻なる賣品の廣告[illegible]謝絶す

史料編纂官 女子高等師範學校教授 和田英松先生 佐藤球先生 著

新刊 修訂 增鏡詳解

クロス製 美本全一冊

▲内容見本進呈▼

定價金貳圓五拾錢 小包料拾貳錢

增鏡は世に三鏡の一と稱せられたる鎌倉時代の國文歷史にして、同時代の史實、殊に承久の御企、元弘の御恢復、皇室兩統の起伏、北條氏の專横等を忌憚なく細敍せるもの也。本書はこれが唯一の註釋書として好評嘖々たる『增鏡詳解』に更に修訂增補を加へ、全部改版したるもの。解釋詳密、考證確實、年表、系圖、人名索引、註釋索引を附する等頗る懇切を極む。國文家、歷史家、檢定受驗者は勿論、波瀾多き鎌倉時代を知らんとする一般讀書家の精讀を乞ふ

簡野道明先生校訂 國語漢文研究會編

新刊 新編 讀書作文用字訣

クロス製 美本全一冊

定價金八拾五錢 小包料八錢

本書は普通行はるゝ漢字にして誤用し易き『見・視・視・觀・覽・看・瞻』、『恨・怨・憾』、『而・然・爾』、『又・復・亦・還』、『與・共・偕・倶』等の同訓異義の虛字、助字を辯明し、更に天文・地理・宮室・器物・動植等に關する實字、例へば『山・嶺・峯・巒・岡・丘・陵・嶽』、『亭・宅・家・屋・邸・第』等の字義用法を懇切に細說し、又駢字分箋抄譯に於て、社稷・宗廟・庖厨・朋友・樞機等兩々相對比せる熟語の意義を丁寧に解釋し、『故事成語大辭』の著者として名聲高き簡野道明先生の嚴密なる校訂を經たるもの。文士、學生、教育家は勿論、苟も操觚に從事せらるゝ人士の案頭缺く可からざる寶典也

發行所 東京神田錦町 明治書院

振替東京四九九一 (長)電本局二四三八

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

卑猥なる賣品の廣告は謝絶す



中央公論第廿五年第十二號目次



女流作家小説拾篇

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

專賣特許 第五六二九九號

日記界の大革新!!

卓上カード日記

好個の歳末贈呈品なり

體裁優美 堅牢無比 價格低廉

カードを取換へると何年でも使へる

正價金壹圓廿錢 小包送料十五錢

日記帖と柱掛け暦と行事豫記との兼用

明細說明書 申込次第無代進呈

ニッケル製利附廻轉自由目瞭然頗る重寶

大好評 再版 初版賣切

和譯 宋名臣言行錄

福本日南先生校訂 小野鍾山君譯

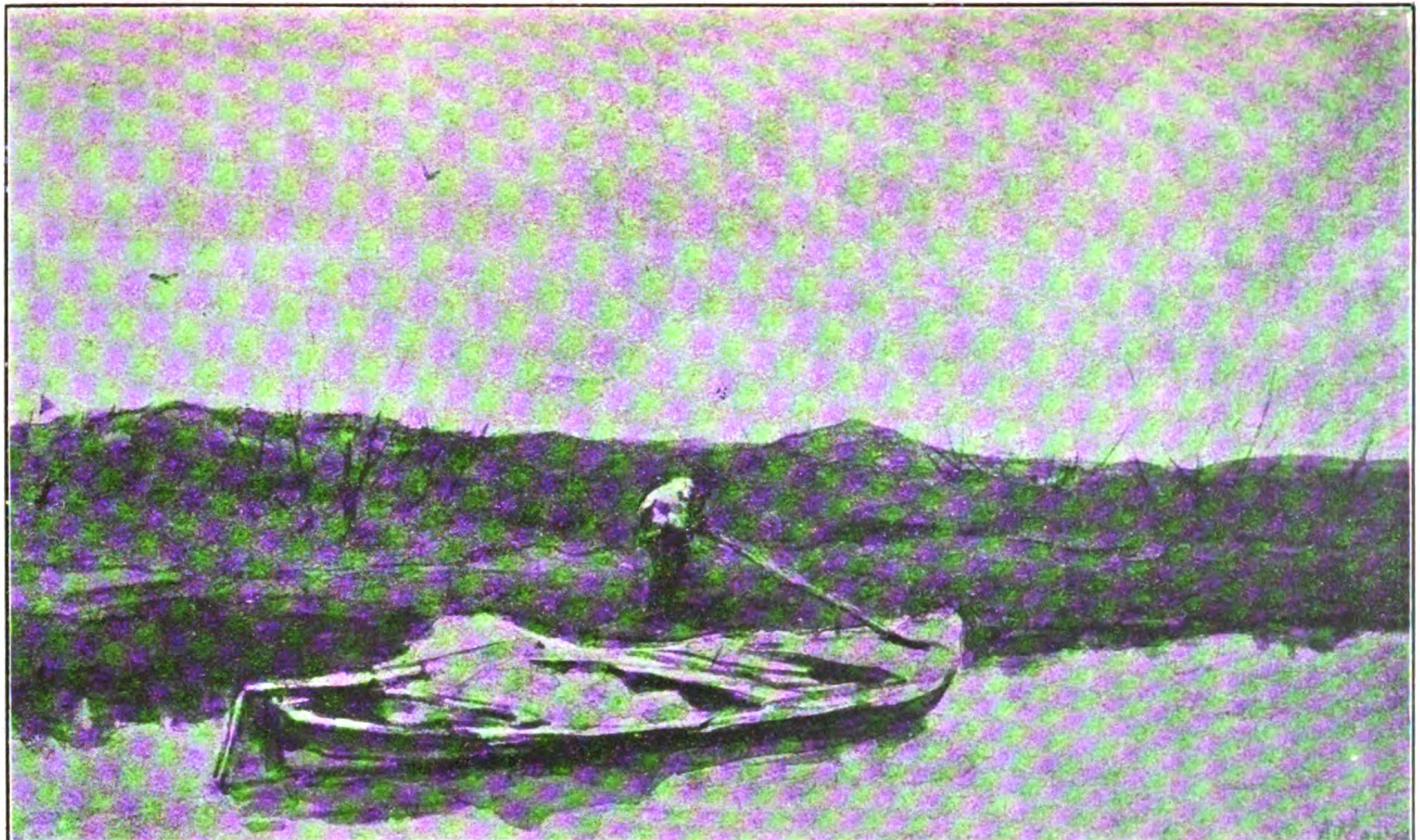
本書は朱子學の祖述者として有名なる宋の大儒朱熹の著はす所にして維新當時近思錄と共に憂國志士の愛讀せし者故伊藤公の如きは常に座右を離さゞりしと謂ふ

菊判上製頗美本 正價一圓 送料十錢

東京本郷森川町 振替一九四六七番 文成社 電話下谷三三一〇番 電話下谷三〇一一番

信用ある賣品ならぬ猥な廣告は謝絶す

The Sand Barg.



By A. MAUVE.

中央公論



第二十五年
第十二號
第二百六十一號

嗚呼亂臣賊子

(一)

刑法第七十三條に該當する犯罪者二十六人出て、爲めに大審院は特別裁判所を構成して之を審理することなれり、刑法第七十三條は天皇、皇太后、皇后、及び皇太子、皇太子妃等に對して危害を加へ、又は加へんとしたるものを死刑に處する個條とす、由て測るに此の二十六人は、我が至尊に危害を加へんとしたるもの丶如く、其の多數が無政府主義者なりといふより觀るに、現在の國家組織社會組織を破壞する目的を以て、至尊を害せんと謀れるものと推斷し得

是れ實に驚歎すべき異常の變象なり、然り、現在の國家社會の秩序を保つに於て容易ならざる犯罪者

にして、殊に至尊に危害を加へんと謀れるが如きは、純然たる亂臣賊子にして、日本國民の斷じて容すべからざる犯罪とす

（二）

其の學說より視れば、無政府主義は頗ぶる老莊の虛無無爲の主義に似たるもの也、政府を要せず、軍隊警察を要せず、市町村各々獨立すといへば、國家の勢力又は共同の資力を以て、鐵道、電信、郵便、航海の如き大事業を經營し得ざるも、無政府主義者は尙ほ之を可なりとして甘んぜざる可らず、即ち生民をして太古の恬淡に復せしむるを理想とす、但だ此の理想を實現すべき直接行動として、總て現在の國家社會の組織を破壞するがため、先づ各國の元首主權者を暗殺するに至つては、其の凶暴悖逆實に言語に絕す、啻だに人道の敵たるに止まらざる也

我が日本國民としては、現在の國家組織社會組織を至當とし、殊に民族の最貴最尊なる祖先にして、且つ最仁最慈なる萬世一系の統治者主權者たる皇室を奉戴し、之を中心として國家及び社會の組織を鞏固にするを以て、最も進歩發達する所以なりとす、苟くも之に叛するものは、國家及び社會の敵として之を排除せざるを得ず、即ち無政府主義者の如きは、其の根本思想に於て我が國家社會に有害也、何ぞ況んや直接行動と稱して、國民が國家及び社會組織の中心として崇仰する皇室に危害を加へんとするをや

（三）

無政府主義者は、人生の平和康安を以て唯一の目的とすといふ、而して其の平生戰爭に反對するに觀るも、理に於て殺人の如き凶行を敢てす可らざる筈也、然るに其の自から直接行動と稱するものを觀るに、最も凶惡殘忍なる手段を以て帝王及び貴紳を慘殺するは何ぞや

試みに彼等の犧牲となつて、慘死虐殺に逢へる列國の元首のみを擧ぐるに、明治二十年に於ける露國皇帝アレキサンドル陛下を首めとし、同二十七年には佛國大統領カルノオ氏あり、同じく三十一年には墺地利匈牙利國皇后エリザベス陛下あり、同卅三年には伊太利國皇帝ユンベルト陛下あり、同卅七年には米國大統領マクキンレイ氏あり、同四十一年には葡萄牙國王カルヽ陛下あり、僅々二十有餘年間に於て三皇帝、一皇后、兩大統領を暗殺したり、然かも彼等が弑虐を企てゝ成らざりしものに至ては、幾んど枚擧に遑あらず、歐洲列國の君主大統領として、恐らくは彼等の窺窬を受けざるものは絶無なるべし吾人の聞く所によれば、歐洲列國の多くは秘密條約を締結して、以て彼等を根絶せんとし、而して列國々民の多數も亦彼等の凶虐殘忍を惡むこと甚だしきがため、彼等の兇焰漸く熄み、其の勢力頓に衰へたりといふ、唯だ不幸にして近く其の主義の我が國に傳播するあり、竟に危害を至尊に加へんとする亂臣賊子を出すに至りしことは、吾人國民の慄然として震慄せざらんと欲するも得ざる所とす

若し眞面目に老莊學の虛無恬淡を唱ふる者あるも、吾人は唯だ時勢に合はざる淸談の閑學究として之を待たん、唯だ其の理想を實現すべき直接行動と唱へ、强ひて現在の國家社會の組織を破壞せんとし、甚だしきは則ち殺人の悖逆殘忍を敢てするに至つては、斷じて之を容るすこと能はざるのみ、何ぞ況んや

無政府主義の毒説に感染し來りて、我が國民の最大信仰の中心たる皇家に危害を加へんと爲るが如き、滔天の罪惡を犯すものに於てをや

（四）

世界に双びなき榮譽を有する我が歴史を案ずるに、至尊の弑逆に遭ひ玉へるは、安康天皇と崇峻天皇とのみ、安康天皇曾て讒を信じて伯父なる大草香皇子を殺し、其の妃中蒂姫を納れて皇后とす、皇子の子眉輪(マユワ)王母后に從つて宮中に養はれしが、竟に間を得て天皇を弑す（一千四百六十五年前）、時に眉輪王年僅かに七歳のみ、蓋し父の讎を報ずると做すも、背後に或る種の陰謀ありしに似たり、崇峻天皇英明にして、常に大臣蘇我馬子の專横を疾んで之を誅する御志あり、馬子恐れて其の臣東漢駒(アヅマノアヤノコマ)をして天皇を弑せしむ（一千三百十八年前）、北條氏が御鳥羽上皇を隱岐に、土御門上皇を土佐に、順德上皇を佐渡に配流し奉つれるは史家の大逆無道とする所、北朝の天子を擁し奉つりて、南朝の宮廷に反抗せる足利尊氏兄弟も、動もすれば逆賊の名を免かれず、慷慨激越なる勤王家は尊氏父子の木像を馘りて三條河原に梟するに至りき

德川幕府は頗ぶる皇室を拘束し奉つれりと雖も、名分に於ては恭敬至らざる無かりき、明治維新の革命は、畢竟するに勤王主義の結果にして爾來國民の皇室を尊崇すると最も敦く、皇室を國家組織社會組織の中心として、以て其の團結を堅くするの必要を感ずると最も深く、忠君愛國思想の旺盛なる、實に前古に見ざる所とす、然るに今端なくも二十有餘人の刑法第七十三條違犯者を現出す、國民豈愕然たら

ざらんと欲するも得んや、若し尊氏父子の木像を馘れる勤王家にして今在らば、而して水戶光圀、本居宣長、平田篤胤、賴襄の如き歷史家にして今存せば、此の二十有餘人に對して果して如何の言動を爲す可しとするぞ、亂臣賊子倶に天を戴かずとして、幾んど其の屍を鞭つも倘ほ足らずと爲さざらんや

彼等二十有餘人の凶謀幸ひにして早く發覺して毒焔を恣にする無かりしと雖も、若し不幸にして彼等の志を遂せしめん乎、一千三四百年來曾て有らざるの汚點を此の榮譽ある歷史に止めざるを得ざらんとす、思ふて玆に至らば、誰か悚然として畏れ、慄然として肌に粟を生ぜざらん

(五)

歐米諸國の社會主義者等は、此の二十餘人の陰謀事件に對する裁判の成行に注目し、若し一點非難すべき所あらば、直ちに起て決議せんとする意氣ありといふ、彼等の思想よりせば、此の陰謀の如き或は視て以て尋常茶飯事と做すもまた知る可らず、然れども我が日本國民に在ては然る能はず、實に稀世の亂臣賊子として、之を憎惡する最も深く、必らずや極刑嚴罰に由て、其の孽類を根絕せずんば止まざらんとす、彼等國外の社會主義者の決議すると否との如きは、素より寸毫も眼中に措くとなき也

我が裁判官に至ては、法を秉る公明嚴烈にして、苟くも枉屈する所なし、素より國民の憎惡に殉じて、故らに二十有餘人を偏罰せざるは勿論、又國外に於ける社會主義者の言動にも拘束せらるゝとなし、之に拘束せらるゝは、是れ我が堂堂たる司法權をして、社會主義者の一種の威嚇に屈從せしむるものに外ならざれば也

我が國體は世界に冠絕す、皇室の尊嚴は絕對無二にして、苟くも冒瀆するを許さず、況んや危害を加へんとするをや、我が國情及び國民の思想は自からあり、之に原きて作られたる我が法律は炳焉として日月の如し、我が司法官亦一分も之を敵ふ可けんや

桂内閣の財政策破れんとす

（一）

近時の我が外交と財政とを視て、吾人は桂內閣の漸く人望を失ふの偶然ならざるを感ぜざる能はず、僅かに其の氣運の盛滿なるに乘じて、自然に縱蕩の傾向あり、疎漫の兆して俄に收拾すべからざる破綻を生ぜんとす、蓋し必至の情勢にして、桂侯、小村伯また實に弊習の外に超脫し能はざる乎

內閣の施設にして、時に見るべきものなきにしもあらず、四坂銅山の鑛毒問題に對して、大浦男が住友家と愛媛縣民との仲間に調停せる一事の如きは、公明至誠、實に天下の人心を服せしむるに足る、惟ふに此の種の事尙ほ少からざらん、乃ち他の平凡なる內閣に在て到底看るとを得ざるもの二三にして止まらざるも、其の外交と財政との大綱に於て錯過あらん乎、人心自から離叛せざらんと欲するも得べからざるを奈何せん

（二）

先づ第一に財政方面より觀察せん、吾人の知る所によれば、桂侯は現內閣組織の始めに、專ら非增稅非募債の兩主義を揭げ、軍事費に大繰延を行ふと共に、鋭意還債に努むべきことを標榜し、其の進退を賭して諸元老の同意をも求め置きたりしが如し、卽ち現內閣の存立する明白なる意義は玆にありとす

西園寺內閣の放縱なる財政策は、痛く國民を危惧せしめたるのみならず、世の識者は齊しく之を一變するにあらざれば、財政及び經濟の前途測る可らずと做し、擧げて內閣の更迭せんことを希望したりき、故に桂內閣の組織せらるゝや、總てを通じて歡迎の聲洋々たりき

抑も日露の大戰役は、邦家非常の大異變として、極度まで租稅を賦課し、國家の信用を傾倒して以て公債を內外に募集したりき、故に戰後經營の第一要義は、租稅の整理と公債の償還とを主とすべきことと言を俟たずとす、勿論國家の地位大に進み、國務爲めに擴大せらるゝ以上、俄かに國民の負擔を寬むる能はざるべしと雖も、戰時匆卒の間に施行せる稅法の公平ならざるあり、妥當ならざるありて、負擔の均衡宜しきを得ざるもの存する以上、少くも之を整理して平正を得せしめ、一は以て產業の發達を促して稅源涵養の餘裕と爲し、一は以て偏重なる負擔を輕くして民力休養の一端たらしめざる可らず、戰役のために實際消費せられしもの十億を超ゆると多からずと雖も、軍備復舊として少からざる費額の注入せらるゝあり、戰後百般の綠に應ずるがため、若くは財政の綠施に充つるがため、募集せる公債の總額幾んど二十億に達せんとす、乃ち其の償還の方途を確立すると共に、鋭意之を償却するにあらざれば、財政の信用得て繋ぐべからず、一旦不虞の大事あるに方つては、財政上より幾んど衰亡の悲運に陷らざ

るを得ざらんとす、然るに西園寺内閣は、依然積極の方針を執ると稱し、一方には少からざる軍費を投ずると共に、一方には又際限なく公債を起さんとする形迹あり、桂内閣が之と全く反對の方針を執れるは、國民の擧げて歡迎する所にして、其の事業繰延と公債償還額の增加とが一般に謳歌せられたるも、全く戰後經營の第一要義に適したるが故のみ

桂内閣は明治四十三年度まで兩次の豫算に於て、最初の主義を嚴守したりしが故に、民望は依然として之に集中したりき、反對黨及び無識にして妬心に囚はるゝ諸新聞紙が百方して之を譏毀せるに拘らず、其の公債借換も亦中外の識者に歡迎せられて、信用は逐日高きを加へんとす、蓋し桂内閣の最も智慧ある態度は、其の成立以來の信條たる消極主義を嚴守し、飽まで新事業の經營を見合せ、嚴しく歳出を緊縮して、以て財政の基礎を鞏固にするに在りとす

（三）

然るに四十四年度の豫算を調製するに方つて、桂内閣は永く其の忍耐を守る能はず、漸く其の主義を解弛せしめんとす、世或は積極主義の美名を掲げて一世の民心を瞞せんとする政事家あるも、眞に經綸の識あるものは、之に眩迷せらるゝなくして、依然財政緊肅を株守すべし、彼の戊申詔書と共に二宮宗を宣傳し、一世を率ゐて儉素の風を起さんとしたるが如き、多少世上の非難を受けしと雖も、吾人は必らずしも之を責めず、戰後の第一要義として、財政上に消極主義を固執する以上、儉素を以て一世を治めんとするも、また一種至當の經綸なれば也、唯だ時勢の急切なる、必らずしも一より十まで其の主義を

株守し得ざるとあり、時に變通を要するや論莫しと雖も、單に急要已むべからざるものに應ずるに止めて、大綱は卽ち依然として財政緊縮を主とし、非增税非募債主義を堅守せざる可らず、然るに、四十四年度に於て、早く已に朝鮮に約一億圓を要すべき計畫に著手せんとし、二億に近き治水事業を興さんとし、甚だしきは則ち鐵道の或る部分を廣軌に改築するが如き不急の事業をも始めて、財政の破綻の之より生ずるを顧みざらんとす、僅少なる成功に意氣盛滿となりて、早くも解弛放縱の兆を顯はせしか

造艦方針に變更を來すがため、六ヶ年間に海軍費八千餘萬圓を增出するとは、蓋し已むを得ざるものとして、何人も異言莫かるべく、不時の洪水に由る水害復舊費約七百萬圓も、亦避くべからざる支出とす、然れども彼の所謂根本的治水策のため、約一億八千萬圓を要すると、朝鮮の交通及び港灣修築等のため一億圓を要すると、東京馬關間の鐵道を廣軌式に改むるため、二億三千萬圓を要するとは、果して緊急已むべからざるものなりや否や、現內閣存立の主義たる非募債と枘鑿相容れざるものに非ざるや否や、財政の緊縮を破るものに非ざるや否や、吾人は敢て之を桂侯其の人の衷心に問はんと欲す

（四）

根本的に治水策を立つると、經世家の當さに意を用ゆる所たらざるべからず、然れども桂內閣の企畫ずるが如く、全國に涉りて約五十條の河川を改修するは果して經世家の用意といふべき乎、眞に根本的に治水の方圖を立てんとせば、第一に森林の繁殖を策らざるべからず、人口の增殖と田圃の開墾とに考へて十二分の制限を加へざる可らず、是れ豈治水に門外漢の多き臨時治水調査會の能く企畫し得る所な

らんや、殊に全國に渉りて五十の河川を擧げたるが如き、深く其の成否を問はず、單に地方の民心を收めんとする政略に出でたるにはあらざる乎、近時地方鐵道の布設を好餌として、以て選擧に勝を制せんとする政黨あるに視れば、內閣も亦治水の看板を掲げて地方の人氣を取らんとするに非ざらんや、思ふに此の治水土工の先後を爭ふがため、地方に一種の運動興り、延きて政黨の內部にも葛藤を生じ、或は走つて政府と結托せんとするものを生ずべし、即ち一方に地方の人心を收攬し、一面には用て以て政黨操縱の具とす、治水の事、洵に妙ならざるに非ざるも、唯だ之がため一億八千萬圓の國帑を糜するに至ては、吾人斷じて與する能はず、況んや之がため財政上に破綻を生ずるの虞あるをや

姑息といはゞいへ、先づ水害の最も甚だしき河川より先きに改修すべし、現に着手中のものを完成するを第一とし、次に荒川の如き屢々慘害を帝都に及ぼすものを修築し、他の諸川の如きは、眞に根本的の治水策を案出し、且つ財政の都合を計りて徐ろに工事を起して可也、始めより全國に渉りて一億八千萬圓の鉅費を豫算するが如きは、斷じて財政の調節を保つ所以にあらざる也

（五）

朝鮮の併合は既定の事實にして、今や評論を挾むの餘地あらず、然れども其の所謂成功と稱するに任せて、一氣に多くの事績を擧んとせば、功に誇りて財政を顧みざるの譏を免かれざらんとす

政府者のいふ所によれば、朝鮮の事業に要する一億圓は、猶ほ臺灣事業費の臺灣銀行に於けるが如く、朝鮮銀行に由て其の供給を受くるが故に、國庫に累を及ぼすこと無しといふ、然れども朝鮮と臺灣とは同

視すべからず、臺灣は土地豐饒にして物產甚だ豐かなるが故に、鐵道港灣の修築に由て富度頓に進み、優に事業費を償却して餘力あるも、朝鮮は貧寒にして物產乏しく、現に京義線の如きは貨物少くして常に損耗を免れず、鐵道の廣軌式なるも、却つて營業費多くして損失の多きに苦めるに非ずや、斯の如き地方に於て、假令港灣を修め、道路を開修し、鐵道を延長するも、到底急に事業費を償還し得ざるや言を俟たず、卽ち一億圓の負債の竟に流れて國庫の負擔と爲るや數の免がれざる所とす

港灣の改修、道路の開鑿、鐵道の延長は、全然效力なきにはあらず、朝鮮の開發を促すに缺くべからざるものたるや論なしと雖も、之に由て臺灣の如く急速に富度を增進し得ざるを以て、能く財政上に餘裕あるや否やを考慮して、以て徐ろに着手するを可とす、財政の緊縮を必要とする今日に在ては、全く不急の事業なりと斷言せざるを得ざるのみ

朝鮮を治むるには、先づ從來の苛政を除却し、簡易を以て生民に臨み、仁德を行ふを最要とす、產業政策は之を第二に措くも決して遲しとせず

桂侯は朝鮮併合の後、國庫より增出するもの僅かに百萬圓に過ぎずといへり、然れども朝鮮の公債三千萬圓の五分利のみも、年々百五十萬圓を要せずや、李王一家に贈與するもの亦年々百五十萬圓を要せずや、併合の後、冗費を節せしものあるがため、差引き百萬圓の增出となれりとは雖も、若し此の三百萬圓なくんば更に妙ならずや、且つ此の百萬圓增出の中には、軍事費の增加を含有せず、若し之をも計算せば、併合後に增出するもの何ぞ百萬圓に止まらん、此の增出あるに拘らず、更に不急の土木のため、

一億の鉅費を擧げて竟に國庫の負擔と爲すを顧みず、無謀にあらずして何ぞ

（六）

東京馬關間の鐵道を廣軌式に改めんとするに至ては、更に不急の甚だしきもの、財政の緊縮を要する最も切要なる今日、內閣は何故に之を敢行せんとする乎、吾人は寧ろ頗ぶる疑はざるを得ざる也

桂侯曰く、安奉線の改築成就せば、現在幹線の聯絡將さに成らん、馬關東京間は即ち之と聯絡して世界の公道と爲るや必せり、敢て廣軌に改めざるを得ざる所以也、況んや巴奈馬運河開通の曉は、東京馬關間殊に缺く可らざる幹線たるをやと、請ひ問はん朝鮮海峽に鐵橋を架して、列車直ちに飛んで日本と大陸間を往返すべきか、且つ巴奈馬運河より太平洋に掛けて、列車の直通する大發明あるべきや否やと

歐洲より西伯利亞、滿洲、朝鮮を經て日本と往返するには、必らず船に由て朝鮮海峽を渡らざる可らず、乘客も貨物も必らず乘換を爲さゞるべからず、故に日本の鐵道は必らずしも大陸と同一式なるを要するとなし、否、露國が其の本國と西伯利亞とを通じて、獨り異風なる五呎の廣軌式を用ゆるを看よ、單に大陸のみにても同一式を要すとせば、何ぞ露國に追つて四呎八吋の普通廣軌式に改めしめざる、然らずんば何ぞ佛獨墺の諸國と我が滿韓の鐵道とを擧げて、露國と同一の五呎式に改めざる、日本內地の幹線、殊に馬關東京間を廣軌式に改めざれば聯絡し得ずと做すは、三尺の童兒を欺むくよりも倘ほ淺薄の言のみ

歐米人の日本に來るや、多くは多島海の好風光を觀賞するがため、海路に由るを普通とす、純然たる

遊覽客にあらざるものと雖も、尙ほ多くは此の航路を取る、故に神戶釜山間の直航路を開き、玆に快速力の汽船を往返せしむるを妙とす、彼の義勇艦隊の櫻丸型船舶は、大抵神戶馬關間の汽車と同速力を以て駛走するにはあらずや

廣軌式改築を以て聯絡のためといふは採るに足らざる愚說のみ、然らば單に輸送に就ての得失如何鐵道專門家の說によれば、神戶馬關間を悉く複線と爲し、且つ東京馬關間の現在軌道に改良を加へて勾配を寬にし、カーブを減じて成るべく直線と爲し、且つ貨物車のため出入の停留場に改良增築を行はゞ、優に現在輸送力の五割を增加すべしといへり、果して然らば、桂內閣は先づ何故に之を實行して以て差當りの急に應ぜざるや

且つ現在の狹軌々道を其のまゝとして、新たに廣軌々道を布設するも、果して相當の貨物乘客を得べきや否や、桂侯の表示せる計數によれば、此の廣軌改築費二億三千萬圓なりといふ、故に之を四分利と するも、年々九百二十萬圓の純益を擧げざるべからず、今や國有鐵道全線の純收益と雖も、一千萬圓を出づると多からず、然るに僅かに東京馬關間に於て、更に新たに九百二十萬圓の純收益を擧げんとす、其の難き何ぞ多言を要せんや、此の點よりいへば、東京馬關間を廣軌式に改築するは、全く損益計算を度外に措ける無謀の妄擧と稱するも過當ならじ

廣軌式の利は、速力を倍加するに在り、牽引力を大にするに在り、故に苟くも貨客多數にして收支相償ふ限り、廣軌式の狹軌式に優さるや多言を要せずとす、然れども貨客少くして收支相償はざる地方に

在ては、寧ろ輕便鐵道を便とすべく、其の少しく進歩したる處に在ては、寧ろ狹軌式を利なりとす、我が國の東北地方に在ては、今尚ほ往々にして廣軌式の利害如何の疑はしく、却つて狹軌式を相當とする地方なきにしもあらず、神戸馬關間に在ては、汽車常に汽船と競爭して貨客の吸集に務めたりしことを記憶せよ、大阪神戸間、又は新橋横濱間に於て、現に汽車が私設の電車と競爭するを視よ、此の憫れむべき狀態を以てして、尚ほ且つ新たに廣軌式を布設するに非ざれば、輸送の能力を完ふしがたしとする乎、吾人は素より絕對に廣軌式を非とするものにあらず、明治政府が始めて新橋横濱間に鐵道を布設し、次て東海道線を延長するに方つて、廣軌式を採用せざりしを以つて挽回すべからざる失敗と爲すもの也、故に我が國庫の餘裕を以て、優に之を支辨するの力あらば、則ち廣軌式に改築することを望むと雖も、財政の緊縮を要すること今日の如き時代に方つては、之を不急の事業として、敢て反對せざるを得ざるのみ

更に吾人をして遠慮なく言はしむれば、今の國有鐵道の經營には誤謬多し、例せば、汽車と竝行する電車の開通を特許しながら、强ひて之を壓倒せんとし、寧ろ客を電車に讓りて以て列車輸送力の不足を補はんとせざるが如き、私設鐵道を虐して其の聯絡を妨ぐること、彼の上武鐵道會社の列車をして、伊勢崎の終點より前橋に至ることを許さゞるが如き是れ也、私設會社の列車と雖も、貨客の便宜のためには、彼我共に車輛を官私線に出入せしめ、軌道使用料を精算して以て相互に相益せば、全體に於て輸送機關の能力を十分に發揮せしめて、竟に國益に資する所以なるに、今の我が鐵道院には此の眼識と度量となし、彼の遞信省が地方の人口一萬にも滿たざる小町村に、不急要なる三十個未滿の電話を架設し、却つ

て大都會の急を要する電話增設を遲緩ならしむるが如きも、又緩急先後の序を失して、徒らにハイカラ政治を悅ぶもの、鐵道經營にも亦往々此の臭氣を帶ぶるは、識者の顰を摘む所ならずや

（七）

吾人は必らずしも鐵道改築費の公債たると否とを窮追するものに非ず、公債たるにせよ、たらざるにせよ、國用の負擔たるや一のみ、桂侯を始め、多くの政黨新聞紙が頻りに公債たると否とを爭論する、知らず果して何の意ぞや、今の如き國用を節し、堅忍して以て消極主義を守り、一意財政上の緊縮を要する秋に方つて、早く已に不急の事業を起し、國庫の負擔を增加すると五億以上（朝鮮事業費一億、治水費一億八千萬圓、廣軌改築費二億三千萬圓）なるが如きは、財政上の調節を破るもの也、放縱疏漫、覺に內閣存立の意義を滅却するもの也、抑も邦家異常の變あり、外勢また意料の外に趨りて、之に應ずる融通を要せば、政事家必らずしも膠柱守株を要する莫し、其の之なきに方つて、自から解弛して軌を逸し、戰後經營の第一要義を忘る、危い哉實に岌々乎たり、桂侯今にして悟るなくんば、民心彌よ離れてを自滅の機會速かに至るべし、何ぞ況んや別に外交上にも失體なきにあらざるをや

公論

セオドル・ルウスヴエルト氏の道徳觀及び政治觀を論ず

田中王堂

一、何人が哲人にして同時に帝王なりや

近世生活の特徴と看做さるべきものは色々あるが、人あり中に就き、何が最も重大なる意義を有するかと問ふならば、私はそれは實行と、理論とが年を逐ふて其の間に交渉と、塡補との程度を増して來る傾向であると答へるに躊躇せぬものである。かゝる傾向は、社會の機關が次第に複雜となり、個人の活動が次第に強烈になるに隨つて、遺憾なく生活を支持し、發展するためには實行と理論とは、共に各相互の關係より、その本來の機能を反省することが必要となつたからである。斯くして、今日に於ては必然に正しき實行は正しき理論を蘊蓄するものでなければならず、眞の理論は眞の實行を胚胎するものでなければならぬことゝなつた。されば毎に當面の事件を料理することを目的として居る實行家も、成るたけその意義の側面よりそれを爲さうとし、常に普遍の問題を解釋することを目的として居る理論家も、成るたけその志向の側面よりそれを爲さうとして居る。つまり眞の實行家は、同時に眞の理論家であり、眞の理論家でないものは同時に眞の實行家でないといふことになつたのである。今日に於て

は、實行家と、理論家との相違は、彼等が有する資格より來ること少なくして、彼等の置かるゝ境遇より來ることの多いことを私は知るのである。

古聖プレトーは『哲人にして初めて帝王たるべし』と揚言したのであるが、彼が考へて居つた意味に於いては、これまでまだ哲人であつて、同時に帝王であつた者は一人もない。これより先といへども帝王にして哲人てある者、或はあり得る者は、恐らく一人もあるまい。併し哲學を、人間の理論的方面を統一するといふ意味に於て『科學の科學』とし政治を、それが人間の實行的方面を統一するといふ意味に於て『藝術の藝術』とするならば、たとひ事實に於ては、哲人たると同時に帝王たるものはあらず、或はあり得べからずとするも、資格に於ては、(プレトーの考へて居たのとは異なる意味てはあるが)哲人たると同時に、帝王たるものはあり得、又あらなければならないわけてある。實際の生涯は一つの學徒に止まると、一つの治者に止まるとの如きは別に問ふところてはない。たゞ覺悟に於て、前者が學問の志向を忘れず、後者が政治の意義を忘れないならば、猶ほ前者は哲人にして而して帝王たり、後者は帝王にして、且つ哲人であると云ひ得ることゝ思ふ。私は古今、東西、四千年の歴史を通觀して、確にこの尊貴なる稱號に値する二人の者を發見するのてある。その一人は佛國の名相チルゴウてあり、も一人は英國の賢儒ジエ・エス・ミルてある。

二、ルウスヴエルト氏の天才の特徴

嘗て故伊藤公が、最後に歐山米水に周遊を試みたとき、歸來切りに米國前大統領ルウスヴエルト氏の人物を推稱して措かず、彼を擬するに當時世界の治者の中第一等の人を以てしたさうである。英雄獨り英雄を知る。是等一代の人傑が、白宮殿裡に邂逅した時に、互に默契するところの多くあつたことを私は陰かに想憶する。たゞ私は如何なる特徴に依つて、伊藤公がルウスヴエルト氏を天下の第一人と見做したかを聽くを得ざりしを遺憾とする。見渡すところ、世界の政局に於て、博遠雄深の治者の寥々たる曉天の星も啻ならざる

今日に於ては、やはりルウスヴェルト氏を以て天下の第一人と看做さなければならぬことをこゝに私は告白する。哲人にして治者たる資格に於てルウスヴェルト氏を取つて之をチルゴウと、ミルとに比するに、その醇乎として醇なる點に於て、大いに遜色はあるやうに思はれるが、然も猶ほその見識を通俗にし、その覺悟を卑近にしながら、さきの二先覺者の衣鉢を一身に收めて居る者はルウスヴェルト氏である。

哲人たると、治者たるとに論なく、苟しくも一世に卓絶せる天才は、必らず彼の理論と、實行とに於て、次の二條件を滿して居ると私は信ずる。

一、彼は複雜なる機關に就て、その單純なる目的を看取する。

一、彼は平凡なる現實の中に、その向上の理想を發見する。

等が即ちそれである。そして私がルウスヴェルト氏の言論と、行動とを窺ふに、彼は優にそれ等の條件を滿たし、而してそれ等の大いなる覺悟に依つて一切の方針を決定して居るやうである。彼が個人の堅實なる品性は、あらゆる善良なる施政の根柢であると說き、また國際間に正義と、平和とを保障するの道は、獨り軍備を擴張するにありと宣ぶる如きは、彼が理解の如何に玲瓏にして、彼が覺悟の如何に直截なるかゞ知らるゝことゝ思ふ。

三、ルウスヴェルト氏の道德觀及び政治觀は時勢の所産なり

併しこれはたゞ彼が思索の方法の樣式に過ぎぬのであつて、それだけでは、まだ少しも彼が事件の措置の內容に觸れては居らぬ。苟しくも人性の極致と世態の趨歸とを洞察して、百年の長計を建てることを、政治の本務と心得て居た賢明なる政治家は、ペリクリイスでも、またはエドマンド・バアクでも、前に擧げた二條件を滿たすだけの資格は優に有つて居つた。さればルウスヴェルト氏の道德觀及び政治觀として特筆さるべきものは、他になければならない。而して、それこそ、私が本論に於て、その意義と、價値とを判ぜんと欲す

るところのものである。

あらゆる指導者の思想の如く、彼の思想は一面より觀れば時代に依つて支配されて居るが、また他の一面より觀れば時代を統率して居るのである。固より詳細の點に亙つて、如何に彼が時代を觀照し、如何にそれを改造しようとして居るかといふことになると、彼が獨自の理解と、覺悟とが大に與つて居ることはいふまでもないが、それ等に大體の動力と、方向と、輪廓とを與へたものは時代の必要であることは、私がこゝで云ふまでもなく自づから明白なる事實である。

誰も知つて居る通り、今日の北米合衆國は渾圓球上未だ嘗て見ざる程の廣漠なる領土と、饒多なる人口と、豐贍なる富とを有する一大共和國である。昔にあつては領地と富力との增加は共和國の存立を劫す二大强敵として知られて居つた。今日にあつては、人々だんだんに個人と國家との關係を知り、個人が國家に對する責任を感じて來た爲めに、昔のやうに領地と、富力との增加が、直に共和國の存立を危くするものとは云はれなくなつたが、兎に角、これ等がやゝもすれば、國家の鞏固を害し、市民の健全を傷くるの傾向あることは、共和國に治者たる者の一日も忘れてはならぬ要件である。

北米合衆國は、今や獨立戰爭を去ること百三十年、又、南北戰爭を去ること五十年である。彼等は不毛の荒野を開拓した祖先の勞苦を甞める必要なく、又戰爭や政爭に於て先輩が忍んだ困難を忍ぶ機會をも有たぬ。今日の亞米利加人は、久しく昌平の天地に馴れて漸く鋭力と、猛志とを失はんとして居る。これに加ふるに、殖產は日に增し、富源は日に加はるに隨つて、文明の利器はそれに必然附帶する弊害とを伴つて日に長じて居る。此の間にあつて、或る者は物質主義の信者となつて、黄金の前に跪拜し、或る者は、享樂主義の奴隸となつて、奢侈を本尊とし、又極めて少數ではあるが勢、是等の孰れにも行かれざる或る者は虛無主義に耽溺して、縱に現存する一切の制度を呪詛して居るのは眞に止むを得ないわけである。

併し概して云ふと、亞米利加合衆國は決して衰變の國民ではない。その血管には青春の血の流れる有爲、有望の國民である。されば亞米利加の國民が今如何に迷路にさまよひ、過失に陷るとも、それは青年の時期に有り勝の一時の出來事に過ぎぬ。その生命と、活力とにして旺盛なる限りは、たゞそれを能く指導し、選擇する者さへあるならば、亞米利加國民は將來[illegible]に於て驚天、動地の活劇を世界の舞臺に演出することの出來るものである。

併したとひ一時のものなりとも此の懸念すべき状態を改善するが爲めに、或る者は藝術を獎勵して、世人に人生の美妙を翫味するだけ修養を與へることが必要であると説くのである。或る者は學術を鼓吹して、彼等に社會又は國家の意義を理解するだけの見識を授けることが急務であると論ずるのである。勿論これ等の何れも、それ〴〵相應な理由のあることではあるが、ルウスヴエルト氏は、これが方法として、各人をして祖國の偉大と、光榮との爲めに、一身の安逸を忘れて努力せしめんとする一種の福音を大聲疾呼して居るのである。

四、彼の奮鬪主義と、彼の帝國主義との相關

この彼の主張は彼が個人は奮鬪を以て彼の生活の要義とすべしと説く點より、時には奮鬪主義とも名づけられ、又彼が市民は祖國の擴張を以て彼の最終の目的とすべしと説く點より時には帝國主義とも名付けらるゝものである。彼にあつては、國權の擴張を主とする帝國主義と、品性の修養を主とする奮鬪主義とは、極めて密接せる依立の關係を有するものであつて、何故に彼が國權の擴張を主張するかといふに、それは個人をして、それを標的として絶えず己れの生活を緊張せしめんが爲めてあり。又何故に彼が個人の奮鬪を主張するかといふに、それは國民をして、それを基礎として出來るだけ生氣ある國家を發展せしめんが爲めてある。されば個人の奮鬪といひ、國權の擴張といふも畢竟するに單一なる目的を達する二つの方便とせらるゝに過ぎないのであつて、それを集合し、統率して居る

焦點は、國民の健全と、發展とに他ならない。

色彩は各々違ふが、奮闘と、努力とを生活の要義とした者は古來甚だ少なくはない。輓近に於てゞさへも、その顯著なるものを求むるに、カアライルの勞作主義もある。又ニイチエの超人主義もある。併しカアライルの勞作主義は、たゞに思索の懷疑より脫却するの方便として說かれたのであり、ニイチエの超人主義は、偏に現人の纖弱に反抗する宣告として說かれたのであるから、共にその對象は空漠なるものとなつて居る。ルウスヴエルト氏はもと詩人にあらずして、爲政家である。實行家であつて、情操家ではない。彼が說くところの奮闘主義即ち帝國主義は、現に米國合衆國の市民であつて、その今日の狀態を改善して、一層健全にして、高尚なる生活を實現せんことを企圖するものであらん限り、何人といへども、直に取つて以て自家の方針とせなければならぬものとして說かれて居るのてある。されば彼の奮闘主義又は帝國主義は、彼に個人の傾向を根據とし、前に祖國が國際間に占むべき職分を動力として出來たものであるといふことが云へる。彼は奮闘主義に於て個人道德の根本を明らかにし、帝國主義に於て社會政策の極致を示して居るが、彼にあつては、これは一つの活動であつて決して二つの理想ではない。如何にせば米國の市民は、將來に於て永く堅實なる生活を持續し、發展してゆくことが出來ようかといふことだけが、絕えず彼が提供し、解釋してゆかうかとする唯一の問題である。

されば彼の奮闘主義とは如何なるものであるか、彼の帝國主義とは如何なるものであるか、而してこの兩主張を結び付ける國民主義とは如何なるものてあるか。

五、彼は何故に品性を斯く重大視するか

彼が言論を讀み行く中に、最も著しく人の注意を惹くのは、品性なる言葉が頻りに提出することである。彼にあつては品性を保つといふことは、何人といへども第一に心掛くべき要件である。男子にして品性さへあれば、他に何の位の缺陷があるとも、その人は猶ほ

立派に己の本分を盡して行くことが出來る。それに反して、若し彼にして品性を缺くならば、他に百の才能ありといへども、彼は到底社會にその體面を保つことは出來ない。それならば、かゝる大切なる役目を有する品性の成分は如何と尋ねるならば、彼は品性を説明して、それは消極的の徳をも併せて積極的の徳をも包含させねばならぬと云つて居る。また品性は眞面目、堅實、己れの隣人及び己れの神に對する責任の觀念、及び聢りとした常識といふやうなものを一切包含して居るとも云つて居る。その他これに似たやうな言葉で、種々と品性の意味を説明して居るが、品性に關して彼が最も得意として居る分析は、品性を勇氣と、徳義との二要素より成り立つものと見ることであるらしい、『徳に於ける力』『力に於ける徳』といふ言葉は彼の最もしばしば用ゐる格言である。或る處では彼はこの意味を敷衍して『徳だけでは十分ではない。又十分らしくもない。力とその力を用ゐる決心とがそれに加はらねばならぬ』とも説いて居るし、又、誰でも善良なる亞米利加人たらんとならば、正直であらねばならぬ。而して又強くあらねばならぬ』と説いて居る。

私は彼が勇氣と道徳とを生活を支持する二大要素と觀ることに大した異議はない。私も人間の過失と罪惡との多くは、これ等二大要素の缺乏より來たつたことを承認する。特に黄金を崇拜し、歡樂に耽溺する風潮が、段々に旺盛になつて來た結果として、黄金の爲めには種々の欺僞が行はれ、歡樂の爲めには追々强健なる質素を失はふとして居る現代に於ては、人間の存續に必要なる、これ等二つの原始的要素を保障しようとする努力には多大の意義のあることを私は容易に承認する。嘗て燦爛たる文華を有したる希臘も、これ等の二要素を失つた爲めに亡びたのである。嘗て强大なる威力を有した羅馬も、これ等の二要素を失つた爲めに滅したのである。奢侈と、纎弱。これ等より恐ろしき强敵が共和政に取つて何があらう。私は何處までもルウスヴエルト氏の主張に同意する。

六、完全なる品性は智慧の要求を缺くべか

らず

併しルウスヴエルト氏が品性なる言葉に依て、眞に市民が現時の社會生活に處して行くに妥當なる資格を代表せしめようとするならば、氏はそれを德義と勇氣とのみより成り立つものと解釋せずして、これ等の二つの要素と同等、或はそれ以上に大切なる、も一つの要素のあることを記憶せなければならぬ。このも一つの要素とは他でもない。即ち智慧である。固より德義も勇氣も、智慧も、人間が生活といふ單一なる事業の單一なる方針を、異る側面より觀察して與へられた名稱に過ぎないのだから、實際に於ては多くの場合に於てこれ等の三つの要素は大體に結び付いて居る。併し、これ等の三つの要素が何時でも同じ分量に於て、同じ關係を以て、結び付いて居らないとからして、或る行爲をその時比較的に顯著に活く側面より觀察して、それは德義であるとか、勇氣であるとか、はた智慧であるとか假に名付けらるゝのである。私はこゝにこの見方より德義と、勇氣と、智慧とが普通に理解されて居る意味に是等を理解して、正當なる行爲の必要なる條件として、德義と、勇氣とを取る如く、智慧をも取らなければならぬと私は信ずる。いつの時代にあつても、勿論智慧ばかりては正當な行爲は成り立つまい。併しそれと同樣に、德義と、勇氣とのみにても成り立たないことは明らかである。而して今日の米國は、實に何物よりも智慧を必要として居る時代であると私は信ずる。ルウスヴエルト氏自らも或る時代と、或る場所に於ては、特に或る種の德（a set of virtues）を必要とするといふのはほんの一つのツルイズムであると云つて居るではないか。彼の聰明を以てして、何故に彼は今日の米國人に對つて、彼等が正當なる行爲をする必要條件として智慧の要素を力說せざるかを私は大いに不思議とするものである。

七、今日の米國には特に智慧の必要あり

今日米國は急劇なる產業の發達の結果として其の社會組織に急劇なる變形を與へつゝある。隨つて過去に妥當であつた生活の方法も、漸くその効力を失して、

現にそれが改善又は改革を求めつゝあるのである。併しながら、如何なる生活の方法が新しき社會組織に對して妥當であるかはまだ尠しも解決せられて居らぬ。併しこれは各人が己の生活と、四圍の境遇との關係を十分に會得した上に、刺激の起る毎にこれに適當に酬酢して行く間にのみ解決せせらる問題である。さればこれは教權に依つてなさるゝのでもなく、傳說に依つてなさるゝのでもなく、習慣に依つてなさるゝのでもなくして、全く事件に對する透觀に依つてなさるゝのである。而してこれが道具たるものは獨り智慧である。然り獨り優秀なる智慧のみである。ルウスヴエルト氏も『賢く行ふためには、先づ明らかに見ねばならぬ』と云つて居るが如何にもその通りである。併し吾人が新しき境遇に置かれた時には、明らかに物を見るといふとは、決して氏が考へる如く、傳說や、習慣や、教權に頼るだけでは、十分に出來るものではない。

今日の亞米利加人の中には、德義と、勇氣とを缺くが爲めに社會に害毒を流して居るものは多いてあらう。併し智慧を缺いて居るが爲めに過失に陷る者の少なくないことも認めねばならぬ。今日の亞米利加が經驗しつゝある多大の損失は、確かに個人の聰明が、境遇の進運に伴はないことから來て居ることを知らねばならぬ。ルウスヴエルト氏が現に戰ひつゝある惡德や、僻見の大部分は、時代に適はぬ淺薄なる個人主義と、固陋なる節約主義より來つて居るのである。而してこれ等の主張を奉ずる人々は、概ね德義にも富み、勇氣をも有つ人々であつて、たゞ彼等の缺くところのものは智慧である。實に現時米國人が是非有たねばならぬ一つのものがあるならば、私はそれは確かに智慧であると思ふ。ルウスヴエルト氏はよく瞭りとした常識(hard common sense)といふことを云つて、これさへあれば、何も要らないやうに思つて居るが、併し常識は兎角保守に傾くものであるから、時々、刻々、智慧に依つて改良され、擴張されて行かないならば、大した效能のあるものではない。神祕家なるザラツストラさへも、鷲は勇氣と、智慧との象徵として、鷲と蛇とを

絕えず伴つて居つたのである。實行家なるルウスヴエルト氏が、何うして智慧を無視し、獨り勇氣に依つてのみ生活しようとするのであるか。

八、努力の價値及び制限

ルウスヴエルト氏は勇氣の崇拜者たるに關聯して、また勞作の信奉者である『此の世にあつては努力に依らざれば吾人は何物をも得ず』『吾人は勞働は呪咀にあらずして、幸福なりと信ず』『失敗することは、固より酷し、されど未だ嘗て成功せんと試みざりしことはさらに酷し』など、及びこれ等に類する言說は彼の議論の到る處に發見せられるのである。ルウスヴエルト氏は今より十年前、市俄古府に於て爲した『緊張の生活』と題する演說の發端に於て『余は卑しむべき安逸の敎訓を說くを欲せず。余は緊張の生活、即ち苦役と努力、勞働と奮鬪の生活の敎訓を說かんと欲す』、と述べたが、彼の一代の事業は全くこの敎訓を說くことにあるやうに思はれる。

今日誰が勞作の價値を疑ふものがあらう。人類が地球の表面を改造し、改良して今日吾人が見るやうなものにしたのも、彼が百難に克ち、萬類を制して贏ち得た彼の勞作の報償である。吾人は、獨り勞作に依つてのみ、過去の文明と福祉とを繼紹し、發展することが出來るといふものである。而して若し少しても、今日米國の市民の中に、彼等が誤れる文明の過剩に中毒し、奢侈に流れて奮鬪を嫌ひ、安逸に溺れて勞作を厭ふ者が生じたとするならば、ルウスヴエルト氏の敎訓に多大の意味のあることを私は承認せねばならぬ。又その上今日の如く、各國共にその人民を敎唆し、鞭撻して、產業の增殖と、富力の增加とを謀り、それて以て、他國を壓迫し宇內の實權を掌握しようとして居る時に當つては、猶更ルウスヴエルト氏の敎訓に多大の權威のあることを私は承認せねばならぬ。

併し翻つて、も少し、深刻に、廣濶に、生活の本來の目的より見たら、このルウスヴエルト氏の敎訓は大に其の價値の變換を來すことはないであらうか。

人間が生活を持續して居るのは、彼が生活欲を有つ

て居る爲めてあることは明らかてあるが、生活欲の中には努力の欲望と共に、享樂の欲望が含まれて居ることは疑ふべからざる事實てある。人間は旋律的に勞作と遊戲とに代り〳〵從事することに依て、生活に價値と意義とを見出して居るのてある。人間が幼稚な時代に於ては遊戲が彼の常態てあつて、勞作がその變態てあつたとさへも考へられて居る。其後段々に彼は己れの狀態を改善する欲望を盛にすると同時に、その欲望を實現する力量をも併せ得るに從つて、段々に勞作の領域を廣め、遊戲のそれを狹めて來たのてあるが、人間の性質にして一變せざる限りは、永久に人間より享樂の欲求を全然取り除くことは出來ないと私は信ずる。人間の性情には如何なる教權を以てするも如何なる威力を以てするも、到底矯むべからざる或る物がある。それを無視して無理に矯めようとすれば、その反動は實に恐るべきものとなる。享樂の欲求の如きは即ち是の種のものてある。古來嚴肅主義を極端に鼓吹したものは、ストア學派にしても、清教徒にしても皆失敗に終つたのはこれが爲めてある。私は人間の生活が努力と享樂とを結合して始めて最も意味あり最も健全なるものとなると信ずるから、純然たる享樂主義を排斥すると同時に純然たる努力主義にも反對する。ルウスヴェルト氏の主張するやうな享樂を全く取り去つた、たゞ努力のみの生活の如き落寞にして騷擾なるものは永久に衆人に依つて遵奉せらるべきものではないに定つて居る。それ故私は如何うしても享樂と活動とを結び付けさして行くことが永久に最も大なる滿足を來たす生活てあると思ふ。

されば國内の奸僞を矯正し、列强の壓迫に對抗するための一時の投藥とすれば多少の意味の發見せられないてもないが、それも一たび生活本來の面目より、意義ある生活とは何物てあるか、何物が生活の價値を作るかと考へて來ると餘程修正せらるゝところがなければならぬと信ずる。人間が生活を持續するは努力に依つてそれを漸々に完成したる上、その結果を享樂せんとする爲めてあるならば、ルウヴェルト氏の主張の實

行せらるゝは、獨り各人にとつて、努力が即ち享樂であると見らるゝ時期に於てであらねばならぬ。併し人間の性情が、今日有てる特質を有し、彼の勞働が今日有てる構造を有する間は、尠なくも多數の者に在つては、ルヴエルト氏の希望の如きは、一個の空想に過ぎぬものとして永く殘らねばならぬと私は斷言する。

九、ルウスヴルト氏は祖國教の信徒なり

これより、私は觀察の步を進めて、ルウスヴエルト氏の持論の中、私がさきに國民主義と名づけたところの側面に移らうと思ふ。

こゝに彼は經世家特に現時の米國の經世家が深く注意しなければならぬ諸々の問題に就て周到に且つ明快に彼の意見を發表して居るが、その多くは肯綮に中つて居る。蓋しこれ等の議論は、彼が『思想の宇宙』に於て最も生氣あり、光彩ある部分であつて、よく然る所以は、政治家として、彼が非凡の天資と多年の修練とを有するより來たつて居るところが多いからであると思はれる。

ルウスヴエルト氏は祖國教の大なる信者である。彼は祖國の偉大なる過去を崇敬し、さらに偉大なる祖國の未來を渴仰して居るものである。彼は偉大なる過去を建設したる大人物を崇拜し、その崇拜を行爲に表はす方法としては、彼自づから、これ等の大人物の後繼者たることを示すに足るほどの偉大なる未來を開展する他に途はないと堅く信じて居るものである。私は彼が斯くまで祖國の國民性の偉大を信じ、祖國の天職の光榮を信じ得るのを見て、指導者としての彼の幸福の尋常ならざるを羨まざるを得ないものである。

『歷史を有たぬ國民は幸であるといふのは賤しき虛僞である。光榮ある歷史を有する國民こそ三倍も幸である』とルウスヴエルト氏が云つて居る如く、私は人にとつて何が幸福であるといつて彼が誇るに足る過去を有つて居る國に生れた程の幸福はないし、何が不幸であるといつて誇るに足る過去を有たない國に生れた程の不幸はないと信ずる。一世の指導者に取つては、特にさうであると思ふ。ルウスヴエルト氏は幸にして光

榮ある過去を有し更に光榮ある未來を有する偉大なる國民に屬して居る。祖國の誇りとして、大事件を語れば、必ず千七百七十六年と、千八百六十一年との大役を擧げ、大人物を說けば必ずワシントン、リンコルン、及び、グラントの三人を舉ぐるのを見ると、祖國の偉大と光榮とに對して、如何に彼が滿腔の敬愛を捧げて居るかが解る。彼の意見に依れば、亞米利加は地球上に於て最優なる過去を有つて居る如く、又最優なる未來を有つべきものである。この種の確信と、覺悟とには、他國人より見ればやゝ稚氣笑ふべきものゝあるやうではあるが、併し是れは何人と雖も、苟も一國の指導者たる者の或る點まで等しく共有しなければならぬところのものである。また私は一人と雖も祖國の過去を輕侮し、祖國の未來を悲觀して、而して偉大なる事業を爲したものゝあるのを聞いたことはない。たゞそれが尊大に流れしめずして改良に進ましめ、退嬰に陷らしめずして、向上に趨かしむるならば、斯く考へ、斯く行ふことは世の指導者に取つて甚だ大切なる事柄である。

十、ルウズヴエルト氏は聰明なる改進家なり

併しルウズヴエルト氏は決して輕浮なる樂觀家ではない。彼は思慮精到にして用意細密なる改進家（ameriorist）である。米國は大體に於て大なる光明を未來に有することは疑ふことを要せぬ事實ではあるが、自然に放任して置いては、それに汚點を與へる要素も少くないから、世の指導者たるものは、力を致してこれが統御、利導に勉ねばならぬといふのが、ルウズヴエルト氏の理解であらう。現に氏自づから『吾人亞米利加人は、全體に於ては、樂天家たるの權利を有す。併し吾人の前途に多少の黑雲の横はる事實を見ざらんとするは眞に愚のことである』と語つて居る。

人若しルウズヴエルト氏が政治家として如何に高邁なる見識を有するかを見ようとするならば、彼は宜しく Latitude and Longitude among Reformers と題する論文と、The Best and the Good と題する論文とを讀むべきであり、又政治家として彼が如何に優秀なる理想を有するかを見ようとするならば彼は宜しく Pell-

owing Feeling as a Political Factor と題する論文を見るべきである。

彼は、世の中には理想に滞する空想家と、現實に囚はるゝ實際家との多きに過ぎ、彼等が共に爲すに足らざるを知つて居る。賢人の取るべき道は獨り實行さるべき方法に依つて、理想を實現して行かうとするのみであることを彼は知つて居る。彼は如何なる場合にも、現在の狀態に安んずべからざるを知るが、併しそれを改めるには、たゞ現存の要素に愬へるより他に道のないことを知つて居る。『革命は時としては必要である。併し若し革命が習慣的となるならば、それの起る國は落下しつゝあるのである』といふのが彼の意見である。隨つて彼は妥協の主張者であつて、『正當な意味に於て、妥協は只に合議を意味する。方便主義は適當なる意味に於ては、只に現存の條件を以て出來るだけの最善を爲すことを意味せねばならぬ』と云つて居る。斯くして彼は極端なる行動を斥けて中庸の針路に就かんとするのである。『極端者が中庸者より優れたるものと考へるのは大いなる誤謬である。通例前者は、後者より道德的に強いものでない。智力的に弱いのである。前者は後者より一層德が高いのではない、一層愚なのである。』斯樣な見解よりして、事件の道義的性質を無視して、たゞ成功を崇拜するところの實際家の態度と、又正義の爲めに動くといひながら、實際的結果を蔑することを知らざる空想家の態度とを斥ける。一つの高き理想を持し、實際家的方法に依り、全力を注いでその理想を實現しようと努力するのがルウスヴエスルト氏の取る態度である。

十一、政府の法律よりも市民の協同

彼は久しく一國の政治の元首であつたが、彼は政府の効力を盲信せざる一人である。「彼はあらゆる行政や、立法よりも互に理解し、互に同情の出來る人々が集まつて政治又は社會の改良を目的として造つた團體の方が遙に効力が多いと信じて居るのである。彼は法律の力は一害を除くにも甚だ効力は少ない。まして一利を起すに到つて、到底民意の力に及ぶものでないことを

知つて居る。これが爲めに、彼は同胞感情を政治の重要なる要素として見て居るのある。

近世の社會の組織の大勢より、亞米利加にも殆ど孤立して他と交通せざる諸種の階級が生じた。それは甚だ悲しむべき狀態である。も少し位置の如何、職業の如何を問はず共同の事業と、共同の目的とに依て、個人と個人とが相集り、相識り、相助けるの必要がある。かゝる勢力の上に始めて善良なる政府は築かれるのであつて、かゝる團結の感化は政府のそれよりも一層深遠であつて、且つ耐久であるといふのである。總ての市民の意志と、利害とを代表することを標榜して居る共和國にあつては孰れの階級をも無視したる團結を基礎として立たなければならないが、斯くして職業を異にし、階級を異にする人々が、或る目的の爲めに集まるやうになれば、それ等の人々はたとその目的を實現する能力以外の相違を他人に見出さうとしなくなるから、それ等の團體より推擧せらるゝ、代議士、又は代理人にして始めて眞實際に於て、總ての階級の意志と利害とを代表するものと云はれ得るのであるとルッスヴルト氏は說いて居る。

私は今日の米國の大患の一つは種々の階級の起ること、それ等の階級の間に自然に生じ來たる猜疑の情とであるとすると、私はこの意見に就てもルウスヴエルト氏の優秀なる理解に同意するものである。

この他、彼が自由を支持するために、秩序と、法律とを尊敬するの必要なるを說くところ、勞動者に對つて眞に彼等の位置を向上せしむるものは、獨り自助の精神にあることを說くところ、同胞に對つて國民としても、個人としても、等しく缺くべからざるものは品性であると繰り返し、繰り返し說くところ、また彼等に對つて昌平に馴れて文弱に流れず、何處までも祖先の有つた鐵石の性質を維持することの大切なるを說くところ、最後に、道德上、及び精神上の改良は商業上及び工業上の繁昌よりも一國の盛衰にとつて一層重大なる關係あるを說くところ、いち〳〵適切の教訓として私は是等に對して滿腔の同意を表することが出來

る。

十二、ルウスヴエルト氏は哲學や科學や藝術の價値を解せず

併し私が彼の意見に對して一の遺憾とするところは、彼が近世社會の支持と發展とに重大の關係ある學問と、藝術との効力を發揚するとを忘るるのみならず、反つて輕蔑したる傾きのあることである。固より彼は一國にとつては、一つの大きな釘製造所の持主よりも、一個の詩人の方が大切であると云つたり、又科學や、文學や、藝術や、探檢の如きは國民の上に最も大なる名譽を齎すものであるともいつたりして居るが、彼の所論の精神を察するに、一般人の常識や、恒德を擴張し、改良し行くところの學問や、藝術が、如何程近世社會の鞏固と、發展とに貢獻するところがあるかといふ問題に就ては、ルウスヴエルト氏は餘り考察を費して居らぬやうである。ルウスヴエルト氏が暫らくも念頭より離さざる國民の常識と恒德とは大切なるものであるには違ひない。併し今日に於ては特に米國の如き日に月に進歩する共和國に在つては、所謂常識なるものも、所謂恒德なるものも、常に新らしき境遇と、必要とに順應する樣に常に改良されてゆかなければ何の役にも立たない。否弊は反つて多い。而してこれを改良して行くところのものは、全く氏が國民生活に照して十分に其の價値を認めて居らないやうに見える、哲學者、科學者、藝術家の職分である。私は天才を單に天才として尊重するの理由を毛頭見ない。たゞ天才にあらざれば、生活に新しき眞理を發見して、公衆をして新しき進路を開拓せしめることが出來ないから、天才を尊重せんとするものである。若し社會の狀態と、民衆の信仰、又は理解との間に矛盾、衝突の起つたときに、彼等にそれを指摘し、それを調整して吳れる者がなかつたならば、百の常識あり、千の恒德ありとも、活路を開くに於て大した役を爲すものではない。今日米國の社會狀態は特に生活法の改造を要求して居るのであるが、何の位無識なる黨人の政見や、固陋なる牧師の道德觀に依つて、それが損害を受けて居るかをルウスヴエルト

氏は知つて居るであらうか。私は一國の文藝が段々進み、その人口が段々殖えるに隨つて、哲學や、科學や、藝術の竭すべき役目は段々多くなるの眞理を觀得せんことをルウスヴエルト氏に望むところのものである。

十三、ルウスヴエルト氏は平和主義者にして武斷主義者なり

最後に若し私にして彼の政論のうち、帝國主義と名づけらるべき部分に就て全然、觀察を怠つたならば、私は忠實に道德家たり、政治家たる彼の見解を遺憾なく考覈し盡した者とは云へないであらう。

國際間の問題に就て、彼が非凡なる思想家であつて、同時に超群の經世家であることは、彼が平和と、軍備との關係を明快に理解し、而して其の結論を大膽に告白して居る一事に依つて知れる。

彼は志向に於ける平和主義者であつて、事實に於ける武斷主義者である。併し彼が平和主義者たると同時に、武斷主義者たることとの間には、少しも矛盾がないのみならず、反つて斯くして始めて、各々の資格をして意味あるものとならしめて居る。何となれば、志向たる平和は、獨り事實たる武力に依つて實現され得るものであるからである。眞に永久と平和とを地球上に建設する方法は、各國共に等しく正義に對するその主張をして、何時でも有效ならしめるだけの兵力を準備するにあるといふのが彼の意見である。國內の政治に關して、彼が空想家にもあらず、現實家にもあらずして、實際の手腕を有する理想家である如く、國際間の政治に關しても、彼は利欲の爲めに侵略を主張する現實家ともならず、情操を弄ぶがために平和を主張する空想家ともならずして、現存の狀態と勢力とを利用して堅實なる平和を永遠に確立せんとする理想家となつて居るのである。

十四、ルウズヴエルト氏の對外政策の眞意義

國際關係にして彼が興味の依て生ずるところを覗ふに、そこには二つの側面があるやうに思はれる。一つはそれに依つて國內に於ける彼が同胞の志氣を振張せんとすることであつて、も一つはそれに依つて人類全

體の幸福を増進せんとすることとてある。

輓近米國が俄に世界の政治舞臺に勢力を暢さんとして來たのは己の製造品に對して市場を海外に求むることの必要に促されたのも一つの動機となつて居ることは云ふまでもないが、併しルウスヴエルト氏の外交政策には猶ほこの純然たる商業上の利害よりも、他に更に吾人の興味を惹くところの一つの大いなる動機がある。それは彼の同胞をして出來得る限り國境外の大いなる事件に關知せしめ、それて以て彼等をして常に遠大なる希望と剛健な意志とを養はしめようとするのてある。彼は常に男性の標本をワシントン、リンコルン、及グラントに索め、而してこの中の二人は軍人てあり、他の一人は戰時の大統領てあつたことは、特に吾人の最も注意すべき事柄てあると云つて居る、彼の考ては軍人または戰時の政治家が最も大いなる品性てあり、天才てあり、隨つて人間の最も高き模範てある。それてあるから、彼の同胞をして立派なる市民の資格を得しめんには、是等の大人物を陶冶した境遇と、機會とに似た境遇と機會とを與ふるを一番の捷徑とする。而してそれは彼等をして一國の消長の依つて懸かる國境外の事件に常に留意せしむることに在るといふのが彼の意見てある。

世界に野蠻の要素あり、動亂の禍根の存する限りは、武力を以てそれ等を芟除するのは文明國の義務てある。それてあるから、武力を用ゆべきに、それを用ゐず、姑息の方法に依つて一時を糊塗しようとすると、反つて戰爭よりも一層悲慘なる結果を生ずることがある。

斯くして『若し此の國民が單に西半球の支那たらずして、地球上の他の國民の間にその義務を爲さうとするならば、海軍と、陸軍とは、其れが常に提げねばならぬ劍と楯とてある』と揚言し『國民の第一の義務のその國境内にあることは勿論てはあるが、それが爲めに全地球に於けるその義務を負ふことから解除せられるわけに行かない。若しそれがさうすることを嫌ふならば、この國民は人類の運命を造り上げて居る他の國民の間

に立つて、一つの位置を得やうとする自家の權利を捨てるものである」と揚言しつゝ、彼は熱心なる軍備擴張論者となり、又領土擴張論者となつて居るのである。米國人にして他國を支配するの勇氣なきが爲めに、或は費用と、手數とを恐れるが爲めに、平和を口實として、軍備を縮小し、或は領土を放擲しようとする者は、ルウスヴエルト氏の意見に隨へば、單に祖國の罪人たるのみならず、又人類の罪人であるのである。何となれば、領土を擴張することは蠻人をして平和に霑浴せしめることを意味し、軍備を充實することは國際間に平和を維持することを意味するからである。

斯くしてルウスヴエルト氏は最も明白に、最も男らしく、國際間の關係を支配する最後の而して又た最優の原理は、今も昔も"Might is Right"であると云ふ彼の確信を宣告して居るのである。尤もルウスヴエルト氏は重もに米國と他の劣等なる國との間の關係に就て語つて居るのであるが、併しながら殆ど文明の程度を等しくする二つの國民の間の關係にしても、最後の決定に到つたならば、餘り變つたことはあるまいと思ふ。なる程この場合には、利害が衝突して一とたび道德關係が絕たれた後でも兩方の實力がほゞ相拮抗する場合には、直に干戈に訴へるといふことは、相方に非常な損害を及ぼすことであるから、互に其の結果を熟慮するの必要はあらうが、兎に角こゝにも、やはり"Might is Right"が最後の、而して最優の原理であらねばならぬ。されば私は今日に現存する國際の關係の甚だ幼稚なるを慨歎するよりも、寧その間の赤裸々の事相を明快に、且つ大膽に述べて居るルウスヴエルト氏の男らしき態度を稱揚するを禁じ得ない者である。

國際間の問題に關して、ルウスヴエルト氏の意見を理解するが爲めにくれ〴〵も忘れてはならないことは、氏は決して正義も、正直も、公平なる措置も忘れて居らない。たゞ兵備の實力がその後援を爲すにあらざれば、百の正義、千の正直、萬の公平なる措置あるも、何の役をも爲すものではないといふのである。私は國際上の問題に關して一々ルウスヴエルト氏の見解に同意

を表することは出來ぬが、兎に角、私は彼が何處までも儼存する事實を正視し、これが方策を講ぜんとする實際的理想家たるの見識と膽力とに深く敬服する者である。（完）

國家の秩序と思想主義

文學博士 建部遯吾

（上）

近頃我國では内務行政と教育行政との機關が連合して、思想主義に對して行政上の干渉を加ふることを初めたといふので、世間では大分矢釜しくいふ模樣である。其爲す所が一黨一派の利益を擁護するとか若くは或特別なる位置の一人の都合の爲めにするとかいふ事ならば、其事の何たるを問はず、素より識者の裁判廷の判斷を乞ふ必要なく、其違法非理なるはいふまでもなき事である。然しながら其目的が國家社會の秩序を維持せんと欲するにあるならば、茲に初めて問題を生ずるのである。

言ふまでもなく、國家社會は自ら己れの秩序を維持するの義務と權利とを有して居る。秩序なき所に進歩はない、行政の一目的は國家社會の秩序を維持するにあるから、其任務を全うするが爲めに、或必要なる手段を取るのは止むを得ぬ事である。

思想主義と雖も國家社會を組織する人民の思想に於て成立し、其發表は同じく國家社會の中に於てし、其影響も亦同じく國家社會の他の人民に向つて行き亙ることであるから、到底、國家社會の秩序を助くるか紊すか、此二つの外に見樣はないのである。夫れ故に、行政當局者が思想主義に向つても常に監督の眼を離さ

ざるは當然の事である。

只之に對して問題となるべきは、當局者が取る所の手段が果して其目的に有効なるべしや否や、及び行政機關が取り得る如何なる手段も効能を有せざるやの如何にある。

行政機關が取り得る各種の手段は如何にするも思想主義に無効なり、とは多くの人が言はんとする所である。成程從來の歷史上かゝる類例もある。例へば羅馬法皇がコペルニクス、ガリレオ、ジョルダノブルノ等の地動説を壓迫せんとて、或者は之を捉へて牢屋に投じ、或者は之を燔殺にした。斯くの如く强大なる威力を用ゐて極端なる手段を行うても尙地動説の傳播を如何ともすることが出來なかつた。況んや手段が之よりも微溫く、而して思想主義が之より更に普通人民に解し易い、普及性の大なる如き思想なるに至ては、到底行政機關の力を以て、思想主義の發生、發育、發展、普及を止むることが出來ぬ、とは好んで人の用ふる推論てある。然しながら一歩を退いて冷靜に考察すれば、此推論は淺薄で、イソップ物語にある、風と太陽とが旅人の外套を脱がせるに力比べをした所が、風の暴力は旅人をして益々外套を身に緊着せしめ、而して太陽の溫味は却て之を脱がしむるに成功したといふ話を忘れたものである。

凡そ行政上の手段を用ふるに、餘りに數々然拘々乎たれば、却て其効を失ふ。世間によくいふ重箱の隅を楊枝でほじくるといふが如き、叉大紘急なれば小紘斷つといふが如きは、行政上決して當を得たる手段ではない。我輩は敢て行政官に一の新格言を呈したい。行政の力は化學的の力にして物理的の力でない。阿古屋琴責に於て重忠のやつた手段の如きは東西古今の行政當局の參考となるべきものと思ふ。羅馬法皇の取つた手段の如きは固より甚しく誤まつたものであるが、其誤まつたものゝのみを見て、直に一切の行政手段は思想主義を防ぐ力なしと斷ずるは非常に無謀の事と言はねばならぬ。

暫らく之を一層小社會なる家庭敎育について論じて

見やう。家庭に於ては、積極的に或思想を其子女に與へ得ると共に、兎角子供は近處の惡るい子供と交つて、惡るい思想に感染せぬと限らない。其場合に於て親の執るべき手段は、即ち國家社會に於ける行政官の執るべき手段に比すべきもので、親といふ特別の勢威を以て其子女を救ひ得べき如何なる手段を取るも差支ないのである。それを如何なる手段も無効なりとて捨て置くべきものといふならば世人は之を笑ふであらう。行政當局が思想主義を取締らんとするも亦親の子に對すると同一の理由より出るのである、

昔、漢の高祖が關中に入つて秋毫も犯す所なく、父老と約するに法三章を以てした。其第一章に人を殺すものは死なんとある。人を殺すといふ事は行爲であるが、之も思想より生じたものである。今日殺人を研究すると、病的の殺人罪もあるが大抵は思想から來るのである。其中には自ら死することを顧慮せず殺人罪を犯すものもある。斯る種類の人間には高祖が如何に死を以て脅かすも殺人を思ひ止まらしむることが出來ない。然し大多數の殺人罪人には死を以て報ゆるぞといふ事で思ひ止まらしむることが出來る。今日に於て總ての行政上の手段を無効なりといふは大早計の議論である。

扨以上述べたる所によれば、結局我々が詮議すべきは、第一今日の所謂社會主義、自然主義の類は國家社會の秩序を紊すや否や、第二、現政府の取つゝある方針手段が、果して此思想主義を輕減し、若くは鎭壓し得るやの問題である。

(中)

第一の問題については嘗て我輩が一二の新聞記者の質問に答へた如く、今の所謂社會主義は危險のものなるはいふまでもない。自然主義に至つては我輩年來の敵である。當局者が目を附け初むるよりも前から我輩は之を撲滅したいと思うてゐたのである。

抑々我輩の學べる所を以て判斷すれば、方今の我國の社會主義は、全く無政府主義に限られつゝある。其極端なるものは無政府主義に之を掛けたもの、極端な

らざるものも虚無主義者て、いづれも幼稚なる原始時代の遺物てある。此三類の中、第一虚無主義はあらゆる國家的權力に反對し、威力に反對し、機關に反對し、機關たる個人に反對し、其れを絶滅せんとするものてある。聰明なる讀者は我輩が重句法を用ひて之を説明せるを見て、如何に彼等が病的なるかを明瞭に看取せられたてあらうと思ふ。一切の國家の權力に反對するは議論の外として、機關に反對するは所謂坊主を憎んて袈裟を憎むの類てある。機關たる一個人に反對するに至つては殊にいはれなきの甚しきものてある。某々の機關を憎んて、其機關を占むる某々を憎むとは何ぞ。道徳上の罪すら、其罪を憎んて其人を憎まずといふてはないか。況んや國家の權力に反對するよりして一足飛びに機關に於ける一個人を憎むに至つては健全なる頭腦の敵てある。その論理的推理の能力の薄弱なる與に憫然の至りてある。

我國の所謂社會主義者の中に尠からざる虚無主義者を出すは我輩外國から歸つたものゝ意外とする所てある。虚無主義と無政府主義との區別は、無政府主義は凡そ國家機關の當局者に國の内外を問はず反對するのて、虚無主義は例へば露國に見るが如く、自國の是等の人々に向て極端なる危害を加へんとするのてある。此事抽象的にいへば格別てないが、實際的にいへば、八逆の最大罪を犯すと犯さゞるとの區別て、非常に重大な事てある。

我國の社會主義者の中に最も穩和なるものに數へらるべきものは、其實歐洲傳來の思想とはいひながら、佛國社會主義の極めて初期に於て見るが如き一時の世態に激して一片の理想より敢て社會改造を企つる連中てある。社會を研究して見ると、實に高尚複雜なる有機體にしてなか／＼心の儘に改良などの出來るものてない事は、中學程度の社會學を學んだものゝ知る所てある。一個の時計を壞しても之を時計屋の手にかけなければ分解することが出來ぬ。器械たる時計猶然り、況んや有機的たる人間社會の改造に於てをやてある。我輩は斯くの如き人々の志の善良なるを認むるも其見識

の足らざることを惜むのである。社會主義は爾來佛蘭西に於て十八世紀のバヘウフ、カベーよりサン、シモン。フーリエー。ルイ、ブラン其他の傑士輩出し、殊に十九世紀後半に於ては獨逸にロードベルトス。マルクス。ラッサル續いてエングルス等を經て、今日に於ては大學の經濟學者に移り、穩健なる社會政策と進化したのである。偶々穩健ならざるものあるも、此れ緻密なる學理を理解する能力なき僅少の徒輩のみに限られ、大多數は皆穩健なる社會政策になつたのである。然し此穩和なる幼稚なる原始的社會主義の、今日に唱へられて、社會の秩序を紊すは間接である。然し間接てあつても、斯るものが居るが爲めに無政府主義者を生じ、又虛無主義者をも生ずるのであるから、其點は大いに顧慮しなくてはならぬ。要するに現今我國の社會主義なるものは國家の秩序に對して危害を及ぼすものたるを斷言するに憚らぬ。

自然主義に對しては餘り多くの言を費やすの必要を見ない。斯くの如きは血氣の未だ定まらざる青年輩より出てたる病的現象の一である。婦人に血の道あり、一定の年齡より一定の年齡に至るまで尋常の婦人に必らずあり。然し往々十五才以前にも之を見るが如き不自然にして病的なる女子もあると同じく、青年文士などにも精神的に此女子に比すべき病的なのがある。かくの如き人々によつて唱へらるゝ自然主義は動もすれば其方面に病的現象を起し易い青年に向て多少危險なるはいふまでもない。之は社會の秩序の上よりいふも又青年の健全なる發達を害せらるゝ國家の損失よりいふも、歡迎すべきものにあらざるはいふまでもない。

（下）

已に第一の問題に向て簡單なる答を與へたが、進んで第二の問題たる我國行政當局の取りつゝある方針手段の批判に移らう。

我輩は不幸にして此點について論議する充分なる自由を有しない。何となれば、我輩は之を取締るべき行政當局てない。而して一方には他の職責を有する官吏の一席を有して居る。官吏てありながら、自己分外の

他の職責を勝手に品評するは官憲の秩序に於て些か缺くる所あるを免れない。故に遺憾ながら只大體論をなすに止めざるを得ぬ。

そこで暫らく百姓論を試みるならば、今の行政當局の爲す所を見るに、多くの事務に於て然るが如く餘り事務的ならざる仕方が此場合にも行はれはせぬか。今其二三を思ふまゝに申さば。

第一書籍の取締。我々の如く平常書籍の取扱に心を用ふるものをして、圖書館術（ビブリオグラフィ）を應用して、危險なる圖書の名目解題を作らしむるならば、日本のは勿論の事世界の著書に亘つて、根本的に過不及なく之に注目を拂ふことが容易てある。然るに仄かに承れば我國では歐米の原書ならば差支なしといふ事である。苟も危險思想を取締るといふならば歐米も日本も何の異る所がないのてある。殊に現今の社會主義者などと騷ぐ連中の火元は歐米の書籍を直接に讀んで一知半解のまゝ之を傳播するやうな徒輩にあるので、若し歐米よりかゝる書籍が渡來しなかつたならば當局の頭腦を惱ます問題も少かつたであらう。然らば今日歐米には危險思想が最も多くあるからして、歐米の書を除外するといふ事は、源泉を清めずして末流を彼此いふといふやり方て、事務的ならざるの致す所てある。如何に行政官に三面六臂ありとて、又内閣書記官長に常識勝れた人があつたとて、書籍の事にかけては圖書館の小使の方がよく知つて居る。政府がいくら八釜しくしても、歐米の書物には一指を染むる能はざることを示すのは、實は當局の威嚴に關し、從て政策の得失の問題となるのである。此點は實に大いに注意しなくてはならぬ。露西亞或は獨逸墺太利の如き國でも、外國より入る圖書には相當の取締をやり、外國の新聞雜誌は公安を害する恐あるものは若干期間販賣を許さない。文明國は自ら其社會の秩序を維持するの權利義務があるから斯くの如くするのは當然の事である。自由放任は古き十八世紀の思想である。雉子の頭を隱して尻を隱さゞる如き今日の當局のやり方はどうも感心出來ぬ。我輩は原書に對する取締なき事から、現今の當局が果して世界

に對して自家の所信を斷行する決心を有するや否やを疑ふと共に、一般世人をして當局の施設の鼎の輕重を問はしむることなきやを危むのである。

第二、擧動の取締、無政府主義虛無主義のものが不幸にして我國にあるから、主義よりも擧動の上よりして明白に國の安寧秩序を害するものとして之に向て適當の手段を取るべきはいふまでもない。之について素より我國の官憲もヌカリがなからうから我輩は言葉を加ふることを謹む。

第三に自然主義に對して教育上の取締をせなければならぬ。文學上の製作物に對しては、文學といふものは、其製作品が直ちに社會に發表になり。社會の人心に快感を與へたるや否や好影響を與へたるや否やによつて作物の良否を判斷するもの故、文學は矢張り社會以外に立つことが出來ない必至の運命を持つて居る。故に世の文士が如何に喋々するも文學の絕對自由などは無意味である。然し玆に我輩が一策として呈すべきものがある。若し文學が萬一社會以外に立つの道即ち純然たる學問上の參考品としてのみ成立ち得るならば、右の如き主張も存在の理由を持つて來る。即ち若し文藝院の審査を受くるのみて、一冊も社會に賣出さぬならそれて差支がない。然しこれは殆んど自家撞着の議論て、社會に賣らぬならば小說を書いた趣旨に協ぬてあらう。要するに教育は社會の中堅てあれば、自然主義の如きを取締つて、社會の正當防衛の任務を盡すべきは當然である。

第四、割據の弊習。從來の我官憲は兎角各省に割據して、豫算の分捕爭などを事とする風あつた如く、何事にも一致することが少かつたが、近來は內政教政協同して事に當るの美風を開くに至つたのは我輩の賀せざるを得ざる所である。今日の如き社會主義や自然主義などの取締に關しては我は積極的、我は消極的などいふ事なしに協同して目的を達せられんことを希望する。

第五、凡そ政府には防遏的政策と助長的政策とある。一つのものを防遏する爲めにそれと反對のものを助長

するは古の明君賢相の用ひし所である。我輩は我當局が現今の社會主義を防遏するが爲めに講座社會主義の人々が執る所の社會政策を實行し、又奬勵するを以て極めて有効の事と考へる。之を怠らずやれば前述したる三つの社會主義の中、少くとも其最も穩和なるものは此治療法のみによつても治療し得るのである。

第六、此點に於て多少遺憾なるは、教育上の自然主義驅除法である。從來の教育行政家は多く法律家で、從て勿れ的素養の人を教師にし、勿れ的人物を養成しやうとして居る。教育は一面に於て大いに積極的でなければならぬ。吉田松陰の松下村塾から伊藤俊輔、品川彌二郎を初め幾多の豪傑を出したが、是れ皆松陰が此等の人に壁を塗らせたり屋根を葺かせたりした積極的教育の爲めてある。中頃福澤翁の如き、所謂楠公權助同一論などを唱へて極端な平凡説を鼓吹したが、それは取るに足らぬ愚論てある。吉田松陰は三餘讀書者七生滅賊之本也、七生滅賊者三餘讀書之功也といひ、近頃廣瀬中佐が七生滅賊を格言とし實行した。あれは楠の湊川と同一である。若し千萬年に一度ある事がつまらぬといふならば、何故須田町に中佐の銅像を建てる代りに、丁稚が十露盤をかゝへて居る銅像を建てなかつたか。福澤翁の僻説から見れば中佐の銅像建立は大僻見といはねばなるまい。とんだ間違つた翻譯説がはやつた爲めに、今や我國の教育界は惰氣滿々として居る、學校は教師の寫眞である。教師に消極的無氣力の人多くして教育を振はしめやしとするのは到底出來ない相談である。我輩は我當局者が吉田松陰の如き積極的教育方針を取られんことを偏へに希望する。

之を要するに、現下の我國の社會主義自然主義に對して當局の取る所は決して無効にあらず、大いに有効なりと思ふ。只官僚として最も必要なる事務的の要素を缺くを以て、其結果意外に薄く、往々又當局の威信にも關せぬかと考へらるゝ次第である。而して是れは多く風式の行政の爲めてあるが、之と同時に太陽式の行政政策をも取らんことを望むのである、實をいへば風式行政は一時的のもので太陽式行政は恒久的事業に

屬するのである。吾輩は此點に於て我當局の熱心なる研究を望みたい。區々たる現今の世論の批評などは何等傾慮する必要なしと信ずる。(終)

日南放言

福本日南

人の長を取りて我の短を補ふといひしは、過去に葬り棄てたる舊思想のみ。

人の長を取り、人の短を取り、而る後ち現時の帝國は在り。

斯くの如くして世界の文明は、悉く此東海の帝國に集中せり。

お家騷動と毒殺の妙味とを學び得たるは、支那文明輸入の賜には非ずや。西園寺内閣を社會主義なりと誣ゐて毒殺したる者は誰ぞ。平生の學ぶ所に背かずと稱揚す可し。

桂内閣——西園寺内閣——桂内閣——而うして又寺内内閣歟。其の都度閣員の顏觸には多少の異動なしとせず。

然も政治は依然たる閥家の陳套のみ。憲政の運用とは赤の他人に過ぎず。是れ舊劇お家騷動の丸出しのみ。支那文明の妙味は此に在り。

賄賂の妙用は露西亞文明、朝鮮文明を輸入して、國内に磅礴せり。武臣も錢を愛すれば、文臣も尙更錢を愛し、請願も賄賂、請負も賄賂、貸下も賄賂、拂下も賄賂、賄賂を解せざる者は、畢竟當世の俊傑に非ず。

文明の波及する所は、置郵して命を傳ふるよりも速なり。國民一般大小公議の議員を選擧する、亦皆賄

賂の多少に聴かんとす。端的是れ對露戰捷、韓國併合の所得なる歟。

獨り是のみには非ず。佛國文明を輸入して、玆に自然主義はあり。穴隙を鑽りて、人の娘を唆そり、出合を約して、人の女房と密會す。

獨り是のみならざるなり。避妊の術は上流よりして、漸く下流を簸蕩し來る。亦是れ佛國文明の一惠澤。

獨り是のみならざるなり。無政府主義まで露西亞文明の副產物として、そろ／＼輸入せられんとす。是に於て乎…………吁忌はし。

抑々最初に獨逸文明を輸入して、國家社會主義に隨喜渇仰したりしは誰れ。

人は飽くこと無きに苦む。旣に隴を得れば、又蜀を望むといはずや。

ホーヘンゾルレン家の世々の當局、自ら進みて國家社會主義の權化となる。社會主義は即ち一なり。保守社會主義――舊教社會主義――新教社會主義――高座社會主義――革命社會主義等の其下に鬱勃し來るは、即ち是れ必至の理勢のみ。

十年の上に、ツモラン夙に之を指笑して、十年の下に再たび同一人をして其眉を顰めしめんとする國はなき歟。存處そこらを尋ねて見たし。暗に何物かゞ雙眸に映出せん。

桂侯爵は當世第一流の大財政家なり。其政策は丸の內――兜町との兩間に往來せり。政策の妙用は此區域を出でず。

侯爵は慧敏、外債なるもの丶運用如何に從ひては、一國の富實を增進するぐらゐの事理は、百年の昔より承知し盡せり。然も今日は言ふ可き秋にはあらず。

今日は眞面目腐りて、何れの所の處にか匍匐し、外債は國を亡ぼすものなり。一國の畏る可きは、只此債なり。西園寺は過去に彼れだけより外は償却し得ず。太郎は年々より多く五千萬圓づ丶を淸還すと。忠君愛國是に於て乎これあり。侯爵は丸の內だけに天下第一等の勤王家を幻映せり。

倫敦に於ける我公債の相場、只の一パーセント下落するも、影響は直ちに兜町に十パーセントの下落とな

り現出せん。株屋の憂懼は此に在り。侯爵は前宰相よりもより多く五千萬圓を償還せらる。それだけ倫敦市場に於て見る可き公債の價額を維持し得ん。株屋の信頼は此に在り。侯爵は此町だけにて亦又當世第一流の大財政家たることを失はず

但だ其れ流石の大財政家も關稅問題だけは少々凹みなり。英國に聽かん乎、國論を奈何す可き。國論に聽かん乎、我唯一の金主に其背を示されんことを是れ恐る。

此處亦お家一流の常套、帝國議會の下院を壓せる有限責任通過請負黨と妥協の一法を剰せるのみならん。

關稅に關する日英の衝突

法學博士　戸水寛人

關稅問題に關して日本と英國との交渉が纒まらず、頗る行悩みの體となつて居る。夫れについて世間或は日英同盟の如きも頗る危機に瀕して居るかの如く噂する者もある。然し之は甚だしき淺薄なる議論て一笑の價値だもない。何故なれば日英同盟は元、貿易上の理由より起つたものにはあらずして、此同盟を存立せしむる根柢の原因は、今日に於ても尙儼然として存して居るからである。

抑々日英同盟なるものは世人も熟知するが如く明治三十五年に出來たものである。此同盟の爲めに英國人も利益を受けて居るし、日本人も受けて居る。其當時露國は朝鮮に於て跋扈し、滿州に於ても亦好きな事をやつて居つた。三十三年の團匪事件に於て滿州を占領してから僅かに二年しか經たぬ時てあるから跋扈するのは當り前てある。若し日本が英國と同盟すれば朝鮮に於て日本の勢威が揚るのみならず、萬々一戰爭ても

あつた時は非常に便利である。故に日英同盟といふものは日本とつて極めて必要なものであつた。

英國の方からいつても當時印度の防備が餘り堅固でなかつた。印度の兵隊は二十二三萬あるが其中英兵は七萬人許りて、他は皆土民兵である。其上印度には所々に獨立國がある。勿論外交權などは英國に任せてあるから國際上に所謂完全なる主權國ではないが、尙彼等は獨立國と稱して居る。そして此等は必らずしも英國に心服してゐない。只力足らざる故屈して居るのてある。だから一旦事ある時は彼等にも備へて置かねばならぬ。て國境に備へ得る兵數は先づ十一二萬のものてある。加之クエッタ(Quetta)の要砦も今日の如く堅固てなかつた。露國は中央亞細亞鐵道によつて澤山の兵士を送りメルヴの方面からヘラットに進み、更にカンダハールに押寄せ、餘り勞せずしてクエッタを攻むることが出來た。故に英露衝突することあれば印度の防備は甚だ心細い譯である。若し日本と同盟して置けば印度の防備の都合がよい。且つ又英國は西藏に多少勢力を扶植したいといふ考を持つて居つた。陸軍大佐ヤング、ハスバンドを派遣したのも之が爲めてある。而してそれはなか／＼困難であつた。若し日本と同盟して置けば此點も都合がよい。何故英國が西藏に勢力を扶植したいかといへば、領土の擴張といふ事も其一理由に相違ないが、主もなる理由は茶の貿易といふ事てある。元來西藏には支那茶が入つてゐた。北の方は青海の近傍の丹噶爾(ダンカール)方面から、南の方は蜀の南なる打箭爐(ターチエンルー)方面から入つて居つた。然し此兩方面とも西藏に入るまては數箇月かゝる。之に反して印度茶を西藏の首都拉薩(ラッサ)に入れるには困難がない。カルカッタから大吉嶺(ダージリン)までは鐵道があるから譯がないし、大吉嶺からブータンとネパールの間なるシッキムを越して拉薩まて行くには三週間位て澤山だ。故に英人はどうかして印度茶を西藏に賣り込みたい。又西藏から持ち來るものも澤山ある。毛皮、礦物を初め其他いろ／＼ある。此貿易上の利益を占めたいといふのが英國の主もなる目的であつた。國防といふ事も一つの目的てあつたに相違

ないが、此方面には露國の侵害する危險が左程ない。又印度北境は疏勒、大食、キルギツ等の人種が居る處て道路險隘だから是れ亦露國から侵入し難い。露國侵入の道はどうして西北方のクエツタ方面からであつた。要するに印度國境の防禦、西藏貿易の利益、此二つの理由よりして英國は日本と同盟を結ばんとしたのである。

今日に於ては西藏の狀況も印度の狀況も昔日と異つて居る。先年南亞戰爭に於て雄名を轟かしたキツチエナー將軍が印度防禦に力を盡した結果非常に善くなつた。又露國も日露戰爭に破れて攻擊力弱くなつた。けれども大體からしていふと、印度の防禦が未だ充分といふ事が出來ぬ。又滿洲朝鮮に於ける日本の地位も昔日と異つた。けれども之も亦大體からいへば一旦事あるの日、英國と結んで置く方が、日本の利益である。

要するに日英同盟は兩國の利益である。此事柄は貿易に關係はない。關稅問題は到底日英同盟の根柢を動かすの力がない。況んや僅かに二三百萬圓の關稅の爲めに英國が此同盟を捨つべき氣遣はない。だから關稅の事については、日本は成るべく法律で定めたものを固執する方が利益であらうと思ふ。之が爲めに英國の商人の感情を害し、延いて兩國民の交誼を薄くすることとは免れまいが、然し之が爲めに日英同盟が根柢から動くといふ氣遣は決してないのである。

且つ又日本の關稅は決して重い稅ではないから英人は自己の利益のみを主張して日本に反對するに及ぶまいと思ふ。

關稅改正を行ふ前に當つて小村外相が英國に下相談をせなかつたのは手落だといふ人もあるが、正面から斯く攻擊を加ふれば多少利益であるから必ずしもわるいとはいはぬが、然し翻て他の一面から考ふれば若し下交涉をしたならば英國は果して承諾したであらうか恐らくは左樣に行くまい。然らば何處までも關稅を高くせんとするならば小村のとつた方針には多少の理由はあると思ふ。今日よりいへば矢張り關稅を改正した事柄を成るべく通した方がよい。若し愈々といふ時に

なつて折合はぬ時は又お互に交讓する餘地はある。初めから妥協する積りで改正して議案を議會に出す樣な事があれば、啻に日本の體面を汚すのみならず日本の將來の爲めに甚だ不利益ならんと思ふ。關稅を少し重くするといふ事は日本の物產を盛んにする爲めにどうしても必要の事である。

今回桂侯爵が關稅の改正の事は議會に上せないといふ話である。或はさうかも知れん。英國は今度總選擧を行ふ。其結果今の自由黨內閣が更迭して保守黨と統一黨との聯立內閣が出來るかも知れん。チャンバーレンは已に老えたから自ら陣頭に立つや否やは疑問であるが、チャンバーレンの主義は或點まで行はれるであらう。若し之を行へば英國の關稅は必らず高くなる。チャンバーレンの主義は本國と殖民地との關稅は之を全廢し若くは輕減し、外國から入るものには重稅を課する必要があるといふのである。若し此主義が多少行はれることになれば英國は外國に對して自由貿易主義でない事になる。さうなれば日本も關稅について新內閣と妥協する見込がある。即ち双方より稅率を輕減して話をつけることが出來る。桂侯は或はさういふ事を豫想して居るのかも知れん、而して此事或は事實となるかも知れん。此等の關係よりして關稅を今回の議會にかけるのを避けるのかとも想像される。斯くの如くなれば本議會終る迄は內閣も更迭することが無いであらう。然し關稅の事たるや外國に關係することであつて、日本の意志のみを通すことも困難である。さりながら之については今の內閣は責任を負はない譯には行かない。加之、桂內閣については日本人は已に倦きて居る狀もあるから、桂內閣は其地位を後繼內閣に讓つてもよい時がソロ〳〵來て居るのではないかと思ふ。(完)

今秋の野球撰手

黒頭巾



其一

◉市俄古來る。市俄古來る。野球の高潮は澎湃として帝國の海岸線を打ち來る。

◉市俄古來る。其の去來する、風雨の萬木を吹き拂ふが如く、颯爽たる雄姿尚ほ眼中に在り。銃劍を執つて世界を睥睨する吾が國民は、バットを揮つては、未だ米人を壓倒せず。

◉戸塚原上、市對早慶、激戰の夢、悵として覺めぬ。吾が帝國の選手が、宜しく義憤を埋抑するの處より寒風生じ、原を環りて、處々の喬木、朝々、寂しく落葉す。

◉聞說、早大の選手、臥薪嘗膽の志を磨き、軍容を新

にして、戸塚原上に、勇猛なる練習を積みつゝありと。彼等の旗幟は、之より精明ならん。吾輩は、之に因て、他日、更に、痛快なる國際競技を觀るを得んことを期待せずんばあらず。

其二

●四谷大傳馬町に鮮やかなる新書肆あり。宮子といふ、どうやら金色夜叉に緣てもありそう也。市對稻門戰の夕、嬋妍たる美婦人入り來る。娉婷十七八、羞を含んで主人に問ふ。今日、戸塚の戰況如何。

●主人慇惶す。美人曰く、私の夫、某省の官吏たり。市對早慶六回、悉く觀戰し來る。つねに棧敷に於て貴下の面を見ざること無し。今日故ありて往くこと能はず、則ち私を遣はし、來り尋ねしむと。

●戸塚の七回戰、日本人不撓の精力、バットに依て發揮せらる。或意味に於て、日露戰役以來の壯觀たるを失はず。

●戸塚の原を環りて皆人也。學生來り、軍人來り、商工官吏皆來る。盛裝せる貴婦人令嬢、亦た萬綠叢中の一點紅を爲す。米國大使來り、歐米紳士皆來り、萬國の國語は、各種各樣の活氣を以て、此の一場の中に鬱く。後れて入り來れる、女優ハ三越ヴエール頗る人目を惹く。

●現在の誇とすべき智勇、學識、皆收めて、此の觀衆の中に在り。智勇も學識も、共に、其の特殊の光采を失ひ、唯だ、東西兩半球の對抗の氣、ひとり、場を壓す。時に、宮殿下の御來觀を辱くし、伯大隈則ち老軀を驅つて陪觀す。

●戰端未だ開かれず。風雲の氣刻一刻に磅礴す。東西兩選手の入場する毎に、喝采は、戰氣を促がし來る。

●滿洲の大戰を觀ざる者は、則ち戸塚原上野球戰を見よ。世界的龍驤虎鬪の活劇は、只だ一場の中に在り。則ち此の觀戰の客は、嘗て自らバットを揮はざりし者と雖も、一擲乾坤の氣慨を起さずんばあらざる也。

●書肆宮子、早大の卒業生前掛黨のラケットの人也。四五年前吾輩の脚を枉げ臂を引きて以て、テニスを教へたる人也。

其三

●市俄古軍の雄姿は、従來一切の內外野球戰の記憶を一掃して空しくせしむ。唯だ、僅かに、數年前、怪投手マックラリイと河野の意氣とのみ、吾輩の眼中に存するのみ。

●市軍は、米國の學生。チームスに在て第一流を下らざるものなるべし。吾に於ては、慶軍は、今まさに、燦爛たる全盛の光輝を發す。早軍も亦布哇の新歸朝に際し、幾多の新研究を齎らし來る。東西對抗戰の華やかなる、今日に到るまで、如此のものを想像し得ざる也。

●早慶軍が、市軍に學び得たるものは、多少の新技術無きにあらざるべしと雖も、第一には、彼等の態度ならずんばあらず。

●市軍の選手が、勇氣を靜肅の中に寓し、モーション敏速、而して慘として驕らず。日本人の審判官の命令に敬從して、一回も厭な顔を見せず、時に、壘審判の曖昧なる判決を爲なせしことあるにも係らず、尚ほ諸々として之に服從し乍らも、其の軍容は、整々として水も漏らさざるの勢あり。一點だも敵に勝を讓るべきの危機を示すこと無し。其の徹頭徹尾、堂々として敵手を壓する武士的意氣は、日本人の觀衆をして、深く眞率なる敬意を拂はしめずんば已まざる也。

●バットは米國の國技也。早慶軍が、彼に比して段違の感あるは、吾輩、今日に在つては、必ずしも、大屈辱とするに値せずと爲す。尚ほ日本人が劍を揮つては、眼中に萬國人無きが如くなれば也。

●然れども、市軍の選手がいみじくも表現し得たる武士的態度の見事なるに至つては、恰も、日本人の「御株」を彼に奪はれたるかを感ぜざる能はず。此の一事に至つては、吾輩、觀衆は實に中心忸怩ならざるを得ず。

其四

●慶軍の奮戰は、滿場の喝采に値せり。其の輕妙にして、潑溂たる、意氣の充實して寸毫の緩み無き。敗るゝと雖も耻ならず。

◉「朝日」は、慶軍の缺陷は、第一壘、第二壘の間にあるべきを豫言せり。此の二壘手は新顔にして、何となく、生々しき姿無きにあらざりしも、思の外、能く戰つて、遂に失態を露はさず。

◉慶軍の精華は、小山、佐々木、神吉、福田の四人に在るべし。此の四人、調子を合せて力戰するときに、精采、頓に全軍に漲り、軍神も爲に降臨するかと想はれて、頼母しき事、限無し。

◉勝敗の決は、力量にありといふとも、頼むべきは元氣なり。今の慶軍には元氣滿つ。萬里遠來の珍客に能く酬ひ得たるは、慶軍の功を多とせざる可らず。

其五

◉慶軍の强味は、其のバッテリイに在り。投手は。三人あれども、捕手は福田の專賣に屬す。今の處、彼の捕手は、天下一品といふべし。

◉福田の正しくして快速力ある、二壘への投球を見る時に、彼の肩胛骨は、如何に、圓滑に且つ堅緻に、構造されたるかを想像するに餘あり。彼は、優さしき顏に、不似合に、膂力を有す。彼の武者振の勇ましきは、當年、全盛の荒岩と相似たるあり。

◉小山、菅瀬、福田の三特徴ある三投手を有することは、慶軍の誇にして、また吾野球發達史に於ける一壯觀たらずんばあらず。

◉菅瀬の魁軀、人をして自ら其の優勢なる躰力を想見せしむ。彼は、嘗てインニング十九回の長きに亙れる對早稻田軍の接迫戰にも、少しも惰容を示さゞりき。其の特徴はコナレたるピッチングに在り。得意のアンダースロウを投出するとき、長き軀幹を右方に傾け、恰も、崩れて倒るゝが如き、特異の姿勢を爲す。

◉福田の表情は勝氣に充つ。其の特徴は、快速力ある直球に在り。彼は三人中、尤も小さけれども尤も雄々しく戰ふ。

◉小山に至つては、悠然としてプレートに立つとき、未だ球を投ぜざるに、早く既に十分の餘裕を示し、機略に富める表情を爲す。其の五尺六七寸ある堅實なる軀幹は、プレートを飾るに足り、其の態度は、衒はざ

るに、先づ敵手を牽制す。

●彼は、アンダースロウは青瀬に、快速力は福田に及ばずと雖も、其の投球は變化に富み、直球、魔球、緩急寧ろ自由也。而して駈引多く、走者を睥睨して、盗壘を逞しくせしめず。殊に、一壘に走者ある場合には、態ざと、手を大きく揮つてモーションを隠くし、福田の捕手と相應じて、鮮やかなるトリックを演出す。

●一壘の走者、耽々として突出の機を窺ふ。此時、投手小山の投球を、福田は、態と取り落して、走者を尻目に掛けつゝ、徐ろに球の轉ずるを追ふて行く。走者彼失策つたりと早合點して突進することあらんには、彼、猛烈、膝を折敷く一刹那、彈丸の如き速球、眞直に二壘に飛んで、走者を刺す。

●對早軍の時に、易々、二壘を奪ふに馴れたる市軍も對慶の第一回戰に、算を亂して福田に占められぬ。福田の前には二壘は遠くして達し難く、小山のトリックは、能く走者を拘束して、一壘を多く離るゝを得ざらしむ。壘に走者あるの時に於いて、此の二人者のバッテリイは、此の妙技を發揮するを見る。

●吾が野球の發達史に於いてバッテリイの優勢なるもの、前に早大の河野、山脇あり。今、慶大の小山福田あり。此の二者は、前後、他の匹儔あること無し。而して吾輩は、後者の、今精練を極むるを讃嘆すると共に、意氣滿盛なりし前者をも追憶せずんばあらざる也。

其六

●慶軍は、此の優勢なるバッテリイを有し、加ふるに三投手を交々出して、三特色を發揮せしめ、敵手をして作戰に忙殺せしむるの利あり。此點に於て早軍は全然、之に對比するの光采を有せず。

●早、慶を對照するに、壘手、外野手の活働に於て、及び打擊力に於ても、互に輕重し易からず。慶に小山、神吉、福田等の强打手あり、就中、小山は殆んど、現代の最强打手たるべしと雖も、早にも、深堀、大井、原、松田等多士濟々たるありて、相讓らず。

●早には唯一の投手大村あり。名古屋一中の時代より、

既に勇名を知られ、早軍の重を負て立つと雖も、其の伎倆は、慶の三投手及び一高の井上に比して、未だ必ずしも遜色無しといふを得ず。唯だ年壯氣鋭、前途の進境に期待すべきものあるのみ。

◉満都の熱球兒に刮目されたる大井は、對市戰を名殘として、投手を退き、一壘に據るべしと聞く。彼や、身長五尺八寸、雄大なる軀幹黑きユニホームを著けてプレートに立つときは、戰鬪艦の威儀を現ず。まさに、早軍の花たる可かりし也。

◉大井は、水戸中學の時代より、投手として且つテニスの大將として、屢々帝都に其の雄姿を示す。彼は、柔道を學び、水府流の水練に熟達し、八宗兼學の大運動家たり。而して、其の精力を野球に集注して、戶塚原頭に出現するに及んで、間も無くリヨウマチスに侵され、其名譽の位置を去るに到れるは憐む可らずや。然りと雖も、彼や猿臂にして捕球精確無前の一壘手として、永く、早軍を飾るならん。

◉慶軍に於ては、小山、稲田來春を以て學校を卒業し去るの後、菅瀬能く健闘して、以て、殘軍を鼓舞するの勇ありや如何。

其七

◉外人の選手は、形勢少しく非なれば、容易にアガルことは、從來、吾が觀球家の實驗して疑はざる處也。然るに、市軍が、満場に彌次られても、アガラざるを見れば、其の伎倆は、實に侮る可らず。若し、彼のグラウンドに戰はしめば、彼は更に沈著を加ふるならん。

◉彼は懸軍萬里、深く敵地に入る。氣根の弱き者は、動顛し易かるべきも、之に反して、強き者は必らずや背水の陣を布て、決死の勇を揮はん。

◉投手ページの速球、魔球、素人目にも驚かる。吾が投手は魔球は緩に、速球は直なるに、彼のは快速にして且つカーヴす、極めて御し易からず。慶の强打手五人を、釣瓶打ちに、ストラックアウトに葬り去りたる怪腕目覺ましくも凄かりき。

◉ページは寧ろ小男なれども、沈著にして敏捷。急が

ず。騷がず、口の前にて、兩手以て球を揉みつゝ肩を狹め眉を蹙めて打手を眺め、哲學者のやうなる表情を爲す。

◉早、慶軍が布軍の壘を摩するを得ざりしは、彼の怪球の爲に、全く、吾が打擊力を封ぜられたるに因る。最後の對稻門戰に、三回の半より市の投手交替して、彼が、プレートに立つに及んで、其後、終に、一のヒットを吾に與へざりしが如き、彼の威力を想像するに餘あり。

◉彼が、左利なることも、亦た吾打手に取つては、著るしく不利ならずんばあらず。加之、左利は一壘の走者を牽制するに利あり。米國の名投手には、つねに左利あり。吾に在つては、一高の守山以後、また左利の名投手を見ず。

◉ラケットの人には、從來、左利の名手必ずしも少しとせず。商の渡邊、柴山。慶の小久保、熊谷の如き、前後輩出す。野球に於ても、左利の選手無きに非ず、試みに、左利の投手を養成するも、又、一案たるべし。

◉市軍の聲價、其の一半は、ペーヂの名に繋はる。概ね說く、彼にして投手たらんには吾に勝目無しと。然れどもロバートを以てしても、慶の勝ち難きを見れば、市軍の勝つは必ずしもペーヂに非ず。

◉市、早第一回戰に、强打手ペギユースの名滿都に響く。其後彼の偉軀のボックスに現はるゝ毎に、滿場頗る動搖す。慶、市の第一回戰に徵するに、菅瀬はペギユースの强打を封ずるに小心翼々たるの觀無くんばあらず。然るに思の外、彼の外に、續々、强打手見ゆ。市の全軍、殆んど强打手ならざるは無く、而して、ペギユースも亦遂に三壘打を飛ばさずんば已まず。

◉市の全軍、意氣充ち、步調合し、著るしき缺陷の呪ふべきもののあること無し。彼土に在つては、知らず、之を吾早、慶軍に見れば、彼、市軍を壓倒するに至るは、尙ほ、「間歇無き努力」を要するもの無くんばあらず。

◉聞く。慶の高濱の如きは、市、慶の實力、六對四なりとなす。吾輩を以て見れば、恐らくは七對三ならん。

然れども、其の結果の六、四と見ゆるは、則ち慶軍の健闘の爲に外ならず。此點に於て、吾輩、頗る慶軍を多とす。

其　八

◉吾輩は、慶軍の振ふを見ても、早軍の衰を悲む。早には、伎術有り、意氣無し。生氣去つて惰容生ず。

◉慶の科學的研究の態度あるに比して、早は、伎術に於ける、初より粗放也。當年、早が慶を壓せしは、其の伎術に非ずして意氣に在り。

◉早、慶の間、鼎の輕重は、世間自ら定論あり。去年、説を爲す者あり、慶の選手、早と戰はんに、神吉の外、斷じて必勝を期するを斷言し得る者あること無しと。

◉説の眞僞は、吾輩必ずしも之を保せず。然れども、如此風評の尙ほ世間に存するは、偶以て、早の武者振の世人に忘れられざるを徵するに足る。

◉三田に於ける早、慶最後の對抗マッチに、早軍の勢、驚濤の沙岸を呑むが如く、其の雄壯なる前後比無く、面して、三田軍の崩潰して收拾す可らざる。吾輩も亦た如此、慘憺たる總敗軍を見たることあらず。名投手河野が名捕手山脇と、呼吸を合して、拈り出す一球々々に、三田軍の心臟の鼓動を亂打せしめたる壯觀は、爾來、內國のボールマッチに、未だ髣髴たるものをも見ず。

◉實に、河野が、球を摑める右手に、左手を副へて、頭上に戴き、體を半身に構へて『勇ましき微笑』を紅顏に湛へつゝ、左の小手の蔭より、三田の打手を睥睨したる、美しさ、威容は、恍として、吾輩の眼中に在り。彼は、ローマンチックの夢なりしよ。

◉河野に貴ぶ可きは其の勝氣に在り。勝氣は、戶塚の空氣なりし。

◉精美なる三田軍に唯一の蠻骨は、神吉也。其の橫に張りて田舍びたる短軀。太くして短き鼻、力味て振る四き肩。いづれか蠻ならざる。而して、其の速にして角度に富めるモーションに精悍の氣迸る。若し彼に、一種特異の愛嬌無からしめば、彼は、一代の人氣選手たらざりしならん。神吉の如きは、紅爛熳の三田軍の

一滴翠ならずんばあらず。

●「キカヌ氣」の快男兒は神吉の外佐々木あり、彼れ亦た三田の花也。彼は、存外、好人物なりと聞く。只だ其の人のナポレオン式の頭髮と照應する過敏なる表情は、神吉の無邪氣一點張なるに若かず。

●佐々木の兄、泉谷、當年、早軍の花武者也。其の輕妙なるモーションは、今、尚ほ斯界の珍とするに足る。

●「キカヌ氣」神吉、佐々木の如きありて、則ち能く、全軍を引立たしむるを得可し。然れども、全軍の振否は、一二人の力に及ばず。一氣、全軍に貫徹するに非れば不可也。

●勝氣(カチキ)は、戸塚を去つて三田に宿れり。吾輩は、早軍に、此上、必ずしも練習の多きを望まず。只だ、其の憤然、覺醒して、以て、また、生氣の全軍に漲るに至らんことを期待するのみ。

其九

●吾が野球軍の防備は頗る鮮やか也。然れども、其の攻撃力は、遠く市軍に及ばず。若し、打撃にして稍振はしめば、彼を凌駕する、亦た難きにあらざるべしとも想はる。

●或は吾が打撃力の不振を以て、日本人體格の矮小なるに歸するものあり。果して、眞ならしめば、吾が打撃の振はざるは、一の人種上の問題にして、平均身長の彼に及ばざるが如く、「バットの人」としての日本人は、終に、米人に勝つの期無からん。

●打撃力の問題は、二箇の細目を有す。其一、バットの揮り方。其二、球の擇び方の二事也。

●バットの揮り方は、尚ほ工夫の餘地あるべしと思はる。吾がファウルは、多く、一壘の側面(サイド)に向つて飛ぶ。打ち方の遲くして弱きことを證す。深堀が、四肢の張身の如き構へ方は、布哇土産の新研究なるにや、異采を放ちて見ゆ。

●市軍が打つたるヒットは、悉く、直球を擇び得たる一事は研究の値あるべし。第一回戰に、菅瀬が、魔球に交へて一打手に一箇宛、投じたる直球は、概ねヒットせられたり。細心、以て此に注意したる、二回戰の小

山は直球を出さゞらんことを期したる也。

●市軍の强打手たる者、必ずしも、悉く、吾が、大井、背瀬、小山等よりも偉大なるには非ず。

●吾輩は、吾が選手が、打擊の研究には、尙ほ頗る餘地あり、且つ、最緊要の問題なるべしと思ふ。吾が打擊力の振ふの日は、則ち、日本の學生が、彼の學生の第一流選手を壓倒するの時なる可き也。

其　十

●審判者の養成は、漸く、球界の問題となれり。優秀なる審判者は、只だ能く、分明に審判するのみに非ず。又能く滿場に活氣を附與す。行司養成の重要なるは、常に角界のみにあらず。

●從來の、日本人の人氣ある審判者は、帝大の中野なるべし。彼は、當年、老鐵山の名を以て、一高の重を爲す。其の伎倆、今、尙ほ侮る可らず。

●中野の審判は權威あり。明亮にして爽やか也。彼が、場に立ちて、一聲、「レヂイ」を叫ぶときは、洪音、凜々として滿場を一新す。拍手、四隅に起り、萬人の目、悉く輝く。「プレイ」「ボール」「ストライキ」一語、一音、殺氣に滿ちたる靜空を破つて響き渡る。

●中野は、聲を以てせず、身を以て審判す。其の態度は潑溂なり。洪音と共に双手を大きく擧げ、火急の判決、敏活に手を揮ふ。音聲の發するとき、滿身活動す。滿場の視線は、彼の一身に集注し來る。如此にして、審判官は、對抗戰の統監たるを得る也。

●彼の審判、時に失策無きを保せざるべし。然れども、彼が、審判の職分に、研究し努力して、以て、審判者の位置を進め、少くとも、審判界に革新を與へたる功勞は、認めざる可らず。

●中野、名を成すの後ち、斯界の審判者、彼の態度を學び、稍、其の風を爲す。然れども、未だ、能く彼の壘を摩する者出でず。

●對市軍の時、中野病んで出でず。審判者、帝大の三島漸く老熟し來れるを見る。三島は、當年の名投手の一人也。學習院の名譽を双肩に荷ひて健鬪せしは、尙ほ、斯界の記憶に存す。

●三島は、中野の活潑なるには及ばず。然れども軀幹魁梧にして風采揚り、場に立ちて耻かしからず。吾輩は、彼の地味にして公平なるを多とす。蓋し、彼、亦、現代、審判の適材たらずんばあらず。

●慶の高濱時に審判者と爲る。彼や、キヤプテインとして稀覯の秀才なるべし。審判官としては、稍、巧猾を弄す。吾輩は取らず。

●吾輩は、運動評論家が、審判官に敬意を拂ひ、選手に對すると同樣に、細心に、之を觀察し、評論し、以て審判學の進步を促がさんことを希望す。

其十一

●吉岡將軍は、選手にあらずと雖も、早大のチームに必要の人なり。彼は、チームに對しては、常設の聲援隊の總督たり。而してマッチに於ては、觀衆に對する司會者たる也。

●野球の聲援の機關は、國際マッチある每に進步して特に、今秋に至つては、整然として、組織的精采を發揮す。

●慶の幼年部の生徒が、稚き聲を張上げて「ケイオー」を絕叫するは、聲援の花也。

●聲援の雄者は、吉岡將軍也。將軍の風貌、行動、悉く優勢にして、一聲、一擧手猛氣發す。彼は、現代、聲援隊の大選手也。聲援に依て、將軍の尊號を贏ち得たる者は、彼の外空前にして、又た或は絕後ならん。

●彼が、聲援隊の前に立ち、音頭を取るの狂熱なる風采は、天下獨步也。彼は鐵拳を揮つて胸を連擊し、身を地に擲ち、躍り狂ひ、飛び上つて、鬚ムシヤ〳〵の鍾馗面が、閃轉して黑丸子と見ゆ。

●四五年前、彼は、唯だ勇悍なる彌次に過ぎざりき。彼の熱誠と才幹とは、次第に、內外の敬意を贏ち得て、戶塚の一名物となり畢る。

●彼は、眼鼻は、鬚の中に在り。熱して叫ぶとき、羅刹の相を現ず。就て叩けば、其人物溫良にして禮儀に嫻へり。彼は、選手の外の選手也。彼、出でずんば、戶塚は寂寞たらん。

●彼は精力に富み、斡旋質に精悍を極む而して、徹く

機を見て、聲援隊の前に在り。彼が、双手を舉げて、躍り出すときは、一道の春風脉々として滿場に通じ、萬衆、自から陽氣に浮かれ、既にして、慷慨、激發、覺えず双拳を握る。彼は、自から聲援するのみならず。實に、滿場聲援の氣慨を涵養す。

●世上、聲援の選手、必ずしも少しとせず。然れども其の餘り狂熱なる者は味方の爲に、全く前後を忘却して、滿場の同情を惹くことなし。

●吉岡將軍は慨然として志士の風あり。外剛、內溫、熱して常識を逸せず、猛り立てし誠意貫徹し、能く滿場の同情を味方の爲に集中せしむ。天下聲援の模範にして、又以て、早大チームを飾るに足らずんばあらず。

其十二

●運動は、國民精神の華也。國運の勃興するとき、又以て、相照應するの現象無くんばあらず。

●對市俄古戰は、今年、日韓併合の紀念として、長く野球史に特筆するに足る。勝敗は、必ずしも、問はず。予輩は、早、慶軍が、能く其の最善を盡くして、日本式の「精力に充ちたる健鬪」を、吾等に見るを得しめたる事を多謝す。

●回憶す。三十八年日露戰役終るの歲の秋、帝大の藤井(實)出づ。運動會に、竿飛を以て、世界のレコードに最高の成績を示し、運動史上に、此の大戰捷を紀念せり。彼の用ひたる竿を以て緣と爲したる彼の肖像額、帝大の運動場を飾りつゝあり。

●今年、テニス界に、三高の福井出づ。其の頭腦、精明に、モーション迅速にして、從來の後衛に一頭地を放出す。又以て、此の併合の年を紀念すべき一選手たらずんばあらず。

●然れども、此の併合の年を紀念すべき、絢爛たる光采は、戶塚原頭に、憤戰したる早、慶軍の選手の頭上に輝く可き也。

其十三

●吾輩は、日韓併合の紀念として、戶塚、三田の相和合して、早慶試合の復活するあらんことを望む。而して是、恐くは、運動界の興隆ならん。

◉早の如きは、確かに、其の勁敵に離れて氣の緩みたるを見る。對市戰に、彼の打手は、順次、バットを肩にして、健氣に控え居るも、早軍は、先打手去つて次の打手、徐ろに起つてバットを携ふる者さへあり。早、慶試合の頃、兩軍に、如此、綏容あらざりし也。

◉最近に早軍稍振起するの兆あり。此の稿を距るとき稻門軍が、神戸軍に勝つを聞く。兩雄對立は、吾野球の華也。而して運命也。必要也。……慶や今、全盛也。振へ、振へ早稻田。

吾輩、元と、今秋のラケット選手を合せ論ぜんと期せり。而して久病後、衰弊、長く筆を執るに堪えず。稿半にして豫定を變更するの不得已を遺憾とす。秋晩、快晴、南國の暖光尤も衰軀に宜し。藤棚の藤葉、バラ〳〵として面白く散る。筆、重きこと杵の如し。

病後の 黒頭巾記

日本料理

倫敦 繞石生

『あゝ、いつか連れて行つて上げる』とばかりて、三月(みつき)四月(よつき)も約束を履行せずに居たんだが、九月の末に遇つた折に『日本料理屋へ連れてつてやると仰つたのは、ありや虚言(うそ)?』と催促を蒙つたので、いよ〳〵十月の二日に同行しやうとネリイに約束した。ネリイは僕の最も親しいレデイだ。序でにと思つて、毎度話しに行くヰルソン氏の若夫婦も招くとにした。七時、エスト、エーマス、ストリート五番地イクイネへ御來車を乞ふと。二日は日曜日だ。英吉利の家では日曜の晩食は所謂サッパーで、至つて御馳走が無い。自然、有福な日本

人は、日曜の夜、日本食をやりに出かける。倫敦には日本料理店が五六軒あるが、博覧會へ來て居る人が多いので、日曜の夜は何處も滿員の盛況だ。そこで早くいゝ部屋を占領しやうと思つて、五時にネリイを連れ出しに行つた。日曜ではあるし、相客があると知らしてもあつたから、大分御めかして居る。

ネリイにはポリイといふ姉があり、母もある。二人とも隨行したさうな顏をして居たが、こつちの懐都合が許るさぬなら、一通りの挨拶をすましてから、早やコートの鈕もキチンとかけ、しやれたスカーフを頸に垂らして、白のキッドの手袋もはめて待つてるネリイに、

『アー、ユ、レデイ、ミス、ネリイ』

『イーエス』

『ゼン……グド、バイ、ミス、ポリイ、グド、バイ、ミセス……』

て出てしまつた。

見るとネリイはフアンシイ、シユースを穿いて居る長路(ながみち)歩るかせるのは氣の毒だ。ハンサムかキャップか奢つて乘らしたいが、實は歸途タキシーで送つて行つてやる考で居るので、往復共ぢや貧書生の僕にはちとこたえる。そこでモータ、バス、ホース、バス、ポートランド、ロードからエーマス、ストリート迄は徒歩(おひろい)で御免蒙つた。

着いたのは五時五十分。二階の大きな部屋へ案内された。下の部屋には、早や日本人の顏が見えた。

日本料理屋とは云ふものゝ、部屋も全く西洋式で、そして裝飾も立派ぢや無い。三方は壁。一方の壁には、爐が切り込んであつて、爐の飾り棚(マントルピース)には黄菊白菊を無闇と詰め込んだ花瓶が大鏡に映つて居る。左右のレセスには、一方には三越の廣告額が吊るしてあり、一方には瑞西風景の額が懸つて居る。この反對の壁には、東郷大將と英國先帝の肖像畫とが並んで懸つてる、壁に接してサイド、ボードがある。サイホンラムネ、タンサンなどの瓶が十本許り載してある。ドアのある壁にも三四枚額が吊るしてある。その反對の側は、通路(とおり)

が見られる窓が三つある。窓には、それでも氣の利いたカアテンが懸つて居る。

部屋の中央には純白のテーブル、クロースのかゝつた食卓が据えられて、六七脚の椅子がある。安樂椅子長椅子が爐近にある。

タキシードの給侍にメヌを持つて來させる。メヌは日本ての料理屋のやうに朱塗の板に墨て二段に書いてある。かうだ。

一椀盛　　一鯛潮
一作身　　一口取
一燒肴　　一金ぷら
一鰻蒲燒　　一海老の鬼殼燒
一甘煮　　一茶碗蒸
一みそ汁　　一湯豆腐
一奴豆腐　　一餡かけ豆腐
一酢のもの　　一胡瓜もみ
一ぬた　　一蒲鉾わさび醤油
一鯨酢みそ

一生そば
　ざるそば、おかめそば、その他御好
一雞なべ、牛なべ
　生稻特製しるこ

あれを、これを、と思つたが、如かず料理人に任せるにはと、作り身丈けは止めにして見繕つて西洋人向きの物を出して呉れと頼んでしまつた。

『私し、坐敷は日本風なのかと思つてましたよ。日本風にしたら――マットを敷いて坐つたらいゝぢやありませんか。その方がクワイト、アト、ホームていゝてせう』

と言ふ。日本人倶樂部てすら、疊敷く程までに國粹を發揮しちや居らぬのだ。

『ても洋服着て居て日本風に坐るのはアンコンフオダブルだあね』

『ウエーターが洋服着て居ますね。キモノて給侍すりやいゝに』

『ても、外へ出る時に一々衣換へるのは厄介だからね』

「それにウエートレスにしたらいゝでせうにね、ムスメの」

これは如何にも御尤もだ。ムスメでも給仕に出さうもんなら、それこそ千客萬來だらう。

「此處の女將は英國人だよ。亭主は所用で此間日本へ一寸歸つて行つたが」

「へー」

「あの額の、鬚のはえてる人、あれがミカドですか」

「あれが有名なアドミラル、トーゴー」

てな話をして居る中に給仕が御膳を持つて來た。お膳は會食膳だ。天麩羅のツユのはいつてる小皿とチヨクが載つてる。

ネリイは安樂椅子から、つと立つてチヨクを取あげて見た。鯉が中(なか)に繪(か)いてある。

「これ、何にするもの？」

「それでサケを飲むんです」

「これは？」

「そりや、後で御皿が出てから話す」

やがて正七時にキルソン夫妻がやつて來た。西洋人のパンクチユアルなのには何時も感心する。

ネリイを二人に紹介する。

「私し日本の御料理は始めてですよ」

「私も」

「ですから、私し此間から鉛筆でチヨプスチツクスの稽古をしたんですよ」

とキルソン夫人が言ふ。實は御主人たる僕は箸を取扱ふと頗る不器用だ。却て西洋人に笑はれはせぬかと危ぶむ。

會食の席次は八釜敷いのだが、まあいゝやと僕はネリイを窓の方、それに向き合せて壁の方へキルソン夫人、ファイアプレースを脊に僕と眞向ひにキルソン氏に坐つて貰らう。

第一に持ち出したのは吸物だ。

「さあ、どうかめし上つて下さい。西洋料理のやうに一度〳〵皿を下げませんから、ゆつくりあれこれめしあがれ」

と挨拶する。そして故意と僕は箸を取上げた儘、椀の蓋を取らずに居ると、三人ともきよろ〳〵して居る。

「これは、斯うやつて割ると二本の箸になります」

と割つて見せる。三人とも僕に眞似て割箸を割る。ネリイが

「ヒヤツ」

と小聲で何かに驚いた風だ。そしてサーヸエツトの上を何か探して居る。

「ん、箸の中にトウースピツクが入つて居ますよ」

と説明する。ネリイは、箸を割る機勢に、胸のあたりへ飛んで來た小楊子に驚いたのである。ヰルソン夫人は箸の中をつく〳〵見ながら

「アイセー」

とか何とか言つてる。三人はまだ蓋を取らぬ。給侍が皆んなに銚子から酒を注ぐ。三人はスプンが無いがと言つた顔をして居る。罪だから

「こりや、蓋を取つて、椀から直かに吸うんです」

と言ふと、三人ともそろ〳〵と蓋を取る。そして上から中を覗き込んで居る。

「汁も吸ひ、中の物も食ふんです」

と僕眞つ先きに椀をとりあげる。見るとネリイは箸が旨く持てぬので大分困却の體だ。

「フォークとスプンとを取りよせませうか」

「いや、よございます」

と言ふ。ヰルソン夫人は御稽古の効空しからずて、器用に中の物をつゝいて居る。汁の身はハンペンと小さな丸の松茸だ。ネリイははさめぬので、箸一本て松茸を突きさして、

「こりや何てす」

「マシユルームてす」

口へ入れて噛んでたが、

「變なものね」

といふ。ヰルソン氏も、同じくハンペンを箸てつきさして、何かと聞く。説明が一寸困難だ。

『そりや、その、フイシユのフレツシユをハツシユして、モーターに入れてブレーして、それを小さい塊

りにしてボイルしたんです」旨く無さゝうな顔をして居る。キルソン夫人は兩手で椀を取り上げて啜つて居たが、

「スープは實においしい」

といふ。他の二人も吸つて見て、これはいゝと言つた。感心にネリイ一人は中の身も汁も平らげてしまつた。

「サケはどうてす」

といふと、キルソン氏は少し啜つて見て、

「ホツト〳〵」

といふ。燗がしてあるリクオアが珍らしいのだ。そして眉を顰めて居る。

「どうも餘り感心しません」

と言ふから、サイホンを取つてやつた。でも細君の方はチクリ〳〵一猪口あけてしまつた。僕は獨酌でグビ〳〵やる。

鬼殼燒が出た。大きな伊勢鰕だ。丹波栗のキントンが添はつて居る。次に鰕と魚との天羅麸が出た。

「その膳の上の、小さなソーサーに入つてるソイをつけて食べるんです」

と說明してやる。此の二皿は大分評判がよかつたが、キルソン夫人が鰕を知らぬのには驚いた。ロブスターは魚屋には大抵出してる程なんだが、常食にはせぬものだから、知らぬのだらう。

次に酢のものが出た。鯖の身の入つた胡瓜もみだ。どうかと思つてたら、案外に

「こりやいゝ、酢の加減がいゝ」

といふ。見ると、いつの間にかネリイの杯は乾て居る。

「も一パイ注ぎませうか」

と御愛想に言つたら、

「え、注いて下さい」

といふ。そしてグイと半分許りのんだ。

次に鰻の蒲燒が出た。皆んな、妙な顔をして皿を眺めて居る。こつちぢや鰻はスープにはするが、蒲燒なんて物は固より無い。タレが鹽辛過ぎて居るやうだつたが、

「フライド、ロブスターよりも旨う御座いますね」

とネリイが言つた。キルソン夫妻は、まづくは無いといふ顔して居た。

次にウマニが出た。何んだか色んなものがはいつてるやうだ。僕の右横のネリイは箸でさぐつて見ては、これは何、これは何、と尋ねる。キルソン夫妻もこれは何、これは何と來る。

「それ？、そりや、バンブー、シユート。それ？、あゝ、そりや、ジンセング。それ？、そりや、バートックの根です。ブルドックぢやありませんよ。」

「私しや、バートックといふ字は知つてますが、食べたことはありません」

「毒になりやしませんから食べて御覧なさい。少し堅いかも知れんが」

「それは？、栗？、」

「いゝえ、そりや、アロー、ヘッドの根です」

三人とも、一品一切づゝ味つた許りのやうだ。

その次に茄子の鴫焼が出た。長たらしい說明をして、旨いから食つて御覧なさいと言つたが、

「エグプラント？」

と珍らしがりながら、一口試みて三人とも箸を置いてしまつた。

ネリイの猪口はまた干て居る。注いでやると又ナミ〳〵と受けた。どうかと聞くと、シャンペンよりもいゝと言ふ。そして又半分ばかり飲んだ。

「今に醉が出ますよ」

と威かしたら

「眞實？」

と顏の色を變へたのは可笑しかつた。

それから賽の目豆腐入りの味噌汁と御飯とが出た。味噌汁は不評判で、ほんの甜めずつた許りだつたが、飯はいゝといふ。その筈だ。當地でライスプヂンやカレイライスに使ふ米は印度米のパサ〳〵ので、それに煮き様が下手と來て居るので心がある。出したのは粘りがあつて軟かい。日本でも一寸した料理屋では出さぬ程の上等米なのだ。香の物はキャベツと蕪の新漬、それに奈良漬瓜。

純日本式に食後番茶を出した。臭いと言ふだらうともつたら、さうでも無かつた。

御膳を下げさしてから、梨子、林檎、無花果を侑めた。キルソン氏は滿腹だといふ。ネリイは梨子を果物皿から取つて、

「半分づゝ食べませう」

と言ふ。こつちの梨は日本のに比べるとまづい。グシャ〳〵して居る。變な甘味だ。砂が後へ殘る。ぞつとはせぬが、レディが折角言つて呉れるのにと思つて我慢して半分食べた。考へて見ると、僕が我慢して此の梨を食べると同じて、三人とも我慢して折角の御馳走を食べて居たのかも知れぬ。でも好奇心だけは充分に滿足さしたらしい。など思つて居ると、大きな林檎を一つ食べ終つたキルソン夫人が

「あなただから御遠慮無しに申しますが、實はこれてやつとお腹が張りました」

と言つたので、大笑した。聞けば今日は腹を空かして置かないと、といふんて晝飯（ディナー）は節するし、御茶（ティ）は拔きにして來たんださうな。處が矢張り日本料理は口に適せぬかして、キルソン夫人丈けは、どの皿もつゝいただけてあつたのだ。

キルソン夫婦は迎の馬車て歸られた。僕はタキシイてネリイを宅まて送つて行つた。

その翌日ネリイからの手紙の中に、次のやうな文句があつた。

Very many thanks for your kindness to me yesterday. I really enjoyed myself very much; and, in spite of the queer things, I am still alive, and feel no ill effects.

ネリイの手紙の譯

英文を解せざる讀者の爲めに不文を省みずネリイの手紙の譯を添へ置く（編者しるす）

昨日はいろ〳〵御厚情を蒙り深謝致し候。私は眞に愉快を覺え候。種々奇妙なるものをいたゞきたれどもまだ生命には別條なく且つ身體に何等の故障を覺えず候

明治元勳の退隱
（後藤伯謀叛の一幕）

魏 昌 卿

一、野心滿々たる兩雄の握手

時代の暗流は往々にして不測の變潮を現出す。實に這は理數を以て推すべからず。

民權を提唱せし後藤の奔走は、克く民權勃興を壓抑して、在朝政權者をして得意の念を深からしめぬ。後藤に信頼せる全國民は、後藤の行動を視て、其の心事を解剖するの明を缺き、後藤を敬せる在朝一班は、後藤を德として、尙ほ容す所ありたりき。狡猾なる怪傑は、斯ゝる好地位にある自己を利して、縱橫の策を弄し萬事其意の如く行へり。而かも其實渠は、相抗爭せる政府と民人との双方に媚び、双方の信を己一個に收めんと企てしなりき。企だてゝ若し破るれば、双方の戰鬪をして益々激烈ならしめ、その何れかを殪すべく畫けるなりき。渠は、確に自己の力と地位とを信じて必然必成を夢みたりき。

明治英雄の大概が、慘苦なりし過去の奔走により、僅に辛く達し得たる今日の權威に滿足し、殆んど疲憊し盡し、元氣銷磨せる時、一服の刺激劑を投ぜし後藤は、投劑の目的を十分に遂げ得ざりき。蓋し、渠は、困憊せる者を仆さん意にて即効藥を與えしに、一部分に成功せしも、一部分に意想外の反應を惹起し、惰眠せる者をして翻然覺醒せしめ、氣力薄弱なる者をして却つて精魂を增進せしめたりき。斯點よりすれば、渠は寧ろ失敗せる者ならん。

劃策と目的とに於て、渠程に大膽ならざりしも、其所期に於ては、渠以上に大いなりし一人あり。其人や、渠に比較しては、遙かに後進、而も智は遙かに渠に優り、加之明治の英雄を左右するの實權力を握り、現れ

ざるが故に畏怖せられず、蹟を樹つるに勵む態を模するが故に、先蹤の信任篤く、識を衒はずして智を完ふし、策を弄せずして計を遂ぐ。心術の實相を論ずれば渠は、後藤よりも、野心滿々たる陰謀家にして、一滴の血なき涙なき人。

其人は誰ぞ。伊藤博文即ち是れ。

一線の兩端に立てる明治英雄の二人は接近して握手せり。渠等は、婚媾同棲に至らざりしも、親密の情を結べり。種々の情局よりして、到底結婚し得ざるものなりしも、時と處と事とにより、渠等は相容す自由を有して、渠等の私通を嫌ふ小姑の權威に服從せざる勇氣を有したりき。玆に於てか、理に明なる伊藤と情に敏なる後藤とは相結びて相計りたり。二人者は、共に陰忍奸謀、笑を包みて、舞臺に現はれ、相利用して起ちぬ。

比喩を以ていはゞ、精悍なる雌豹と獰猛なる雄虎とが約して兇暴を逞ふせる態とも謂ふべきか。征韓論を界として、明治元勳乖離を策し、突嗟の間に、非常の成功を爲せし脚本作者、伊藤博文と、元勳網羅、擧國對外を案出せる後藤象二郎との握手默契は、目的を異にして道行を均ふせる二人者の意の如くなり來りたり。粗豪なる權略家後藤は、言に行に露骨にして、堅苦を辭せざる政治家伊藤は、笑を湛え秋波を流して、共に運よくば自己の天下を作らんに專ら腐心しき。而して、後藤は、後藤一人の天下を望み、伊藤は伊藤個の天下を要めぬ。是れ二人者の將來を貫ける精神にして、謙抑を陽りて、總てを欺き、娼婦媚を售るの姿を執れる伊藤と、傲岸尊大、飽くまでも親分の體を學べる後藤との相距る由以なるなり。故を以て、後藤は好んで敵を作り、伊藤は巧に利を收めたり。

在朝權威者の伊藤と、在野權威者の後藤との密約は玆に大成功の域に達せり。按ふ、花蕾既に結べるも果實未し。

二、陰謀破壞の陰謀

後藤は、伊藤との密約奏功し、日佛同盟、慷慨志士渡韓の機方に熟するや、露骨に航路の計を急轉せり。

渠は、昨に渡清せしめし藤田一郎の報告に因り、清國控制の策了に不可なるを知り、又英國駐剳公使上野景範の通信に基きて、香港を根據として清國を窺へる英國の嫉眼遂に吾に不利なるを見るや、一切を胸に秘して、伊藤に會し、

『やるか。』

『勿論、既に佛國は殖民地兵出動の準備を終つたさうだ。此の通り、通告電報が來て居るのぢや。』

『ぢや、貴公も、例の優柔不斷を止して、愈々決心したな。』

『品川の公使館を燒拂ふた當年の俊輔に甦つたよ。』

『然うもあらうな、何としても、時勢ぢやからな。だが、伊藤、貴公今日の勇氣を五年前に奮つてくれたら、江藤、西郷も犬死しなかつたらうに。』

と虚僞の涙數行、渠は、本意と表裏の言を吐きて、伊藤の眞心を確め、歸邸して、天井を仰ぎ、屋を覆へす哄笑一番、胸を叩き、

『尚且天下は俺の有ぢや。』

渠は、智薄く、策淺く、正直なる伊藤を嘲笑せるなりき。是嘲笑と同時に、渠は、何如にして總てを陷れ詐れる日佛同盟、志士團征韓を破壞すべきやに想を捻りぬ。一瞬時、渠は、微笑を洩すと共に、手を打ちて、坐を起上れり。既に渠は其の策を決定したるにてありき。

狡猾の老爺は、直に片岡健吉、田中不二麿、古莊嘉門を招き、室を異にして、告ぐる所ありき。片岡には突急の渡韓を命じ、古莊には九州志士間の運動を委托し、田中には退京の後事を托しぬ。三人三樣の返答と顏色とを殘して去る。後藤は、姻關の才子、吉田正春を招ぎ、

『こゝ一週間の事ぢや、これを持つて、仙臺に走れ。』

渠は、一封の信を托して、仙臺禁獄の陸奧に致さしめたるなり。其の言中の「こゝ一週間」とは、旋乾轉坤の活動の萌生する期日を意味するに非ずして、伊藤の退却、換言すれば、伊藤よりして陰謀中止の報來る期間を屈指せしなりき。渠は、陰謀を破るべき陰謀を

考出し、正面より友と後進と即ち天下を欺けるなりき。

亦、渠は、岩崎彌太郎に下命して、切に商界の動亂を行はしむ。岩崎は、言下に横濱英一番に打電して、銀塊相場を沸擾して、一攫千金の快を爲す。

一切は果して渠の意の如くなりき。

誠實なる片岡は、當時在京せし親友山地元治に、同志よりも以前に、計の一般を告げ、惜別を叙す。山地は、何の心なく、寧ろ土藩出身者の協和を冀ふ心より其の調和は斯機にありとなし、先進谷干城に語り、愈々日本出兵の際に於ける活躍を謀る。鯁岸なる谷將軍は、可否の答辯を與えず、山地の去るを待ちて、密に三條公に通じ、懇々時局を說きて、事の不可を謂ふ。

古莊は、民權論に與して、一方の伯たりと雖も、佐賀の亂に當り、米田佐官の勸告により、大久保利通の恩に買はれし以來、頑固なりし其節を屈し、一に薩長藩閥に據り、殊に山田顯義に親從せる者、渠は、後藤を辭する深夜なりしも、山田を其歩にて訪ね、長派軍人の膽を奪ひぬ。

田中は、寺島伯の次官にして、河野敏鎌と相善し。大臣に告げ、友に語るは勿論の事。渠は、妻妾に秘すも、寺島伯に隱すなく、親に包むも、河野に明けざるなしと稱さる。是の國家の大事を發頭人の口づから聞知して、焉て是二人に報ぜざらんや。是の二人斯の秘事を知る、河野は、改進黨袖領大隈に談じ、小野梓等と謀りて、自由黨の名を爲すを妨げんと期し、寺島伯は、誠意國を憂ふるの情よりして、徒に事端を釀す暴擧の禁壓を明治元勳の間に奔走す。

副島伯等、征韓論の主張に、廟堂を退きし元勳は、今更なる伊藤等の行動を憤り、百方妨害の策を講ず。總體は、伊藤の知らざる間に行はれぬ。而して、一日、廟議の席上、三條公の口先づ開かれ、寺島伯次ぎ大木伯和し、山田伯爭ふて、伊藤に其の無謀なるを責め、何故に西郷主唱の際に斯計を提出せざりしやを詰るや、伊藤は、不意なる破綻に驚駭し、進退に窮せしも、豐富なる智は忽ち活路を求めて、辯疏の辭を爲す、曰く、政府の人は、個人としても官人としても、敢て

參與せず、然れども、渠等が自ら事を擧げんとする、國内の亂ならんには之を取締り得んも、國外の事何如ともし難し、余は渠等に毫も關係するなしと。陰謀の預光を認めし西郷、井上、黑田は共に、齊しく口を揃へて、伊藤を庇護し、漸く脫したり。

而も、各參議等は、宮府に伺候し、方に上奏し、龍顏に咫尺して、在朝在野連合非謀の罰を乞はんとせる副島伯等を宥むる策を執らん爲め、溫和なる寺島伯も、一身の榮辱を賭して、警視總監大山巖に命じ、民權志士を一時拘留捕禁する準備を行はしむ。縣令三島通庸は、後年警視に長となりて、政治家を酷遇せし人、部下の警吏を放ちて、志士に尾行せしめ、隼眼に巨細となく、其の動靜を探知せしめたり。

山田伯も、同藩の山縣監軍と意を合せ、全國の各鎭臺に號令して、一呼の下に、隊伍的動搖の志士を、暴徒の名の下に、鏖殲すべきを以てしぬ。三日ならずして、秘事を破られたる英雄中、伊藤は失望せり、板垣は落膽せり、只獨り後藤のみは笑へり。

陰謀を許せし黑田、西郷は、伊藤を訪ふて、事後を完ふすべきを告げ、井上は寧ろ最後の計に出て、反對者を壓服すべき計を講じ、大膽なる處行に走らんと主張せり。激越なる井上は、時に嚴頑なる態度を採りて非常の事を爲すを快とす。是時も、渠は反對者の無法なる業體を悪り、西郷、黑田をして薩派の軍人を動かしめて、己等の連立地位を保たんと謀り、榎本等幕臣を煽りて、味方たらしめんと云ひぬ。斯くては、後藤の懷悉く頹る、渠は、井上夫人の先所天中井弘を遣して、閨閤より井上參議の憤怒を鎭めぬ。

三、聖勅乞奏の失敗

ボアゾナード博士の所謂無意味なる立消にて、破天荒の壯擧は破れぬ。唯後藤怪傑の陰謀は成功せり。

渠は、政府内の軋轢を知らざる爲して、伊藤參議を訪ね、我輩の負擔せる部分は、一寸の隙なく、其緒に就けり。參議の有せる範圍は何如と。伊藤は、後藤の面を見るや、苦悶に耐へざりしなるが、此の言を耳にし、猝に震慄し、先づ謝して、告ぐるに審に其の事情

を以てす。後藤は、「然るか」と、輕く一言を殘して起上り、

「ぢや、機を見るとにしやう、夫れまぢや互に默して。」

相別れぬ。渠は、充分に伊藤の亢を制して、他日の典質となせるなり。渠の他日は世の所謂後日に非ざりき。即ち約束せる日にてありき。故に、翌日、渠は再び伊藤を訪ね、

「參議、理由を問はで、三十萬金をよこせ。」

伊藤は、憂國の志士を養ふ料と信じ、喜び笑ふて、應諾しぬ。金は、井上參議の獻謀する所にして、一部は高島嘉右衛門、一部は三井組、一部は小野組、一部は外商の暗夜收納する所なり。後藤は、其金を握りて、何に使用せしか、一厘一毛も志士に投ぜず、渠が當時負擔せる商業の損失百萬圓の埋草となりぬ。後日、斯事の實相を知りて、井上は、非常の憤怒を以て、後藤を詰罵しぬ。後藤は平然答へて曰く、問ふ勿れ、拙者は伊藤參議と説明の約なくして受授せり、若し余を尤むるならば、足下等は其金を作れる道筋を説明すべしと。流石の井上も、言なくして頭を俛れ、切齒して後藤に含む臍を固めぬ。

執拗强直なる板垣は、壯擧を破れるは一に渡鮮船準備の任を帶べる岩崎の利欲に基き、一に伊藤の小膽に因すと爲し、一面伊藤の無智を嘲けると同時に、一面岩崎を蛇蝎視せりき。渠は後藤の設けだる陷穽を知らざるなりき。或は愚と括稱すべきか。

折から、吉田正春仙臺より歸來し、禁獄中の陸奥宗光の消息を傳ふ。何と云ひしか、陸奥は、

「マア、歸京に及ばぬ、悠然遊んで行け。」

而して、陸奥は

「何事もならぬワイ。」

と、空嘯きしとて、吉田は涙を流して切齒したり。後藤は首肯しながら、

「言の如しぢや、陸奥尙ほ用ふべしぢや。」

と、渠は益々陸奥宗光を愛惜する念を深ふしぬ。而して、推擧稱贊、渠の宥免を伊藤に說きぬ。股肱として渠の策を用ふべきを切言して、他の元勳を憚る伊藤

の心を動し、眞に渠を思ふの情を誘きぬ。後藤と共に陸奥を伊藤に推擧せし人他に一人あり、渠は富貴樓女將お倉なり。お倉は、

『伊藤の御前、妾の推擧に御不足ない筈、女ばかりぢやムんせぬ。今度は男一人、嫌を仰言るまい。』

と念を押し、更に念を强めて、陸奥を推稱しぬ。伊藤は、渠等に聽き、半月に瀰り、微行して獄中の陸奥を訪ね、其の所存を質して而後、渠に誓約するに宥免を以てし、自重自愛を勸めぬ。陸奥は涙を流して渠に謝したりき。爾來二人の間に默契成り、後年陸奥は再び伊藤後藤を締ぶ媒となりぬ。

伊藤の心尙ほ孰れに寄る所あるを、陸奥訪問の一事に試金せる後藤は、三條公に詣り、例の世界大勢論を冒頭にして、元勳網羅を献策しぬ。耿々たる誠忠一片の外、些念なき三條公は、固より其說を悅び、天下の途斯一にあるを云ひ、事行はるゝや否やを確めぬ。後藤は、宰相自ら班列に首たらば事成らん、否らずんは則ち遂げずと。三條公は、國家の爲ならんには、敢て辭せずと。玆に所謂元勳網羅の擧成る。

然れども、斯擧は、元勳の序位順次に關して、後進西鄕、松方、井上の沮む所となり、方に行はるゝ前日の夕、革丙將軍高島鞆之助の苦肉なる獻言の實を得ざりし爲め、脆くも破れたり。高島子爵が、寺島伯を通じて、時の內閣に爲せる獻言は、聖勅を乞奏して、元勳の心情を動かさず收抑するにありき。三條公と伊藤伯とは、是擧を恐畏多しとなして、如何に後藤伯が勸說するも、敢て容れざりしなりき。

四、平民政治の維新

板垣死すとも、自由死せざる民權の偶像板垣伯が、岐阜に於て、刺客相原の襲ふ所となるを耳にするや、後藤伯は、聲を放ちて、板垣を刺せる者は、相原に非ず、大隈井上なり、明年政府を亡ぼす者は政府の大臣公卿なり、臣は闕下に伏奏せんと謂へり。

政府は狼狽せり。蓋し、後藤は、公書を以て、相原が過日上京して、三島縣令の門を潜り、河野敏鎌の苞苴を收めたる實を例擧確證して、伊藤に贈り、政府の

探偵の自白を通じたればなり。事の眞僞は余保せず。兎に角政府は狼狽せり。狼狽と同時に、板垣慰問の使は公に、後藤慰解の役は陰に內閣を出でたりき。後藤に對する慰撫は後藤の意を迎ふの一事に畢る。後藤の意は、聖勅乞奏、元勳網羅の一事のみ。政府は之を許せり。

是事を爲すに際し、三條公は伊藤伯の發意に從ひ、各元勳の內意を豫め問ひ諮りぬ。主に大隈は、先日來の怨を抱き、小野梓等の謂ふ英國派政黨內閣を夢想して絕對に反抗を論じぬ。朝に在る井上は、野に在る大隈と說を合し、聖勅乞奏の不都合を鳴しぬ。斯くては事行はれん途莫し。

後藤は、大隈、井上の反對かと、莞爾笑ふて、兩雄の離間、且つその交を復せんとする兩雄の接近を妨害し、加ふるに二人を孤立の一櫓星たらしめんと劃しぬ。渠は、自由黨の古澤滋をして、三菱攻擊の步を進めしむ。三菱は後藤の姻戚岩崎彌太郎なり。後藤は、反間苦肉の計を描きて、大隈の缺點を攻めたるなり。井上の幕下、品川彌二郎子は、鯁直の士、常に三菱を憤る、今や自由黨の攻擊を見て、快心事となし、古澤に心肝を披く所あり。偵狗古澤は、巧妙に品川を操りて、井上に接近し、能く其日夕を明にせり。亦、渠は、自由黨の名士、杉田定一の姻戚、藤田四郎が井上參議の女婿たるを利用し、井上の坐席を詳に知れり。斯くて、松方侯ありて、能く大隈、井上を握手せしめんと苦心し、澁澤男奔走して、其間に盡力せしも、山縣、大木等の名星の牽制も加はりて、自然に二人者の連從は可能の如くして不可能なりき。

茲に於て、後藤は突飛の一案を提出したりぬ。

渠は、在野元勳の慾望野心を板垣、大隈の政黨爭に相凌がしめ、在朝英雄の權勢爭奪を部局割據に限らしめるつる間に、伊藤に提案して、元勳隱退、宮內省解放を强要しき。渠の要求は最も時弊に的中せるものなりき。而も、當時に在りては、畏怖すべき謀叛として戰慄されたりき。寔に、渠は謀叛の爲に謀叛せるなりき。

伊藤は、山田、大木等と儕を異にして、有理なる言として、後藤の提說を聽きしも、之を行ふに躊躇しき。大膽なる後藤は、往に慶應四年、二條城に幕府十五代の將軍、德川慶喜を說きて、一熱舌の下に、帝政奉還の丕業を遂げしを再び繰返して、三條首相を訪ね、政權讓與を勸說しぬ。渠は、劈頭に、

『公は、政權を暫時預れるなるが、今や機運熟したれは、異なる文明の政治家に椅子を讓るべき機來れり。』

と滔々數萬言、數時刻に渡りて、世界の大勢より、日本現國民の進歩せる狀局に及び、我輩は一時の風雲に乘ぜしもの、只民に不平なからしむべし。知識見達に於ては、國民の內、我輩より卓れたるもの多し、功遂げ名成りて退かずんは、光を失ふ恥辱と悔恨とあらんと、娓々として說來り、最後に、

『國會開設を請願せる人民の總代に、明治貳拾參年を期約せる公は、政權握取を去るを政府――後進の俊英に通告すべきなり。』

と辯に一種の魅力を有する渠は直に三條公を說伏しぬ。渠は、權勢の首、三條公を說服せしを以て滿足せず、胸に他の老元勳を何如にすべきかの憂を抱き、意を決して、勝安房を訪ひぬ。勝海舟は、後藤以上に策を好む士、屐を倒にして渠を迎ふ。

主客坐定まるや、兩怪傑相覗て相笑ふのみ。良少時にして、

『第二の維新が來まして……。』

と、後藤口を啓くや、

『大名の天下が倒れたのが第一の維新でござつた。士族の大臣參議が出來たのは第二の維新でござつた。もう平民の時世が來ました。是が第三の維新で、アンタは英雄ぢや、自分を尋ねて下すつたのは是の用でせうか。』

圖星を指されし後藤は、『然やう。』

『そこで、相互に老人の隱居を勸告しましやうな。』

後藤は一言も費す所なかりき。

斯くて、後藤の提唱により、勝の考案に基き、唐代の制を採り、隱退元勳優遇の法を攻め、樞密院を設け、

宮府と政府とに於ける兩顧問官親任の制を布かれぬ。這は是時に約されて、明治拾七年に實施されし三條太政大臣の議なりき。

三條公が是議を内閣に發案せる際、最も重きを爲して、最も畏憚されし寺島參議は、平常の態度に似ず、首に公の意見を賛しぬ。渠は、元勳中に於ける學者にして、幕府の時代より洋學者を以て名を爲し、開成校の教官なり、勝安房と親交ありしを以て、先に勝の說く所となり、充分に覺意せるなりしが故に、且つ同列の元勳の最後悲慘なるに心情愀み、自然に赤松子を慕ふ念萌せし折、喜びて衆を靡き、退隱の魁となりしなりき。

怪傑後藤の謀叛は、談笑の間に、斯くも功を收めし一幕を閉ぢぬ。先の一幕は失敗せしが、是一幕に成功せり。時に、元勳間に於ける後藤の名聲は頓に揚り、方に三條公に踵ぎて内閣を統ぶべしと評されぬ。三條公も阿か信じて、其意を洩しぬ。蓋し、渠は、政權を幕府の手より奪ひ、今亦無能元勳の手より奪ひたる者、必然に其權威を握るべき地位にありたりしなり。而も將來の運命は渠に報はざりき。

後藤は、此成功に意を得、宮内府解放を謀叛しぬ。渠は、公卿は厨子蔽に非ずとの粗磊なる放言を宣して、野心を更に深く演出しすゝまんとしぬ。

玉島古意

福本日南

頃者讀ニ中央公論所レ載院本佐用姫篇一。錦心繡腸。好箇幼婦。使ニ人銷魂失魄一。我亦曾遊ニ其地一。風ニ其雩一。曰松浦潟。曰虹松原。曰振領峰。曰玉島河。歷々印在ニ眸中一。試錄ニ當年吐囑一。博ニ泡鳴才

人之一粲。

日南浪客

其一

上つ代に傳へし天の七少女今も降る平玉島の川に。

其二

七少女今も遊ばゞ手を把りて共に遊ばん川の中洲に。

其三

玉島の川の汀に相逢はゞ我にも分て天の羽衣。

其四

忽ちに笑ひどよもす聲すなり我は來にけり玉敷の庭に。

其五

七少女六人は去りて紅の帳の裏に我二人居し。

其六

契りしは只一時の心ちして百年經たり瀧の宮居に。

其七

故郷の坐に思ひ出でられて一人辿れり虹のかけ橋。

其八

七色の空のかけ橋あと消えて手もとに殘る虹の松原。

其九

橋板の轟く音に驚きて夢は覺めけり小車の上に。

其十

今みしは夢のたゞ路歟幻歟問へど答へず玉島の川。

トルストイ伯を偲ぶ

昇曙夢

トルストイ伯の一生は十字架の一生てあつた。懷疑、煩悶、悲痛、不安の連續てあつた。其の思想は曾て安住の地を得ることがなく、常に動搖し、戰慄し、矛盾し、衝突して、それが又眞理探求の絕えざる努力を以て貫かれて居た。人生は有ゆる矛盾、衝突、煩瑣、複雜の姿を以て伯の面前に現はれ、絕えず伯の思索的精神を惱まして止まなかつた。それて伯は此の人生と云ふ解き難き怪物の正體を解くべく、其意義を我等に明すべく、一生を擧げて、懷疑、分解、思索の勞に打込んだのである。

トルストイ伯は要するに偉大なるスケプチックてあつた。其頭腦は曾て或る信仰の上に凝爲として居ることが出來なかつた。人生の光明なる方面も、醜惡なる方面も、共に物の眞相に徹底せんとする伯の熱烈な傾向を亡ぼすことが出來なかつた。伯の騷々しき心の友は常に不信、不安と云ふ否定名辭てあつて、伯は則ち是等の伴侶の助けに據つて其創作力を深く、鋭く發展して行つたのである。伯が有り觸れた習慣的の思想や俗說に滿足しなかつたのは、畢竟斯かる特殊の精神狀態から來た結果てあつて、此點より言へば、伯は啻に宗敎的意味に於てばかりてなく、廣き意味に於て思想界の異端者てあつた。而も異端者としては彼は最も偉大なる、最も完全なるものてあつた。

我等は今此の偉人を記憶するに當り、其一生中の綾をなせる數篇の逸話を輯錄して、其隱れたる俤を偲ばうと思ふ。

○

トルストイ伯が、サマラ縣に行つて馬乳て養生して

居つた千八百六十二年の一夜であつた。大勢の憲兵と地方警官とを載せた五六臺の馬車や腕車が、ヤスナヤ、ポリヤナの留守宅へ詰めかけて來た。そして突如、伯爵邸を取圍み、先づ家族の者を拘引して置いて、それから文机の蓋を引剝すやら、事務室の鍵を捩ぢ切るやら、戸棚の書類を取散らすやら、其他書齋、地下室、物置に到る迄、所構はず見廻つては凡ての家具調度を引摺出して、綿密な家宅搜索を行つた。留守になつて居るトルストイ伯は當時未だ結婚して居なかつたので本邸に居たのは其叔母と姉のマリヤ、ニコラエウナ(目下修道女になつて居る)であつた。姉が伯の書齋に寐て居ると、ツーラから出張して地方警吏がつか〱と這入つて來て搖り起す。といつて書齋から外へ出ろといふのではない、捜索の終るまで其の處に居ろと言ふ……。

憲兵大佐と地方警察官と分署長とは、トルストイ伯の物理室、學校、活版所、其他家の部屋々々にも一々番兵を立て、家の者には互ひに話をする事も部屋から部屋へ移る事も禁じといて、仕度い放題な事を仕た。武裝の憲兵と巡査とは宛も家の主人でもある樣な顔をして入り込んで來て、食物を出せの馬に餌をやれのと勝手な事を言つた。丸で占領された斗りの敵城にでも乘り込んだ樣な態度であつた。

婦人や召使ひ共の驚き方は一方でない。年老つた叔母は一晩中眠に就かれなかたので、一番先に馬車の來る音を聞き附けた。で、レフ、ニコラエウヰチが歸つて來たらのと想つて、その迎へに玄關先へ出ると、とんでもない人々なので、アッと氣絶して倒れたのが原因となつて、後暫らく病氣に罹つた……。夫ばかりではない、件の人々はヤスナヤ、ポリヤナから、其と隣合つてゐる他の所有地にも行つた。其處でも亦、文机を開けて、トルストイ伯が大切にしてゐる死んだ兄弟の文書を讀み散らした。其後で其人々は亦ヤスナヤ、ポリヤナに引返して來て婦人や學生の氣を靜めながら、何處にも別に疑はしいものはない、唯大勢の者に伯の敎訓を讀み聞かせて來た丈だと言つて食事を求めて立

去つた。

此事が話題に上る度にトルストイ伯は能く恁う言つた。

「私は常も獨りて然う思つてるのだが、彼時私が家に居なかつたと言ふのは、實に運が良かつた。あれて若し私が居つたとすれば、今頃は乾度殺人罪に判决されて居たに違ひない。」

○

千八百九十七年の事てある。詰らん宗教上の確執から外國へ追放されるやうになつた一人の名高い同主義者てチエルトコフといふ人と袂別する爲に、トルストイ伯はペテルブルグに行つたが、其が濟むと直ぐ其足て友人のコオニーを訪ふた。其時の光景をコオニーは次のやうに語つて居る。

「私は晩の十一時頃或る集會から戻つて仕事に取掛つた。すると隣の下宿から奏樂の音や、舞踏の聲や、足踏の音などが漏れて來るので折柄好い慰藉てあつた。所へ、一人の百姓が私を訪ねて來たと家の年老た召使が言ふので、誰だ、今頃何の用が有るか、聞いて來いと言ふと、その人はレフ、ニコラエウヰチと謂ふのだと問ひ質して來た。

私はその所謂百姓を丁寧に自分の書齋へ通して、一時間も話したが、その間、チエルトコフを追放した政府の處置に對する彼が態度の極めて寛大なのには實に驚いた。焦立つた言葉も不滿の色も見せなかつた。彼は酷刑に處せられながら、和平を以て世界を征服した初代基督教の一人てはあるまいかと思はれたのてある。何時隣て音樂が止んだのか私は氣が附かなかつたが、トルストイ伯が歸ると云ふので梯子段まで送り出すと、隣の客がどや／＼出て來た。トルストイは身を縮めながら帽子を眼深に引被つて、そこ／＼に下の方へ驅け降りて行つた。

譯の解らぬ百姓を私が嘻しさうに、而も丁寧に待遇するので、召使は其間、百姓の身の上を知らうと思つて戸の脇からその姿を覗いて見て居たが、頓て書伯レービンの筆になつたトルストイの肖像とよく似て居る

のに喫驚した。彼女はやつと謎が解けたので、この事を臺所の者に勿體らしく言ひ聞かすと、皆なの話がそれに遷つて了つた。

○

千八百八十年代の頃、ヤスナヤ、ポリヤナに餘生を送つて居た老婆で、トルストイ伯の小間使を勤めた事のある女が居た。背のすらりとした痩せ形の老婆で(名をアガヒヤ、ミハイロウナといふた)決斷力と我儘と癇癪とを打ッて固めたやうな、一種獨特の昔氣質を有つて居つた。自分の事などは丸て忘れつちまふ程主人に忠實てあつたが、其も其筈、此の婆さん唯二つの信仰と、唯二つの義務しか持つて居ない。其は如何なものかと言ふに、神と主人に對する信仰、神と主人に對する義務てあつた。だから彼女の生活は凡て之を中心として織り成されてあつたのてある。或時此の婆さんが伯に向つて斯う話した。

『何うてす、旦那私も隨分つらい譯ぢやありませんか。教會には遠いし、臘燭は買えないし、聖像の前にも適にしか立てられないのてす。何時だつたか、教會の執事が私の所へ來て斯う云ふのてす、(アガヒヤ、ミハイロウナさん、困つた事が出來ました。セルゲイ、リオウヰチさん(若旦那)の犬が田舍へ逃げたのてすが、乾度何處かて羊でも喰ひ荒す事てせう。然うなつた日には何が何てもトルストイ伯は是が爲に被害者から要求される丈揃はなきやならんのてす。だから、田舍へ人を遣つて見ましたのさ。所が何處に居るのやら蔭張解りやしません、犬の方て跳んて來れば兎も角……。)斯う言つて執事は歸つて行つたのてすが、私、恁う云ふ時にこそ、聖人方に臘燭ても上げて祈つたらと思ふのてす! 所が簞笥へ行つて見ても有る筈はなし、一本殘つて居たのも今少し前、奥樣の兄弟のベルス様が試驗に及第する樣にと立てたばかりてす。何うしたら、まア可いんてせうね。私今聖像の前に立つて十字を切つて、父よ父よ、神の御意に召したまう聖人よ! と祈つたのてすが、それは若旦那様の爲に祈つたのてすから、今度は事が違ひます。他の事はさて措いても、今

の場合犬が田舎の羊を荒らさない樣に祈らなけりやならないのてす。』

○

二三ヶ月前の事てある。アンドレーエフは旅行の歸りがけ態々ヤースナヤ・ポリヤナに寄つてトルストイ伯を訪問した。伯夫婦は文學上てこそ、アンドレーエフに對して、是迄時々手厳しい非難を加へたもの丶、私交上に於ては何等の懸隔もなく、伯は喜んてアンドレーエフを迎えた。一通りの挨拶が濟むと伯は此の珍客を食堂へ案内し、例のサラダをうんと御馳走しながら恁う言つた。

『私の所ては菜食主義だもんだから食事は至つて簡單てす。君は未だ菜食黨にはならないのてすか。』

伯が笑ひながら恁う訊ねると、アンドレーエフは少々まごついた氣味て、

『否、まだなか／＼てす。何うしたら菜食黨に成れるんてせう』と誤魔化す。伯はそれに答へて、

『否、何てもない。一年ゝしたら君も菜食黨に成れるてせう』と、そんな事を言つてアンドレーエフを慰めた。

と、アンドレーエフはサラダを食べながら恁う訊いた。

『サラダの生る木は何と云ふ木てすか。』

『サラダは木に生るものぢやない。』

『ては、木がサラダから生るんてすか。』

『木とサラダとは丸て別物てす』と、是には伯も少々呆氣に取られた風てあつた。

それから談話が文壇の事に移つてトルストイ伯は先づ訊いた。

『君は最う「アンナ・カレニナ」を書きましたか。』

『否、私は近頃辛つと「アナテマ」と「アンヒーサ」を書いたばかりてす。』

『何うてす、近い内に一流の作家になる決心が有りますか。』

『左樣、準備はして居ます。去年「アナテマ」を書いてから暫らく作をしないて、大に準備をして居ました。

此秋の試驗には及第するでせう。』

トルストイ伯もアンドレーエフの熱心をほめて、

『それは結構です。若いうちにうんと働きなさい。神は勞働を愛しますから』と勵ました。

一先づ話が終ると、伯は自分の書記のセルゲエンコをアンドレーエフに讓らうとして頻りに勸めたがアンドレーエフが、要らないと云ふので、てはクープリンの方へでも言つてやらう、クープリンは屹度要るかも知れないと、言つて、一寸顏を曇らしたが、直ぐに又元の晴々した顏色に復して、一夜を文學談て明したと云ふことである。

アンドレーエフは都へ歸つて、其時の印象を人に語つて恁う言つた。

『今のトルストイ伯は作家でもなければ批評家でもない。又哲學者でもない。彼は全く聖人である。醒めた聖人である。其身邊には一種の柔かい光が輝いて居る。凡て安靜と平和の象である。其頬や顋の柔かい髯、其百姓風の粗末な外套、其蒼く輝やける双の眼――其等が總てシンミリとした靜かな印象を與へた。』

之を見ると晩年の伯の貴い面影が偲ばれる。伯の一生のカタストロープをなした最後の隱遁が未だ決行されぬ以前、既に其容貌や精神狀態が段々氣高い隱者に近づきつゝあつたものと思はれる。

▲次號に掲載の杉村楚人冠氏の事實譚

杉村楚人冠氏は　例年の通り新年號に面白き事實譚を寄稿せらるべきことを約せられたるが、今同氏が書きたしと思ふ材料二つある由なるも、一は其物語中に現はる一役者が、尚或職にあるの故を以て、一は或地方に旅行調査せざるべからざる事項あるの故を以て、此稿締切までは標題を定むる能はずといはれたり。若し或人が其職を去れば（最早や去るべき事情あり）前者を書くべく、若し旅行の時間を得ば後者を書くべし。萬一何れをも書く能はざる事となるとも必らず之に代るべき面白き讀物を送らんと語られたり。

白瀬中尉論



△白瀬を助けた所以

伯爵　大隈重信

白瀬のことは此春までは薩張り知らなかつた、それも此二月か三月かに南極探検補助費の請願が議會に出て兩院共通過した記事が新聞に出たので、つまり新聞を讀むで僅に其名を知つた位なものであつたが、其後東京日々新聞の千頭清臣の紹介て尋ねて來て初めて會つた、それは五月頃の事であつた。一度ヒヨツと會つて直に此

男ならばと信用する、といつては少し輕卒の樣にも思はれ樣が、實は會つて話を聞いて其人物を觀察すると信用の置ける點がある、成程此男ならば探検も出來樣と思はれる。彼の話によると、今よりザッと二十年の昔、まだ日清戰爭も起らぬ前の事で、何でも故兒玉大將がまだ旅團長か師團長で居つた頃の話と想ふが彼は其部下に居た相で、當時より已に冒險的思想を有し、北極探検がして見たいからと兒玉に助力を賴んだ相だが、兒玉は其志は甚だ宜しい、併し如何に氣のみ旺盛であつても體力が伴はなくては出來ぬ、汝の身體で十分に成功の見込があるか如何か、先づそれに堪ふる樣身體を先に鍛え上げなくては應ぜられぬと言はれた。彼は深く其語に感じて之を實にするの志を起し、忽ち郡司大尉の千島行に加はり、遂に共に占守島に穴居して、嚴寒と戰ひ飢渴と戰つたが、多くの同行者は敢なき最後を遂げたにも拘らず、彼ばかり無事に一冬を過したといふ程の豪のものである、それから更に亞米利加の漁船に乘つてベーリング海峽を超え、アラスカに渡りエスキモーにも行き、攝氏の零點下七十度といふ地に六ケ月も滯在し、火も無き處に只魚肉、獸肉を生食して過ごしたといふ事もある、身體は斯く迄に鍛えられて居るので甚だ頑健である、此樣な事して日清戰爭の在るも知らず、戰爭後漸く飄然歸國したのだが、日露戰爭の起るに及んで身を後備の軍籍に置くものだから徵集に應じて滿州に行つた、以前は騎兵であつたが此時は輜重の方へ廻された、其時は兒玉が總督の參謀であつたので、親しく彼の體力を見て、是ならばやれやう、北極探検を試みるも宜からうといはれたので、戰局の結ばれた後には大に其援助を得て多年の宿志たる北極探検をやつてのけやうと思つて居たが、憐むべきは兒玉大將の逝去である、大將に志を語り、大將によつて勵まされて立ち、遂に大將の知遇によつていざ多年鬱勃の志を果さうと考へ詰めて居る其矢先に、大將は溘焉として世を去られたのである、彼の失望は思ひ知るべきである、彼は爾來爲すなく、只心を苦めて時を經る中、昨年米人コットなるものあり、遂に北極探

險の功を奏したといふ事が新聞に傳へられた、實際極地に達したものか如何か、それに就いては兎角の評もあることだけれど、兎に角此報を耳にするに至つて最早や彼の北極探檢の志は一頓挫してしまつた、今は殘す所唯南極のみだから、それなら自分は南極に向はうと、それが此度の發意の原因である。彼は生來であるか自ら勉めてかは知らぬが酒は一滴も飮まぬ、茶を飮まぬ、煮たものも食はぬ、十分飢寒と戰ふべく體質が出來上つて居る、學問は大した事はない、先づ士官になり得た丈の力ほかない、が是でも宜しい、此上科學などの力がもつと有つたら一層宜いには相違ないが、兎に角此意氣、此體力とだけあれば十分其志を果すことが出來相に思はれた、君はそれて宜しい、が率ゐる部下は如何かと曰つたら有ります、嘗ては北亞米利加の漁船若くは我國の密獵船等に乘り組み、オコック海やベーリング海峽を超えて氷海をも渡り、鯨や膃肭獸を獵つたといふ漁師や水夫の群て自ら志望して一行に投ぜんと欲する者が幾らもあります、兎に角此度船長にし樣と思ふ男に會つて見て下さいといふので、其の後其男にも會つて見たが成る程丈夫相な男である、某海軍大佐の處に居たといふ事であるから其方面から腕前は如何かと聞いて見たら彼なら大丈夫との答も得て居る。成る程斯ういふものの一隊であるなら多分成功するであらうといふ氣になつた。宜しい、では我輩も一つ冒險的に思ひ切つて後援をやつて醵金を勉め樣といふ事を承諾した。

此樣な事は勿論冒險である、一度で旨く目的を達するか如何かは請合は出來ぬ。が一度失敗したからとて又此次にも行く、其又次にも行く、幾度も行く、成功は幾回かの後に期せなければならぬ、北極探檢といつても實に數十度試みて漸く昨年成功したものでないか、白瀬の此行旨く一度で功を遂げて來ればよし、遂げないからとて決して全然の失敗とはいへぬ、目的を遂せぬ迄にも何處迄かは行く、さればそれ迄の成功である、即ち全部の成功を見ぬとも幾分の成功は矢張する事であるから蹉跌が萬一あつたからとて全然其功を

沒すべきではない。西洋文明の力今日あるは何の爲か、彼等の力今日能く全世界の富を支配するの勢あるは何の爲か、基く所コロンブスの亞米利加發見、ヴァスコダガマの印度洋發見に在るではないか、此等を以て科學發達の力といふか知らぬが、實は其科學發達の力を利用して冒險を試みるものがなくては駄目な事である、冒險は能く未發の利益を開導すること此の如きものであるが、更にそれのみではなく、其國民の精神に影響することは尠小でなく能く英發勇敢の氣象を鼓舞し養成するものである。我輩の彼の壯擧に贊成したのは此等の點である、唯是だけである。

飢寒との戰に於ては我國人には經驗あるが、彼の奉天役の如き、攝氏の零點下三四十度といふ氣候に滿州の雪野に二週間の久しき幾十萬の師を暴露して露軍と對戰したてはないか、而かも一人の凍死者を出さずに全軍旺盛の志氣を以て大捷を占めたてはないか、露人は極寒の地て育つたものだから身體は十分それに順應すべく出來て居る、更に防寒具の如きも我よりは大に進んで居るに拘らず、之と戰つて能く彼の如きを得るものは何に因るか、我國人の能く飢寒に堪ゆる體力を有する以外に、更に勇氣の一點に至つて、他に比類なき者である、或る點迄は體力だがそれ以上に至れば精神の力である、處が我國は此點に至れば如何にも頼もしい力を持つて居る、即ち外國人が一週間堪えるならば我國人は同じ狀態の處に十日は堪え得るのである。此度の事の如きも眞額劍を振冠つて直に敵陣を斫るの覺悟で居るのだから、此元氣に於ても能く物質的の力の足らざるを補ひ、必ずや外人を凌駕するの功を収めるであらうと思ふ。特に極地の寒氣といつてもスコットやシャックルトンの報告によれば白瀬の經驗した程の溫度に達して居らぬ樣だから尙更である、物質的の供給に於ても、何しろ開南丸は二百噸ほかないから大して澤山も積めぬけれど、一通りの用意はしてある。防寒具の如もテントやら嚢やら、即ち此嚢を以て彼地に上陸してから大風雪に逢ふ時分には犬を抱いて共に其中に潜み、堆雪の中に埋もれて或は數日を送り、其

收まるを待ちて出掛ける事とする、其他糧食に於てもビスケットとか道明寺とか或は鰹節或は味噌、或は梅乾等先づ不足の無いだけには調つて居る筈、外國人だと中々平生の衣食の度が高いから極地探檢などといふと餘程の準備が要るけれども、日本人はそれの低い丈に準備も容易である、

衣服も誰も承知の寛濶なもので四肢は常に暴露されて居り、之を以て雨をも風をも雪をも冒して來て居るのだから極地の寒氣と戰ふにも外國人よりは都合能く鍛えられて居る上に又粗食に慣れて居る、澤庵、湯漬でサラ〳〵とかつ込むといふ習慣が付いて居るからいざとなつても困りはせぬ、特に梅乾といふものは調法である、極寒極暑にも變味せず、而かも是を以て能く壞血病の厄をも免れることが出來る、先づ此樣なものを舐り、鰹節を嚙み。間には味噌でも磨つて石油の火で養て食ふ位の事で凌ぐ、萬一糧食缺乏の時には携へて行つたカラフト犬でも屠つて食ふのである、之をスコツトやシヤツクルトンが上等の牛肉の鑵詰を多量に携帶し、更に飲料品に於てもブランデーだシヤンパンだシエリーだボルドーだと澤山に持つて行く、それ等に比べては甚だ簡易なものである上に荷嵩重量共に少く、從つて上陸後の競爭と言つてもそれだけ容易に前進し得る點に於て我に一日の長ある譯になる、其他學術用機械等に於ては十分精良にして新樣のものを用いてあるから他に遜色あるを覺えない、之を以て世界の學術界に立派な報告をも作り得べき事と信ずる。白瀨は性急の質で且つ剛直であるから能く人と衝突し喧嘩するが、所謂吳越同舟であるからいざ乘出して目的地に向つてからは、十分協同して一つに働くことが出來樣と思ふ。世の中は空論ばかりでは始まらぬ、百發の空彈よりも一發の實彈の方が力がある。兎に角今度は日本が世界に向つて實彈を打掛けた事である、どうか我輩は此我國に前古未だ曾て有らざる一大壯擧をして旨く成功せしめたいものと思ふ。

△剛情にして冒險好きな白瀬中尉

根本千代吉

明治三十四五年頃に仙臺に於て私は初めて白瀬中尉と逢つた。其時は何でも中尉が郡司大尉と喧嘩して千島の方から歸つて來た時だと記憶して居る。個人として往來したことはないが秋田の會などでは二三回逢つたし、又日露戰爭の當時滿洲に於て一回逢つた。それから仙臺に居る時にあの人の子供が仙臺の幼年學校を退學せられたについて暫らく私の家に預つてゐた事もある。然し前申した通り親交がある譯てないから餘り立入つてあの人を論ずる程の知識はない。

私の見る所では、何しろあの人は剛情な人だ。非常な負けず嫌ひな人だ。理が非ても思ひ立つた事は仕遂げるといふ性質の人だ。郡司大尉と喧嘩した時でも、郡司大尉排斥の論文を出したり、或は千島に關する建白書を出したりいろ／＼な事をやつて自分の主張を枉げなかつたらしい。私もあの人の「千島探檢錄」といふものを一讀したが、あの本て見ると隨分頑固な保守主義の頭で、西洋嫌ひ、耶蘇嫌ひ、何處までも國粹保存主義の人らしく思はれる。千島に行つた時でもあの人は陸行隊の隊長てあつた。其後深くエスキモーの方まで行つて其處て越年をした。確か十何人かて行つたが皆壞血病とか水腫病とかて斃れて了つて僅か二三人しか生殘らなかつた。あの人は其二三人の一人だ。だから寒氣や困難に堪ゆる丈けの修業は充分積んである。身體は中肉中丈だが、ガッシリとした頑丈なよい體格だ。

あの人が探檢の志を起したのは餘程古いことて最には兒玉大將に逢つて北極探檢の事を申出てたらしい。處が大將はまだ修業を積まなければならんといふやうな事をいはれたが爲めに、千島樺太から沿海洲を經エスキモーまでも行つたらしい。其時に千島海峽を根據として屯田兵を置いて密臘船の取締をしなくてはならんといふやうな建白書などを出した筈だ。然るに北極の方は已にペアリーに先鞭をつけられて了つたので、

今度南極の方へ行かうとしたのだと想像する。
一體冒險が非常に好きらしい。あの人の子供なども矢張りなか〳〵の負けず嫌ひて、同級生などの遣り得ない事を好んでやるといふ風があつた。その爲めに退學にもなつたのだ。今は海軍兵學校に入つて居る。中尉も矢張り其父丈けあつて何ても人の出來ない冒險的の仕事をやつて見たいといふ風だらうと思ふ。人の下に立つて働くよりも、自分が人の上に立つて思ふ通りに仕事をして見たいと云ふ性質だと私は見た。まア此位の話で御免を蒙らう。

△酒も煙草も茶も一切用ひぬ白瀨中尉

村上濁浪

白瀨中尉も人間であるからして、若し其人を論評したならば、長所もあらうし、又缺點もあらう。私の見て特に中尉に感心する點は撓まず事をするといふ事である。私が中尉と知つてからは一年位のもので、長い間の交際でもないから委しい事は餘り知らぬが、嘗て郡司大尉の一行に從て千島に行き、そして隨分寒氣や困難と戰つて少しも屈しなかつたといふ事である。それから又倚身體を鍛ゆるが爲めにずつとエスキモーの部落までも行き、いろ〳〵な困難に遭遇したが少しも屈せず、何處までも探檢家たるの志望を貫徹するに勗めた事は感心すべき點といふてよからうと思ふ。

それから、も一つよい事をいへば、中尉は酒も飮まない。茶も飮まない。煙草も呑まない。湯さへも飮まない。只水ばかり飮む。普通酒の害とか煙草の害とかいろ〳〵いふけれども之を抑制することが容易に出來ない。然るに白瀨中尉は堅く之を守つて決して破ることがない。或新聞に白瀨は酒を飮まぬといふ話てあつたが此頃船の出來ぬのに自棄を起して酒を飮むといふやうな事を書いてあつたが、其れは飛んでもない間違て、私は明かに其無根なることを保證する。中尉が此等の飮料物を飮まないのは決して外觀を粧ふ爲めてない。こちらから茶や湯を出しても必らず水を要求す

る。身體が丈夫だ爲めにさうするのか、修養によるのか、或は水を飲むのが身體によいといふやうな理由の爲めにするのか私にはよく分らない。

顔は赤ら顔で身體はかたく出來てゐる。餘り大柄ではないがガッシリして居る。探檢家にはどうもあゝいふ身體の人が多いやうだ。現に私の知つて居る所でも、福島中將の身體もあゝいふ風だし、又鳥居龍藏君などもさうだ。

軍人だ爲めか物事はキチン〳〵と秩序正しくやる。然しこれはよいともいへるし、わるいともいへるが頭腦は餘程單純らしい。夫れだから費用の計算や何かといふ事は餘りあの人の得意でない。然し、雪の中をおめず臆せずドシ〳〵進んで行くといふやうな事は蓋しあの人に最も適當した事だと思ふ。向ふに行き着きさへすればキット行ける所まで行き了ほせるだらうと思ふ。

一體日本の人はまだ探檢の事に關する知識が乏しい。南極探檢といへば必らず南極の極までも行ける。然うせざれば大失敗の樣に思うて居る。實をいへば多くの人は探檢の檢の字の書き方もよく知らない。檢と書いたり險と書いたり甚しきは驗と書いたりして居る。又碌々寄附金も出さない。そしてゐながらいろいろ注文をしたり攻擊したりしてゐる。今度の南極探檢の如きは日本人としては實に初めての事業である。世人は餘程同情の眼を以て視て寬大の心を以て遇して貰ひたい。假りに極まで行くことが出來ぬにしても、今迄の人が行つたとは別の地點から行くのであるから、其效能は決して皆無でない。又國民の元氣を皷舞するといふ無形上の利益に至ては莫大であらうと信ずる。今迄足が三本あると思うてゐた鳥の足が四本あつたとか五本あつたとかいふ事を檢べるのは抑々末だ。國民の元氣を皷舞作興するといふ事が本だ。現に私などの若い頃に福島中佐の騎馬旅行とか郡司大尉の千島探檢とかいふ話を聞いて、盛んに冒險心を起したものだ。況んや今度の南極探檢の如きは現今の靑年の元氣を振興するについては非常に効能があらうと思ふ。(完)

△乘りかけた船

風滿樓

▲或る人達が斯う云ふ話をしてゐるのを聞いたことがある。

『南極探檢隊が開南丸とか云ふ船に乘つていよ〳〵出發すると云ふ日に、何處かの新聞で其の開南丸の寫眞でも出して、「乘りかけた船いよ〳〵出發」とでも書いたら面白からう』

▲これは單に皮肉、冷評とのみ聞いてはならぬ。今度日本人の手によつて企てられた南極探檢には、何んとなく「乘りかけた船」と云ふ趣きが見ゆる。

▲日本人の南極探檢計畫は、其の發表が如何にも大膽てあつた。何等の計畫も準備も無しに、只『南極に行く』と云ふことを無雜作に發表したやうてあつた。世界の探檢家と稱するものは定めて驚いたてあらう。『南極へ行く』と云ふことゝ『隣家へ行く』と云ふことゝを日本人は同じ樣に見てゐると思つたてあらう。

▲曾ては十分の準備を以つて西比利亞に騎馬旅行を試むることを一大冒險のやうに思つて、それを行つた福島中佐とやらに、熱狂するばかりの大歡迎を捧げた日本國民は、南極發見と云ふことをも西比利亞旅行ぐらゐに解してゐたのてはあるまいか。

▲我等は不幸にして、我が同胞に對して「淺薄」と云ふ感じを起さゞるを得ない機會に接することが屢々ある。文學界のこと、思想界のこと、それ等の近狀に於ては、先輩長者學者經世家を以つて自ら任じてゐる人々の態度が殊に淺薄で、譯の分らぬ卑俗な見解を正しとして、徹底どころか、筋の滅茶々々な言葉を高慢ちきに並べてゐるのが可笑しくてならぬ。あゝ淺薄、それは我が同胞の多數の上を蔽ふ霞のやうなものであらうか。

▲南極探檢の企てに對する日本人多數の態度、それも決して周密とは云はれないらしかつた。出發の期日の幾度か延引されて、乘りかけた船の容易に岸を離れない感あらしめたことなど、甚だ遺憾に思はれる。

▲併し私は白瀬と云ふ人には同情を有つてゐる。白瀬と云ふ人がドンなつもりであゝ云ふことを企てたかは知らぬが、兎に角『南極へ行かう』と云ふ一つの目的を定めて、一生懸命にそれに取り付いてゐる狀が、無目的に漂浪してゐるやうな我等の生活に比べて何となく羨ましいやうにも思はれる。

▲尤も私一個の上から云へば、冒險、探檢と云ふやうなことは大嫌ひである。飽くまでも平和、安寧、逸樂を欲する私は、食うて寢て牛になつてゐたい。高いところへ登るのは、日比谷公園へ行つて摺鉢山へ登るのも厭やだ。新橋大阪間の汽車旅行が私には生來第一の大旅行である。夏になるとよく富士登山の記事が新聞などに見えるが、私はあの記事を讀んで見る氣にもなれない。南極など、聞いたゞけで慄とする。

▲けれども老子か何かにある『鷄犬の聲相聞ゆれども民老死に至るまで往來せず』と云ふやうな生活も實は詰まらないし、さりとて活動とやらをするのも面倒だし。何うしたら可いか。私も寧そ『乘りかけた船』へでも乘せて貰はふか。

△白瀬中尉について

福本日南

白瀬といふ男はなか〳〵剛情で、思ひ立つた事は何處までも遂行して見やうといふ奴だ。一言にしていへば木强漢で、極めて眞面目だ。今度の仕事には堅くなつてキバリ込んでゐるといふ形だ。何處かの新聞にやり損じつたら白瀬が切腹するだらうなどいふ記事があつたが、彼奴本當に腹を切るから白瀬に言ふまいとて、我々は其新聞の記事を隱した程だ。

今度の探檢について私は白瀬に注文をして置いた。白瀬の極めて眞面目なことは分つて居るが、從いて行く部下の中には場當りの好きな奴もあるやうな。古來探檢家は嘘を吐くに極つて居る。其れが爲めに全部の功を沒して了ふ。目的は達しなくてもよい。只嘘を吐くな。正直に行つて見て來た丈けのことを語れば其れ

は必らず何かの爲めになる。マルコポールが今日まで「地理家の母」といはれる所以のものは彼が嘘を吐かなかつた爲めだ。當時は世界のことが些つとも分らぬ時であるから、嘘をつく積りならいくらでも吐くによい。けれども彼は比較的正直に見聞を錄した。其爲めに今日まで世を益して居る。又林子平と間宮林藏の事を比べて見ても、當時は林子平の方が景氣がよかつたが、嘘が多かつたので、今日から見れば間宮の方がずつと價値がある。又近い例は釋元恭、あの坊主だつて矢張り西藏の山の根つこ位までは行つたに相違ない。其れを正直に語れば取るに足るに相違ない。然るに行かぬ所も行つたやうな話をして、お釋迦の經文を取つて來たとか何とか嘘を吐くから全部いけないといふ事になる。一寸の事で永久の損をする。此點は吳々も白瀬を戒めて置いた。

今度の探檢は日本人として初めての事であるし、又其事夫れ自身が壯とするに足る事であるから我々は非常に之を喜ぶ。成功は固より期せなければならぬが。假りに成功しなくてもよい。行ける處まで行つて正直に見聞を語れば夫れでも非常の利益がある。白瀬は艱難に堪ゆる丈けの鍛錬は充分あるらしいから、此點は大いに信を措くに足ると思ふ。

今より十年許り前に佛蘭西から南極探檢船が出た。其時の費用は三十萬フラン(約十二萬圓)の豫算であつたが一般の人が到底駄目だらうと噂した。然るに探檢者は之に激して、船の名に Pourpuoi Pas?(何が故に能はぬ乎)とつけて出發した。當時佛國のアカデミーの學者や何かは懇篤にいろ／＼の注意を與へて大いに其便宜を計つてやつた。こういふ事を考へると甚だ遺憾に思ふのは日本の今日の學者などの態度である。素人に何が分るものかというて冷眼に看て居る。博士達と普通人との差は神と人と程遠く隔つて居るのではない。學者ももとは學んで覺えた者ではないか。よく親切に敎へさへすれば素人でも近い所までは行けるのである。今少し心を寛く持つて民間の事業に同情を寄せて日本人總體で日本を持上げるやうにしたいものと思

ぶ。

△白瀬矗

佐々木照山

麥茸は黄土に生ぜず、筍子は石田に出でず、物の現る丶や必ず其地を得て現る丶ものである、此故に吉田松陰は地を離れて人なく人を離れて事無しと絶叫して居る、我輩が人物評を試むる時の用意は先づ出生地が何處であるかといふことに着目するを第一の緊要事として居る。

南極探檢隊長白瀬矗其人は仙臺の產である、仙臺は鹽釜明神の繩張り内であるが、其鹽釜明神が神代記の鹽土の翁といふ以上は白瀬矗其人が探檢的性格は後天に非ずして先天であると信じらる丶のである、何となればヒコホホデミの尊にメナシカタマといふ小船を造りてまでも、タツノミヤコを探檢さしたのは鹽土の翁である、而して又ニニギの尊に教えて、東方に美地あり、就いて以て王業を謀るべしといふ論を唱へたのも此鹽土の翁である、神武天皇の東征は實に此鹽土の翁が遺圖を實行されたのに過ぎないのである。

斯の如き探檢家の元祖を土地の大明神として崇拜の標的とせる地方に、探檢家白瀬矗其人の現る丶のは、猶ほ麥茸が砂原に生じ、筍子が竹籔に出づると同じく現るべき地に現はれたのであつて、一も異むに足らないのである。

斯くいへば、地に由りて人を生ずるとならば、獨り白瀬矗其人を待つまでもなく、仙臺から他にも探檢家が現れさうなものであるといふかも知れぬが、如何にも白瀬矗其人を待つまでもなく、日本で有數の波濤開拓論者伊達政宗は、仙臺の殿樣ではないか、其使節として慶長十八年九月十五日陸奥國月の浦より出帆し、明年一月メキシコに着し、尋いで西班牙マドリッド府に入り、更に伊太利に到て羅馬法王に謁見した支倉六右衛門常長は、實に仙臺の武士ではないか、

去らば此正宗主從のみかといふに、否、否、否、蹈

國の人々悉く徳川三百年の太平に昏睡せる眞最中、身を挺して蝦夷を探検し、後三國通覧海國兵談等を著はし、江戸の日本橋の水は直に阿蘭陀の岸を拍つと絶叫せる林子平も亦仙臺の藩士てはないか、此等は皆鹽釜明神を崇拜せる仙臺の産物としては現はるべき地に現れたものであつて珍とするにもあたらないのである。

白瀬矗其人も亦地を離れて出現した人てはない、「三十五反の帆を捲き上げて往くよ仙臺石の巻」といふイソ節に鼓吹され、「船はチヤンコロても炭薪や積まぬ積んだ荷物は米と酒」といふ負けじ魂を養成された結果、自然に出來あがつた探検家てあつて、勉めて作り成した細工人形てはない。

既に細工人形てないから、織巧な處は更にない、計算ても何ても大まかなものてある、支倉六右衛門は四間に十二間の船て羅馬まて往つたから、俺がやつても出來ぬことは無い、二百噸もあれば南極まて乾度往けると直覺して直唱したまてである、費用は四萬圓もあれば澤山だ、四萬圓が出來なければ二萬圓てもやつて見せるといふ樣な調子であつて、我輩も其位な金て出來るものならどうかやらしたいといふて乘り出したのてあるが、さてそれが二錢といふては買ふ人が少ないから一錢九厘といふて客を引かうといふ樣な緣日商人的魂性ても何てもない、實際本人も左樣信じて居るから面白い、だから聞く人も亦左樣信ずる樣になるが、偖て實行に掛るとそれが頓てもない違算といふことが分り、本人も驚けば聞いた人も亦惘れることはあるが、それが又故意てないから、それ程深く咎めるにも及ばないといふ譯になつて、淺い河じやと小褄をからげた人が、次第に帶を解くまて深く嵌まり込むといふ樣な次第てある。

現に二百噸の船て馬を十疋も積まんとしたり、一臺四十貫目も有る樣な橇を造らせて、馬も駄目になるし橇も役に立たなくなつたりした樣な滑稽が有るが、此處等が如何にも大間抜の底抜けな處で、算盤以外ツボヌケた馬鹿さ加減の處が一寸及び難い處てある。

どうせ探検とか冒險とかいふ仕事は刃の上を渡る樣

なきハどい仕事て、不成功の請合は九分まて出來るが成功の望は一分しかないといふ馬鹿げた仕事だから、二一天作の五といふキチンとした算盤の持ち方て、一分一厘も餘裕の無いといふ天窓てはやれたものてはない、まあ二一天作八位て、も一一遍位一進一十が取れさうな處が味ひのある處て、常規外れの處程心配だが、亦見込も其處に在るのてある。

白瀬矗其人が成功すれば其算盤以外な處に在り、失敗すれば又此算盤以外の處に在る、

白瀬矗其人は一言に評すれば志大才疎といふ四字で盡きて居る、山子でも食はせものでもない、軍人の出身にしては多辯な方、思ふた事を胸に疊んで置くといふことの出來ない男で、直情徑行丸で赤ン坊見た樣な處がある、それかと思へば涙も血もある、それに體軀は頑丈だから、海上で天災に罹らぬ限り極地に上陸したら屹度終點まて往き果すに相違ない、本人は「盡人事待天命」といふ六字を口癖に言つて居るから、まあやる迄やらせて見るが此天成の探檢家に對する國民の義務だと我輩は信ずるのてある。

△探檢的に出來て居る

田中舍身居士

白瀬といふ男に先づ感じた事は彼が豫備に編入された理由てある。それは以前には陸軍武官結婚條例なるものがあつて、結婚するにも制裁がある、即ち少中尉は六百圓大尉は四百圓を保證金として官に納めなくてはならぬ定めてあつた、處が貧乏少尉にやつとこ中尉とやらいつて、少中尉の分際ては容易に六百圓などといふ大金が納められるものてない、さればといつて十分に禁欲するといふ譯にはいかぬ、已むなく善い加減のものと關係を結んて濯ぎ洗濯等身のまはりの勞を取らせる事となる、すれば自然に子供が出來る、出來る小供は已むなく皆婦人の子として屆けさせるので表向き私生兒になる、すれば又其小供が大きくなり、親の志を繼いて軍人となるとすると、第二の軍人は悉く私

生見てある譯になる、是は不面目である、不都合である、而して基く所は苛酷なる結婚條例なるものの存立にある、廢せざるべからずといふので、此意見を當時第二師團一兵卒といふ匿名を以て兵書新報に寄書したのである、すると事が八釜しくなり詮議が始まつて到頭何も知らぬ一兵卒が嫌疑を受けて營倉に繋がれる事となつた。此に於て彼は默するに忍びず、其無辜の一兵卒を救はうと思つて自首して出た。其爲に遂に少壯の身を以て早くも豫備に廻されたといふ事である。其處が彼の男の値打である、即ち彼は至つて正直である上に、又此の如き謂はれなき束縛のある可きでない、斯くならざるべからずといふ見究めの附く所がある。即ち目先の見えぬ男ではないと見られる點がある。

彼の冒險心は一朝一夕の思ひ附ではない、早く故兒玉大將に北極探檢の志を語り、大將に勵まされて先づ我身を如何なる極寒の地に曝すも大丈夫といふ鐵石に作り固めんものと志し、郡司大尉の一行に投じ千島邊に飢寒と鬪つたのみならず、更に漁舟に乘じてベーリング海峽を超え、五人の同志とエスキモーに上陸し、玆に越冬の計を定めたが、中三人は攝氏の氷下七十度といふ冱寒に堪えなくて非命に斃れる、ただ彼と他の一人のみ氷雪に埋もれて六ヶ月の長き、辛くも命を支へ止めた、其間の艱苦は名狀すべくもなく、マッチも無ければ火を造ることも出來ず、食料は全く盡きる、已むなく只捕つて來た狐の四肢に嚙み付いて生ながら食ふ、鮮血滴らす、直に口邊に着いて紅の氷を作すといふ有樣、兎角する中遥に北亞米利加の漁船通過の烟を認めて援助を求める、人有るべくも思はれぬ斯かる境に物の吠ゆる樣なる聲、野獸にもやと各々銃を擬して近よつたら、毛髮爪と伸びに伸び垢つき黑ずんだ身體ではありながら流石に人間の俤を留めて居たので漸くに救ひ取られ、再び本國をも見るを得たといふ事である、其辛酸艱難を味つた事は斯の如く、生來の頑丈なる身體愈よ強さを加へて今では水にも火にも溺れず焚けざる外觀を呈して居る。特に酒は一滴も口にせぬ、酒は興奮劑で一時は氣血の循環を能くし體溫を加へる

ものであるが、醒めての後は反動的に體溫を減じ、極寒の地には之を用ふる事は甚だ危險である、彼は其所以を以て之を避けて居る。又烟草も吸はぬ茶も飲まぬ否煮燒したもの熱したものは一切用ゐぬ習慣を幾歲月かに涉つて付けて居る、私等の處へ來ても遂ぞ湯茶を口にした事はない、御飯を喫べるにも必ず湯茶を斥け水を請ふを常とする、他所へ行つてばかりかと疑つて試みに彼の居る月見館のものに尋ねて見ても矢張左樣である、冷飯に水のみで押通して居る相だ、之を見ても其志の一朝一夕でなく而かも如何に强情我慢意志の堅固に忍耐力の强いかが知れる。

學問は大したことはない先づ普通の士官並の處である。性急で正直で、それに直情徑行一毫の矯飾もない、そして議論を好む、言はんと欲する所を勝手に言ふから兎角喧嘩をやる。が斯樣な武骨漢の所が偶ま以て探檢的に人物が出來て居る事と思ふ。用意周到で御世辭ても知つて居つて都合能く當世を游泳して出やうなどといふ樣な、所謂利巧な人間には迚も萬死を賭する探檢などいふ事が出來るものでない。考へるにコロンブスなどいふ男も矢張り彼樣なものであつたらうと思ふ、無謀と嘲られた冒險も旨く其効を奏して米大陸を發見したものだから、俄に聲名嘖々として萬世の後にも喧傳さるゝに至つたが、白瀨とても遂げざれば已む、若しも旨く夙昔の志を遂げたとすれば、矢張りコロンブスに爲り、俄に偉大な人格と爲つて歷史の表に殘る事と思ふ。白瀨が初め一萬圓そこらの計畫を立てた事は隨分無謀とも言はれたが、それは只極地に到り着く丈だけの計畫で、船も八十噸位のもので、濟ます考であつたから、强ち無謀とも思はれぬ、隨分それ位の小船で漁師などは能く北海の怒濤に抗して居るのを目擊して居る、逆浪天を捲いて崩るゝ時には船の大小を問はぬ、大船は能く免れて小船が獨り覆へると定まつた事はない。然らざる時とすれば小船だからとて何等の不自由はない、只其最初より計畫を大にし、學術部員を完全に從へ機械其他を十分に整頓するといふ段になると八十噸では足りず、従つて費用も多きを要する譯に

なるのである。それだから私は必ずしも白瀬を以て無謀の計畫を立てたとはいはぬ。私が白瀬に會つたそも〳〵には先づ一死以て之を貫くの覺悟があるかといふ事を以て第一に問ふたが、其時の彼の答に不肖ながら私も日頃佛教を信奉して居るもの。中には十分の覺悟を抱いて居る、事就らずんば一死あるのみ位の臍は固めて居りますと言つた、私は此點に於て大に彼に信ずる所がある。それゆゑ中道にして運動に困難を感じた時には常に同志の者に語つて、「下手すると白瀬は死ぬぞ」の一語を以てしたものゝ、漸くにして今日迄漕ぎ付けたのは先づ喜ばしい、此上は何とかして彼に圓滿なる結果を齎させたい。（談話）

白瀬中尉は秋田縣由利郡に生る。十一月二十六日夜、在京秋田縣人相會して同中尉の送別會を神田玉川亭に開く。時に一青年あり。つか〳〵と演壇に登つて、大聲を張上げて甚句を唄ふ。其文句に曰く

白瀬中尉は話せる男　コリヤサ
氷山枕に晝寢する

拍手暫らく止まず、皆其奇抜なるを稱讃せり。一青年、名は伊藤銕藏、今、慶應大學の生徒たり。面白き文句なれば餘白に記し置く。（楊陰）

和歌

尾上柴舟選

○ 關本梁村

夜となれば何のこゝろかしらねどもあやまられたる君にひた馳す

あやまられあやまりたりといふのみにことたることもありにけらしな

月見草いつしか白き初秋の風吹く宵となりにけるかな

病める身はよろこびのごととく起きて朝の空氣を限りなく吸ふ

われながら心もしらず身もしらず君てふものにみちびかれゆく

生活とたゝかひもしてわれもまたけものゝごとく生きてあらなむ

冷やけき朝の空氣の冷々と病む眼にしみ來る悲しさ

こゝろよきほどに醉ひたる眼をあげて靜に凪げる海を眺むる

荒浪の上に夕日の落つる時さびしくなりて口笛を吹く

かなしみもよろこびも皆つちくれにひとしきのよ歌うたふ時

夜となれば冷たく胸に沁みて來るものあり遠き杜のともしび

○ 塚田眞

落葉のうつくしさともたとへなむ二十はつかに逝きし友はや

誰かいへわれ等が生は落葉のごとく果敢なく哀れならじと

ひとの死をきけば先づしも眼にうかぶわが身死したるあとの安けさ

劇場にきゝし三味の音むねにあり十一月の街の

午後ゆく

をゝかたのものごと忘れゐたりける眞晝落葉のうつくしきかな

朝床のぬくきがなかに眼覺めして十一月の朝の風きく

しづかにも音なき空にむかひつゝわが生くるてふもろさを思ふ

哀れみて任意にしつるわが心哀しき態となり果てにけり

癒えにけるそののちの日を偲びいてなぐさむれどもなほ安からず(病みて)

○　小澤紫紋

うち默す日のみかさなる此頃を淋しや樹々の黄ばみそめける

秋更けぬ刺戟もあらぬ我が生に倦ずともせてなほ歌をよむ

蓬の香霜にとぢられうらかなし秋更けし野の朝の河原

椎の實を嚙みつゝ森の細道を少年の日の夢たづね行く

死に隣るわがこのころの力なさ人を思ふにはやも泪す

河くまにそこはかとなくほの匂ふ水草に沁む夕ぐれの風

かりがねは大空遠く鳴きわたるわれら渚をかなしみて行く

囚はれしこゝろをいつか忘れはて秋に歌ふはうらなくかなし

○　岩谷莫哀

たれか來て強き侮辱を加へずやくやしまぎれに命死ぬべし

抽斗をなかば開きて茫然と机の前にものを思へる

くれがたの電車の窓に江戸川の濁れる波のうつるさびしさ

ふる里の野には野の花咲きつくし君なさけなく

なりし頃かな

秋の風都に入りぬふる里の早稻の飯などなつかしき哉

菊の匂ひしづかに窓にはひのぼる十一月の一日のあさ

外光はまばゆきばかり照りてめりまた靜やかに寢がへりをする(病床にて)

○　逸見雨山

やう〳〵に覺めし心の冷たさの消えて行くこそうら悲しけれ

悲みも誇りもなくて一日々々けだるく過ごすいらたゝしさや

我心我にそむくもいつしかに習ひとなりて悲みもせず

嚴かに立てる山かな晩秋の風がもてくる死の聲の中

今朝のあさけふと執りあげしペン軸に指ひやひやと冬を覺ゆる

雜誌など取り散らしたる片隅に瓦斯の光を浴びて横臥す

堀割になかば沈める小船あり潮さすごとに浮かんとぞする

○　段谷秋洋

夜は深う沈みぬひとりめ覺めてはくらき我世をおもひ涙す

おののきぬ我いやはての日をもなほ靜かに天つ日は照すらん

丘に立てば秋の光のしらじらとかなしきまでに澄める夕ぐれ

ああけふもたそがれにけりとりとめて何なせりともあらねど安し

果もなく我ゆく路はつづきたりはろに見渡し涙さしぐむ

人の世にかかはりあらずさゝやかに秋の小草は花つけにけり

○　村田長春花

日の流れあかるく朝を逝ひ來ぬ果物の香のみなぎれる丘
こゑもなう遠にかゞやく浪かしらひるがへる見ゆ十月の岡
日光のふる方へのみ飛びて行く小鳥の聲をさびしめるかな
いさかひの後にたゞよふ不安なる心もちより秋の風吸ふ
けらぞ泣く黍の畑に疲れたる黄なる微光のたゞよへるもと
船あまた疲れしさまに帆を垂れし初秋の朝の海のなげかひ

○　千住湘江

われもまた漂泊者の一人かときどき頰に涙してゆく
かがやける涙とともに汝が指のルビぞ光れる月光の下
灰色の空氣をにごす雜音の底をしづかに笛の音のする
青草の甘きにほひに抱かれてものおもひする午のしづけさ
蒼ざめし海と天との中をゆくかの白鳥に似たるかなしみ

○　西井金羽

いざゆかむ行きてねむらむ人の世の幾山河の旅のさびしさ
ゆくらかに白き雲わく水無月の山の靜けさ山のたふとさ
とらはれし心かしらず放たれし心かしらずあはれなるかな
心よくつかれて入りし夕暮のレストラントの灯のなつかしさ

○　正木哲夫

心よう風木々を吹く河岸の林のひるの明るさに立つ
夕暮のうすやみの中に身を浸しものも思はて君

を待つかな
ほのくろき山やゝ高う聳えたりある日の午後の光かなしき

○　大岡緑雨

旅人は馬車の立場の片隅に夕空みつゝ物を思へり
草屋根にまつはり咲ける黄色なるへちまの花と頰の赤き娘と
鉋屑ちらばり匂ふ普請場のわきにあかるくコスモス咲けり

○　乾山茶花

秋の陽はいと長々と我影をかなしや地に横へにける
慰まず加留多のむれをつとぬけて冷たき床に寐にかへりきぬ
見返れば道行くさはの旅人のなかに哀しき我のまじれり

○　小出秀月

ことさらに落葉ふる夜を戀しがり林のおくに歌をうたひき
草枯れし出水の跡の川端に小さき花のそよぐ夕ぐれ
河原みち釣鐘草のほろ／＼と咲けるを見れば人のこひしき

○　尾崎渡水

吾が君の髮にさしたるコスモスに來て戯るゝ初秋の風
月光は杳かに原を照らすなり寂びしき歌を口ずさむかな

○　本間多市郎

古驛たゞひとつせし槌のおとの止みたるかなし木枯吹けり
散り敷ける落葉に見ゆるくれなゐに僅か殘れる青のいたまし

○　岡本昇

病める日は酒も思はずさま／＼の辛き事をのみ

思ひ見る
寂しさは我性なりや歡樂の巷し行けば涙あふるゝ

○　　井田葉歌
のび出し僅かの鬚の手ざはりにまつはるふけし秋のさびしみ
さわやかに風鳴りわたる十月の樹の間に白き朝の月かな

○　　飛川晶耕
秋は來ぬ垣にまつはる蔓草のしろき葉裏に風光るなり
雲のかげ一つ靜かにながれけり白くかがやく十月の空
そこはかと汚物のにほひただよへる出水の町の暮れなやみかな

○　　鈴木風影
上り汽車待てるあひだのさみしさに柿なども買ふ夜の小驛

セコンドを佪かず刻める針のごと心ひまなく君を思へり

○　　富安白雨
君と云ふ殼を求めて入りしより明るき光射してこぬかな
曉の製絲會社のもの鈍き汽笛きこゆる夢のさめぎは

○　　武田青眼
うつくしき揚羽の蝶のきてまへる靜けきひるの柑子ハ畑
夕暮のうすあかるみにたゝずみて月見草見る寂しき心

○　　足立笑也
思ふこと語らむとして一言も語りえざりきとはに默さむ
たぷ〳〵とつぎしビールの泡の今あふれんとする如きうれしさ

○　　三浦薔薇

何鳥か榎の實をこぼす靜かなる心もとめて墓のみちゆく

○ 伊藤緑水

聖像の前に頭垂れ眼を閉ぢてあれども心物を思へり

○ 月森神來

さびしさは花により來る蜜蜂の蜜を吸ふごとわが心すふ

○ 七條正則

宿直の十二時過は寂しかりうつろなる心公報を讀む

○ 增田宗二

母上よ時にはかなき不足言ふ兒も悲しさに泣く夜はあり

○ 高橋卜仙

秋の日は白くまろびて無花果の果のむらさきを滑り歌ひぬ

和歌原稿は東京小石川區原町一三三尾上柴舟宛中央公論歌稿と表記ありたし

俳句

年木

高田蝶衣選

年木樵れば藏ざまに積む家法かな　月精

北風(きた)除けに積める年木か窓に添ふ　同

炭竈の火頭見に立てば年木樵る　同

塾壁に戒火のことや年木積む　同

家の山減り行くを思ひ年木樵る　同

年木山冷え手溫むる溫泉口あり　同

年木樵るや寒蛩既に春を告ぐ　夢筆

垂天の雲裡に樵りし年木かな　同

雪の雁は華やかなりき年木山　同

寒柯斧に觸るれば落つる年木枝　同

幽谷の樓脚の旭や年木樵る　同

年木一荷歌の師の尼へ贈りもす　雨圃

僧に乞はれしその年木なしかゝる山　同

年木山に番屋めく落葉埋むる家　同

陶土らしを雨に見て過ぐ年木山　同

年木山請け出して法會營めり　不寐庵

蘭の花今咲く深山年木かな　同

木の溢に刃なまり鉈や年木樵　同

吾歳に推す木齢や年木山　同

わが老は年木も樵らず俵あみ　總子

忙しさも嬉し樵りたむ年の柴　同

森尻の湖風寒むや年木樵る　同

年木拾ふ法のお山の落ちこぼれ　同

年木にと樵れば水吐く何の木や　天梅

年木樵歸路の目あてに枝切り行く　同

年木積みし夜鼬啼けり道絶えに　同

傭はんに愚者こそよけん年木樵　同

谷を隔てゝ日々年木樵る二人かな　雨郎

女手の束締め・ゆるき年木かな　同

暮れ前の山明る年木樵り止めん　同

序普請に實立チの納屋や年木積む　人生

年木積んでよりぞ鼬の災鯉に　同

貧すれば二分持つ山や年木樵　同

師も弟子も情相同じ年木樵る　耳山

年木積むや頤使の主の髭袋　同

天人の糞かけ松や年木山　同

僧と杣と閑話ながらや年木樵る　保赤

貧厨に破爐に用意の年木かな　同

藥堀りし山にも樵れる年木かな　同

年木樵る暦日の吉山晴れて　木屋

魑魅祭る供物も敷いて年木樵　同

隣軒に年木をわかつ驪語かな　同

樵り殘る年木は神の姿かな　奇溪

年木樵る斧を振うて魔を伏す　同

年木積みに舟の集まる入江かな　同

今日て三日年木の車つゞきけり　水竹

獵人の兎くれけり年木小屋　同

谷の家年木の人を宿しけり　同

野は寂びて山賑ひぬ年木樵　柳洲

繩盡きて薦て束ねる年木かな　同
生ま傷の絶えずといへり年木樵　同
麓村年木積みてより熊の訴も　火碧
年木樵藤橋編むも囑ありて　同
片岨に家あり年木樵歸る　同
鹿穽を見廻り暮れぬ年木樵　但翠
霜に遇へる山梨うまし年木樵　同
年木干せば鹿の骨燒く思あり　竹朗
年木割るや我に許國の心あり　同
年木樵る音北窓を寒うせり　鷺江
山寺の僕庭離一歩に年木樵る　同
年木樵る愚公が家の小者かな　椋雨
年木山この國限り城たてり　同
舌耕の閑や婆を俱し年木伐る　鬼哉生
缺舌の斧忘れぬる年木樵　同
歸養遂に起たざりし臣や年木宿　洒涙雨
坊々の嚴律緩む年木かな　同
改易に祿なき寺の年木かな　一白水

山柿一葉血の如きあり年木樵　同
年木積むやのべし機糸色はてに　不騒
退耕を村年の年木樵ることよ　同
年木樵る緇素相交り深山寺　凰車
黄檗山裏の茶畑に年木積む　同
君斧をわれ年木負ふ馬返し　蓮窓子
年木樵れば何悲める鳥の聲　同
仙家とも見ゆ二タ並び年木山　虹凉子
年木など餘戶の寺へ寄進かな　同
納豆の床の加減や年木積む　楢風
五男五女ありて堆き年木かな　同
旅情又年木つむなる五家の庄　太古
此村に過ぎたる寺や年木棚　同
茶屋婆の世辭に報ゆる年木把　卯月
竿鎌に年木なぐ空雉子飛で　同
年木積んで何寒干の箕の物ぞ　五黄
一棊局果つる時年木の斧柄朽ちぬ　同
死人ありて年木樵らずよ山の家　唯郎

粟飯や山村は早年木つむ　同
年木樵書休む間に鴨を獲し　孤風子
冬百日定めし假居や年木樵　同
年木樵る家僕の老を犒ひて　燕閣
鞍壺に知る岨冷えや年木樵　同
年木樵鎌研ぎ水に庵叩く　鶯樓
閑一爐年木積むことに賑へり　石楠花
一村皆年木の山に籠りけり　對山樓
年木積めば竈の神の微笑みぬ　筑仙
年木千棚里の長者が古諺に　鳳城
斧入るゝ年木に鎮火神事かな　死雛
生木焚いて煙に目病みぬ年木樵　螺山
年木樵妹が頼みの砧槌　麻生
奥山の苔のつき居る年木かな　花鳥
年木樵らん前日十斧を研ぐ夜業　漁笛
兎糞多少を吉凶談や年木樵　烏城樓
馬流して年木も樵らず出水年　枕水
猿を射れば神罰をいふ年木樵　[illegible]

杜木を伐り序にも年の柴　兎笑
ちぎれ飛ぶ雲あはたゞし年木樵　紫明
檀那寺の年木樵る衆が大焚火　丈貝子
忌日ありて遲れて入るや年木山　巨椋

蝶衣

机上日々木兎風間を齎しぬ
河豚の座にさ音の詞忌む人も
年の暮汝に二舌を看得たり
師走人業無き者を白眼に
富に居て師走の雪を賞しけり

課題

惠方　十二月五日〆切
氷　一月十日〆切

規定

▲淡路國假屋在高田蝶衣宛
▲一人三十句限▲用紙半紙

正誤

花そばや蕎麥屋の濤過刈　蚌月
逝川つや薔薇白けれど渡し閑　綾郎

評論

米國黨勢一變

一

十一月八日の米國總選擧は意外にも民主黨の勝利に歸したり。共和黨の金城鐵壁たりし紐育、マサチユセッツ、ユネチカット、ニユゼルシー四州の知事は、民主黨候補の手に落ち、從來議會に於て少數黨（共和二百十九對民主百七十二）として失意の境涯にありたる同黨は今や形勢一變、俄かに多數黨（共和百七十二對民主二百二十三）となり、天下の形漸く意の如くならんとす。吁嗟運命は循環す。吾人は今更らの如く感慨に堪えざる也。

然かも翻つて想へば、是何ぞ怪むを須ゐん哉。昨年ペイン關稅法制定は、稅率低減を標榜して、却て逆まに之を增加し、爲めに國論を激昂せしめたるにあらざる乎。蓋し物價騰貴は方今天下の大勢也、之を以て保護關稅の罪のみに歸せんとする米人の議論、或は偏見僻說の嫌ひならむ。然かも關稅が多少の責任を免る能はざるは確實也。已に多少の責任あり、從つて選擧前に於ける共和黨領袖の千萬言も、遂に其甲斐無かりし也、而して兩關稅法の起草者たるペイン氏（紐育選擧前下院議員）は劈頭の落選者たる光榮を擔ひたりき。

二

然れども共和黨敗北の原因は獨り關稅改革問題のみにあらざりき。ロオスエルト氏の活動振と其新國民主義とは、亦大に其責を分つ可きもの無くんば非ず。所謂新國民主義とは何ぞや。ロ氏自ら語つて曰く「新國民主義は大統領を目して公衆幸福を保護する執事とするもの也。同主義は法廷に對しては財產よりも人類の幸福に重に注意を拂はんことを求め、議會に對しては人民の一部よりも全部を代表せんことを求む」

讀み來つて何の奇なきが如しと雖も、ロ氏の意は法廷

及び議會を非難し、最も頼むに足るものを獨り大統領とするに在り。換言すれば公衆の幸福を托す可きは大統領に在りとして、之が權力を强大にし、立法、行政、司法三權の分立極端に行はれ、互ひに平等的關係を持し居る現在の制度に一大變革を來さしめんとするに在り

ロ氏は又曰く

新國民主義は國民的問題を地方的問題なるが如く取扱はんとする地方立法の結果、起り來る混亂紛雜を忍び能はざるもの也。

是即ち米國制度の根本たる州權に打擊を加へんとの警告也、現在の地方分權を排して、中央集權の策を講ぜんとする豫報也。豈一般米人に執りて破天荒の改革論にあらざらん哉。

ロ氏が此論をなす、固より多少の根據あり。理由あり。然れども米國民より見れば、大統領權力を强大にするも、州權を微小にするも、畢竟是れ彼等が最も嫌惡する一人政治主義、即ち專制政治主義に接近するの觀ある也。思ふに米人が昔年英國を逃れて新大陸に移植せるは實に此專制主義を免れんが爲めなりき。極端なる三權分立制を定めたるも、地方分權主義を執りたるも、一人政治を避けんが爲なりき。然るに今や一人政治は海洋を超えて彼等を襲ひ來らんとす。彼等如何んぞ驚駭せざるを得む。

三

是猶可也。然かも彼等は別に更に恐懼措く能はざるものありたりき。何ぞや、選擧前に於けるロ氏の專制的態度是也。

ロオスヱルト氏は一世の雄也、彼が自己の所信を行ふて屈せざるは、美點也、長所也。左れど其眼中大統領無く、共和黨領袖無く、紐育共和黨綱領を定むるにも、自意を貫ひて、他人の所見を容れず、壓迫と威喝を以て黨人に臨みたるは、宛然獨裁君主の態度なりき。換言すればロ氏自身こそ『新國民主義の具體的實現』なるが如く思はれき、黨人の不平は少焉らく說かず。一般人民が愈々驚惶し、靡然として在野黨に奔りしも何ぞ偶然なりとせん哉。

吁嗟斯くの如くにして共和黨は敗れたり。而して民主黨の運命は拓かれし也。

四

黨勢一變す、今後タフト氏の施政漸く其難を加へんか、而して明後年に於ける民主黨大統領當選の希望は大に增加したりと見る可き也。

然らば則ち何人か共大統領候補たる可き。ブライアン氏か。曰く否。氏は三度戰つて三度敗る。況んや最近故郷ネブラスカの民主黨、已に氏に背けるに於てをや。吾人は目下優勢なる候補者として兩雄を擧げんとす。曰く新ニユゼルシー州知事ウイルソン（前プリンストン大學總長）曰く紐育市長ゲイナー。

ウイルソン氏候補說は、十年來の事たり。世人之を知る。ゲイナー氏に至つては、今春紐育市長就任以後、改革を斷行して名聲隆然として擧る、今秋紐育州知事候補に推薦せられんとするや、斷乎辭退して曰く、老生、市長として任半ばに、業未だ成らず、何ぞ職を去る可けんや、殊に生を信じ、公職に從ひ共に働ける友人を放棄し去るに忍びざる也と。此書簡世に傳へらるゝや、敵味方を問はず、以て現代の珍となし、其職務に忠實にして、徒らに榮譽を求めざるを賞讃す、然かも曷くんぞ知らん。是却て將來ゲイナー大統領候補說を高むる所以にあらざるかを。

思ふに今後の米國政界は變動の機也、興味を喚起するもの多からしむ、而して共和黨對民主黨の策戰とウイルソン、ゲイナー兩氏の勢力消長如何とは必らず各々其重大なるものゝ一たる可き也。

英國總選擧

英國總選擧、本月三日に決定すとの報あり。誰か首相アスキス氏に對して同情の淚無きを得む。首相アスキス氏の上院否認權妥協會議に於けるや、洵に力めたりと謂ふ可し。去六月愛蘭、勞働諸黨の攻擊と不平とを顧みず、自ら膝を屈して和を統一黨に求め、政府四名、在野黨四名より成る憲政妥協會議を開始し、夏期に至れるも、双方の主張餘りに懸隔して相讓るに由無く、一旦中止し、今秋（十月）再び會議を催うし、十一月中旬に入れるも、事遂に成らず。方今君が心事それ如何ぞや。

然かも今や戰鬪の時となる。知らず兩黨の勝敗果して如何なる可きか。

吾人は豫言者にあらず、從つて選擧を豫言するの勇氣を有せず。然かも政府黨側は前回選擧の際に比し、有利なる點と不利なる點を兼備せり。有利なる點とは他なし。前回には統一黨の内部鞏固なりしが、今や然らず、關稅改革派の不平とバルフオル氏の黨首的資格を疑ふの議論とは、内部の不統一を明示して餘りあり、然るに自由黨側は之に反し勞働黨、愛蘭黨との聯合一

屑鞏固となり來れること是也。不利なる點とは他無し。前回の爭點は豫算案なりしも、今回の爭點は上院改革と共に愛蘭自治問題（英蘭人が好まざる）を含むこと是也。此二點の如き、恐らくは總選擧の結果を左右する所以の重因子たる可き也。

殊に此選擧に關聯して注目を値ひするものは、今秋愛蘭國民黨首領レッドモンド氏が米國にて醵集し來れる四十萬金の使途をなす。借問す、彼は何處に向つて此黄白を散ぜんと欲する乎。

中亞鐵道計畫

露國シンヂケート、三億五千萬圓を投じて中亞鐵道布設計畫を立つ、露國首相ストリキピン、外相サソノフ、英國外相サー、グレイ諸氏皆贊成す。露國政府の贊成は問はず、英國外相が贊成せる點に至ては吾人は至深の興味を以て之を見ざるを得ざるものあり。何ぞや。四年前迄は、中央亞細亞に於ける露國鐵道の計畫程、英人の神經を惱ましたるものあらざりき。其眼に映ぜる同鐵道は、印度征服の野心の表證たりし也、之に關しては多數の著述成り、多數の論文新聞雜誌を賑はしたり。然るに今や此態度は一變したり。一變敢て不思議にあらず。是英露親和の賜也、協約の賜也。然かも此親和、協約の保護の下に成らんとする同鐵道は、高加索を發し、波斯を横ぎり、ベルヂスタンに入り、印度と歐洲とを聯絡せんとするものなるも、工事の大部分は寧ろ波斯國内に在り。換言すれば、中央鐵道の聲は、波斯にとりて、其亡滅期近づくを告ぐるの弔鐘也。吁嗟何等悲慘なる運命ぞや

佛國内閣改造

十一月上旬、佛國内閣辭職し新内閣成る。然かもブリアン氏依然首相たり、ピション、ブルン諸氏依然外務陸軍を掌る、以て其改造に過ぎざるを見る可き也。

抑も此變動は如何にしてか起りたる。他無し、十月鐵道工夫同盟罷業の際、政府が高壓的手段を執り、鐵道人夫が、佛國法律の下に在りて一種の豫備兵となれるを利用し、之に特別召集令を發し、三週間軍律の下に置き、列車運轉を行はしめたるに依る。蓋し勞働、司法兩大臣（ウィウィアンニ及ペルッウ）は之迄、鐵道人夫に同盟罷業の權利あることを承認し且つ之を公

言したりし人なりき、然るに今回政府の措置は、事實に於て同盟罷業を不可能にしたるものなりき。内部の衝突なからんと欲するも豈それ得可けん哉。

然らば則ち新内閣の運命は如何。吾人は其漸く社會黨的臭味減少すると共に、最も有力なる勞働同盟の反抗を喚起し來り、内治上幾多の面倒の續生に會す可きを疑はず、是遂に或は内閣の生命を短縮する重因の一たる可きか。

寧ろ政府の罪也

米國テキサス州に於て一墨耳哥人、暴民の爲めに木枝に吊され、燒殺さる。墨耳哥國民大に憤怒し、首府墨耳哥市に於ては學生の大行列あり、米國公使館亦危きに至る。

外人を國法に問はしめず、私に刑す。是米人特有の蠻的行爲なり。然かも其罪は寧ろ重に政府に之あらざるを得ず。今春判事ホルト氏發表して曰く方今私刑を敢てせる犯罪者にして刑罰を免れ居るもの十萬に達すと。政府が私刑に對する態度斯くの如く緩慢に且つ寛容也。非文明的汚行、其跡を絶たざるも亦宜ならずや。

前露國國民議會議長逝去

露國議會開會す。而して劈頭紛々たる論議を喚起したるは過般逝去の第一回議長ムロムツェフに對し弔意を表するや否やに在りき。其理由を問へば曰く、彼は不軌を謀りたるの疑ひあれば也。

吁嗟迫害、陷擠、讒誣、充滿せる露國政界に於て、唯一片の嫌疑の故を以て故人に弔禮を表す可からずとせんか。露國々民議會議長中、恐らくは弔禮を受け得るもの遂に一人もあらざる可き也。

杜翁長逝

露國文豪トルストイ伯、十一月二十日午前六時、溘焉長逝す。齡正に八十二、天下之を聽ひて痛悼せざる無し。

伯は理想家なりき。其理想は老子恬淡の道に近うして、實際社會を指導せんには餘りに遠かりき。其聲は麗はしかりしかど、孤鶴蒼旻に號叫するの聲なりき。然かも今や則ち亡矣、吾人は竊かに老偉人を追懷して涕涙の横流するを禁ずる能はず（懷沙隱客）

第二十七議會召集

十一月七日の詔書を以て、十二月廿日議會召集令を發布せらる。

霜深くして彌よ政治季節に入る、政論の頓に盛んなる知るべきのみ。

陸軍大演習

十一月十三日より十六日まで、岡山縣に於て陸軍大演習を行はれ、至尊臨御、親しく武を閲し玉ふ、成果は兎に角良好なりしと聞く、願はくは士氣を維持して、永遠に失墜せず、益々之を振作し砥礪せんことを、士氣は我々陸軍の基礎なれば也、然なくば軍隊は一種の五月人形に過ぎざれば也、舉世滔々物質に偏し、型式に流るゝ時、吾人は敢て此の言を爲すの太だ無要ならざるを信ず。

明年度豫算の綱要

桂藏相は、十一月十五日大阪市の經濟會に於て、明年度財政の綱要を演説したり、吾人は後の參考のため、其の全部を茲に掲げ置く

明年度豫算の計數は今後多少の異同ある可きも、今日迄に定りたる所は經常歳入約四億九千百萬圓、臨時歳入約九千百萬圓にして、歳入合計約[illegible]億四千二百萬圓、歳出は經常歳出約四億八百萬圓、臨時歳出約一億三千四百萬圓にして、合計約五億四千二百萬圓なり、而して明年度歳出豫算中、新規又は既定經費の増加として見込まれたる經費の重要なるものは海軍々備補充費製鐵所第二期擴張費、關門海峽及神戸港の設備に要する經費、水害復舊費、朝鮮總督府補充金等なりとす

東洋平和の保障を益々鞏固ならしむる爲、列國の製艦方針の變更に伴ひ、我國も亦從來の製艦方針に適當なる變更を加ふるの必要あり、幸に財政の基礎漸次鞏固を加へたるの結果、國防の必要に應ずるも差支なきを認め、國防と財政との調和を保つ範圍内に於て海軍力充實の爲海軍既定經費を追加することゝせり、右追加の計畫は來年度以降六箇年に亘るものにして、其の總金額約八千二百萬圓、内明年度に使用すべき金額は約一千五百萬圓なり、而して海軍補充費の如き經費に對しては確實の財源を以て之に充つるを相當と考へ、經常歳入を以て其の財源とし、六ケ年に亘り既定繼續費の追加として豫算に計上することゝせり。

朝鮮に於て努めて同地方の利源を開發し、人民の福利を増進するに全力を注ぎ、以て克く併合の目的を貫徹するの考なるが、之と同時に成るべく財政上の累を來すことなからしむる爲、朝鮮の會計を特別のものとし又努めて經費を有効に使用するの方法を講じたるにより、明年度に於て一般會計より朝鮮特別會計へ補助金として繰入らる金額は約一千二百餘萬圓に止まり、之を從來種々の形式を以て韓國に對して支出し來りたる金額約一千百餘萬圓に比較するときは、増加する所は百萬圓にも上らず、

而して朝鮮の殖產工業開發鐵道等に付要する經費の增加は、韓國銀行をして融通せしめ而して融通資金の償還は朝鮮特別會計にて計畫を立つべければ累を一般會計に及ぼさず故に之が爲め公債募集の要なし。

水害の復舊工事に要する經費は未だ全部の調査を結了するに至らざるも、大體の金額は略ぼ見込立ちたるにより、調査確定次第政府より補助すべき金額は成るべく速かに支出の手續を爲し、復舊を急ぐの考なり、其金額は七百萬圓前後なるべく、政府は何時にても其の必要に應ずる準備を爲せり、又地方の負擔となるべき經費支辨の爲府縣債の募集を要する場合に於て、政府は成るべく便宜を與へ、地方の苦痛を出來得る丈け輕減するの希望を以て、別に其の考案を立てたり。

治水の財源に付ては、初めより一定の腹案あり、治水計畫は目下委員會にて調査中なれば今日に於て之が經費を明言する能はざるも大體は既定九川の外十一河を加へて廿河川とし、之れに森林經營砂防工事調査費を合せて約廿個年の繼續費とし、明年度豫算には先五百十餘萬圓を計上し、其後は每年相當金額を繼續費として計上するに豫定せるが故に治水費增大に伴ひ是等豫定費に多少の增額を來すべし、而して政府は治水に付特別整理の方法を講じ、豫定費不足の場合は年々全部預金部より融通するとし、事業終了後豫定費を以て漸次預金部に償還するの計畫なれば之が爲めに公債募集の要なし。

交通機關を整備することは既往に於ける經濟狀勢の發達に鑑み、又將來進步に適應し、凡之を促進する上に於て最も緊要なりと信ず、現に此の趣旨に依りて鐵道の國有實行せられ、其の後亦此目的を貫徹するが爲め鐵道特別會計法制定せられたり、併しながら種々の事情により、鐵道の整理を圖るの上に於て從來甚だ遺憾を感じ居たり、然るに今や一般財政經濟の情態頗る良好なる域に向ひ、公債借換の事業も漸次進捗を告げつゝあるに至り、又鐵道に付ても數年來の難問題たりし約五億に近き鐵道買收公債交付の處分も全部完了して、而かも其の經濟界に對する影響極めて良好なるのみならず、此の間事務の整理技術官の養成等も漸く進みたるが故に、玆に鐵道に關する政策を一進し明年度以降東京馬關間の帝國鐵道幹線を廣軌式に改築して、以て滿洲及び朝鮮に於ける鐵道と連絡を保ち、遙かに歐洲經濟市場との交通の大道に一大改良を加ふるの計畫を立て、其の實行に着手することに決定せり、而して此經費は既定經費の外一億二千萬圓を十三箇年に分割支出することとしたる結果既定繼續費割延長せられ每年度割は都合一千萬圓を增加し、明年度割は約五千百九十萬圓の勘定と爲れり。

鐵道經營の財源に付ては從前の如く鐵道の收益を以て辨ずるものゝ外は、主として預金部郵便貯金其他の特別會計に依るの考なり、現に現年度にては鐵道資金四千萬圓鐵道證券、預金部其他の特別會計にて支辨し得るを證明せり、元來鐵道に付ては其の性質上公債を財源とするも差支なきものなるが故に、當初財政計畫を立てたる當時に於ても鐵道特別會計法は此の趣旨に基き制定せられたる次第なれば民間金融調節の爲め資金を使用する必要ある等の內外經濟狀態に照らして支障を生ずる虞なしと考ふる場合に於ては、鐵道資金は公債に依るも差支なしと思考す、併しながら財政と經濟とは常に調和を保たしむることが根本の方針なるのみならず、既に公債の低利借換の事業に着手し、之が遂行に努むる目的を立て目下其の事業の進行中なるに依り、鐵道資金の調達に付きては克く此等の點に鑑み、些少の遺憾なき樣深く其の手段方法を愼むる考なり。

同時に大藏省より提出せる各省所轄費目は左の如し

歳　入（千圓を單位とす）

	來年度	本年度との比較

經常部	四九一、〇〇〇	(增)五、六六一
臨時部	五一、〇〇〇	(增)七、二二九
計	五四二、〇〇〇	(增)一一、五六一

歲出（右同）

經常部	四一八、〇〇〇	(減)九、六三八
臨時部	一三四、〇〇〇	(增)二一、一〇九
計	五四二、〇〇〇	(增)一一、五六一

各省所管別（千圓を單位とす）

所管	計	經常部	臨時部	本年度計との比較
皇室費	四、五〇〇	四、五〇〇		增減なし
外務	四、四〇〇	四、二〇〇	二〇〇	減 三、一一六
內務	二三、七〇〇	一一、八〇〇	一一、九〇〇	減 一、五五四
大藏	二一一、二〇〇	一八六、七〇〇	二四、五〇〇	減 九、六六九
陸軍	九八、三〇〇	七六、三〇〇	二二、〇〇〇	增 一二、八一七
海軍	八六、一〇〇	四〇、七〇〇	四五、四〇〇	增 一〇、七一五
司法	一二、七〇〇	一二、〇〇〇	七〇〇	增 二七七
文部	八、七〇〇	八、〇〇〇	七〇〇	減 一四五
農商務	一四、九〇〇	七、三〇〇	七、六〇〇	增 二一七
遞信	七七、六〇〇	五六、八〇〇	二〇、八〇〇	增 二、一二三
合計	五四二、一〇〇	四〇八、三〇〇	一三三、八〇〇	增 一一、六六一

右表中來年度に係る分は概數を示すに過ぎざるを以て、本年度との增減比較も自ら正確を期し難し。

廣軌改築と政黨

右の藏相演說を以て、東京馬關間の鐵道を廣軌に改築することを發表するや、世間是非の言紛々たり、政友會は前期議會に建議せるは、公債に由て未成線を延長布設すべしとの趣意にして、廣軌改築には反對なりといひ、國民黨また之を悅ばざれば、廣軌案は所詮不成立に終るべし、唯だ內閣は其の運命を賭して之を爭はざらんも、議會に於ける一大問題たらんや明らけし、內閣若し之を以て政友會と妥協するに非ずんば、必らず先づ衆議院に於て敗れん。

治水計畫

政府は治水調査會に提出したる全國河川改修案なるものは下の如し

△年度繰上案內容

	千圓
既定計畫改修費額	六三、三一七
新規計畫改修費額（十九ヶ川）	八三、〇〇〇
內 荒川改修費	一二、〇〇〇
北上川改修費	八、〇〇〇
其他の河川改修費	六三、〇〇〇
一ヶ川平均額	七、〇〇〇

計	一四六、三一七
譯　外に　荒川上流改修費	一〇、〇〇〇
木曽川上流改修費	六、〇〇〇
砂防費	一〇、〇〇〇
諸雑費	一、五〇〇
總計	一七三、八一七

△各河川工費総額

利根川	二六、八二一
庄川	六〇
九頭龍川	六八〇
木曽川維持費	三、三〇〇
遠賀川	一、六九五
信濃川	一〇、八〇〇
高梁川	三、三八三
吉野川	六、六六〇
澱川下流	一、八五〇
渡良瀬川	七、二二六
荒川	一三、〇〇〇
北上川	八、〇〇〇

△各年度支出総額

四十四年度	一一、二五〇
四十五年度	一三、一九〇
四十七年度	一二、一七〇
四十八年度	七、一四五
四十九年度	六、五四五
五十年度	五、四七三
五十一年度	五、一九〇
五十二年度	四、一一二
五十三年度	一、三八〇
五十四年度	六三〇
計	七九、五三六

△各河川工費支出年度割

▲利根川

四十四年度	三、八〇〇、〇〇〇
四十五年度	五、三〇〇、〇〇〇
四十六年度	三、六八〇、〇〇〇
四十七年度	四、三〇〇、〇〇〇
四十八年度	二、八〇〇、〇〇〇
四十九年度	二、六三五、二七五
五十年度	一、八〇〇、〇〇〇
五十一年度	一、八〇〇、〇〇〇
五十二年度	一、八〇〇、〇〇〇

▲庄川

四十四年度	六〇、〇〇〇

▲九頭龍川

四十四年度	一三〇、〇〇〇
四十五年度	同上
四十六年度	同上
四十七年度	同上
四十八年度	同上
四十九年度	三、〇〇〇

▲木曽川維持費

四十四年度	三〇〇、〇〇〇
四十五年度	同上
四十六年度	同上
四十七年度	同上
四十八年度	同上
四十九年度	同上
五十年度	同上
五十一年度	同上
五十二年度	同上
五十三年度	同上
五十四年度	同上

▲遠賀川

四十四年度	五〇〇、〇〇〇
四十五年度	同上
四十六年度	三〇〇、〇〇〇
四十七年度	同上
四十八年度	九五、〇〇〇

▲信濃川

四十四年度	一、六五〇、〇〇〇
四十五年度	一、七〇〇、〇〇〇
四十六年度	一、一五〇、〇〇〇
四十七年度	同上
四十八年度	同上
四十九年度	一、〇〇〇、〇〇〇
五十年度	同上
五十一年度	同上
五十二年度	同上
五十三年度	同上

▲高梁川

四十四年度	六、五〇〇、〇〇〇
四十五年度	六、〇〇〇、〇〇〇
四十六年度	五、〇〇〇、〇〇〇
四十七年度	同上
四十八年度	同上
四十九年度	四、〇〇〇、〇〇〇
五十年度	二、三三〇、三七〇

▲吉野川

四十四年度	一、四六六、〇〇〇
四十五年度	五五〇、〇〇〇
四十六年度	四五〇、〇〇〇
四十七年度	四〇〇、〇〇〇
四十八年度	五〇〇、〇〇〇

四九年度	五五〇、〇〇〇
五〇年度	同上
五一年度	同上
五二年度	同上
五三年度	同上
五四年度	同上
▲淀川下流	
四四年度	五三〇、〇〇〇
四〃年度	同上
〃六年度	四三〇、〇〇〇
四七年度	三六〇、〇〇〇
▲渡良瀬川	
四四年度	八〇〇、〇〇〇
四〃年度	一、八〇〇、〇〇〇
四六年度	八〇〇、〇〇〇
四七年度	二、〇〇〇、〇〇〇
四八年度	四五〇、〇〇〇
四九年度	四〇〇、〇〇〇
五〇年度	三六〇、〇〇〇
五一年度	同上
五二年度	二五六、〇〇〇
▲荒川	
四四年度	一、〇〇〇、〇〇〇
四五年度	一、五五〇、〇〇〇
四六年度	三、九〇〇、〇〇〇
四七年度	一、八〇〇、〇〇〇
四八年度	八〇〇、〇〇〇
四九年度	同上
五〇年度	同上
五一年度	同上
五二年度	同上
五三年度	一五〇、〇〇〇
▲北上川	
四四年度	九〇〇、〇〇〇
四五年度	同上
四六年度	一、二〇〇、〇〇〇
四七年度	一、五〇〇、〇〇〇
四八年度	七〇〇、〇〇〇
四九年度	同上
五〇年度	同上
五一年度	同上
五二年度	同上
五三年度	同上
五四年度	一〇〇、〇〇〇

調査會委員會は、若干の修正を加へて之を可決したりといへば、本會も又或は之を通過せん乎。

亂臣賊子出づ

大審院の檢事總長は、十一月九日左の驚ろくべき決定書を公けにしたり。

幸德傳次郎外廿五名が今回の大陰謀を爲すに至りたる動機をたづぬるに傳次郎は明治卅八年十一月米國桑港に至り、同國の同主義者と交はり、遂に個人の絕對自由を理想とする無政府共産主義を信ずるに至り、同港在留の日本人に對して其說を鼓吹し、翌三十九年五月頃社會革命黨なるものを組織し、本邦の同主義者と氣脈を通じ相呼應して主義の普及を圖るの計畫を爲し、同年五月歸朝し直接行動論を主唱したるに始まるものなり。

幸德傳次郎は當來現今の國家組織を破壞して其理想を實現せんと欲し無政府主義者の泰斗たるクロポトキン其他の著書學說を翻譯出版して國内に頒布し、盛に無政府主義の鼓吹に努め、遂に多數の同主義者を得るに至り、其言論益す過激となり、明治四十年二月十七日東京神田錦輝館に於ける日本社會黨大會に於て直接行動を執るべき旨を公然主張するに至れり。

尋て同月廿二日曩に認許されたる日本社會黨は安寧秩序に妨害ありとし其結社を禁止されたり、所謂直接行動とは議會政策を非認し、總同盟罷業、破壞、暗殺等の手段を以て其目的を達せんとするものにして、傳次郎等は其初に當ては秘密出版其他の方法により、主として其思想の普及を圖りしも、遂に進んで過激なる手段を執るに至り、同主義者は第一着手として、明治四十一年六月二十二日東京神田に於て「無政府共産革命」と大書したる旗を白晝公然街路に翻へして示威運動を爲し、警察官の制止に抵抗して爭鬪を挑み、其中數名は處刑せられたり。

當時郷里高知縣に於て無政府主義の著述に從事し居りたる傳次郎は、同年七月郷里を出發し、途次新宮及び箱根に於て同志に謀るに暴擧決行せんことを以てし、八月上京し、屢ば東京の同志と會合したる末、主義普及の最も有力なる手段として今回の陰謀を爲すに至りたり、而して本件が本年九月下旬長野縣明科に於いて發覺したる際、被告人となりし者は、宮下太吉、新村忠雄、新村善兵衞、新田融、東京に於いて逮捕したる古川力作、當時東京監獄に勞役場留置中の管野スガ及び神奈川縣湯

同縣に於いて逮捕したる傳次郎の七名に過ぎざりしに、嚴密に搜査を爲したる結果、陰謀に參與せし者各地に散在せる事發覺し遂に廿六名の被告人を出だすに至れり。

△決定書

高知縣幡多郡中村町大字中村町平民著術業　幸徳傳次郎(四〇)
京都府葛野郡朱雀野村字聚樂廻聚樂西町無職　管野事　管野すが(三〇)
岡山縣後月郡高屋村平民農　森近運平(三〇)
山梨縣甲府市本町平民機械職工　宮下太吉(三八)
長野縣埴科郡屋代町平民農　新村忠雄(二四)
福井縣遠敷郡雲濱村竹原第九號字西作園場栽培業　古川事　古河力作(二七)
北海道小樽區稻穗町畑平民機械職工　新田融(三一)
長野縣埴科郡屋代町二三十九平民農　新村善兵衛(三〇)
東京市神田區神田五軒町三平民　奥宮健之(五四)
高知縣安藝郡室戸町大字元無家平民活版文選職　坂本清馬(二六)
和歌山縣東牟婁郡新宮町三百八十四平民醫業　大石誠之助(四四)
同縣同郡請川村大字請川二百八十三平民雑商　成石平四郎(二九)
同縣同郡新宮町五百六十四平民僧侶　高木顯明(四七)
同縣同郡同町二平民僧侶　峯尾節堂(二六)
三重縣南牟婁郡市木村大字下市木二百八平民農　崎久保誓一(二六)
和歌山縣東牟婁郡請川村大字耳打藥種賣藥及雑貨商　成石勘三郎(二九)
熊本縣玉名郡豐水村大字川島八百七十二士族新聞記者　松山卯一太(三二)
同縣飽託郡大江村大字大江平民無職　新美卯一郎(三二)
同縣熊本市西坪井町七平民無職　佐々木道元(二二)
同縣鹿本郡廣見村大字四丁平民無職　飛松與次郎(二二)
神奈川縣足柄下郡温泉村大平臺平民僧侶　內山愚童(三七)
香川縣高松市南紺屋町平民金屬彫刻業　武田九平(三六)
山口縣吉敷郡大内村大字御堀平民電燈會社雇　岡本頴一郎(三一)

大阪市東區本町二丁目四平民鐵葉細工職　三浦安太郎(二三)
高知縣高知市鷹匠町四十平民神戸海民病院事務員　岡林寅松(三五)
同縣同市帯屋町四十一平民養蠶業　丑次事　小松丑治(三五)

右幸德傳次郎外廿五名が刑法第七十三條の罪に關する被告事件に付、刑事訴訟法第三百十五條に依り大審院長の命を受けたる豫審判事東京地方裁判所判事潮恒太郎、同河島臺藏、同原田鑛より差出したる訴訟記錄及意見書を調査し、檢事總長松室致の意見を聽き之を審案するに、本件は本院の公判に付すべきものと決定す

明治四十三年十一月九日

大審院特別刑事部にて(裁判長判事鶴丈一郎、判事志方鍛、同鶴見守義、同末弘嚴石、同大倉鈕藏、同常松英吉、同遠藤忠次、書記田尻惟德)

吾人は事の世道風敎に取て容易ならざるものあるを思ひ、殊に全文を揭げて永く後世に貽らんとす。

關税論汪洋す

關税問題に於て、英國々民の攻撃熾烈なるや、我が政府外交の疎漫を攻撃するもの多く、單に外務大臣其の人のみの責任とせず、全内閣の責任と爲さんとするの聲甚だ高し、政海をして危惡ならしむるものは、實に此の狂浪洪濤ならん。

清國の國會速開

清國資政院は全院一致を以て國會速開の建議を通過するや、攝政王は直ちに之を容れ、宣統五年を以て開會すべきを宣示したり、即ち明年七月を以て憲法及び選擧法を發布し、明後年春選擧を施行し、明々後年早々國會を開かんとする也、英斷は即ち英斷なるも、清國の多事は是よりせん、其の富豪輩が近き將來に變亂あらんことを豫期し、爭ふて外國銀行に預金すといふもの、以て形勢の嚮ふ所をトするに足らずや。

清國の借欵

米國シンヂケート、清廷に利率五分、手取九十三の割合を以て、五千萬弗(我が一億圓)を貸付くるに決し、英佛獨の資本家をして之に參加せしむ。

近時暴露せる所によれば、清國の財政不足額年々五千萬より七千萬に上るといふ、清國危機の一は必らず此の財政上に在らん、識者甚大なる警戒を怠る勿れ

軍艦注文

政府新たに英國ヴイツカアス會社に二萬七千噸の大装甲巡洋艦一隻を注文す、海軍の所謂造艦獨立奈何せんとするや、思ふに深き理由あるべし。

天の聲か人の聲か

桂内閣漸く人心に倦まる、解弛近きにあらんといふの説高し▲唯だ寺内子後繼たらば将軍政治益々熾盛ならん、政友會果して割込み得て之を寛和するの力量ありや否や▲大浦男を事實首領とする中央派の策士曰く、内閣は必らず明後年の總選擧を終るまで持續すべしと▲ポンチ畫を立案するものあり、謂へらく、原敬氏に肖たる漢子、地方問題の張紙ある多くの硝子鎚を肩にして往く、才槌頭の小兒双手を擴げて之を遮る漢子喝して曰く、蹴散らしても通つて呑せるぞ、偶々圓頭巨目の一小兒あり、漢子の背後に跳出て、棒を以て鎚を粉碎せんとす、漢子匆皇、私かに合掌して救を求むと、政局を描し得て一の妙有り。

新刊批評

▲藤公餘影

古谷久綱著
民友社發行

著者古谷氏は最近十年間伊藤公に隨伴して公の行く所必ず行き、公の在ゝ所殆んど在らざるなきの人、此人自ら筆を執て伊藤公の逸事遺聞を敍す。其記事多くは公の美點長所に止り、其文調些か公を尊崇するに過ぎたるを感ぜしむる所なきにあらざるも、公と著者との關係を考へ、多少の割引をなして讀めば、其事實の正確なる他に決して匹儔を求め得ず況んや文章流暢、一度卷を開けば一氣に讀了して卷の畢るを覺えざらしむ。近來の最も面白き著書の一也。若し評者の好む所をいはしむれば、公の言葉は文章とせずして全部言文一致にして貰ひたかりし。韓國新皇帝踐祚の時に公が發したる「ドウしても行く」の一語は如何なる金言妙句よりも力あり。全篇此調子にて行けば更らに公を活躍せしむるを得たらんと信ず。公が韓國の官妓の無心にして歌舞するを見て、憮然として其場を去れるが如き、著者を捉へて韓國の制度について再三論辯したるが如き、韓國に對する態度の如き、皇室に對する忠節の如き、維前先輩に對するの誠實なるが如き、讀み畢つて、公の面目眼前に髣髴たるを覺ふ。德富蘇峯氏の評せるが如く、我等の著者に聞かんと欲する所此に止らざれども、それは恐らくは他日を待つて發表せらるべきを信じ、鶴首して其日の速かに來らんことを祈る。（定價一圓五十錢）

▲南日本の富源

恒藤規隆著
博文館發行

恒藤農學博士が自ら南日本を實地調査して、其富源の豐饒なるを說述

したるものにして、著者の意は日本民族の發展及び生活地を遠く南米若くは北米に求むるの前、近く之を我が南日本に試みしむるにあるが如く熱心に實業家及び青年に向て南日本の事情を知悉せよと勸告せり。南日本とは何ぞ、即ち臺灣本島及び所屬諸島沖繩群島離島及び無人島、大島諸島、小笠原島列島及び無人島等を指せるものにして、我國の富源を開發するには南へ延びざるべからずとして、南へ！、南へ！、の呼聲高き折柄、著者亦南方に關して世人の注目を怠れる方面を提唱す。最も研究すべき書の一也。地圖及び挿繪は多く著者の自ら調製せるもの、信を措くに足るべし。(定價一圓六十錢)

杉原亮山著
千代田書房發行

▲新譯王陽明傳習錄

雲井龍雄が傳習錄より手抄せるものに評註を加へ、訓方を附したるもの也。傳習錄は抄錄に依らず全部之を讀まざるべからざる書なるも、龍雄の如き奇傑の手抄したるものは、又特殊の面白味なきにあらず。三宅服部、遠藤、高瀨諸博士の序文あり。(定價六十五錢)

▲現代名士學修法

大岳小峽著
一星社發行

現代名士廿一氏の學生時代の勉學法及び所感等を集めたるものにして、嘗て「中學世界」に連載せられたるものなるが、學生の參考となるべし。(定價九十錢)

▲日記文

水野葉舟著
春秋社發行

葉舟氏曩きに「愛の青簡」の著あり。此書「愛の青簡」と姉妹篇たるべきものにして、日記に對する著者の感想より、著者試作の諸種の日記文を載せ、最後に現代名士の模範的日記を採錄せり。何處までも氣が利いて、清新なる所著者獨得の壇場。有益にして面白き讀物也。(定價六十錢)

▲處世交際法

笛川漁郎譯
玄黃社發行

獨逸のクッニゲ氏の名著を譯したるもの也。原著は已に數百版を重ね歐米諸國に翻譯せられたるものゝ由にて、交際法について說述すること懇切を極めたり。譯文亦流暢也。笛川漁郎とは蓋し玄黃社主鶴田氏のことなるべし。(定價七十錢)

▲基督教聖典

赤司繁太郎編
金尾文淵堂發行

バイブルの全卷を教理篇、倫理篇の二大篇に分ち、又更らに之を數章に分ちて、各章の標題に適合すべき教訓を順序よく排列したるもの也。例へば父に對する聖書の教訓を見んと欲すれば、父に對する教訓の章を開けば全卷にある父に對する教訓悉く之を知られ、母に對して、兄弟に對しての教訓又々同じ。故に便利なることは極めて便利なるも、眞にバイブルを讀まんと欲する人は原形の儘にて讀むべきものならんと考ふ。聖書梗概、耶蘇傳、基督教發展小史等を附せり。(定價一圓)

▲孟子之聖訓

二條公、東久世伯著
金尾文淵堂發行

「孝經」「易經」「中庸」「大學」「論語」「家語」「禮記」「孔叢子」等に於ける聖訓を悉く集め、附錄として「忠經に於ける聖訓」を載せたり。「論語」以外の書は果して孔子の遺著なるや否や學者間に議論あれども、世間通俗に孔子の書なりといふものは悉く集めて洩らすなし。至極便利なる書也(定價八十錢)

▲簡易聖書

小田明主譯
金尾文淵堂發行

トルストイ翁の「ゴスペル、イン、ブリーフ」を譯したるもの也。原著者の序文は、杜翁の基督教論とも見られて面白し。

▲新譯古今名家文鈔

坂井松梁著　千代田書房發行

日本に於ける近世漢文名家の作、七十餘篇を集め、之に和譯文を附し、且つ註釋を施したるもの也。內容は寧ろ近世漢文名家鈔といふべきもの也。(定價八十五錢)

▲實說太閤記(上卷)

伊藤銀月著　千代田書房發行

伊藤銀月氏の觀察及び文章共に文壇の一異彩たり。此篇日本外史等を小說なりとして斥け、著者の研究によれる史的事實をのみ記述せんとしたるもの也。(定價六十錢)

▲養生訓

貝原益軒著　益文館發行

益軒文庫第二編として發行せられたる袖珍本にして、內容は今日より見て、滑稽なることもあり、又總ての訓戒多少消極的なるを惜むも、大體に於て眞率にして自ら履行したる大人の教訓大いに味ふべきもの多し。文章亦平易にして後學の模範とするに足る(定價三十錢)

▲新釋挿入近松傑作全集(索引)

水谷不倒校註　早稻田大學出版部發行

近松傑作全集は四卷を以て完成したり。此篇校註を施したる字句の索引にして研究者にとつて極めて便利也。全集を購ひたる人は是非共之を備へざるべからず。(定價一圓)

▲日蓮論

木下尙江著　文榮堂出版

日蓮を傳し日蓮を論ずるものは少くないが新く迄日蓮を赤裸々にして解剖臺に載せ、冷靜な手を以て思ひ切つて解剖刀を揮つたものは無いであろう、日蓮に幾多の偉大なる點を發見すると同時に又幾多の矛盾撞着を指摘し、完膚なき迄に論究し、三重の迷雲を散へて彼の氣質、日本の歷史、時代の學問の三つに其所因を歸して居る所は頗る痛快の感を與へる。最も讀むべき良著である。(定價四拾五錢)

▲小公女(バーネット原著)

櫻井白是子譯　家精堂藏版

譯筆の流麗な事は坪內博士の序文に「若松女史のに比して遜色なき好譯筆これならば如何な幼年者にもよく解り申すべく又詞づかひ上品なればいつ何處にて誰の前に朗讀するも差支なかるべし」と存候とあるに贊同すべく、別に屋上に屋を重ねるを要せぬ、唯此著の曾て故若松賤子の麗筆の譯によつて名を歌はれたる小公子の姉妹篇で、英米其他歐洲各國の家庭に頗る歡迎せられた好著である事だけを言ひ添えて置く、(正價金壹圓)

▲羯南文集

梶井盛編　蟠龍堂出版

日本新聞紙上に現れた故陸實氏の論文を集めたもの、氏の偉大なる經世的識見を具へたことは何人も知つて居る所であるが、其文章に表るゝや又莊重典雅の辭は立論の堂々と相應じて一種の異彩を放つて居る、此集收むる所悉く重要な時事問題に關した者だから能く時代を反映して歷史的に回顧するも一段の興趣がある(正價金壹圓五十錢)

▲人文地理學

横山又次郎著　早稻田大學出版部藏版

人類と地球面とを併せ考へて其互に影響し合ふ點に多大の注意を留い

て研究するのが即ち斯學である。此著說述周詳にして明晰其學人を益する甚だ大なる事を疑はぬ(正價金壹圓五十錢)

▲硬教育

遠藤隆吉著
富山房出版

所謂此書の硬教育には二義ある樣だ、一は知的教育に就いて其努力を促すべく程度の高きものを教うる事、一は情的教育に反對して意的教育を施す事、此二つがゴッチャな樣だが、孰れにしても現代に於ける對症療法と丈は見る事が出來やう、之を以て唯一の定規とは出來まいと思ふ、大分賣行がよいと見えて此篇は四版である(定價金壹圓貳拾錢)

▲孔子傳

遠藤隆吉著
丙午出版社出版

縱に歷史の推移を見、橫に時代の狀態を窺つて先づバックグラウンドを明確し、其處に孔子を點出して仔細に評傳したもの、儒教熱復興の今日には讀まるべき好著であらう。(正價金壹圓四十錢)

▲イエス、キリスト

佐野天聲著
金尾文淵堂發行

基督の一生を美文的に敍したるものにして、主としてバイブルに記しある事實を材料として著者の見解を述べあるも、餘りに迷信的と思はるゝ箇所は省きあり、文章は漢文的の辭句と雅言との調和未だ完しといふべからざるが遺憾とす。卷頭にある二枚の三色版及び四十葉の挿繪は何れも泰西の名畫にして此書の半ば以上の價値あるを思はしむ。(定價一圓五十錢)

▲東西遊記、北窻瑣談

有明堂發行

前者は橘南谿の名著にして、後者は橘春暉の著也。共に有明堂文庫の一篇の中に收めらる。東西遊記は單なる紀行文にあらずして。地理、人情、風俗、物產、名所等について著者の觀察を述べあるは、皆人の知る所、而して本叢書は新式ポイント式活字を用ひ、製本美麗にして堅牢、書架の飾としてよし。(定價八十五錢)

▲太平記(上卷)

有明堂發行

同じく有明堂文庫の一篇にして、丁寧なる索引を附し便利なり。下卷の出づるの日の速かなるを望む。(定價八十五錢)

田山花袋氏の長篇小說「緣」は今古堂より發行せられたるが、次號に精評すべし。

女流作家小説十篇

娘

水野仙子

一

今日は新らしく弟子入りがあるといふので、師匠は秘藏の梅酒の口を切つたり、お茶の用意などをさせて置いた。是非にと頼まれることはあつても此節は大抵斷つて居た。お針の師匠をして生計をたてゝ居るのでもないので、座敷に一ぱいになるやうな弟子もとらず、親類や其つてゞ頼まれて餘儀なかつたのを四五人預つた。それが其妹をといふことになり、今度はまた此人も是非と言はれて、多い時には日々六七人ばかり集つた。また田舍の素封家などから、扶持もちで見習ひ旁寄宿してる娘が一人二人はあつた。

今日の御弟子は三里ばかり離れた隣り町の商家の娘で、一人娘のお祖母さん育ちで我儘一ぱいなのをそんなに云ふことを聞かないなら、何處かにやつてしまう〳〵と嚇しつけてたのが眞實となつて、今日はいよ〳〵送られて來るのである。

しかし娘は喜んで來た。何かしら潜んだ樂しみが自分を待受けてゐるやうに思はれた。他人の中は辛

いものといふ、其辛いものにも樂しみな期待を持つて祖母に送られて來た。

娘の生れたKといふ町とこのS町の間は汽車て殆ど三十分ばかりて往き來することが出來た。S町の端れにある停車場に着くと、車を二輛呼んて蹴込みに大きな鞄を置いた。場末からそろ〳〵賑やかな通りにならうとしたところて、娘は途中まて迎へに出た友達に逢つた。

「まアやアちやん」と懷かしさうに車の上から聲をかけた。直ぐにもう一輛車が呼ばれた。

この友達は多田彌生といつて、二三年前に夢中になつて愛讀した少女界て知つた名てある。K町の名所は櫻、S町は牡丹園。そんな花見の使ひなどから、お互に一二度顏も合せて、今度のことも此彌生が仲にたつて口を利いたのてある。てもまだ逢つてしみ〳〵話したことはなかつた。

三臺の車は續いて走つた。若い娘と娘は、まだ氣心の知れぬ心と心の離れ〳〵なのを、手紙の往復やちら〳〵受けた目の印象や、或は新らしい嬉しさでもつてそれを結び付けやうとした。

祖母の車は一番先に走つた。次が娘、續いて彌生、その三輛の車が一先づ彌生の家の玄關に止つた。そこて、娘達が、結んだ不思議な初對面の挨拶が親達の間に取り交はれた。三人はそこから歩いて程遠からぬ師匠の家に行つた。

庭に出て張り物をして居た年の若い下女が、垣根越しに三人の姿を見て、

「來やしたぞい」と家の中に注進をしたのて、師匠は眼鏡をはづして襟を掻き合せながら坐を起つた。其下坐に並んて居た娘達は、お互に一寸針の手をとめて顏を見合した。

「さ、どうぞずつと此方へ……」

娘は思つたよりも若かつた師匠の口から、先づはつきりとした此言葉を聞いた。初對面の挨拶が一應す

んてから、
「ヤアちやんどうも御苦勞さんてした」と新らしい弟子の脇に、猶坐つて居た彌生に一寸笑顔を向けて
「なんてございましたねえ、降るかと思つたら降りもしませんて……」と小さく坐つて居る祖母の方へ言葉を繼ぐ。

師匠の發音は此邊の土地の者のやうに濁つては居なかつた。染めてるのかは知れないが、黑々とした髮を小形な丸髷に結つて、稍々角がゝつては居るが顏の色は艶々として居る。坐つたところの少し猫背氣味な、整然（きちん）とした着物の着方は、一目て子供のない人といふことがわかつた。

「まことに飛んだ御緣て、屆かないものをお頼み申しやす。誠にはや我儘者てござつりやすから……」
と小柄な祖母がしみ〲と言ふのを引取つて、
「手前どもこそ少しも行き屆きませんてございますよ、みつちりお世話申すことが出來るといゝんてすけれど、何かと此節は用が多しするものてすから……どなたもお預りするのを斷つて居たんてすが、ヤアちやんがたつてせがむもんてすから、つひ行き屆かぬながらお預りすることにしまして……」と師匠は緩く揉み手をして居る。

お茶の道具などを運んて居た、銀杏返しに結つた若い嫁が、
「おつ母さんあのお土産を……」とそつと後の方から、笹の葉の上に寢せた松魚を一尾見せた。祖母は心祝ひにと途中の魚屋にそれを賴んだのてあつた。
「まあ貴女、とんだ御心配を……決してそんな御心配は御無用てすのに……どうも有難う存じます」と師匠は丁寧に禮を言つた。

祖母は一寸、後に坐つて居た娘の方を振り向くと、娘は心得て手提げ鞄の中から紙包みを幾つも取り出した。それを引寄せて、

「皆樣にお菓子でもと思ひやしたが、つひ大急ぎだつたもんですから何の用意もしてまゐりやせんて……甚だ粗末なものですがこれをどうぞ一つづゝ皆樣に」と師匠の前に押してやつた。

障戶を隔てた座敷の中に、俯いて時々ちら／＼こちらを見て居る娘達の、白い顏や赤い櫛などが硝子の中に見えた。紅入りメレンスの半襟が一つづゝお土產として其前に配られた。娘達はやがてひとりびとり出て來て挨拶をした。

「どうぞ皆樣、よろしくお賴み申しやす」と祖母は一々丁寧にお辭儀をした。

今の今まで、何事も好き自由に振舞つて來た娘には、それらの盡くが何となく窮屈に思はれて、初めて心細さの思ひが湧いて來た。

「おくちやんこつちへ來い」と時々座敷の娘達と笑顏を見交して居た彌生が、先に立つて早い土地言葉で呼んだ。

娘の名はお粂と言つた。粂といふのをおくちやん、彌生のことはやアちやんと呼ぶし、かういふ風にこのあたりでは大抵片名を呼んだ。時には短くやアちやなどゝも呼ぶ。

紅絹裏の燃えるやうなのを、紋のところに紙をあてた小紋の表に合せて居る束髮の娘も居た、末坐の方に覺束ない手付きをして、單物を縫つて居る小娘も居た。彌生も其中に交つて自分の仕事の續きにかゝつた。お粂は其前に坐つて、有り合せた糸卷を手玉に取りながら、人々の手許に眺め入つた。

お粂はふつくりとした桃割れに結つて居た。先方は舊式な家庭に違ひないからと祖母の指圖で、久し

振りで日本髮にあげさせたのだが、油を嫌つて結ひあげたので、髮の毛はちらりほらりと豊かな頬に散れかゝつた。それがまた一しほの趣きを添へる程、お粂は美しく生れて居た。

まだ浴衣に早い頃て、赤味がゝつたネルの單衣に、銘仙の羽織を一寸引つかけて居た。少し目につく服裝(みなり)をすると、直ぐに小さな町の者に彼れ此れ言はれるので、素朴(じみ)な柄ばかり身につけ馴れた娘達には、お粂のしつくり體に合つた作りが、羨しくも妬ましくも見られた。

祖母は間もなくくれ〴〵も娘のことを頼んで、思ひ切り惡るさうに暇を告げた。お粂もさすがに心細さは迫つたが、元氣よく門口(くち)まで送つて出た、

「祖母(ばア)ちやん心配しつさんなよ」と袖をひいてそつと言つた。言つて自分も涙がこぼれさうになつたが、上り口に見送つて立つて居る師匠と顏を見合すと、溢れるやうににつと笑つた。

二

「おつしよ樣さいなら」

「お鳥さんさいなら」

「皆樣さいなら」

上り框に手をついて、皆から言つて一人二人づゝ歸つて行つた。最後の一人が、薄縁(うすべり)に箒をあてゝ小切れや綿屑を掃き出すと、疊のそゝくれに掛つて殘つた絹絲の端がふら〴〵として、薄い〳〵闇が段々と家の中に籠つて來た。

きイ〳〵と釣瓶の音が頻りにする。廣い臺所に釜は盛んに泡を吹いて、人は誰れも見えなかつた。あは〳〵と笑ひ頽れる聲が止まないので、師匠は納戸から出て來て見ると、子供が水いたづらにする時の

やうに袂を背中に結んだお粂が、水を汲むとて釣瓶の繩に縋つて力を絞つて居た。そのなか〳〵汲み得ない形が可笑しいと言つて、嫁のお鳥さんと下女のお辰が腹を抱へて笑つて居るのである。お粂の生れた町には水道があつた。

「まあおくちやん、そんなにいろ〳〵しなくつていゝから休みなんしよ、え」と師匠が笑ひ〳〵云ふと。

「そんぢやつて先生、してみたいんだもの」と莞爾して、今度は家の脇から草箒を持つて來た。

「あゝそれ〳〵紙屑を拾つて〳〵」と長火鉢の前にちよこんとして居た旦那樣が、突然聲をかけたので、お粂は吃驚してつと塵取りの手を放した。お鳥さんが丁度はいつて來て紙屑を拾つてくれた。お粂は何となく旦那樣が怖い人のやうに思はれた。

翌くる日は彌生が一番先に莞爾〳〵しながら來た。

「旦那樣お早うごす」

「おつしよ樣お早うごす」

「お鳥さんお早うごす」と挨拶がすむや否や

「おくちやんお早う、泣かなかつた？」と笑つて聞いた。

彌生とお粂は同じ年の十七であつた。たゞお粂の方が四月ばかり早く生れて居る。二人ともまだ肩あげは取れてなかつた。

おくちやんおくちやんと、お粂を中心にした話がそれから暫らくの間續いた。ひよつこり〳〵と面白いことばかり言つて皆を笑はせるので、師匠が時々

「おくちやん、ちつとも手の方が動かねんてねえかい」と笑つていふと、

「そんぢやつて先生、祖母ちやんはお針なんてどうでもいゝから、臺所のことをよく習つて來さうつてさう言つたんだもの」と決つてから言つて澄して居る。お粂ばかりは師匠のことを先生々々と呼んだ。先生なんていふと何だか相想なくて可笑しいと皆がいふと、お師匠樣なんて、そんな面倒臭い寺小屋のやうなことは言へないものといふ。

お粂は祖父と祖母にあてて長い手紙を書いた。師匠の家内は、師匠夫婦に息子の義雄さんと其お嫁のお島さん、下女のお辰と、それから二三日前に貰つて來た小犬と猫が一匹、猫の名は玉といふこと、犬の名はまだきまらないこと、旦那樣は毎日程近いところの生絲の合資會社に出かけて、先妻の息子の義雄さんは一年志願の中尉であること、日露戰爭に負傷をして戰さ半ばに歸り、今でも猶歩く時には少し足を曳くことやら、さうしてよく木綿の紋付の羽織を着てかき餅が好きなこと、家の廻りが廣くて、裏の畑には總菜ものを作り、物置小屋の屋根にかけて這はした南瓜の棚には、黄色い花が咲いたことまで書いて、筆を持つたまゝ、兄さんは今紋付の羽織を着てかき餅を燒いて居ます、と節をつけて讀んで聞かせた。遠い〳〵水車の音を聞きながら、洋燈の下の夜なべに眼鏡を光らして居る師匠の顏は冴え〳〵とした。

仕事をする部屋は客間に續いた八疊で、緣近くの霧島が硝子に盛つたやうにうつる障子の際には師匠が坐つた。それに續いては一番年かさのお島さん、お節つあん、お粂は彌生とお信ちやんといふ娘の間に坐つた。

壁に寄せて茶箱を横にして二つ重ねて、その中には絎け臺やら針箱やらものさしやらがごつちやにはいつて居る。箱の上には出來あがつた着物を乘せて重しをかけて置いた。其並びにはお島さんが坐つて

居る。それからお鳥さんの生家に世話になつて居る娘が一人來て居た。下女も後片づけがすむと仲間にはいつて、隅の方で解きものや綿ほぐしなどをやつた。

庭の敷石の間々に、松葉牡丹の柔い花が咲き初めた。外庭にはダーリヤも咲いて居る。スーイと薄い翅を縦にして去つた蜻蛉の行衛を、折しもお節つあんが絎け臺に肘をついて、針の頭で齲齒をつゝきながらぼんやりと見送つて居ると、

「御來客お目出度う！」と言つて誰やらがくすりとした。お節つあんは氣が付いたやうに一寸赤くなつて急いで絎け臺をぐいと引き寄せて針をかけた。

「あら良助！」お粂が突然高い聲を出した。自轉車を小脇に曳いて、鳥打帽を冠つた白いヅボンの男が門をはいつて來た。

「良助、良助、よく來たなア」とお粂は懐かしさうに言つて上り口に飛び出した。

良助はお粂の店に十二から世話になつて居る男て、お粂はよく小さい時に友達と喧嘩をして、負けると此男を連れ出した。良助はまだ若いけれども、働ける男だと祖父はいつもかう言つて居た。８町の取り引先に度々自轉車でやつて來るのである。

「おくちやん祖母ちやんが言つてよこしたげつともなつし、水を氣を付けつさんしよつて」

良助はこんなことを言ひ置いて歸つて行つた。祖母の丹精だからといつて、ハンドルに結ひ付けて來たお重を開いて見ると、白餡のあんころがはいつて居た。

三

「……そんな人は私の生徒ぢやない、私の生徒ぢやない、私の教へて居る生徒のうちに。そんな人が居

たかと思ふて私は口惜しい！お乳を白木綿で卷いたり、窓から首を出して男の生徒と顔を見合して笑つたのと‥‥そんな、いゝえ、それは嘘に違ひない嘘に違ひない、私の敎へて居る生徒のうちにはそんな人は居ない筈だもの、それはどこかの人に違ひない、この私が敎へて居る高等四年の生徒ではないのでせう。女はお乳が大きいのが當り前です、何も恥かしいことも隱すこともないのです、それが却て女の美しいところなのです、それをわざ〳〵白木綿で卷いたりなんかして‥‥そんな〳〵馬鹿な眞似をする人が何處の國にありますか！まア幸ひに私の組にはそんな馬鹿な眞似をする人はないでせうけれども‥‥もしもあつたら私は其人の爲めに泣きますよ、皆さんはまだ無邪氣でなければならんです。また男の生徒に對してもですね、とかく人はいろ〳〵なことを言ひたがるのだから、氣をつけた上にも氣を付けなければならないんです‥‥」

彌生は拳を握つて、ある時ある折の受持ち敎師の口吻を眞似た。

師匠は昨夜、生家の母親が病氣との電報を受取つて旅立つたので、今日は一日朝から塵埃のうちがざわついた。

「あの時は山田先生ほん氣になつて怒つたつけ、唱歌の時間だつたげつとも、初めつから終ひまでプーともスーともオルガンを鳴らさないつちまつた。涙をこぼしてふるぶるつてるんだもの、おつかなかつたは」

「そして白木綿でお乳を卷いてたつて誰れだつたの？」

「やつぱしお凉さんだつたか知れない、あの人はおとなだつたもの、今考へてみつと能く解るわ、私らが鬼事をしたり陣取りをしたりする時に、ことによつといくら引つ張つて來てもいつの間にか拔け出し

で、編物なんてばつかしてる時があつたつけ……もうあの時分からなんだつたのない、知らねもんだから無理やりに引つ張つて來て終ひに怒られつちまつたことがあつたつけ」

「ヤアちやんヤアちやん、お乳を白木綿で巻いてどうしんの？」

「知らないそんなこと！あんまり大きくつて極りが惡るいからなんだつて」

「一體あのお涼さん今どうしてんの？」

「東京に居るつていふ話てねかい、誰とかの妾してんだつて……」

「嘘う、まさか」

「うゝんほんとなんだつて……」

「あのお涼さんが……？」

「えゝ」

「まあ！」

「山田先生つてばあの先生も惜しいことしたのない」

「ナイチンゲールだのジャンダークだのつてあんた話が好きな先生だつけ」

「私はあの先生嫌ひだつた、氣取つてんだもの、あらさう！なんて」

「そんぢやつていゝ先生だつかわ、熱心て」

「少しおしやれだつたない」

「さうてもなかつたのに、そんぢやげつと嫁に行つてからは得意らしかつた」

「山田先生、山田先生、お墓参りに行つてみたいなア」

「青山に埋つたんだつて……」

「えゝ、狩野病院の中で死んだんだつて、お安つあんが泣きながら書いてよこした手紙見てあん時私も泣いたわ、大へん出血したんだつてない」

「オゝやだ！」

「あの先生のごつたから、氣は確かだつだつていふわ、ずうと氣が遠くなつて行くんて確かりなさい！ていふと、これだけ確かりしてたらいゝぢやありませんか！つて醫者のこと叱りつけたんだつて……」

「赤兒も駄目だつたの？」

「死んて生れたんだつて……子供はどうしました／＼つて度々聞いてたつて……」

「うゝむ」

「とにかくあの先生が產て死ぐなんて思ひもかけなかつたない」

思ひ合したやうに皆だまつた。

輕い倦怠の氣の搖れた七月の眞晝を、朗かな飴屋の笛が生垣に添ふて流れて行く。

暫くすると誰やらがくすりと笑つた。ふつと皆が一様に顔をあげてあたりを見廻した。やがて其目と目が互に見交してまた俯くと、くす／＼と頽れるやうに笑ひがうつつた。間もなくくつ／＼と押し潰したやうな聲が洩れたと思ふと、眞つ先にお信ちやんがはつはつと聲を出してしまつた。どつと一同にそれがうつつた。

「あゝあ、どうしてから眠かつぺ」と言ひながら、お鳥さんも笑つて針を持ち直した。併しまた暫くすると、其姿勢のまゝ電氣の止つた機械のやうに動かなくなつて、ほつれ毛の首がこくり／＼と前に搖れ

る。

お節あんは意味ありげにお島さんと顔を見合してにつとした。お条もお島さんが昨日裏に行つてげい〳〵言つてたのを思ひ出した。

「緑りもぞ濃き柏葉の……」

お条は唐突に寮歌を中音て歌ひ出した。

「陰を今宵のやどりにて――夕べ敷寝の花の床――旅人若く月細し」

彌生とお信ちやんが續けて調子が稍々高くなる。

「しつ」とお節ちあんが針の手を止めた。

「大丈夫！」とお条は笑つてすまして居る。

「義雄さんは？」

「先刻なんだか出て行つたもの」

「さう」とお節つあんも安心したやうに笑つた。

「何か喰べたい！」

小さな聲がお条のあたりから起つた。お信ちやんがものさしてお条の足の平をつゝいて笑つた。

ぽきりと絲を歯て切つて、針さしに針をさしたお節つあんが、針箱の引出しをがら〳〵言はせて、何やらむく〳〵とした手に握つたと思ふと、

「お辰つあ、なんてもいゝから……」と小さな銀貨を隅の方に居た下女の前にほいと投げてやつた。

「仕様のない人達だなア」

やう〳〵本氣に目を覺ましたお島さんは、せうごとなしにたゞ笑つた。

四

西村島子二十二歲、竹内節子二十歲、多田彌生十七歲、吉田信子十六歲、お粂は當用日記の人名欄にかう書いた。お島さんと同い年のお島さんは自づと別ものになつて、この五人の心は絶えず並行して進んだ。お粂は殊に彌生に親しみ、お島さんとお節つあんはまた一つ體かと思ふ程何をするにも離れなかつた。一番年の行かないお信ちやんは、何事もたゞ二人が爲るやうにして蹤いて行く。

流行の中心はお粂にあつた。東京の伯母さんから送つて貰つた帶だの、祖父が京土産の襦袢だのと、すべてが土氣を拔けた好みであつた。

娘達は鏝を燒く火鉢の廻りに集まつて、風呂敷の下から三越タイムスなどを引きずり出し、都の流行に就て彼れ此れ言ひ合つては、アルミのお辨當箱の蓋を鳴らしたり、過つて梅干の種を灰の中に落したりした。

お粂は一日齒が痛くて、四疊の部屋に籠つて一人て寢て居た。少し痛みが薄らいてうと〳〵となりかけた時。

「はいおくちやん郵便」とお辰が一封の手紙と寫眞を持つてはいつて來た。

「ありがたう」と言ひながらお粂は一寸裏書きを見て唇をほころばした。紙撚を解いて中身を引き出すのを、それまて立つて見て居たお辰が、

「おくちやんそれ誰?」と覗き込まうとすると、

「誰てもない!」とお粂はそれを隱すやうにした。

「なんだか軍人みたいな寫眞……」とお辰が座敷に歸つて來てさう言つたので、
「軍人……？洋さんのだな必と！」
丁度仕事に飽きが來て居た彌生は。いきなり起つて四疊へ行つた。
ばた／＼と爭ふやうな音が聞こえたかと思ふと、
「駄目だつてばやアちやん、駄目だつてば……」とお粂の訴へるやうな聲が聞こえた。彌生はにこ／＼しながら逃げるやうにして出て來た。
「どれ！」
「どれ／＼」
一枚の寫眞が手から手と渡つて行つた。
「どれ、やアちやん見せて見なんしよ」と師匠も眼鏡に一寸手をかけて、膝の上のものを押しやつた。
「これが何かい、その許婚つていふ人かい、ふうむ、なか／＼立派な男だない」と師匠は飽かず眺めて居る。
ひそ／＼とお粂の噂さが出た。お粂は祖父母の養子の子で、母親は夫が死んでから生家に歸つて居ること、許婚の人は其身内の者て、一年志願の小尉になつて今猶入營してること、お粂はやがては其人を婿にして、砂糖商の家業を繼がなければならないこと、こんなことは多く彌生が知つて居た。
お粂は其日は一日座敷に顔を見せなかつた。
「怒つてんだか知れない」と彌生は歸る時にそつとまた四疊へ行つて見た。
封の切れた手紙が油氣のない髮の下になつて、お粂はすや／＼と寢入つて居た。

お信ちやんは絲屋の娘であつた。ある日師匠から絹絲を持つて來るやうに賴まれたので、翌くる朝は忘れぬやうに其用意をして行つた。いつもの仕事座敷に來て見ると、すでにもう皆は揃つて居た、襖のかげの客間からは、賑かな話し聲が洩れて居た。お銚子を運んで行くお鳥さんに、

「お客樣?」と聞いて見る。

「えゝ」

「誰?」

「良人(うち)の友達」

お鳥さんはかう言つてそつと襖を開けた。酒の香と煙草の匂ひの滿ちた中に、三四人の顏がふと此方を向いた。師匠は此時お信ちやんが來て居るのを知つた。

「お信ちやん、絹絲を持つた來てくれたかい」暫くしてかういふ師匠の聲が聞こえた。

「はい」

「どれ、こゝへ持つて來て見い」

お信ちんは皆の顏を見てぺろりと舌を出した。けれども何の氣も付かずに、絲の包みを持つて起ち上ると、

「あ、お信ちやん、一寸々々」とお節つあんが呼びとめて、赤いさし櫛の曲つたの直し、袂について居た絲屑などを取つてくれた。

お鳥さんとお節つあんとお鳥さんの、意味ありげな微笑みに送られて、お信ちやんは隔ての襖を引いた。背の低い義雄さんが胡坐に頽れて、盃をさし交して居る傍に、師匠の顏もてか〳〵と赤味を帶びて

五十ばかりの品のいゝ女と向ひ合つて居た。

間もなくお信ちやんはぽつと赤くなつて出て來た。

「眼玉の大きな人」と罪もなく言つて笑つて居る。

彌生もお粂もお信ちやんも知らずにしまつたが、翌日そつとお節つあんはお島さんにこんなことを聞いた居た。

「どうだつたえ」

「少し若過ぎるつてさう言つたつて……」直ぐにそれを悟つてしまう程、お節つあんはそんなことに馴れた居た。さうしてそれがまた師匠の癖てあつた。

取りたてゝこれと思ふのはなくても、若い娘ばかりが並んでるのは華やかなものであつた。色の白い愛嬌のある顔が殊に目立つて、あれは何家の娘てすえ、と茶話しに來たおかみさん達に聞かれることも珍らしくない。

師匠は澤山の娘を持つた親のやうな氣がして居る。

お節つあんが十八の時に、手を換へ品を換へて望んで來た家があつた。師匠は仲にたつて隨分骨を折つたのだが、親達はあれは親類に嫁る積りてすからと言つて聞かなかつた。それからも度々方々から話があつたけれど、師匠のやうに親達はさう氣を揉みもしなかつた。終ひには師匠も張り合ひがなくなつて、さう世話も燒かなくなつた代り、あまりいゝ感情は懷いてないらしかつた。

お島さんは家持ちだからお嫁にはやられない。縹緻もよし品もよしするのだから、嫁くのなら隨分いゝところへも行かれるのだが、養子をするのでは思ふやうに行かない。此方て欲しいやうなのは先方て

厭、進んで來るやうなのは此方で御免蒙りたい方で、母親が氣を揉んでるにしてはなか／＼縁が遠いのである。お島さんはつく／＼それを厭がつて、絕えず仲の善いお節つあんに悲觀めいたことを言つて居た。お島さんの家はお女郎屋である。お女郎屋の婿さんにお島さんの氣の入るやうな人は來なかつた。

彌生とお信ちやんにはまだ先がある。師匠はこの二人をやがて自分の手でどうかする積りで居る。昔の弟子の一人二人は師匠の媒人で嫁入りをした。さうでなくても自分の弟子が相當な緣につくのを非常に喜んだ。お島さんが義雄さんのところへ嫁入りの時に——お島さんも昔は風呂敷を抱へて、その頃流行つた雪駄を履いてお針に通つて居た——七人のお友達がずらりと裾模樣を着て並んだ姿を、お雛樣のやうだつたと師匠は今でも時々それを言ひ出した。其時其仕度のまゝで寫した寫眞は、五年經つたので色が少し薄くなつたけれども、今でも納戶の簞笥の上に飾られてある。

友達の婚禮の時には、師匠を先にたてゝ皆が招ばれて行つた。其度に嫁達は、ハコセコが買はれ襦袢が殖えして、やがて自分の嫁入りまでには一通り揃つて行くのである。

やアちやんは官員樣にも商人にもどつちにも向くいゝと師匠は或日口のすさびにこんなことを言つた。彌生は何の考もなくだゞ笑つて居た。お嫁になんか行くものかと心の底で思つて居る。しかし私もやはりさうは思ひながらも、當り前の女になつてしまうのではないかとも思ふ。何にしてもそんなことは遠いことだと思ふ。一日々々と日を積んで行くうちには、いつのまにか運命といふものは形造られて行くに違ひないと思つて居る。

八人といふ澤山な兄弟の三人までは東京に出て居るが、思つたやうな成功もしてないので、彌生だけは苦しくない商家になりと片づけたい親達の下心である。若手の立派な技倆ある學士なども追々入り込

むし、持病の喘息が折々起つたりして、多くの家族を養ふのはなかなか容易でなかつた。町の舊家ではあるが、彌生の父は年老いた醫師であつた。

五

山の賣屋と人が呼んだ程、師匠の家は町の雜鬧を遠ざかつて居た。近い小學校に時間毎のベルが鳴り響くと、時にはわアわアといふ運動場の騷ぎが家の中に流れ込む。

此頃増築の議が町會を通過して、隣り合つて居た丸龜といふ材木店は其地所を引拂はねばならなかつた。四五日前から其家を曳くとて、多くの土方が丸太を持つて喚きあつて居た。

「ようういとまいとウようういとまいとウ」丸龜の主人が、空家の床に立つて音頭をとるのが、日長のつれづれに口眞似されて、家は少しづゝ動いて行つた。或日は道の出鼻に其家が來て日が暮れた。

冷たい雨が降つては、堀りかへされた赤土に水を含んで、馬車の轍の行き惱んだ跡に、風呂敷包を抱へた娘達の下駄が吸ひ取られた。

秋の彼岸のすんだ頃から、お鳥さんのお腹は人の目について來た。目のあたりには隈が出來、妊婦の黑い斑點も見えて、顏には著しく脂肪氣を失つた。時にはふつと針の手をとめて帶のあたりを眺めてることがある。

「動くのかい?」と師匠に聞かれて、

「はあ、なんだかから握りこぶしててもつつぱられるやうで……」とお鳥さんは淋しく言つて笑つた。

「お鳥さん、男、男、男を生みい、女なんて生すもんでねえぞい」と一人が云ふと、

「總領は女の方がいゝんだつて」とも一人が云ふ。

「顔があんまりやつれたから男だか知れない」とお節つあんが老年じみたことを言つた。
「おつしよ樣はどちがいゝと思ひやす？」とお信ちやんが口を入れると、
「さうだない、やつぱり男がいゝない」と師匠は笑つた。
春蠶、夏蠶、秋蠶、この三期の繰かへしが暫らく續いた。旦那樣も義雄さんも、朝早くから社の方に出かけて一日姿が見えない。
「何時だい？」と師匠が毎日眼鏡越しに時間を聞いた。十一時を過ぎると、二人前のお辨當を詰めて、お辰がそれを兩手に下げて行つた。
休みを知らせる拍子木の音が、畑を越して幾打かを傳へると、縺合つて居た簍の者が一時にハタと止む。それが幾度か繰り返されて日暮れになると、辨當を抱へた工女達がぞろ〳〵と門を出た。子供を背負つた繰取り女が、繭包みの風呂敷を下げて、あす一日の仕事を持つて行く姿なぞも娘達はよく見た。
其會社の一年の仕事も無事に終つて、留守居の男の女房が、白い前掛けに道具をくるんで、閉ぢられた門の脇の小さな潜りを出這入りした。
利益の配當によつて惠比須講も賑やかにすんだ、冬の知らせの西の山には雪が降つて、我慢強い者もそれからは足袋を履く。霜枯れた井戸の脇の松葉菊を摘んで、三杯酢の黄色い皿が旦那樣の晩酌の膳にのぼつた。
漬け菜洗ひと大根干しの時節が來た。師匠の家でもぽか〳〵するやうな日を選つて、騒ぎ半分の娘達に手傳つて貰つた。洗ひあげた漬け菜の束を納屋に運ぶと、師匠は片はしから桶に詰めて鹽を撒つた。
お島さんやお節つあんが其前に立つて鹽加減などを聞いて居ると、

「先生々々、早く隱してくんつあんしよ」とお粂がつとはいつて來てごそ〳〵と俵のかげに身を潛めた
すると間もなく、
「おくちやん來なかつたがい」と彌生がきよろ〳〵しながら入口から中を覗いた。
「めつけた！」と思はず彌生が大きな聲を出すと、
「此人達はまあ」と師匠があきれたやうに腰を直して振り向いて笑つた。
「誰鬼――？」とお信ちやんも母家のかげから飛び出して來た。
こんなことをして大根干しの日もすんだ。また煤拂ひの日には、大根の輪切り汁に鹽鮭を燒いてお齋が出た。おやつには熟柿が配られて、手拭ひを冠つた娘達が、顏を眞赤にして簞笥などを運んだ。
それらがすむと師匠は間もなく立派な結納物を一揃へ預つた。寺の前の寶屋と呼んで居る親類からので、そこの夫婦が夏時分から頻りに足を運んで居た縁談がいよ〳〵決つたのである。お嫁さんはやはり一期前に來て居たお弟子の一人で、師匠夫婦は表向きともに媒酌人になつた。
婚禮は押し迫つた年のうちにあつた。彌生の家も縁續きになつて居たので、其夜待女郎に頼まれて裾の長い着物を着せられた。
彌生は島田髷に初めて結つた。それを翌日になると、母に隱れてそつと座敷の隅に行つて獨りて根を解いてしまつた。
「あらやアちやん島田はどうしたの？」とお粂は待ち構へてたやうにいきなり笑ひながら聞いた。
「やアだ大嫌ひ！あんな重い頭、極りがわるくつて歩かれないもの」
「やアちやんはもう十七だもの、島田に結つてたつていゝんだわ、此頃の人達はどうして島田を厭がん

だつぺ」とお鳥さんは不思議がつた。

彌生のの耳のかげには、昨夜のお白粉の名殘りがまだ薄く殘つて居た。

六

お粂は暮れの廿六日にK町に歸つて正月を迎へた。今までとても二三日づつはちよい〳〵歸つて居たが、今度は思つたよりも少し長くなつて、一月ももう二三日を餘すばかりになつた。

或る日夕餉をしまつてから、何の氣なしにぶらりと店先に出て、眞鍮の火鉢のほの暖い胴を抱へてぼんやりお粂は表を眺めて居た。硝子戸の外を荷馬車が續いて、水氣のない雪が時々はら〳〵と散るともなしに散れて居る。綿のふくれたねんねこ半纏で背中を丸くした子守が、赤い雪帽子の紐を胸元に結び付けて、手先でちよい〳〵編棒を動かしながら二三人來かゝつたが、店先に坐つて居るお粂の白い顔を見ると、お互に顔を見合して何か囁き合つた。するとその中の一人が音頭をとつて、

「二ろとや——二つ二葉屋のお粂さん——おくめさん、赤い襷て砂糖掛けィ——砂糖かけイ」と振りかへり〳〵唄つて行つた。

お粂は帳場に坐つて居た良助と顔を見合して、につとして起ち上らうとしたところへ勢ひよく郵便が來た。澤山な商用の端書に交つて、水色の封筒のは彌生からのであつた。お鳥さんのお産のことが知らせてあつた。男か女かは來て見てからのことゝ筆を切つてあるので、お粂は急にS町に歸りたくなつて祖母に土産ものゝことなどを相談した。

「姉さんお目度うー！どれまア赤んぼ見せつさんしよ」とお粂は師匠に戻つた挨拶をするや否や、驅け込むやうに産室にはいつて行つた。お鳥さんは鉢卷の頭をそつと擡げてにつこりした。その傍の蒲團の中

に頭を眞綿で巻いた肉の塊りが息をついて居る。
「あらアま」とお粂はそれに手をかけると、
「あおくちやん、今眠つてんだから」と師匠は慌てゝ後から聲をかけた。
其時からして、お粂はお鳥さんの位置といふやうなものが、一段と高いところに置かれたやうなのを覺えた。いつかお節つあんが「お鳥さんはお師匠樣のお嫁さんだか義雄さんのお嫁さんだかわからない」と言つたのを、お鳥さんの態度に適切な言葉だと思つて、非常に感心したことがあるのを思ひ出した。さうしてまた、はいはいといふお鳥さんの返事は切れるやうだと彌生が言つたのも思ひ出した。
師匠は赤兒の世話にばかりかまけて過した。一寸泣き聲をたてゝも、それと一番に飛んで行くのは師匠であつた。お鳥さんは殆ど乳母のやうな立場に居ることが珍らしくなかつた。
初着が染め上がつて來ると師匠は手づからそれを縫つた。孫振舞ひの手配りが殘りなく出來ると、娘達には其前の日から手傳つて貰つて、餅米を磨いだり膳椀などを洗つた。其日になると朝から親類の手傳人なども見え、赤飯をふかす白い煙りが騰つて、猫は物置小屋に押し込められ、魚を燒く匂ひが厨の中に滿ちた。
燭の灯のかげにやがて人々の顏は赤くなつて、三味線の、騷ぎに合せる無茶な撥音が響いた。
五月の節句も賑やかにすんで、それからは師匠も少しは落ち付いて針を持つた。
石竹の濃艶な花が咲くと洗濯や張り物が賑はひ、柿の實の色づく頃になれば、秋祭りの使ひが村々から來た。それは何處の家でも變りがなかつた。
師匠は或日何を思ひ出したか黒七子の紋付の羽織を出して來た。

「どうするんです？」とお節つあんが怪訝んな顔をして聞くと、
「久しく着て見なかつたげつと、丈でも出したらまた着られつかと思つて……」と師匠は背すぢを摘んでものさしをあてた。
「おや／＼四寸丈つまりない」と呟いて、
「やアちやん一寸これを引つかけて見い」彌生は起ちあつがて紋付の羽織に手を通した。
「まアやアちやの腰つきりない」とお信ちやんが笑ふと、
「元祿の若い衆のやうだ」とお粂が言つた。
「肩あげがなくても着れば着られる」と肩のあたりを撫てゝ居た彌生は、突差に二尺ざしを取つて帯の間に差し込み、風呂敷を三角に折つて冠つて、大手を振つて皆の前を歩いた。褄の形がよく出來ないと言つて、顔を眞赤にして焦れて居たお島さんも、丁度火鉢の前に烟草を詰めて居た旦那樣も思はず笑つた。

　この羽織を縫つてくれた其頃の弟子の一人は、今年はもう三人の母親であることなども思ひ出されずにすんだ。

　こんな日のうちに秋も暮れて行つた。

垣根に並んだ山茶花に赤い花が咲いて、霙の日に郵便やの草鞋がびしや／＼と聞こえて、お粂は膝の上のものを掻いやつて飛び出すのが常であつた。
「私んのは？」と待切つて聞くと、
「播かぬ種は生えぬ！」

顔馴染になつた年取つた郵便やはこんなことを言つて歸つて行つた。横濱商報がふはりと投げられて行く。

お粂は此頃あまり様子が冴えなくなつた。師匠に隠れては無暗に方々へ長い手紙を書いた。さうしてそれらの返事によつて、自分の決心や方法を取らうとでもするかのやうに見えた。彌生に相談をして見ても、そんなことにはお互にまだ子供同様な二人、それでは其人が厭なのかと聞かれゝば、決して／＼さうではないと首をふるし、なんとはなしに結婚といふものに怖れを持つ心は、當事者でない彌生にはよく解らなかつた。

四五日前から師匠の許へは祖父からの信書が届いて居る。來年は十九の厄年故、年のうちに兼々決めておいた婚禮をさせるべく、近々に迎への者を差し向けるからとの文面であつた。

いよ／＼迎への者が來ると決つた二三日前から、お粂は仕事も手に付かずに泣いて居た。師匠に彼れ此れ慰められても、慰められゝば慰められる程猶悲しくなつた。前の日には師匠から暇を貰つて揃つて公園に行つた。紀念の寫眞をうつして一日湯になど浸つて樂しく遊び暮した。お名殘りだからと言つて、其夜は師匠の家でもお汁粉の御馳走があり、お粂も久々て友達の癖などを眞似て皆を笑はせた。

迎へには祖母が來た、いよ／＼となつた其間際、お粂はぴたりと師匠の前に手をついて、

「先生‥‥」と言つたまゝ涙をはら／＼と溢した。誰も／＼目をしばたゝえた。

「旦那様、長々お世話様に‥‥」

いゝから／＼と師匠に追ひたてるやうにされて、下駄を履いて外に出ることは出たが、祖母の袖のかげから家の中を振りかへつて、臺所の窓から首を出して居るお鳥さんを見ると、

「姉さん！」と言つたまゝ、被布の袂で顔を蔽ふた。

「さア遲くなつから去んべ〳〵」と彌生は赤い眼をして先に立つた。

皆停車場まで送つた。

七

「裏二階がやう〳〵出來あがりました。

今日前の家のお禮さんが來て、すつかり着物の肩上げを取つてしまひました。もう一週間の命、やアちやん其日には必と〳〵來てね。もう諦めたの、それでも今日もまた泣いて居る。やアちやん必と來てくれるてせう、必と〳〵〳〵ね」

二三日してから鉛筆の走り書きで右のやうな手紙が彌生の許へ來た。

暫くはお粂の噂さが絶えなかつた。始めから終ひまでのお粂の素振りが、殊に師匠の胸に深く喰ひ入つて居た。

丁重な招待狀が改めて師匠の一家と彌生の許へ來た。兩家とも行きはしなかつたが、裏地か何かを祝ひ物として送つた。友達は集つて刺繡入りの半襟を買つて送つた。

「やア〳〵拂ひませうか厄落し厄拂ひ」

晦日の夜に例年の通りこの聲を聞いて彌生は十九になつた。

この年はもうお島さんはお針に來なかつた。お節つあんも家か忙しいと言つてはちよい〳〵休むので彌生やお信ちやんなどが頭株となり、田舍から新たに一人お粂の代りになつた。

花が咲く頃、お粂は一度供の者を連れて挨拶に來た。其時は小學校の新らしい校舍も出來上つて、高

見の運動場から、顔色の惡るい女教師が、お粂の水際だつた丸髷姿を目を聳てゝ見て居た。華かな小豆色の羽織が、ちらりほらりと出來た長家の女達の目を引いた。

お島さんは或日、顔色を惡くしてお節つあんの家へやつて來た。丁度出來あがつた着物に火熨斗をかけて居たお節つあんの前に坐つて、ものをも言はずにつゝ伏してしく／＼と泣き出した。驚いてお節つあんがいろ／＼と聞くと、知らぬ間に緣談が決つて、お島さんには少しも知らせずに先方に返事をしてしまつたのだといふ。私の家に來るやうな男は、どうせ碌でなしの曲者か何かに違ひないと、お島さんはたゞかうばかり言つて泣いた。

けれどもどうも仕方がなかつた。心の晴れるまで夕方まで泣いて／＼、お節つあんに送られて裏門へ出た。お節つあんの家は造り酒屋なので、大きな六尺桶が幾つも倉の脇に轉がつた居た。二人は猶もそこで暫く立話をした。

お島さんの婚禮は非常に時日を急いだ。袴を穿いた子供が、招びつかひの紙札を持つて親戚知己の家に配つて歩くと、そらいよ／＼泉樓の婚禮が來たと人々は言ひ合つた。

三日に渡つた婚禮の中の日、花嫁は見違へるやうに飾られて、お茶立ての座敷に坐つて師匠や彌生などとまみえた。商買柄とて細かな座敷が幾つにも別れて居るのを、いつの間にか連中は其一つに隱れて甲斐々々しく介添へをやつて居たお節つあんは、花嫁のお島さんを一寸盜んで來た。其日のお島さんの顔には涙はもう見えなかつた。

廊下の外を手傳への女達がばた／＼と驅けて通つた。離れの座敷からは亂れ合つた撥の音に疳走つた藝者の唄が聞こえる。四人はそれらの物音に遠く耳を貸して、膝をつき合せて其上に手と手を握り合つ

て居た。

誰も一言もものを言はなかつた。

八

お節つあんは淋しい人となつた。お島さんの心は自分の心、自分の心はお島さんの心と信じて居た心も、我から氣が置けて自づと足も遠くなつた。

彌生はだん／＼お節つあんに近づいて來た。此頃はお針に行つても、師匠の顔色を窺つて、健ちやん／＼と子供の機嫌を取るのが、時によると堪へられないほどの苦痛を覺えた。考へるでもない考へに捕へられて、口を結んだら飽く迄もくだらぬ追蹤にそれを解きたくはない。

傘をつぼめて雪あがりの空を眺めると、眩しいやうな冬の光りに瞼を射られて、思はずも目を落す足許に、足袋の汚れの目に立つのも物悲しく、ショールに腮を埋めてとぼ／＼と灯の入つた街をかへる。其道順の指物師の工場に、惡戯口を浴せかける大工の姿も、冬は障子に圍まれて心安く、ぱつと燃えたつた鉋屑の火が、障子に一ぱいになつて凍つた道を照す時など、むら／＼と暖い感情が湧いて、此まゝの此思ひを書いて送るに適當した誰かに、誰かにこの感情をそのまゝに書いて送りたいと思ふ。それも併しまた陽炎のやうに消えて、日々の營みに追ひつかれまいと焦慮（あせ）つて居るやうな、餘裕のない家内の空氣に息塞るやうな思ひをした。

彌生にとつてお節つあんの胸は廣いやうな氣がした。話し聲の大きなのからして、苦勞などゝいふ吝なものは其胸に巣喰ふべきやうもなからうと思つた。お針の行き歸り、或は師匠の方を休んで、お節つあんの家で一日を過すことなども度々あつた。

そんな時にはお節つあんは別段彌生には構はず、帳場に坐つて榜の番號を控へたり、大きな聲をして村の客などに愛想を言つて居た。

日に〳〵二人の親しみは增した。それと確に口に出して言はなくても、彌生にはお節つあんの心の全部がわかるやうになつた。師匠の例の手で見合をさせられた時に、見事裏をかいて逃げ出した話などをお節つあんは得意でした。彌生はまたお節つあん自身でも知らないで居るある心を見拔いて居た。

お節つあんの家には休夏みになるとよく書生連が集つた。皆甥とかまたは伯母の子とかいふ親類の者て、氣の置けない一家の人達をいゝことにして、居たいだけ遊んで行くのである。そのうちに大學の法科に籍を置いて居る紀さんといふのがあつた。惡口の上手な人で、負け嫌ひのお節つあんをいつも口惜しがらせて居た。

或夜お節つあんの家から枝豆の使ひが來たので、彌生は團扇を持つてぶら〳〵と出かけて行つた。お島さんもお湯上りの白い顏をして來て居た。緣側に續けて涼み臺を置いて、蚊遣りの煙りの流れる下でさま〳〵な世間話に花が咲いた。表の通りには家毎を渡つて步く假聲使ひや、編笠で流して行く冴えた撥音なども聞こえて來た。

十一時を打つたのに初めて吃驚してお島さんは慌てゝ起ちあがつた。お節つあんがそれを送つて行かうといふと、僕もと紀さんが尻輕に起つて、彌生を交ぜた四人は、そろ〳〵蔀を下しかけた街を並んで步いた。お島さんの家は田甫を越した別天地に廓をなして居るのである。

「岩井の妾‥‥さう〳〵お瀧さんて一體今年幾つなの？」とお節つあんは言葉を繼いだ。

「さうさね、三十八か九だらう、もう婆アだ何しろ俊ちやんが十九だからね」と紀さんは卷煙草の火を

ふいと捨てた。

「俊ちやんて綺麗てせう」

「ん、綺麗だ、毛が赤くつて」

「まあ！」と横からお島さんが笑つた。

「今に其俊ちやんを押しつけられんたつぱい、必とね」とお節つあんがちらり白い眼をすると、

「さうだ、さうしてあの別荘が僕のものになるんだ」と糺さんは笑つて居る。

「まあ」とまたお島さんが笑つた。

「ハイハイ！」と勢ひよく袖を掠めて車が通つた。それをやり過して、

「どつかの大盡どんがお乗り込みだ」とお節つあんが呟く。

一寸の間に店の灯がと絶えて、二三歩先に立つた糺さんの白絣がほんのりなつたと思ふと、浮き出したやうな灯の軒が田甫の中の高見に並んだ。

「成程不夜城は違つたもんだ」

糺さんは口笛を吹き出した。女連れは默つて並んで其後に續いた。

それを渡れば圍ひの中にはいつてしまふといふ土橋の袂で三人は別れた。

「さよなら！」

「さいなら、お休みなんしよ」

お島さんは草履の音をたてゝ、の小刻みに明るい下を潜つて去つた。肩のあたりの圓い輪劃が、くつきりと灯を受けてやがて消えた。

「いゝ奥さんになつたね」と紀さんがいふ。

「お舅さんは署に行つて大自慢なんだつて」とお節さんは鼻のあたりに薄い笑ひを泛べた。烟草の專賣局に出て居るお島さんのお婿さんをお節つあんはいつもお舅さんと呼んで居た。

其夜のことを彌生はいつまでも覺えて居た。さうして何故かお節つあんのことを考へる度に、必と紀さんの白絣姿も思ひ出した。

九

九月の秋祭りから夥しく冷氣を增して、思ひ出したやうに人々は袷せの用意を急いだ。お節つあんのお母さんが、或日眼鏡を光らして朝顏の種を茶袋に入れて居ると、聞き覺えのある足音がして、彌生が慌たゞしく裏口からはいつて來た。

「ヤアちやがい、今日は」

「そばさんお節つあんは？」と彌生はいつになくそわ／＼として居る。

「お節がい、お節は今倉さ着物出しに行つたの、まああがつてなんしよ、今ぢきに來つから」

彌生は緣側に腰を下して、小八ッ口に兩手を入れて乳を押へた。ものを考へる時やぼんやりして居る時のこれは癖であつた。

風呂場の屋根に重い枝を乘せた柿の葉がさや／＼と搖れる度に冷たい風が脇の下を撫でた。

「初茸にしめじはようごすかーい」と茸賣りの女が格子戸を掠めて行つた。

「なんだいヤアちやん、なにぼんやりしてんの？」と例の元氣な顏をして鍵をチャリン／＼言はせながらお節つあんが出て來た。

「お節つあん、あのない、私明後日東京さ去ぐの……」と急に彌生の顏はにこ〳〵と頽れた。
「東京さ去ぐえ……」
「えゝ、あさつて」
「一體まあどうしたの？」
「伯母さんの看病に行くんだ、昨日手紙が來たものんだから、急に行ぐやうになつたの、女中一人て淋しいんだつて」
「さうがい、よくお母さん達あんたのことやる氣になつたのない」
「自分から去ぐ〳〵つてさう言つたんだもの」
「だげつと直ぐ歸つて來んだつぱい」
「えゝ……」と彌生の返事は鈍つた。お節つあんは直ぐに見てとつて、
「それともまたもう歸んね積り？」
「……まあどつちにしても一度は歸つて來つらえ……ほんとにどうなつかわかんねの」
彌生は東京に憬れて居た。たゞ嫁入つて、たゞ母となつて、それが別段厭と嫌ふのではないけれど、も少しどうにかした生活が自分には定められてあるやうな氣がして居た。さうしてそれはたゞ東京にのみ潜んで居るものと思つて居た。上京は彌生にとつて定められた運命の絲を手繰りに行くやうなものであると、さう思へてならなかつた。東京、東京、彌生には上京がたゞ嬉しかつた。
「紀さんはやつぱり本郷に居んの？若しも行けたら尋ねて見つら」
彌生はこんなことも言つて、用意に忙しいからとそこ〳〵にして歸つて行つた。

其日はお信ちやんもお島さんも停車場まで送つてくれた。お節つあんは待合室の隅に彌生を呼んで、「若しも暫く歸んね積りなら、其うちには私もあとから出て行くわい、待つてなんしよ必と出て行くから……私も今あの親類の方に決められさうなんだげつと、どうしても厭だから必と出て行く。少し勉强しなくつちやあんまり何んにも知らなくつて馬鹿にしられつから……やあちや、これ少しばかりだげつと切手でも買つて」と無理に餞別の紙包を彌生の懷に押し入れた。

それから二年は造作もなくたつた。

お粂は或日出來上つて來た子供の寫眞を一枚送るとて、彌生の許へ次のやうな手紙を書いた。

早いものねえ、一郎はもうこんなに大きくなりました。動いて〳〵仕方がないのを、やう〳〵のことて寫したのですよ、二時間ばかりもかゝりましたの、母ににた面影があるかどうか、まあ見て下さい。

お節さんもいよ〳〵お嫁入りしましたのね其家のことをうちの店の者がよく知つてますが、大へん大きな穀屋ださうですよ、店の者つてば良助は、去年の十二月入營して一等卒ですつて。

お信ちやんは今年のお祭りに一寸來ました。おとなになつたこと吃驚しました。なんだか家では手がないから養子をして家に置くつて言つてるさうですわ。

山の賓屋のことは此頃少しも消息がわからなくなりました。だつてお節さんは、S町に居なくなるしお信ちやんは筆無性なんだもの。健ちやんはさぞ大きくなつたてせうよ一郎より一年早いんだから。お島さんはまたあとが出來るつて話ですよ。

小說なんか此頃ちつとも見ないの、先達て前の家の良さんが持つてたので、花袋の「妻」を讀んで見ました。良人の自白がも一度讀んでみたくなつて、此間お信ちやんのところへ賴んでやつたけれど、どう

したかまだよこしてくれない。

私も隨分御不沙汰するけれど、やアちやんもあんまりてないの、此間の手紙に、つまらない〳〵つてばかり書いてあるだもの、氣になつて仕樣がないわ、やあちやんはまだ人にならないから駄目、ホヽヽ。

ほんとうにこれは眞面目でいふんだけれど、やアちやんいつそのこと田舍に歸つて相當なところに嫁づいたらどう、惡るいことは言はない積りよ。

それともまたね、何か目的があるなら少し位の助力は出來ると思ふの、充分なことは出來ないけれど……お氣に障つたら御免なさい、伯母さんの家に居たつて、いつまでさうしてたつてつまらないぢやありませんか、なんだか委しく打ち明けてくれないからわからないけれど、やアちやん極く苦しんどるやうね、窘められてるんぢやないかと思つて心配て〳〵。

あゝ書いた〳〵、こんな長い手紙幾年ぶりで書いたでせう、やアちやん私が言つたことよく考へてね、さよなら。

返事は直ぐには來なかつた。五六日過ぎてからやう〳〵端書が着いたが、

お手紙ありがたうありがたうよ、一ちやんのお寫眞もたしかに。

其うち悉しく御返事を書きます。たゞ涙がこぼれます。

とだけて、感謝の意味で涙がこぼれるといふのか、または自分の身に關して泣けるといふのか、お粂には一寸わけがわからなかつた。

筆蹟といふものに殊に氣を付けた彌生の字とは思へぬ程筆が亂れて居た。

借家

小寺菊子

兩親に早く別れた貞子は、十二も年の違ふ一人の弟の事を、遠く離れて居る爲めに、いつも心配して暮したのであつた。

弟の淑が二つの時、兩親續いて病死したので、伯父は兩人の兄弟を引き取つて育てゝ呉れた。そして年頃になつてから、姉の貞子を緣づけた。幸に其夫は係累が少なく親切な人なので、貞子は亡き父母を戀しがる事も無く、伯父の家へ愚痴を云つて遣る事も無く、夢の間にもう十五年近く過してしまつた。弟も爲合せに煩ひもせず、學校も好きで、一年も後れずに去年から大學といふ事になつた。早く卒業して一廉の醫者になつたらばと、貞子はそれをのみ待つてゐるのである。

吾子の樣にして、怠れば勵まし、勉めれば褒めて呉れた伯父は、去年の暮死んでしまつて、遺族は經濟の都合から郷里へ引つ込んでしまつた。それと引き代へに、今まで地方廻り計りしてゐた貞子の夫か東京に住はれる樣になつた。

伯父の死後暫く下宿住ひをして見た淑は、邊りの騒々しさ食物の粗末なのに弱つてしまつた。伯父は

酒は呑まぬが食道樂で、酒呑の好きさうな物計り嗜んだ。年來それに慣らされた淑は、下宿屋の朝の味噌汁からが滿足に喉へ通らなかつた。時間が有るから無暗に掻き込んで學校へ駈け出す。晝は赤門前のミルクホオルで濟ます。夜も亦一切れ幾錢宛といふ下宿屋向きの魚の事を考へると、外で食べて歸らぬわけには行かなかつた。食物はそれで濟んでも、どうも勉强が仕にくい。前の廊下をば人が絶えず通る。客が來て隣室で盛んに辯ずる。夜は酒に醉つて歸る人がある。つく〴〵伯父さんの家にゐた時が戀しくなつた。

伯父さんの家は巣鴨の畠中の靜かな屋敷であつた。近年新開地になつた伯爵家の貸地で、普請の音がする位、別に邊りにやかましいものは無かつた。大學へは少し遠いが、遲れた日はがた馬車に乘ればそれで濟んだのである。

貞子の家は小石川である。夫が勤める會社の都合で選んだのだ。夫はいゝ人だし、一人の弟の事だから引き取つてとも思つたが、借家なので思ふ樣な室は無し、子供は少さいし、勉强の邪魔にならうと思つて控へて居たのである。

「姉えさんの家もやかましからうが、僕の下宿にも實に困つてしまふ。餘所の人はあれてよく勉强が出來ると思ふ。僕は我儘なのかしらん。」

「だつて一高の寄宿時代には、隨分ひどかつたと云つたぢやありませんか」。

「えゝ。あの頃の事を思へば何ともないと思つたが間違でした。ノオトをなほす位はいゝが、參考書などを讀んで居ると、何が何だか分からなくなつてしまふ。尤も明き次第に一番奥の室と更へる樣には云つて置きましたがね。その代り奥へ行けば、火事があれば燒け死にます。あの家は一方口ですからね。」

「まあ縁起のわるい事」と貞子は眉を顰めた。「いづれ私の家も地所を見つけて立てますから、其時は都合のいゝ室をこしらへませうよ。人に頼んでありますが、いゝ加減の地所はなか〳〵少ないものですね」。

「なに。そんなにして下さらんでもいゝのですが、僕がまだ中學の時に、四年生が巣鴨病院へ精神病の講義を聽きに行つて、夕方どや〳〵歸るのを見て、早くお前もあゝなるといゝ、其時は家が近いから便利だなどと、伯父さんは幾年か先きの事を樂んでゐて下すつたに、やつと大學にはいつたばかり、醫科とは云ひ乍ら聽診器の扱ひも知らないで、ろくな看病もせずに殺したんだから、考へると實にお氣の毒でなりません」。

「ほんとにさうですよ。私は女の事ではあり、御一所にゐた年限は短くても、お二人に隨分お世話になつたのに、地方廻りで思ふ樣にならなかつたのは、ほんとに濟まない樣な氣がします。昨日も伯母さんがお好きであつたから、藤村のお菓子を送りましたよ」。

暫らく考へてゐたが、ふと思ひ付いた樣に。

「ねえ。淑さん。家を一軒借りて見ては」。

「え。僕ですか」。話が不意なので、淑はびつくりした。

「此間からどうも下宿の都合がわるいさうだし、內は御存じの通りで今の所爲方がなし、普請をすると云つても急の間に合はず、素人下宿へでもと思つたのですが、それにはそれで惡い所もあるし、今伯父さんの話が出て考へると、あんなに長年の間親身に世話をして下すつたのに、これからといふ時になつて、勉強が出來ないと知りながら下宿してゐるのは、馬鹿らしいぢやありませんか。それは家を借りる

のは、學生としては贅澤かも知れませんが、お父うさまのお蔭でそれ位には困らないし、一つ家を搜して見てはどうですか」。
「それはさうして見てもいゝのですがね。何、都合が惡ければ又下宿する迄の事ですから」。
其時臺所の間の障子を開けて、女中が顏を出した。
「あの。奧樣。八百屋が樽柿を持つて參りました」。
「さうかえ。丁度いゝね。よささうなのを剝いて持つて來てお吳れ」。
暫くして「あらお落しなすつてはいけませんよ」と、女中の聲がする。やがて十になる初子が、柿の皿を盆に載せて持つて來て淑の前にそつと置く。
「さあ召し上がれ」。
「これは御馳走さま」と、前にあつた菓子鉢をわきへ寄せた。
「これも上ぎようつて」と、初子は菓子鉢も其傍へ並べた。
「又あぎようつてか」と、淑は言つた。初子は顏を赤くして、貞子の後ろに隱れた。
そこへ四つになる槻子がお河童に唐縮緬のお被布、白い前掛をして、守に連れられて歸つて來た。
「さあ叔父さんにお辭儀をなさい」と敎へた。
「おゝ。よく出來ました。御褒美を上げませう」と輕燒を一枚取つて遣つたが取らぬ。
「柿の方がいゝや」。
貞子は柿を小皿に取つて、長い楊枝をつけて渡した。淑はぢつと見てゐたが。
「どうも槻ちやんのゝ方が僕のよりも旨さうだ。その方を僕にお吳れ」と、手を出して取らうとする。

槻子は周章てゝ。
「いやあ。これは槻子のがんだ」と泣きさうな聲を立てる。淑は大きい聲をして笑つた。此「槻子のがんだ」を云はせて、淑はいつも笑ふのである。貞子も一しよに笑つたが。
「ほんとに困つてしまひますよ。地方に居ても、成る可く言葉は惡くならない樣にと、氣を付けて居ましたがね。學校へ出せば、周圍が殘らずて、とてもかなひません。それでも大きいのには、内て少しは直して遣りますが、小さいのは、守が「がんだ」といふから、爲方がありません。まあこれから氣を付けませうよ。私もすつかり田舍者になりましたてせうね。其田舍者の貸家搜しがうまく行けばようございますがね」。
「えゝ。僕も夕方の散歩の時には搜して見ますが、どうか婆あさんもみつけて下さいよ」。

* * * * * *

成る可く學校へ近くと思ふので、買物に出た歸りなどに、龍岡町彌生町森川町邊を通つて見る。十年餘り見ぬ中に、樣子はすつかり變つてしまつて、昔の射的場などは影もない。どうかすれば、迷子になりさうてある。彌生町に一軒あると車宿て敎へて吳れた。生垣の垣根つゞきを曲り曲つて行つて見ると、近所が靜かで住みよさうだ。乘せて行つた車夫が「學生さんのお住ひには持つて來いてす」といふ。成る程電燈も引いてある。夜勉强をするにも都合がよい。井戸もなく水道もないのを不思議がると、同じ構内の家主の召使が「どうせ小さい家てすから、住む方も小人數てせう。水は私とこの水道から貸てお送り致します」といふ。まあ、それも我慢が出來る。「明日中に御返事を」と約束して歸りに、門から出て裏へまはると、背戸

に新しい高い塀があると計り思つて居たが、そのすぐ後ろは家主の厩てあつた。寝藁が澤山廣げてある。小路を出かけた時に、逞ましい馬を引いて歸る馬丁に出會つた。厩の傍に住んだ事はないが、夏は蝿が多からうし、床を蹴る音がやかましからうと思つて罷めた。

森川町に好い家が昨日あたり明いだと、知らせて呉れた人があるので行つて見た。門を這入ると驚いた。いくら貸家を引越した跡だといつても、紙屑やら、瀬戸物の缺けたのやら、おもちやのこはれ、古雜誌までが庭に堆く積んである。

「あゝ。鉛筆を忘れて來た。間取を寫して行きたかつたに」といふと、「それてはこれてお書きなさいまし」と、車夫は帳面と鉛筆をそこて拾つて呉れたが、氣味が惡くて取られなかつた。此樣子ては搜したらなんても出さうてあると思つた。臺所の押入を覗くと、里芋の萎びたのや、玉葱の芽の出たのがころがつてゐる。

「どんな人が住んて居たの。隨分汚なく住んだものだね」といふと、雨戸の建付を直して居た職人が「たしか醫科の助手の方だとかいひましたよ」と云ふ。

貞子はいよ／＼驚いた。まあ掃除をしたら、住めさうだと思つて差配所へ行つて聞いて見ると、「あの家は明かぬ前から次の方とのお約束が出來て居ます。こゝらには明家は一軒もありませんよ」と、搜すのが間違ひだといふ樣な挨拶をする。そんな田舎者に家などが搜せるものかといはれた樣て恥かしかつた。馬鹿な顔をして小石川の家へ歸ると淑が來て居る。

「姉えさん。家がありましたよ。」

「どこに。」

「森川町に。」
「私も今森川町へ行つて來たのですよ。どこいらです。」
「宮裏てす。」
「まあ全くわたしには捜し物は駄目てすね。何にしても見つかつてようござんした。」
古びた建仁寺垣根て圍んて、門から玄關迄は敷石が敷いてある。庭はかなり廣い。櫻や松の大きい木がある。秋海棠はもうすがれたが、野菊一むらと山茶花がやさしく咲いて居る。八疊二間の緣側付、六疊の茶の間と玄關に臺所、二人住むには廣すぎる程てある。
三十餘りのと五十計りのと、二人の女を世話して呉れた人がある。一人留守居をさせるのだから、年を取つた方が好からうとそれに極めた。
顯微鏡は光線を受ける具合の好い向きへ据ゑて、其傍へプレパラアトの箱を置く。机やら本箱やら、それ〴〵置場所を工風した。臺所道具は勸工場て一揃ひ買つて、忽ちに所帶が出來上つた。四五日たつてから貞子は寄つて見た。
「どうもお若樣て入らつしやいますが善くお氣がお付きになりますこと。私などは行屆きませんて、さぞかしお目まだるう入らつしやいませうと存じまして。」
行儀よく坐つて述べたてる。少し赤ら顏て小さな丸髷が艶々してゐて、小ざつぱりした唐棧に、黑繻子の掛衿、小綺麗な婆あやてある。
「小さい時から親の手を離れた人てすから、思ひやりはあらうと思ふけれど、私しも兄弟とはいへ、長年一しよに居た事は無し、若いことだから氣儘な事もいふてせう。どうか面倒を見て下さいな。」

「私は年を取つて居ります計りで、何のお役にも立ちません。どうぞ奥様、折々お見廻り遊ばしてお叱り下さいまし。」

手綺麗に茶を汲んで出す。新らしい火鉢には炭がよくおこつて湯がよく沸いてゐる。

「お醫者樣におなり遊ばすのださうでございますが、今朝ほどお座敷のお掃除をと存じましたら、お机の上に骸骨がございまして、びつくりいたしました。さういたすとお笑ひ遊ばして。婆あや。これがこはいのかい。僕は毎日の樣に人間を料理してゐるのだよと仰しやいます。あゝやつて御勉强遊ばすのはお大抵ではございません。」

いつ迄も果しが無いので「婆あやさんは子供はあるの」と聞いて見た。

「ございませんので貰ひましたが、思ふ樣になりませんのでたゞ今奉公いたして居ります。とかく私は不運の人間でございまして」と、見掛によらぬ哀らしい事をいふ。

十日計過ぎた。下宿屋とどつちが好いかと問へば「そりやあ比べ物になりません。一體あの婆あやは怜悧ですね。少しの御飯もぢき焚き馴れたし、お菜も感心にこしらへて吳れます」と云ふ。

「さうでせうね。廻りは靜かですか」。

「裏の方に何か細工場がありましてね、一日こと〱いはせてゐます。それに隣りの鷄が時嫌はずに鳴き出してやかましくて困りますが、今迄の事を考へれば何でもありません。槻ちやん。お守とても來て御覽よ。僕の內へは猫が來るよ。緣は日當りが好いものだから、いつでも丸くなつて寢てゐるよ。」

「あらいつて見たいわ。」折紙をして遊んでゐた槻子はいつた。

「みたいわなんて。覺えたね。」

「子供はぢきに直りますよ。こん度のお休には連れて行きませうね」と貞子はいつた。

間も無く一月にならうと思ふ頃、或晩淑がやつて來た。

「兄いさんは」。

「今夜は宴會です。」

「暫くお目に懸かりませんね。此節は夜勉强する事にしたものだから。」

「何か用なの。毎日々々忙がしがつてゐますよ。」

「いゝえ。何、昨夜ごたくして眠らなかつたから、今日は頭が痛くて勉强する氣になれないので、散歩して歸つて早く寢ようと思つてね。」

「盜賊でもはいつたのですか。」

「いゝえ。昨夜はあの隣でしたらう。十一時迄起きてゐてやつと寢付いたと思ふと人の魘される聲で目が覺めました。暫く聞き定めると、茶の間からです。罷めては又苦しさうに唸り出します。僕は氣味が惡くて爲方がありません。病氣かとも思つて、婆あや婆あやと二聲計り呼んで見ましたが、罷めません。又二聲三聲呼びましたら、やつと氣が付いたらしく「あり難うございました。どうも持病でさぞお驚き遊ばしたでせう。お休み下さいまし」といつてぢきに寢た樣子ですが、僕は何だか目が冴えて、今朝迄起きてゐました。朝飯の時に話すのを聞けば、いつ頃だか與津邊の旅館に緣付いたさうです。其の家の先妻が非常なヒステリイで、死ぬる時に決して跡を貰ふなと云ひ遺したのを知らずに、貰はれて行くと夫婦共每晩々々魘される。姑が「とんだ不心得な嫁だ」といつて修驗者を頼んで祈らせる。やうく罷んでしまつたが、かれこれする中事情があつて離緣になつた。併しその後も其癖が殘つてゐて、折々魘

されるといふのです。今迄二度緣付いたといつて居ましたが、今朝の話を入れゝば三度です。余程經歷のある女ですね」。

「さぞ不氣味でしたらうね。なか〳〵並の女中に來る女とは違ふと思ひましたよ。あの詞遣ひの丁寧なこと。いつも顏は赤くてお酒でも食べて居る樣ですね」。

「さう〳〵。いつだか奈良漬は食はぬかと云ひますから、酒臭いから嫌ひだといひますと、私は若い頃は一升位飲みましたといひます。一合のいひ違ひかと問ひ返すと、ほんとの一升ですつて。僕は驚いてしまつた」。

「今でも飲んでゐるでせうか」。

「どうですか。此頃は朝出れば夕方まで、解剖の實習や何かで歸りませんから、留守中の事は分かりません。其中に來て見て下さい。近頃は同じ年頃の婆あさんが好く話しに來ます。其外にもちよい〳〵人が來る樣です。どうも僕のお客さんより多いやうだ」と笑つた。

一箇月は過ぎた。

「どうです。豫算通りに行きましたか」と貞子は聞いた。

「初めてで分かりませんが、超過の氣味です。それにあの婆あやは若い時から帳面などを、ちやんと付けたことは無いのださうです。有る時は氣樂に遣ひ、無い時はどんなにも不自由して居たさうて、僅かでも豫算を立てゝすることは非常に面倒と見えます。食事の世話はよくしますが、其跡は裁縫といふものを出したのを見たことが有りません。暇な時は新聞を見るか煙草を吸ふかしてゐます。國へ行つた伯母さんの樣に、朝から晩迄針を持つのを女の一大事のやうにして居る人を見馴れた目で見ると、隨分兩

極端と思ひますよ。」

其後一月もたゝぬ中に、婆あやは着更を取りにと、一日暇を貰つて行つたが、何か口實をつけてそれ切り歸つて來ぬ。世話をした人は笑つて、「又茶飲友達でも搜すのでございませう」といつて居る。貞子は使ひ馴れた田舍の女中と違ふのに驚いた。代りの女のある迄、お針に賴んである婆あやをやつて淑の世話をさせた。

「姉えさん。今度はもつと馬鹿な女を搜して下さい。女中の怜悧なのは、僕は氣味が惡くて困るから」といつてゐる。

今度はどんなのが來るやら。（完）

おそろひ

森しげ女

七月の初めに、獨逸へ注文した子供の洋服が四箇月目でやう〳〵屆いた。どうも日本で寸法を取らせて拵へさせた洋服より、獨逸から取り寄せた出來合の服の方が氣に入るのである。

いつも注文してから六十日目位に屆くのに、こん度は倍も日數が掛かつたので氣の短かいお母あさんの里子は御苦勞樣にも江戸橋の郵便局迄二度も三度も足を運んだのである。

併し里子の家の經濟では、子供に外國から出來合の服を取り寄せる位が關の山である。日々の魚屋八百屋の拂を濟ませて、税金を拂つて行くことがやつと出來る。里子の夫は少しは名の知れた學者である代り金には緣の遠い方であるのに、殆ど病氣ででもある樣に、和洋の書物を買ひ入れる。「藝者に金を遣るよりは增しだらう」と云つて、自分は落ち附き拂つてゐても、里子は流石に學者が書物を買ふといふのに反對することが出來ない。それで先づ「全くですね」なんぞと云つてゐる。併し腹の底ではかう云ふ事を思つてゐる。近頃或る方面の人達が危險なる洋書といふことを唱へ出した。あれを世間では種々に解釋してゐて、中には正直に惡い學者を退治るのだと、痛快がつてゐるのもある。又あれは諷刺で、

こんな風に言へば、どんな立派な西洋の大家にも、日本の學者や詩人にも完膚なしだから、當局者も少し考へたら好からうといふ心持で書いたのだらうといふものもある。いかにもしらじらしい誇張の文字があるのだから、物分かりの好い人が、却つて諷刺だなぞとも思ふのであらう。里子は分からないので夫に聞いて見たら、夫は「あれか、あれは手短かに云へば、デノンシアションといふのだ」と云つた。里子は又其詞が分からないので、けげんな顔をすると、夫が「梶原樣へ御注進といふたちさ」と云つた。そこで始て成程と思つたのである。さて里子の思ふには、デノンシアションでもなんでも好いが、あんな事が盛んになつて、夫が西洋へ拂ふ書物の代が耗つて來たら、内の經濟が餘程らくになるだらう。惡くないわけだなんぞと思つて見る。それでも洋書を買はれるのはまだ好い。好いといふのは、背革、麻のクロオス、パアガメント、また假綴は假綴で、あらゆる色の紙に、意匠を凝らした模樣が附けてあつて、どれもどれも美くしいからである。自分には讀めないが室内の裝飾に丈はなる。假綴のばかりでも、どんなに立派に製本してある和書漢書に比べても、遙かに見た目が好いのである。それに小說や脚本なんかは、讀んだ夫に話を聞いても面白い。さうして見ると、なにも梶原樣へ御注進に荷擔するものはあるまい。それよりは夫が毎月のやうに、いろんな人に金を用立てるのが、どうも詰まらなく思はれてならない。それも昔恩になつた人だとか、今まで長く心安くしてゐた人だとかいふのなら、事情已むことを得ないとも諦念めよう。そんなのではない。夫の處へは殆ど絕間なしに、自分の窮狀を訴へる人の手紙が來る。結論は家に置いてくれろとか、どこかへ世話をしてくれろとか云ふのである。手紙でなくて、一冊の書物になつた自傳を送つて來るのもある。寫眞が添へてある。戸籍の寫しが添へてある。尋常小學、高等小學、中學なんぞの卒業證書が添へてある。皆見ず知らずの人で、自分勝手ばかりを書いてよ

こずのである。それを夫は一々讀んで見て、氣の毒だの可哀さうだのと云つて、どこへか世話をする。さう云ふ人にも獨立心があつて、一度世話になつた跡は、立派に遣つて行くのもあるが、中には又次第に馴れて、負ぶれば抱かれようと一種の親類附合になりたがるのもあるのである。さういふ人の數が次第に殖えて行くのだから、溜まつたものではない。夫も月末なんぞにさういふ人が來て、幾らか持つて歸つた跡で、「全く他人は己が電車賃の外になんにも使はずにゐるといふことは、夢にも知らないのだからなあ」なんぞと云つて、歎息する。併し又來ると、宿料の溜まつた話や、病氣で日給を差し引かれた話を聞いて、氣の毒がつてどうにかして用立てようとする。里子はそんな時に云ふのである。「ほんとですか。月給はかなりあるのですから、餘所の人はそれが右から左へ出て行つてしまふとは知らないで、細君が贅澤な爲めに、橋本は役所でパンばかり噛つてゐるなんぞと新聞に書くのですもの。あきれてしまひますわ。お負けに人が困るとさへ云へば、無理をしてでも用立てゝ遣らうとなさるのよ。あなたは誰の言ふことも本當にしておしまひなさるから、中には困るどころではない、贅澤のお手傳までなさるかも知れないわ」と云ふ。夫は笑つて、「女と云ふものはもう少し優しい同情がなくては行けない。萬一向うが贅澤に使ふやうな事があつても、こつちが無駄をするよりは德義上に利益だ」と云ふ。里子にはかういふ議論になると、餘り抽象的になつて、どうも腑に落ち兼ねるのである。世の中には金持も隨分あるのだから、金の用は金持にさせてもらひたい樣に思ふ。

さういふ經濟をしてゐるのではあるが、こん度子供の洋服を獨逸へ注文する時、「ねえ、鶴子にもお揃ひに買つてやらうか」と、夫が言ひ出した。鶴子と云ふのは里子の兄の子である。「それは難有うございますわ。鶴さんがさぞ喜びませう。」現金なもので、里子は嬉しさうに禮を言つた。大勢ある從兄弟達の

うちても、一週間程前後して生れたので、鶴子と里子の長女の愛子とは、分けて仲が好いのである。

里子はやう〳〵屆いた服を持つて兄の内へ出掛けた。出來合の安い服でも、西洋から來たと云ふのに興味があると見えて、兄嫁も鶴子も恐ろしく喜んだ。鶴子は風を引いて頭が痛むと云つて、學校から歸つてから休んでゐたのが起きて來て、早速服を着て見る。優しい眉、玉の樣な大きい目、こんもり高い鼻、淸い額に垂れ掛かつた艶々した柔かい髮、桃色と白とて自然に色どられた顏。服を着せて見ると、丸て西洋人形の樣に可哀いのてある。

里子は麴町の八木て帽子を買はうといふので、兄の家を出た。八木はおもに學習院女學部の生徒を得意にしてゐるのてある。値段を聞いてから品を極める樣な客は少い。どの客も自分の好む品を選んだ跡て、價丈の金を拂つて歸るのてある。

里子にはそんなおほやうな買物は出來なくなつてゐるのてある。第一に値段を聞いて見る。それて品物もなか〳〵根氣好く選るのだから、賣手の爲めには厄介な客てあらう。

ふと店先きに、獨逸から來た服と同じ色の帽子があるのが目に附いた。値段も恰好て、同じ品が三つばかりある。それを買ふことに極め掛かつて、ひねくり廻してゐるうちに、「一寸、これは船來てせうか。和製ぢやあないの」と聞いた。「へい。或る所の御注文て三つ四つ拵へました品てございます」と云つた。和製と云ふのにいや氣が差して、それは罷めて、船來品を見せて貰ふことにした。大きな硝子の箱に、小山の樣に色々の形の帽子が這入つてゐる。遠慮なく有る丈出させて見たが、色が同じになつてゐるのは、形が丸て違つてゐる。同じ形のは色が違ふ。數ある品が好くも〳〵一つ〳〵變つてゐるのてある。姉えさんは、「鶴子は帽子はあるのですけれど、同じ服を頂戴したのですから、帽子も愛さんと同じのが

ありましたら、序てに買つて來て下さい。お揃のがなければ、買ふ必要はありませんからね」と云つて賴んだのである。同じ物がどうしてもないので、愛子の丈一つ買つて八木を出た。

帽子を一つぶら下げて電車へ乘つてから、姉えさんはああ云つたが、「こん度入らつしやる時は、帽子を持つて來て下さるのね」と、鶴子が云つたことを思ひ出した。折角帽子が來ると思つて待つてゐるのに、同じのがないから、鶴さんのは罷めましたと云へるだらうか。鶴子だつて愛子だつて、和製も舶來もあつたものではない。只自分の氣持丈て、折角お揃の帽子が見附かつたのをよして、一つ丈買つて來たのだ。自分はどうしてかう思ひ遣りのない事をするだらう。つひ此間兄いさんが鶴子と愛子に友仙縮緬の被布を拵へてくれた。その時も一しよに姉えさんと三越へ行つたら、退紅色へ元祿摸樣のそれは好いのがあつたのを、一反しか無かつたので、姉えさんが外のにしたことを考へて見ても、自分のすることがあまり勝手過ぎる樣に思はれた。あした又出直して鶴子の帽子を買つて行かう。自分の小使で買ふのだ。さうしよう〳〵と、腹の内て極めた。（完）

鶉

国木田独歩

（一）

鶉は相變らず可い聲で鳴くだらうね、毎日噂をして居る大切にして呉れ。

と今日も主人から來た手紙の終に此樣書いて有つたので、

「お琴、旦那樣のお手紙にまた鶉の事が書いて在るよ、如何したら可いだらうね。」と時子は思はず次の間に松雄を遊ばせて居る女中のお琴に此樣言つた。

「奥樣、鶉は逃たと言つておあげなさいましよ、私達の不注意で逃がしたのでは無いので御座いますから」とお琴は不平らしい聲で返事をする。

「父ちやんは怒るよ、母ちやん」と七才に成る松雄は母を威すやうな聲で、此樣言ひながら次の間から出て來た。

「若しか旦那樣の御留守に死にでも仕たら大變だと思ひまして、隨分可愛がつて遣りましたのに鶉の畜生、逃げ出すなんて眞實に恩知らずで御座います」とお琴は口惜し相に言ふ。

『逃げたつて可いよ、僕の鶉なんだから』と松雄は力む。
『其れては坊樣、父樣の所へ僕がつい逃しましたッてお手紙をお出しなさいましよ、左樣すれば母樣が叱られないて濟みますから』
『ウン、其れが可い』と松雄は嬉し相に勇むだが、
『お琴、駄目だよ僕は未だ學校へ行かないから手紙なんか書けないや、困るなア』と松雄は頻りに困つて居たが、
『母ちやん、僕いゝ事を考へた電報を打ちましやうよ。「鶉綱を喰い破つて逃げた、」つて、サア電報用紙々……』と机の引出しを拔いて掻探す。
『松雄さん可いよ、母さんからおわびを仕ますから、サア除いて頂戴』と時子は松雄を机の側から離して自分が机の前に來た。
『母ちやん、金魚は僕がお料理して了つたのだから、松雄があやまりますつてね。鶉が逃げたのは誰の罪でも在りませんッて、其れからラックは馬鹿犬だもんだから、他所へ遊びに行つて、歸り道を忘れて了つたのか、如何しても歸つて來せんてね。けれどラックは毎日お琴が探して歩いて居ますから。きつと後に見付かりますッて書いて頂戴』と松雄は小供心にも母の顏色の惡いのを見て取つて心配相に、手紙を書く側から色々の事を言ふ。
『松雄さん、おまへ其樣に心配しないても可いよ、母さんが手紙を書くうちお琴と散歩にても行つてらつしやい』と時子は笑顏を見せれば。
『琴や母さんにお金を戴いて烏森の和泉屋へ鶉を買ひに行こうか』と言ふ。

「坊ちやま駄目ですよ、お宅に居たのは支那のですから、日本のよりは少さう御座いますし、折角買つて來ても鳴きは致しますまい」

「仕様がないなア、けれどラックは此の大久保中探せばきつと居るよ、サア又探して來よう」と松雄は氣輕に走け出した。

「ねエお琴、只でさへ旦那様がお留主で淋びしいのに、鶉は逃る犬は迷子に成つて了ふ、其上可愛らしい金魚まで松雄さんが御料理して了つたので、又急に淋びしく心細く成つて了つた、お前も早く田舍に歸してあげたいけれど、今お前に歸られては私何如する事も出來ないから、氣の毒だが旦那様の御歸京までは是非居てお呉頼むよ」と時子は染々言ふと。

「何んて今奥様を置いてき放にして田舍へなんぞ歸りましやう、私は元來歸國たくはないので御座いますから何時迄も置いて戴きます、眞實に旦那様がお留主だと淋びしう御座いますが、其内には御病氣も可くお成りなさつてお歸りに成りましやうから」お琴は優しく時子を慰さめた。

（二）

鶉は今歳の春、此の一家が下町に住居つて居た頃、松雄が此家に世話に爲つて在るお妻さんと言ふ婦人の親許へ遊びに行つて貰らつて來たのであつた、松雄は貰つて來た當座間暇さへあれば籠の側へ寄つて、棒を入て突いたり、蓋を開て鶉を掴むだりするので。

「松雄、其んなに虐めると父さんが喰て了ふぞ」と父親から威されて居た。

「父ちやん、可愛がりますから眞實の鶉籠を買つて頂戴な、此籠は間に合せなんてすツて」

「ウン宜しく〲、其内買つて遣るから、可愛がつて遣るが可い」

「僕ちつとも虐やしませんよ、可愛がるのですよ」

『けれどお前のやうにギユツと握ると死むで了ふよ』

『じやア遠くから見て居れば可いてしやう』

と言つたが相變らず人の見て居ない折は虐めるので、鶉はすツかり驚いて了つて人の影さへ見ればバタ〳〵と大騷ぎを遣るので有つた。

其のうち一家は郊外へ轉宅した、最早其の頃松雄はすツかり鶉を忘て、父親の友人から貰つたラツクと言ふ小犬を朝から晩まで友達にして遊んだ。鶉は松雄ばかりでなく一家の人達からも忘れられて。餌を遣るのをさへ忘れる日が有るやうに成つた。

所が或時近所の奥樣が來られた時、縁側の隅に片寄せて有る鶉を見て。

『マア珍しいものが居りますね、鶉は實に可い聲の鳥で御座いますよ』と言つた。

『左樣ですか、じやア是からは僕が世話を仕て鳴かせて見ましやう』と其れからは不精な主人が餌を遣つたり、籠の掃除まで人手に掛けず世話をしたが鶉は相變らず、少しも馴れないので、氣の短い主人は鶉を憎がつて、目を廻させて遣るなどゝ、籠を振り廻したり、水を浴せ掛たりした。

夏の或朝時子が目を覺ますと最早何時の間にか戸が開いて居るので。

『マア何んだか大變涼しい風が當つて、氣持ちが可いと思つたら戸が開いて居たのだ』と思わず一人言を言ふと。

『お前の樣な奴は火事でも有ると燒け死ぬぞ』と次の間から主人が笑つた。

『マア、貴方お目覺だつたのですか。』

「左様さ、お前の様に寐ぼうじやないから、」

「私如何して此様寐ぼうなんてしやうね。お琴も又今朝は素敵に早く起たのですね、お天氣が變らなければ可いが」

「眞實だ、僕は此れから飯の出來る迄一寐いりするのだ」

「私も餘り可い氣持ちですから、最少々過つてから起ますわ」

「また始まつた何んとか彼とか理窟を付けては寐たがる奴だな、勝手に爲るが可い、サア寐るぞ話を仕ては嫌だぞ」と主人は言つた。時子も又ついうと／＼と寐むり掛た時、今迄とんと聞いた事のない鳥の聲がきこえた、其聲は鈴を振るやうな、何んとも彼とも言ひやうのない可い聲で有つた。

「オイ、今の聲を聞いたか」と主人は時子に聲を掛た。

「エヽ、マア何んて可い聲なのでしやう、何んと言ふ鳥なのでしやうね」

「僕も知らん、また鳴くかも知ないから靜かにしろ」

「左様ですわね」と夫婦は再び鳥の鳴くのを待つた。

　其日時子は主人に、

「ねエ貴方、今朝また彼れから鳴きまして」と聞いた。

「否、鳴くだらうと待つて居たが、中々鳴かぬので待ち勞びれて寐むつて了つた」

「私もつい寐て了ひました、如何な鳥が彼様な可い聲で鳴くのでしやう、私は生れてから始て彼様可い聲を聞きました」

「またきつと來て鳴くよ、此度は如何かして鳥の正體を見たいものだ」と主人も言つた。

其れから間もなく又朝早く其同じ聲を聞いた。所が聲の主は思ひも掛ぬ鶉であつた、家中の者の顏は喜びに輝いた。なかにも主人は友人の顏さへ見れば、

「鶉がとう〳〵鳴き出した、實に可い聲だよ」と嬉し相に吹聽するのであつた、然し鶉は朝早く鳴くばかり、晝間はとんと鳴かないので、主人は朝を樂みに暗い內から起きるやうに成つた。主人の早起に閉口したのはお琴で、短い夏の夜を暗いうちから起された。

「鶉やお前のお蔭で每朝早く起るので寐むくつてたまらないよ」とお琴は午後に成つて用事の合ひ間にはきつと緣側に腰を掛けて鶉を相手に愚痴を溢しながら居寐むりをするので、

「戶さへ開ければまた一寐いり位させてやる」と主人から言われた。其れからは目覺しを掛て置いて、音がすると機械のやうにお琴は飛び起て、半分寐むりながら戶を開けて置いてまたころりと寐て了ふので有つた。

また主人は家中の者に、

「オイ、鶉を大切にして吳ろ」と始終言つて自身も一生懸命に氣をつけて可愛がつた。左言ふ風なので家の者が急がしいのに取りまぎれて一寸でも世話を怠ると即ち拳固が飛ぶので有つた。

（三）

秋の始主人は病氣の爲に海濱へ轉地する事に成つた。

「如何かして鶉を連て行きたい」と主人は熱心に言つた。

「エヽ、如何か左樣して頂戴、お留守に若しかの事が有ると大變ですから」

「お前は責任を避れやうとするのだな、其れては連て行きたいのだが置いてゆく」と主人は持前の皮肉

を言ふ。
「マア、其んな積りでは無いのですよ、鶉はお妻さんが受持だつたので、つい私やお琴は餘りかまひませんでしたから、お預りしても心配なので」
「僕だと思つて世話をしろ」と主人は言つた。
「其れでも先方へ行けば友人も無く淋しいから是非連て行くと言ふ事に成つて居たが、荷物の都合やなにかで、矢張り鶉はお留主居する事に成つた。
主人が留主に成つてから鶉は日に幾度も鳴くやうに成つた。其度に、
「旦那樣が居らしつたら、嘸お喜びなさるだらうね」と時子はお琴と噂を仕た。
或日の暮がた、時子は風邪を引いて寐て居た。松雄とお琴は藥取りに行つたので、寐むるまいと仕て居たが、ついうと〳〵すると、けたゝましい物音に目が覺めた、四方は薄暗く成つて居る、音のしたのは緣側の方らしいので「若しや」と驚いて籠の側へ行つて見ると、クックッと言ひながら、一羽の鶉が籠の中を廻つて居た、二羽の鶉が一羽しか居ないので、矢庭に籠を座敷へ入て置いて、庭へおりて其所らを探し歩いた、木の蔭などは最早まつくらなので、ランプを持つて熱に振ふ足を蹈みしめながら緣の下やら庭の隅々を探し廻つて居る所へ松雄やお琴も歸つて來たので、共々探したが、とう〳〵見つからなかつた、籠を調て見たが、此所から飛び出したかしら、と思ふやうな損所もなかつた。
「困つた事が出來て了つた」と時子は途方に吳た。
明日（あくるひ）からは殘つた雄が二三日は朝から晩まで鳴き續けに鳴いた。時子は其聲が染々と胸に應へて、淚さへ溢れるので有つた。

松雄は鴉が鳴く度に籠の側へ寄つては、

『オイ、鴉悲しくつて鳴くのかえ、母ちやん此奴はおかみさんが居なく成つたので、淋しくつて鳴くのですツて、お琴が言ひましたよ可哀相ですから逃がして遣りましやうか』と籠の蓋を幾度開けやうとしたか知れなかつた。

『でも奥様、鳴く方が殘つたので旦那様に申譯が立ちます』とお琴は言つた。

一羽逃てからは時子が側へ置いて世話をした、一羽が逃てから十日ばかり過つてから、朝お琴が雨戸を開ると同時にバタ〳〵と勢の可い羽音がした。

『アレ、奥様また鴉が』とお琴は泣き聲で呶鳴つた、時子も羽音に驚いて飛び出すと、お琴が狐にでも憑まれたやうな顔をして、素足で庭に立つて居た。

『全然夢のやうで御座います、羽音がしたばかりで影も形も見せずに逃て行つて了ひました』とお琴は言つた。

時子は崩るやうにソフアに腰を落して、兩手を顔に當たまゝ暫は言葉も無かつた。とう〳〵二羽とも逃て了つた。

『母ちやん、昨夜のうちに網を喰ひ破つて外へ出て居たのですよ、此様穴が開いて居ます』と松雄は籠の天井に張つてある麻の網を時子に見せた。

『鴉は餘りで御座いますね、眞實に奥様お察し申します、旦那様が御在宅の時にだつて幾度も逃掛たくせに、其の時逃れば奥様や私に迷惑は掛らなかつたに』とお琴は庭に立つたまゝ立腹つて在た。

『鴉はきつと喜むで居ますよ、今頃は先に逃たおかみさんに逢つて、お詫でもして居るてしやうねエ母

ちやん」と松雄は慰顔に言ふ。

『お妻さんが奥様の爲に辯解して呉るやうな婦人だと可いのだけれど」とお琴は呟やきながら時子の方を見た、時子は猶手を顔に當たまゝ身動きもしなかつたので、氣の毒相な顔をして臺所の方へ行つて了つた。

『母ちやん、泣いて居るの』と松雄は時子の手に縋つた。

『坊ちやま〳〵』とお琴が呼ぶので。

『ウン、今行くよ、よう母ちやん如何したの御飯喰べて戸山の原へ鶉を探しに行きましやう』と頻に時子をゆすぶるので、

『アヽ、左樣仕ましやうねエ』と泣顔を隱して立ち上がつた。

其夕べ、主人の友達が二三人留主見舞に來た。門を入るや否や、

『奥樣、鶉が逃ましたつてね』と一人が言ふ。

『マア、最早御存じ』

『今松雄さんに聞いたのですよ、大變な事が出來ましたね、先生嘸殘念がるてしやうな』

『眞實に私如何したら可いかと思ひまして』

『マア、餘り心配しないがよう御座んす、たかが鳥じやア有りませんか』と友達は慰て呉た。

(四)

『たかゞ鳥ては有りませんか。とお友達は仰しやるが、私には鶉の逃げたのは大問題なんだわ』と時子は他人の居ない時思わず呟やいて深い溜息をついた。

主人が出立する二三日前の事。

『私達が留主に成ればお奥様やお琴が鶉を荷厄介にして、干乾しにでもして、殺して了ひましやう』とお妻さんが主人に言つたのを、蔭て聞いて居たお琴が口惜しがつて、時子に直ぐしやべつた。聞いた時子も不愉快でたまらなかつた、其れで主人が轉宅先へ鶉を連れ行きたいと言つた時、好い幸と贊成したのだが、とう／＼預る事に成つて了つたのだつた。

逃た時直ぐ主人に知らせやうと仕たのだが、迷惑ながら預つたのを主人は可く知つて居るから、何んと言譯を仕た所が『そら、とう／＼逃して了つた』と立腹顔、お妻さんが『私が言つた通りですわ』と其れ見た事かと言ひたげな笑顔などが、時子は目に見へて口惜しくつて堪らないので、主人が歸つて來てから目前で謝罪らう。拳固の二ッや三ッ何んでもない。蔭て立腹たりお妻さんに嘲られたりする方が餘程つらい。と思つたので知らせずに置いた。

所が此頃の手紙にはきつと鶉の事が書いて有る。其の筈此方からも始終書いて送つたのが、逃げてからは在もせぬのに何んて、相變らずよく鳴きますと書けやう。何んとも言つて遣らないのに、先方は知らないから相變らず鶉の事を聞いて寄こすので有つた。

『最早仕方がない、何んと思われても可い』

と時子は謝罪の手紙を書いた。手紙は幾度も書き直した。其譯は平常から氣の短い主人が病氣で猶氣がイラ／＼して居るのだから、立腹て又熱でも出されては大變と思ふので、「仕方がない」と斷らめて呉るやうと苦心して書いた。

（五）

今日あたりは返事の來る頃と時子は朝から氣が落つかなかつた。晝から手紙が來た、封を切つた時子の手は振るへて居た。

拜啓

病氣追々御快方の由安心致候、但し油斷して輕はずみなきやう御用心が第一に候小生も發熱の方宜しきやう申上げ候へ共相變らず猫の目の如く日に依りて變じ現に昨日の午後は三十八度四分の高熱が半日以上も續き閉口致候、されど氣分は次第に恢復致候間此れ丈は喜び居候、今日は梅田氏の來訪を幸ひ寫眞機械を携へ近所を歩き候、昨日も今日も小春日和にて、實に病人には何よりの幸福に有之候

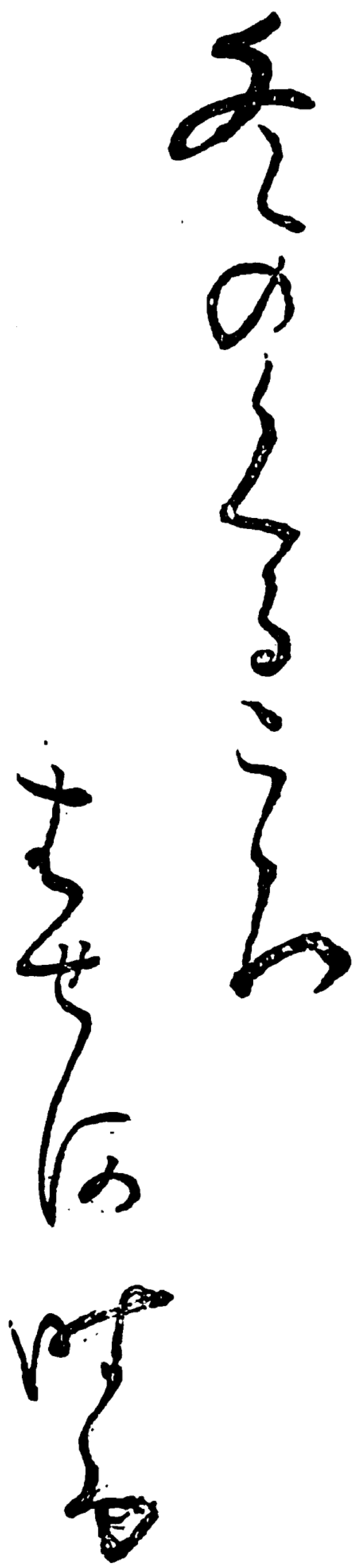
と此所まで一息に讀むだ時子は何んだか勝手が違ふやうな氣がした。

酒を廢してより以來酒の事は思ひ出しもせず、夜食後も醉ふて居らざる故、讀書も出來實に愉快を感じ居り候、たゞ殘念なるは煙草だけは未だ廢し得ず、然しこれも必ず二三日中に廢してお目に掛ます、其代り芋を喰ふには我れながら呆れ居り候、日に一度は必ずふかして貰ひ、ふかし立ての熱いのを吹き乍ら食ふのを何よりの樂しみに致候、四五日中には小生だけ一寸歸京仕るべく候間、上等の芋を仕入れ置き下され度候、御身も遂に最後の勝利を得て御滿足と存候、芋を食つて居る分には間違は御座なく候。

時子は思わず手紙を顏へあてた、如何かして一日も早く元の壯健な體に仕てあげたい、壯健て芋黨に成つて下さつたのなら嬉しいが、病身の爲に好きな酒も上がれず、其代りに芋を召上がるかと思ふと情なく成つて時子は泣いた。

鴉が逃げし由、惜しき事なれど今更ら致し方なし、但し一言申上候不注意に非ずと辯解するよりも、不注意の爲に逃げましたと言ふ方眞實にして、且つ立派に御座候、何んとなれば「鴉が逃げた」ことが直に不注意に候へばなり、鴉は魔法使に非ず、人間以上の能力ある者に非ず、此の理窟がわからぬならば吉澤君にてもお聞きなさるべく候、凡そ人と言ふ者は自分のなしたる事の眞の意義を解せざるが爲に更に第二の失策を致す者に候、此理窟も能くわからねば吉澤君にてもおたゞしあるが宜しく候、今日のお手紙に依れば果物をお送りになりし由、未だ屆きませんが明朝を樂しみに致し居り候、大久保の諸兄にも宜しく、お琴にもよろしく。

時子は此手紙を幾度も繰り返へして讀むだ、其して辯解したのは眞實に卑怯だつたとつく／＼思つた。けれどまた主人ばかりなら決して辯解などせず、心から優しく謝罪つたに違ひないが、其所には『奥さんやお琴が荷厄介にして』と蔭口を聞いたお妻さんの在る爲に、一方には主人の病氣を氣づかつたにしろ、卑怯な言譯などするやうに成つたのだと思ふと、つく／＼お妻さんが恨めしかつた。　（完）



コスモスも菊も同じやうに立枯た、山麓の家の脊戸口へ、力のない薄日がぼんやりさす日がつづいた。裏の崖へ忍んで出てくる兎の毛色が、ふと目につかぬほど散り埋もれてゐる落葉に、おく霜が朝毎に深くなつた。冬のくる頃の此山里では、老人達は春が廻つてくるまで、日向ぼつこの出來ぬのを淋しがつてつぶやく。若い娘達は、都の人に馴た夏ごろの俤夢を忍んで、しみじみと光のない生活を果敢み、涙ぐむ日の多くなるのをいとつた。

夜が明てから暮るまで、石を切る鑿の音が山懐にたたまれて、靜に戸毎に響いた。溪石を割る轟が障子をゆすつて消えたあとは、まだげつそりと閑寂になる。散殘つた木の葉が落るぐらゐて、犬さへ馴てなかなくなつた。痩た吹井の水は低い方へさつさと走る。さうして短い日はくれてはあけた。

土間に釣した山籠には煤がかかつて、息杖はそこいらの片隅へいれられ、然うしてさういふ家業の男達は、安い歩で親方に使はれて、縣道の崖淵から見下すと、蟻のやうに溪流をぬつて、割石を運びだしてゐる。それをまた子供達は、其大勢の人足の中から父親や兄弟を探しだして、せい一ぱいに呼んでみ

ては、呀するのをよろこんでゐた。

溪の水の瀬のかはつたほど此夏の、山海嘯は土地の溫泉宿に手痛い疵をおはせた。奔流は二間にもあまる溪の石を轉ばして、走り下る道に障るものを薙倒し突崩した。溫泉宿の崖も突崩された。縣道の橋も落された。官線の驛から客を運んでくる、電氣鐵道の線路は、レイルを蛇のやうに河原へのたくらして、ある場處は跡方もなく浚ひとられた。

其折泣いて宿の者を困らせた避暑客も、ヒステリーの昂じた宿屋の娘も、もう噂もされなくなつた。溫泉宿は溫泉の道の採掘やら、裏の崖の終繕やら、座敷の手入れに取紛れてゐる。人出入は多いがさういつた場合ゆゑ、女中や男衆の實入りは淋しい。溫泉に入浴るものもお客の頭數よりは、宿の者や近所からの貰ひての方が何倍か多かつた。

悲慘なのは旅藝人であつた。浴衣の重ね着に紋のついた羽織を着て、溫泉宿から貰ひあつめた草鞋錢を命の綱に、溫かい土地の冬の湯場へと落ちていつた。其中には仲間からは取殘され、安宿に病ひついてゐるのもあつた。

日が落ると、風の冷さが一しほ身にしみるやうになつた。箱根の連山は何日の間にか眞つ白になつて、炭燒の煙が急に目立つた。頭の病ひを養ふ客とか、筆をとる爲に合客の少ない、閑寂なのをよろこんできた客は、つくづく煙の行衛を眺めて旅愁を深めた。宿の者は筧に流れこんだ紅葉の一ひらを見出した時などは、上の方の溫泉宿の寂れた景色を思ひやつてゐた。

湯本に住てゐる三味線彈の友作も、御多分にもれぬ心さびしい旅鳥の身の上であつた。それでも去年から土地に居ついてゐる馴染甲斐に、顏の新らしい渡り者のうけたやうな悲慘は見ずにすんできた。寂

にも藥にもならぬお役目だけの巡査が、家族と一所に住居してゐる駐在所の裏に、小さな巣をかまへて儉しい生活を女房と二人で營んでゐた。

ぱらぱら雨が晴れたりこぼれたりする日に、温泉宿の傘をさしかけて、女房と二人で塔の澤から歸り道を、住岡の店の前を通りかかつた。湯本の電車停留所の前には、住岡とおなじ店つきの茶屋が五六軒立並んで、其家々で客をうけてゐる温泉宿の名札をかけてゐる。温泉宿からは男共が、馴染客を迎へに此處まで出張るのが例になつてゐる　例年ならばまだ紅葉の客が充分ある頃を、盛夏の出水以來火の消た有樣で、たまさか登る客でも小田原から人力車ゆゑ茶屋の前は通拔けてしまふ。住岡でも半分ほど店の戸をおろして、廣い土間に卓は積重ね、椅子は隅の方へ片寄せてあつた。

友作と女房とは小さな聲で諍ひながら歩いてきたので、住岡の前を通り過してしまつたのを、硝子戸の中から呼かけられたので、弱い家業の二人は周章て言譯しながら立寄つた。

「どもあかん、目の明いてゐるものは鈍や」と女房のせいにして、盲目の友作は顏中愛想を作つて會釋した。女房はつぼめた傘の雫をきりながらは入つてきた。

「わしや心眼が明いによつて、何ぢややらお店の前らしう思うた」

「あんたがそつち側でおまけに横降りだもの、分つてたなら御挨拶しなされば好いに、あんたこそどんや」

「まゝえいわ。へい今日は‥‥」大きな聲を出して「今日はいふても、此景氣ではなんといふてよいかあかん」と揉手をしながら大火鉢のきはへいざりよつた。

住岡のおかみさんは茶釜にさはつてみて、湯呑茶椀に汲とつて友作にもたせてやつた。

「わたいが二つともよばれませう、女房は飲ませんから」と友作は色氣もなく、閉されてゐない方の眼をぐるぐるさせてお湯の加減を吹いて啜りこんだ。

住岡のおかみさんが友作の其樣を凝と見詰てゐるので、女房は目をそらして、顏立よりも手の美しいおかみさんの、細い指が觸つてゐる拭きこんだ茶釜から、茶棚の上にすがれた菊のさしてある花瓶、白いきれのかけてある電話機と目をうつしていつた。

「まさかお師匠さんと一所になつたお禮に斷物でもあるまいかね」おかみさんは今更らしく二人を見くらべた。

どう競て見ても亭主より一嵩も二嵩も大きい友作の女房は、夫より十五も更て見られてゐる。額ぎはの廣い濃い髮を、輪の細い銀杏がへしに小さく結つて、少し紋の赤くなつた黒縮緬の羽織を引かけてゐる。お酒がいけるので小肥りした赤い顏、人前では何と言はれても笑つてゐるだけで、友作に花を持たせてゐた。

「おかみさんは偉いな。其通だす」友作は頓狂な聲をだして、奇麗な齒並を見せて笑つた。開かぬ方の眼は眉毛の下に落込んで窪んでゐる。右の方のは濁つた色の幕が瞳を閉してゐる。色白の顏とは權衡のとれぬ萎びた小さな體へ、薄汚れのした白博多の巾廣の帶を胸高に締てゐた。

「一日飲まず喰はずでは愁いに違ひないと、どなたさんもお言ひなさるけど、一向平氣でおますわ。かういう時や思つて、わたいが一人で何もかも詰込みますのや」と友作は女房が自分のところへきてから、遲れて習ひはじめた淨瑠璃の爲に、月に一度口へ入るもの一さいを斷て學ぶ事を、稽古の嚴しい自分の誇にしてはなした。

「それゆゑ私も遠慮して、家ではおぶもよう飲みまへんから、よばれるとおいしうて」と言譯しながら女房の分まで呑ほした。

女房は女房で「出るものは耐へにくいが、ちと辛抱せい、何事も藝道の爲やといふて私を責ておきながら、自分の賤しいことといつたら此通りですもの」といつた。

「どうだかね。相合傘かなんかで羨ましいよ」おかみさんは二人の言ふ事を信用せずに茶化してゐた。

「そりや違うた。稽古の歸りやがな、いつも傘は一本借るのや。なあおよし、そんでも珍しうお座敷があつて嬉しかつたな」

「ほんとにあのお客様の胴間聲を、おかみさんにきかせたかつた」

「さうやさうや、恐しう彈きづらかつた。やあやあ久吉――チチツ、チンツツン、ンテチンチン……」

お客の語り様を眞似て、人差指で火鉢の縁をたたきながら、土間で下駄をがたがたさせた。

「あすこはいつも繁昌するね。家なんぞも客うけしてゐるのだから電車さへあれば好いのだけれど」

「他の溫泉客さんはから甚いのですよ。何といつても山崎の別莊の方を、出來上るまですつかりなさるのだからね」

「山崎さんといへば大變な騷になつたね。湯本でも挽物屋の方では、よつぽど拘引れるかも知れないつていふことだよ」とおかみさんは聲を秘めた。

唐の驪山宮にもまさる大建築を起さうとしてゐる、ある富豪の別莊の用材を盜まれてゐたのが、一年二年と積つて見逃されない額となつた。此頃になつて監督が代り、技師長が代りして、おまけに村會は村會で紛糾してゐる間に、山の上の方の村から檢擧がはじまつて、騷動が起りかかつた。不景氣のどん底に

燻つてゐる土地の者には泣つ面に蜂で、山崎家の仕方を、今になつてからと怨まぬ者はなかつた。
「嫌なことや、其事ならきくも切ない。さ、家へいんでも一稽古せにやどもならん」
其話がはじまると急々しだして、友作夫婦はきくのを厭つた。
「あの位お客様があれば結構なに、そんでも慾やな。女中さん達は庭のお稲荷さんに願かけてゐやはつた。わたいがお帳場へいつて、お店の門口の土を掃ていんで、自分ところの門へ撒いて、おまじないしとる者がありますがいふたら、昨日も表戸に吸出し膏薬がはつてあつたと、おかみさんが笑ふておいてた」ときかれもせぬことを言つて住岡の店を出た。
二人は外へ出るとすぐ爭ひをしつづけた。外目に美しい傘の中で、友作は女房を肘でこづいた。此土地を離れる離れぬといふことは二の次にしてしまつて、女房のいふなりに東京に出て、女義太夫の仲間入りをさせ、席へ出してやるといふことが、友作には業腹でならなかつた。女房は友作の言葉にしたがつて、大阪へ修行にゆくもよいが、折角溜た小金をそんな事でなくしてしまつては、今迄の辛抱甲斐がない。東京へやつて席へ出させぬほどならば、此土地に居据つて客の合間を、地の者に安くても稽古をつけてゐた方が、食はぐりがなく安全だといふのであつた。けれど旅から旅へお茶を濁してきた友作には、性質のよい弟子が覺えこむにつけて心配も起る。好い客を失敗らぬやうに大物をこなしておくには、大阪へいつて買出してこなければ不安心でもあつた。
其日の夕方になつて雨はあがつた。氣紛れな夕日はさしたり影つたりしてゐる。友作は火の氣のない火鉢の前に懷手をして坐つてゐたが、雨があがれば陰氣くさい氣分もはれるやうに悦んで
「およし、雨があつたぞ」と元氣らしく障子を引あけて、空を仰ぐやうに顏をさしだした。

はつきりと高い空に、二子山は軒近くせまつてゐる。女房は山茶花の散る庭へ、借てきた傘を干してゐたが、表の駐在所から洩れる話をきかうとして、垣根のきはへよつて立聴きをしてゐた。それを思ひやりもなく呼立られて、返事をする事も出來ず、顔を顰めて縁さきへ來た。

「そんな大きな聲で呼立て、なんの用さ」と友作が手をかけてゐる障子をやけにあけて内へはいつた。友作の傍を通抜けて、奥の突あたりに祭つてある縁起棚から、お造酒をさげてきて火鉢の猫板の上においた。

友作は障子をたてて、座布團の上に坐つたが、小鼻を動かせて「酒くさいな」と首をふつた。手さきに徳久利がさはると取上げて、徳久利の口から匂ひを嗅いてみて、底をふつて分量をはかつた。

それを見るとおよしは舌打ちをして「どうせあるものなのに、おいしく飲ませるのも惜いのかね」

「どうして」

「どうもかうもありやしないさ」と疑ひ深い陰のちらつく、友作の顔を見下して、立つたまま邪見にいつた。

「今日はよう煙草の辛抱が出來たな」

「それどころぢやないよ。鰹節箱はどうしたら好いのだい」

「しッ、静に言ひな聾ぢやないわい」見えぬ眼を見張つて四邊を見廻した。

鳥か――障子にばさりと羽音がして陰がたつた。友作もおよしもぎよつとして、互に何か言ひかけやうとしたのを呑込んてしまつた。駐在所での高聲はまだつゞいてゐる。

日は沈んだ。およしは灯をつけに立たうともしないで、隣家の話を聴きとらうと耳をすましてゐる。

友作はさうやつてゐるうちに、耐へられなくなつたやうに輕く顫へた。
「なあ、一思ひに明日大阪へいんてしまはう」と突然およしの膝をゆさぶつた。
「鰹節箱一個て、大阪まで逃ないても、何とか言譯がありさうなものぢやないか」
「それだがて私や嫌ぢや、巡査にたづねられたりするのは」
「それても彼品は、源さんがさしてやらうといつて進めたからだと‥‥」
「そりやいかん。三味線箱なら商業ものて目につかん知らんが、火鉢一個ろくながない家に、あんな‥‥‥」
「一體お前が赤ん坊のやうになんてもほしがるからだよ」
「だまらんかいな。やくたいもない鰹節箱などにしたは誰や」
「お前だつて迷つたのだらう。まあ目につかん物の方が好いといつた癖に、たんと大きな聲をお出し、後て氣になつて寐られやしまい、其時あやまるな」およしは腹立まぎれに威すやうに言つて、洋燈をつけに立つた。
さう言はれると氣になつて、友作はおどおどしながら「どなたさん、どなたかお出たか。暗うても居りますが、今ぢきに燈火をつけさせます」と誰にいふのでもなく、障子を引あけて、薄暗の庭の入口の方へ向つて怒鳴つてみた。
丁度それ〻嘲笑ふやうに隣家から笑聲がきこえた。夜風にぶるぶると顫へた友作は、障子をたてきつて火鉢の縁へ肘をかけ、うつむいた頭を兩の手でおさえた。
およしは燈火をつけて、友作のお膳立をして膝の前へつきつけた。火種を火鉢へうつすのに「さあさ

あ」といつて首をあげさせた。友作は溜息をつきながら、箸箱から自分のを取出した。鐵瓶へ觸つて見ると水ばなれもしてゐぬので箸を投出して

「辛氣くさい、誰もどうして來ぬのだらう」と柱に掛てある稽古三味線の太棹を下して、壁へむいたまま二三度二の絲をてきおろし、派手に手のついてゐる野崎の末の方を彈かけて見たが、氣がのらぬのでさはりを氣にして直した。

およしは新らしい鰹節箱を出して、温泉宿から貰つた土佐節を、小刀て花鰹に搔いてゐた。その小さい音も友作には氣になるので、調子をあげ撥をあてて

「熊さんは來ぬといふたのか」と苛立しくきいた。

およしは鐵瓶を土鍋とかけかへて、戸締りに立つた。ついでに便所へいつてくると、友作は待兼てゐたやうに

「うさんくさい者は居なかつたか」と聲を秘めて「巡査がきた時に、金など持つてゐたら面倒やらうな」と内懷の金包を上から押へて心配さうにした。

「盲目の謄へなんぞ大丈夫だよ」

「盲目だかて」と景色ばんだが「わしや矢つぱり大阪へいにたい」と淋しさうに言つた。

「其代り弟子なんぞ來るものか、下手くそな師匠につかないても、澤山あるものね」

「さうやさうや、たんとぼろくそにいふたが好い。深切な女房や。東京へいて白粉ぬつてからに、高坐へのつて、やんや言はれて見たい心は分つてゐるわい。なんぢや其藝て、其面て、浮氣者め。鏡みいな」とやつきになつて毒附いた。

「おちやね、弟子が踊つてから袂を撫てみたりするのは、明日からよしておくれよ、此面が分つてゐるのならね」およしは手酌て初てゐたので、態と冷さうにいつて「さあさお飯をおたべ、婆でもゐなきや困らね」と嫌味を言ひながら、友作のお皿へ鍋のものをよそいつけた。

「投つといておくれ、ほしうない」胸に痞へた聲を出して、友作は悔しさうにむだ彈きをつづけてゐる。およしもむしやくしやして折角盛つたのを、鍋の中へあけてしまつた。

一合ばかりの御造酒ても、一日絶食の身にしみて、およしは醉が廻つてきた。しよんぼりした壁の影法師と向合つて、段々首をさげてゆく小さな夫の後姿をいまいましさうに、煙管にあたつて火鉢の緣をはたきたてた。

早雲寺て撞く鐘が幽に響き渡つた。日のうちは物音に紛れてゐる溪の水音が、つい其處に迫つてきこえる。

およしは洋燈を明くして見詰てゐたが、急に華美なものが見たくなつたので、つい二三日前伊達者の女客がくれていつた、赤い花模樣のある長繻絆を戸棚から出してきた。

友作は壺阪を彈いてゐた。

「……有難いとも嬉しいとも、其貞節なそなたをば、此年月の廻り根性……」およしは何心なく、平日のやうに釣こまれて、長繻絆をひつくりかへして見ながら唄つた。機嫌上句で唄ひ續けてゐると、友作は鼻をすすつてやめてしまつた。

火柱が二抱へもある太さに、眞夜中に中空へ立て、それが消る時には別莊の方へ崩れるといふ噂が出た。

「溫泉宿の庇蔭てたつてゐる土地が死んでしまう。あんな邸へ客をとられちや生られねえ」とか「繩附きなんぞ出しやあがれば只はおかない、村が潰れるか先方を潰すかだ、幾度でも燒いてやれ」などと物騷な事も口にするやうになつた。そんな事から種々の風說が起つた。

さうなくても不景氣のさきに、年の瀨の關が見えてゐるので人の心は曇つてゐた。空もとかく曇りがちて寒い風がつゞいた。たまに落葉を蹈んで外國人などの籠が出ると、珍しがつて騷くほどであつた。

友作は夜もおちおち眠られぬ樣子で身じろぎをして明した。

ある夜「およし今晩起て火柱見てみるか」とたづねた。

およしは、此頃弟子は來ず客はなし、友作がむづかしくなつたに氣を腐らせて、はかばかしく返事もしなかつた。

「起ぬか」と念をおして「水の瀨がかはつたといふが、ありや向ふ岸が深うなつたのかしら、お前知らぬか」とききたさうにした。

妙な事をきくとおよしは思つた。一日其日は御飯も咽喉へ通らぬ樣子で、暮れきらぬうちから「早う戶をささんか」と催促をして、そはそはとしてゐたことなどを思ひあはせた。

晩御飯をしまつておよしが流をしてゐた時に、友作は懷から札を出して、一枚一枚と皺を伸しながら數へてゐた。およしは何の故といふこともなしに、あの金は佛壇へしまひはせぬかと、臺所からそつと覗いて見てゐたが、友作は改め直して、又もとのように自身の肌へつけた。

其夜床ついてから友作はおよしを搖り起して

「宮の下の露太夫はんは、何を着て立たつけか」と今さくにもあたらぬ事を問ひかけた。

「あの人なら宿へ拂ふものも、ようなかつたので……」

「ああ、さうや。白地きていんだのはかつぽれの仲間やつた。杖ついてゐたつけ、竹の杖を」とおよしの返事を壓つけて、

「此位な聲が隣家へ知れるか」と態と笑聲をたてた。そして

「もしな鰹節箱もない前なら、ま、此度はどつちの方へ行かう思ふ」と私語いた。

およしもさう相談かけられると、何ても東京へいつて一働して見ると言張るほどの自信もなかつた。それに友作の樣子が變つてゐるので、平日のやうに自分の言條ばかりも言つてゐる場合てないと氣も折れてゐた。高坐て花を咲かせるにしても、本場を一度踏んでからても遲くない氣もする。友作とても老朽てゐるのてはなし、便りにならぬ程の下手てもなからうと、今迄は考へても見なかつた優しい思ひも出たので

「大阪へいつて修行しても好いね」とさからはなかつた。

「大阪にも好え男は澤山ゐる。女太夫の高坐もあるし、白粉だかてわしや見えんさかい勝手に白う塗つたがよい」と皮肉をいつたが、それても大阪へといつたのを悅んでゐた。

消し忘れた洋燈を、およしが消しに起上ると、友作は手探て臺所の方へこそこそ出ていつた。戸棚をあけてがたがたやつてゐたが、緣側の心張棒を外しながら

「およし、火柱は見えぬか」と戸を引きあけた。

冷い風が暗をぬけておよしの髮の毛にふれた。瘦ても溪水の音は澄んで高く枕に響いた。月のない夜も霜は冴てゐる。

およしは障子にほんのり赤い光がさした心地がしたので飛起た。椽側へ出てみるとそんな影もさしてはゐなかつた。二子山の項に星がちらちらと煌いてゐる。巡査の家から老人の咳くのがきこえた。

氣がつくと友作の姿が見えなかつた。家の中かと寐床を透してみてもゐなかつた。ふと此頃の變な素振りがおよしの頭に浮んだので、庭へ下りて見ると、溪の方へおりてゆくそれらしい足音が、ひたひたときこえた。およしは反跳んでくる胸の動悸を押へつけて、足音のする方へ駈けていつた。

風に追はれる木の葉のやうに、明けるのを待つて友作夫婦は、暇乞ひもそこそこにして馴た土地を離れて去つた。

其朝溪から引上げた木材は盗木事件の證據物として日附けがついて署へ廻されたが、岩の上にのつてゐた鰹節箱は其中には入れられてゐなかつた。はげしく吹落した嵐が凪いてから雨になつた。

繪の具箱

長田秀雄

片岡さんは青年畫家である。相變らずの長髪で、黒紋付に白襟をはみ出さして薄汚れた白小倉の袴で、京都からのそりと繪具箱をお供に歸京つて來た。

五月の始めの午後の事である。平山の畫室にはモデルが來て居るので、其内に始める積でもあらうか、もや〳〵と暑いのにストオブが焚いてある。やう〳〵十疊も敷けやうかと思ふ畫室の片隅に立てた畫架には、愁を帶びた裸の美人が、斜めに立木に身を凭たして居る所を、油で描きかけた畫布が据えてある。紅殼で染めたやうな紙を貼つた壁といふ壁には、油畫や水彩の額をひし〳〵と掛けて、所々の柱には、デッサンやエッチングが幾枚もピンで止めてある。日の届かぬ本箱の陰や棚の下には、新らしい枠や古い枠が、まだ使はない畫布と一所に塵埃だらけになつたまゝ押しつけられて居る。さうして棚にも本箱にも秩序もなく和洋の書類がギッシリと詰められて居るのだ。重い梁に支へられた天井を斜めに走つて、大カ軒の三分の二を占めた明取の摺硝子も、此頃の日照續きに薄黒く汚れて居る。

その覺束ない明り眞面に受ける場所に置かれた形ばかりのモデル臺には、鳥釘だの鐵槌だの、畫布を

張る鐵鉗や鉛管の殼などが雜然と散らばつてる中に、モデルの腰に卷く、羅綾が、無造作に投げ出してある。

客が二人、モデルも一所に、ストオヴの前に車座になつて雜談にふけつて居る。初袷の肌を吹くすが〳〵しい風が、煙草の煙の籠つた生暖かい畫室を通つて、前栽に主人が秘藏するチユリップの花を、ゆら〳〵と搖して過ぎた。

畫室の主人は、モデルをそつち退けにして、近頃凝り出した懷中畫具箱の製造に熱心である。過日の運動に新橋の金物屋で見付けて置いた大工の道具箱を、其月畫が一枚賣れると早速買ひに行つた、ニスで塗つた深さ五寸、一尺に五寸位の長方形の箱である。蝶番になつた蓋を開くと、鋸、鉋、鑿、水平まで、出來は些とちやちだが、鋸は疊めるやうに、鑿は鞘へ塡るやうに、小ぢんまりとした如何にも素人の手細具には持つて來いの道具箱である。夫が手に入つてからの主人は、只さへ澁り勝の手はいよいよ本職を遠退いて、パレットの畫具は日に增し堅くてびりついて行くのである。

主人は道具箱を買つた次の日に銀座の出頭といふ煙草店でハヴナの葉卷の空箱を四錢で二つ買つた。そして、夫を畫室の片隅に敷いた、之も去年の大晦日、愛宕下の西洋古道具屋で買つた綴ぎ合せの土耳其絨毯の上へ持ち込むと大胡坐をかいて、鑿で削る、鉋で引く、がり〳〵ごり〳〵と、大方毎日モデルは待ち呆けてある。やがて斯うして寢覺めにも忘られぬ好物の香を含んだハヴナの空箱は、形を變へて亦も主人が一生の友となるのである。

客の一人は片岡さんである。今一人は平山と隣合せに畫室を持つ、主人には古い友達で、片岡さんには先輩に當る信田さんといふ洋畫家である。鼻張の强い割には親切な無邪氣な人である。年配は主人と

おつつかつつてもあらうか、實世間から言へばもう好い分別盛りだが、この仲間では、生れてから何年などゝいふ面倒な勘定はせず、いつまでも唯青年畫家たる事を希ふ一人である。

元來大酒家であるのに、ある時、同じ趣味を喜ぶ人々と魚河岸へ天麩羅を食べに行つた事がある。別に人々は通と言ふ譯でもなかつた。魚河岸で立つて食ふ天麩羅の旨さを聞くと其儘其晩飛び出した連中である。橋を渡つて右へ折れると、先づ目に入つたのは屋臺店の洋燈に光る鰯のすしであつた、人々は夫をも見逃す事は出來なかつた。鮨屋の主人は六十餘りのつや〳〵とした婆であつた。人々は老婆にからかひ〳〵鮨を頰張つた。信田さんも負けずに食べた一人である。其處を出ると人々は目的の天麩羅屋を差して突撃した。信田さんはまづ茶椀にぐつと冷酒を飲つた。天麩羅屋には十六七の顏立のぱらりとした娘が居た。人々は、此娘を狂しい迄讃美して止まなかつたが、店の爺は始から終まで六つかしい顏をして天麩羅の上手に揚る事をのみ祈つてるやうに見えた。夫でも人々は平氣なもので、遍く泰西の名畫彫刻に例へて娘を讃美した。娘は始から終まで ニコ〳〵として人々の騷ぐのを面白さうに見て居た。人々はやがて口々に「御馳走さま」と叫つて未練氣もなく其處を飛び出した。人々の中に下戸が一人居た。梅園々々と其人は叫んだ、其時誰かゞ、

信田さんが可哀さうだ。」と言つた。

なアに、可哀さうなものか。と信田さんは最先に梅園へ飛び込むと、いきなり、君代と小倉を誂へた。さうして下戸でさへもう一つがやう〳〵の腹へ、ぺろりと二ッ呑み込んで、其處を出ると、ものゝ十町も來たかと思ふ時、不意に、とある横町へ飛び込んだ。人々は氣にもせず行き過ぎる後から、大聲に笑ひながら信田さんは追ひかけた。そして下戸の肩を叩いて、

君は罪だぜ。汁粉屋へ這入らうと言ふ位だから、二つは確と思つたので、まんまと己は計られた。あゝ好い心持だ。すつかり出して終つた、と言つてから〳〵と笑つた。此人も御多聞には洩れぬ煙草好で、明けても暮れても離した事の無いパイプを今日も又啣へて居る。近頃になつて一度は啣へたまゝくさめをしたので吸口を折り、二度目は佛蘭西へ立つ友達を見送に行つた船の中で、甲板の手摺に寄つて矢張り啣へたまゝ何か言はうとした拍子に海の中へ落して終つたので、歸りに横濱で買つたとか、貰つたとか言ふ立派なのである。

片岡さんは生野の銀山の人である。大きな強さうな柄で居て、存外優しひ、處女の樣な心持の人である。

「どうも、道具の揃つてない時の方が雅なものが出來るな。」

と主人の畫家は獨言ながら相變らずこつ〳〵とやつて居る。其不器用らしい手許を見て居た信田さんは、その眼を主人が描きかけの裸體畫を正面からぢつと見て居る片岡さんの長髪に移すと、不意に、

「片岡君。君は何の爲に、そんなに髪の毛を延ばして居るのだい。」

と言つた。パイプは其時左の手に握られて、右の手は腰に下げた唐織の袋の中で、辛い粉煙草を捻つて居るのだ。

「これてすか。」

と片岡さんは困つたやうに其大きな手を後頭に當てゝ反り返つてニヤ〳〵と笑つた。黒キヤリコの紋付の羽織の襟が寛んで、尻つこけに穿いた袴は床を摺つて居る。

「何の必要と言ふ事もありませんがね。去年の六月からやう〳〵之丈に延ばしたのですからねえ。」

「去年の六月から延ばしたつて、何ヵ延ばして置かにやならんといふ無理も無いのだらう」
と信田さんは眞面目臭つた顔をして言ひながらマッチを擢る、音を立てゝ吸ふ、吸口からも雁首からも青い煙が薄く昇るのである。
「けれどもねえ信田さん、なか／＼毛といふものは延びんもんですよ。この前にもよう／＼延びたと思ふたら、病氣して切られましたさかい、もう惜しうて惜しうてなりませなんだ。」
片岡さんの言葉には生國の訛に、京やら大阪やらが混つて一種の片岡語をなして居る。
「だがねえ君、そんなに延ばして置くと今にラミが生くぜラミが。」
と信田さんはます／＼眞面目な樣子でいふ。
モデルが大きな目に笑を含んで一寸片岡さんを見た。ラミとはシラミの略語である。
「よして下さいよ、ラミは酷うござんすよ。之でも毎朝湯に行つて洗ひますがなア。」
少し耳の遠い主人は構はずがり／＼やつて居る。モデルは又片岡さんの顔を見た。そして成程と心に頷いた。片岡さんの着物や襦袢の汚れて居る割合に、顔なり衿脚なりの淸らかなのは、そのお湯の故かと感心して見て居たが、その中に、二三日前の事、信田さんと主人とが、矢張り此書室で、夫はほんとの眞面目で、片岡もやう／＼歸京つて來たが、あゝ言ふ頭髮をして居ては、之から世の中へ出やうとする人物としては眞面目でない、何とかしなければと、相談して居た事を思ひ出して心中にクスッと笑つた。
「毎朝湯に行く？　夫にしちやア君の襦袢の襟の色は落着き過ぎてるよ。」
と信田さんは片岡さんの鼠色になつた白襟をそつと撫てゝ大きな聲て無邪氣に笑つた。

その聲に見返つた主人へ信田さんは早速に聲をかけて。

「ねえ君、巴里にだつて片岡君のやうに髮の長い畫家ばかりは無い。」

「さうさ………………」

と主人は氣永に答へて先づ道具箱の端に置いた呑みさしのロオヤルメエルを取つて新たに火を燈けると、身も魂もこの煙の爲に濕ふかとばかり深く吸つたが、やがて髭面に子供のやうな笑をたゞへて、

「長くしてるのも好いさ、けれどももう少し如何にかなつてると猶好いのだ。その儘ぢやア餘り旨味が無いねえ。」

「さうですかしら。」

と片岡さんは泣きたさうな顔をして、

「これでも去年の六月から一生懸命に延ばしたのですよ。」

「だからなアに、切るには及ばないよ。然しその儘ぢや君の爲に損になつても爲にならないから信田君も案じて居るのさ。」

「だからねえ先生。せめて後丈もお切んなさるとねえ。」

モデルが突如として口を出した。

「お前等默つて居なさい。」

片岡さんは大きな手でモデルを押へるやうにして、

「此儘ぢやいけませんかねえ、」

と片岡さんはそつと鬢に手を觸れて見る。

「餘り好くはないよ。夫ぢやァ知らん人は何者かと思ふよ。」

「夫はさうです、知らん人はなァ。いつかも旅に行きまして湯にゆくと、中に居た隱居見たいな人がね、今度は何方て始まりますと眞面目に言ひますさかい。何の事かと思うたら、僕を相撲取の弟子やと思うたので…………………」

「馬鹿にして居やがら。」

と信田さんは若い友達の爲に笑ひながら怒つた。

「だからねえ信田さん、せめて後丈もお切んなさりやまさか相撲には見えないわ。」

と亦モデルが言ふ、主人が引取つて、

「さうさ、後もだが前も少しは切らなくちや法がつかないよ。さうして毛の先を鏝かなんかて少し捲けば好いのだ。

「さうだ、さうすれば好い、」

と信田さんは話が最早目的の場所へ着いたので優しい常の調子て言ふ。

「然し後を切ると衿が寒いてすからねえ。」

「馬鹿言へ、冬ぢやあるまいし、涼しくなつて好いのだよ。」

と又信田さんが短兵急に押し寄せて來る。

「然し又之丈に延ばすのは大變てすからなァ。」

「なんて又延ばす必要がある。切り給へ、切り給へ。男ぢやないか。」

「男は男てすがなァ。」

その様子が可笑しかつたのか、モデルが不意にホッホッホと笑つた。片岡さんはモデルの方を恨めしさうに睨んだ。

「さうしたまへ、悪い事は言はないよ。」

「…………………」

片岡さんは頭を抱へて困つたやうに笑つて居る。

「裁縫鋏でちよき〳〵と切れば譯なしよ、ねえ先生。私が切つて上げますわ。」

と立上つた、肉附の好い丈の高い女である。

「此奴。」

と片岡さんはモデルの胸と背に左右の平手を當てゝ止めた。同時に主人もオイと聲を掛けてモデルを押へた。

「切つたばかりぢや不可んよ。鏝が無いから、今日と言ふ譯にも行かない。」

と信田さんは落着いて居る。

「火箸でも捲けますわ。片岡さん離して頂戴。鏝でなくても好うございますわねえ、先生。」

片岡さんは柔順にモデルを離したが、ヂッと睨みつけて居る。

「嫌な片岡さん知らなくてよ。」

とモデルは向ふを向いて終つた。

「鏝は多分あつたよ。」

と主人は傘立にした大きな高麗燒の瓶を引き寄せた。

「君の所にか、誰が用つたんだ。」

と信田さんも側へ寄つて來た。

「己だつて昔は用つたものさ。」

と珍らしく戯言を言ひながら筆をがちやがちや言はして捜してる。

「君がか。」

と驚いて主人のもしや〳〵の鬚面を見て信田さんは眼を見張る。

「尤も鬚の鋏だから間に合ふかどうかしらないが。ソラ有つた。眞赤に錆びてる。」

新聞紙を取つてグイ〳〵拭く。錆が血のやうに付く。

「さアいよ〳〵だぞ、片岡君覺悟し給へ。」

モデルは懲りづまにモデル臺の上から鋏を探して持つて來る。

「さア切つてよ片岡さん。」

とモデルは無造作に片岡さんの後へ廻つた。

「止せよ、貴樣になんぞ切つて貰はん。」

「まア待ち給へ。」

主人もとう〳〵手細具を捨てゝ立つて來る。

「何か衿へ掛けるものを探して來いよ。」

「ハイ〳〵。之ぢや如何。」

と讀みさしか何か新聞の開かつて居たのを取つて來る。

「女の癖に氣が利かんよ。」

と片岡さんも極めつける。

「知らなくてよ。」

「オイ椅子を出してやらにや不可ん。」

と疊みかけて信田さんが言ひつける。

「ハイ〳〵。」

と椅子を其處へトンと置く。

「鋏を一寸お借し。」

と主人が手を出す。

「ハイ〳〵。」

とその椅子の上へカチリと置いてスタ〳〵其處を離れたかと思ふと窓の側へ行つて後向になつて小説を讀み出した。

「さア掛け給へ。」

と主人は鏝をストオヴの火を見る穴からさし込んで、椅子の後へ立つた。

「では少しばかり願ひます。」

と是非なささうに片岡さんは言つて椅子へ恐さうに腰を下す。衿に狹んだ新聞紙がカサ〳〵と鳴る。

「少しばかりだ？ 男らしくもない。宜しく願ひますと言ひ給へな。」

「然しねえ信田さん。去年の六月から隨分苦心して延ばした事を思ふと、さうも言はれませんてすよ。」

「大丈夫だよ、安心して居給へ、坊主にはしませんから。」

主人は默つてニャ〳〵と笑ひながら、まづ衿首に纒はる毛を後へ跳ねて、左手の差指と中指とに狹んだ。

「オイ〳〵、一寸來て、此毛を何かに受けて吳れ。」

「ハイ〳〵。」

モデルは直ぐ氣輕に立つて來て有合の紙を片岡さんの領首に當てゝ受けた。

「いよ〳〵御剃髮の始まりか、南無阿彌陀佛々々々々々々々。」

信田さんはパイプを啣へたまゝ言つて、片岡さんを正面から見下して居る。

「實際惜しいですよ。」

と片岡さんは首を縮めて眞面目である。

「何しろ去年の六月からだからなア。」

と信田さんがわざと溜息を吐く。

「ホヽヽヽヽ。」

とモデルが堪へきれずに笑つた。其途端にぢよき〳〵と鋏の音がしだした。片岡さんは目を据えて耳を澄す、モデルは紙に落る黑髮を、時折片岡さんの目の前に突きつける。片岡さんはその度にモデルを睨みつけながら、情なさゝうである。

「アヽ惜しひ〳〵。」

と信田さんが笑ひながら首を振る。

「アヽ寒む。」

と不意に殊更首を縮めて片岡さんは言つた。

「仰山な事を言ふな。」

と信田さんは言下に怒鳴りつける。

主人は此時、鋏を置いて鏝を取つた。

「後を切つたので餘程具合が好くなつた。一寸ドラクロアのやうだな。」

と主人は後の柱に張つてある寫眞銅版の肖像と片岡さんとを見比べて得意氣である。

「夫れ見給へ、一寸毛を切つた丈で大家になれた。物は當つて砕けろよ。」

と信田さんが言ふ。

「衿の處が開いてさつぱりしたよ。見給へ、此樣に餘分な毛があつたのだ。」

と主人はモデルの持つた紙を更に取つて差出す。

「仰山切れましたなア。」

と片岡さんはぢつと見入る。

主人は立直つて鏝を片岡さんの前髪に當てた、鏝は燒過ぎの氣味(きみ)でぢり〳〵と毛の焦げる香がした。

「アツ。」

と片岡さんは聲を立てゝ首を後へ引いた。

「如何したんだ。」

と信田さんも驚く。

「毛が焦げますがなア。」
「大丈夫だよ。焦げる位の方が好く利くのだ。」
と主人は平氣である。
「先生、今度は私にさせて頂戴。」
とモデルは袂を後手に結へて待ち構へて居る。
「貴樣なんかに出來るか。」
と片岡さんが頭から極めつける。
「まア待て、もう少し己がやつてからさせるよ。」
と主人は鏝を一寸ストオヴに燒べて、片岡さんの側を離れさうにもしない。
「少して好いからねェ先生。」
「甘へても駄目だよ。」
「知らないわ。もう賴んでも嫌よ。」
とツイと又窓際へ行つて終ふ。
主人は又鏝を取つて今度は片岡さんの耳の後の毛をくる〳〵と鏝に卷きつけた。さうして夫を左手に持ち換へると片袖て額の汗を拭いた。
「ソヲ見給へ、見違へて終つたぞ。」
と何かゴソ〳〵やつて居た信田さんは、主人の繪具箱の中から裏に繪具のこびりついた黑鏡（ミロアルノアール）を持ち出して來た。片岡さんは夫て直ぐに顏を見た。

「如何だい、今度は全てラファエルのやうだ、ねえ平山。」
「さうさ、一寸似て居る。」
「後も一寸見度いですなア。」
と片岡さんはそつと信田さんを見上げて言つた。
「まア少し待ち給へ、すつかり出來上つてからにし給へ。」
と主人は腕を捲つて腰を屈めて後の毛を幾段にも幾段にもくる〳〵と捲き上げては鋏を拔いて、そつと手で押しつけて加減する。
片岡さんは又そつと黒鏡を覗き込んだ。少し凸面になつた其表面には、遙に小さく自分を中央にして、錆びた書室の色彩が、浮き出したやうに吸ひ込まれてちんまりと纒つて寫つて居る。その自分と言つたら今迄は、人形の酒呑童子か北海道のアイヌと思はれたボウ〳〵頭が、夫となく分けられた左の額際から、ちり〳〵と捲き上げられた小さい渦に幾重にも取り巻かれて、殊に二三本長く領脚に切り殘されたのが、若い葡萄の蔓のやうに、くる〳〵と優しく卷かれた風情は、見違ふばかりに氣品が上つて見えたのである。
「さア好し、後も見給へ、其處等にまだ鏡がある筈だ。」
「ハイ片岡さん。」
とモデルが何時の間にか側へ來て懐中鏡を帶の間から出して渡す。
「しやれ者だなア。」
「知らなくつてよ。」

「如何したら上手く見えますのでせう。」

と片岡さんは合鏡が出來ないのである。

「夫ぢやァ無理だ、さァ之を貸さう。」

と主人は枠の置いてある場所から古鏡を持ち出して來て、塵を着物て拭き〳〵片岡さんに渡す。

「オイ合鏡を敎へてやれよ。」

と信田さんがモデルに言付ける。

「隨分だわねえ片岡さん、斯うするのよ。」

とモデルは片岡さんの太い兩手を摑ぐやうにして前と後に鏡を配る。

「アラ、後の鏡を見るのぢやなくてよ、前のを見るの、ソラ見えたでせう、ねえ、あんなに好く見えるのに。」

とモデルは焦れつたがる。

「如何だい。」

信田さんと主人とが同時に聞く。

「結構ですな、非常に結構ですな。」

と片岡さんは鏡を離さうともしない。

「非常に好く似付きますなァ。」

と蕩けさうな顔をして居る。

「オイ〳〵何時まで鏡を見て居るのだ。」

「ア、さう〱どうも有難う。然し明日からは湯に這入つても髪を洗へませんなア。」

「なアに寢る時に濡らしてグイ〱揉んで置けば先のやうにぼや〱にはならないよ。」

と何時の間にか道具箱の前に坐つた主人は受合顏に斯う言つて、何か一肩下したやうにロオヤルメエルをさも旨さうにスーと吸ひ込んだ。

斯うして平山の書室の半日は過つて終つた。モデルは肌も脱がずに今日も歸つて行つた。主人の繪道具箱はまだなか〱出來上りさうもない。



富田さんは袴の紐に卷きつけた銀鎖を手繰つて、銀側の懷中時計を出した。一寸時間を見ると、氣忙しさうに龍頭を二つ三つ卷いて歸り仕度をする。

「では今日から愈々判任官樣ね。」と云ふと、

「お蔭樣で。」

と、さも滿足したやうな顏で、お辨當の包らしいのを取り上げた。

「貴女だつて彼からずつとお勤めなら御一緒でしたのに、最う少時の處で惜しいことをなすつたつて、昨日お噂をしてゐたの。」

氣の毒さうに云つて、「お序の時、役所の方へもお遊びに入らつしやいな。」と立上つた。

私は忙しげに自分の體を運ぶ澤山の勤人に交つて、とぼ〳〵袴の裾を蹴つて行く富田さんの後姿を見送つて、何となく自分の體に緩かに溫かい血の通ふのを感じた。

富田さん達は矢張り朝の幾時には袴をつけて、甲斐々々しく役所の門をくゞるのだ。そして午砲がな

ると御辨當を開いて番茶を飲んで、それから例の、女が流行を追つたり、化粧をしたり、はにかんだりするのは卑しい下心があるからだと云ふと、男に喰べさせて貰つて、其代りに如何無謀な事にでも屈從して全く自己を沒却してゐると、島田や銀杏返しに結つてゐる女の無敎育なこと、針仕事だの音曲など計りを女の道と心得て、それ以上は時間を有效に利用することを知らぬ時代後れの女の多いこと、時計の必要を感ぜぬ女の憐れむべきこと、などを三十分の休み時間の「快談」としてゐる。然うして何十圓と何百圓を〆上げると、何千圓になつて、部長の札が返つて、黑い事務服を脫いで家に歸る。そんなことを毎日々々繰返して得意がつてゐるのであらう、とつひ此間迄自分も同じ役人であつた事を思ひ出した。

それは、私には今は過去である。

自分は誇り顏に役所の中を步き、得々として往來に平凡な女を嘲笑つた上級の女役人の當時のことは、最う思ひ出したくない。

今日はSさんと散步をした。

「時計を持たなきやならない女を見る程不快なものはない。」

とSさんが云つた。それは些と過激かも知れないが、此一語は私には十年の惡夢を破るやうに強く響いた。

私はSさんの溫かい情緒に觸れてから、毎時もながら、Sさんの彼迫らない、綏りとした態度や、優しい情の籠つた顏を見てゐると、つひ時間の經つとまで忘れて了ふ。折々愉快さうに低い音で謠ふSさんの小歌が、私の耳には長閑な小鳥の歌――それに聞える。私はSさんと一緒にゐる間は、少なくとも人の

世の悲哀とか、人生の苦悶とかと云ふ、そんな小難しい暗いことを考へたことがない。よし往々家へ歸つて、愚痴つぽい母から十年前に離縁されて歸つた當時の悲劇話を繰返されても、それが丁度人の事でゝもあつたやうに冷かな頭腦になつて、空事に聞いてゐる。そして心の中には矢張りSさんのことを思ひつゞけて、樂しい活々とした明るいことばかり考へてゐる。

此頃は逢ふ人毎に、

「秋子さんは大變に圭角が取れた。」

と、さも滿足したやうに私の顏を打目戍る。

半年ばかり京都にゐて歸つて來た伯母さんが、

「此上もう少し京都女のやうに、體に潤ひが見えて來ると申分がないね。」と云つた。

實際近頃は自分でも、自分が甚く變つて來たと、つく〴〵然う思ふ。

「今度の日曜に又お目に懸りませうね。では此處でお別れ………」

四谷の停車場で右と左に別れて、私は外濠線に乘つた。私の乘り込むのを見送つてから、Sさんは今行過ぎた自分の電車に飛び乘りをした。其後姿を瞥と見止めて、私はなほより以上の滿足と安心とを覺えた。

赤坂見附で下りて青山行に乘り代へる時、私は偶と家まで歩いて行かうと思つた。溫かい今の心持を、電車の響きにさへも觸れさすのが慊やだ。靜と胸を抱いて、徐ろ〳〵と歩きながら、今日の目黑の散歩を偲びたかつた。

私は騷々しい電車通りを離れて、左の小路へ曲つた。秋の夕日は薄りと反物やの店頭に吊下げた紅絹

や友禪縮緬の小切に美しく射してゐる。通りがけに素見しの女連が二人、其切の端を摘み出しては直段書を見て、時々顏を見合はせながら何やら頷づいてゐた。

「最う年暮の支度だらう……」

と思つたが、私には其年暮と云ふものが、何の刺激をも與へなかつた。

「一反九十九錢均一……」

と書いた大きな立札が、妙に眼について可笑かつた。

新町の角へ出やうとする時、偶々、振りの好い松の木の下の小さい門に、「貸家」の貼札のあるのを認めた。

「一寸入つて見ませう？」

と、然う思つた。別に「轉居」と云ふ考へもないけれど、何となく調子づいて、入つて見たい氣が起つたので、靜かに門をあけた。玄關まで二間程の間は飛石て、一方の隣りとの堺を板て圍つて、一方の狹い庭にコスモスの花が凋れ〳〵に咲いてゐた。格子をあけて中へ入つて見ると、四間ばかりの小ぢんまりした感じの好い家てある。押入と廁を調べて臺所へ行つて見ると、流しに丁ど水道も引いてある、其上裏に一坪の物置もあつて、炭や鹽や張板などを置くに好い。これなら結構と思つて、直ぐ隣りの質屋へ行つて訊いた。家賃も相當てあるし、前に住んでゐた人についても心配はないと云ふとなので、私はうか〳〵と即坐に取極めて了つた。

家へ歸つて皆に話したら、

「引越？」

と頓狂な聲で云つて呆れてゐたが、結局陰氣臭い寺住居から脱れらるれとを悦んだ。

越してからSさんが初めて來て、

「此度の家は好いてすね、それに周圍の空氣が今迄と恐ろしい違ひやうぢやありませんか。」

と云つて笑つた。

「え隨分突飛てせう、自分ながら自分の思ひきつたやり方に驚いてゐますのよ。何しろお湯やへ行つて感心しましたわ。」と云ふと、

「何か變つたとがあるんてすか？」

と不思議がる。

「ありますとも、大ありよ。私等は珍らしいものを見たのてすもの。」

「如何ものてすか？」

と眞面目に訊かれて可笑しくなつた。

湯やの客と云ふのは九分迄、これ迄私共の餘り見慣れてゐない藝者てあつたとてある。十四五から三十五六の大年増にいたるまて、兩鬢に可愛らしい毛筋立をさした連中て、磨く、塗る、髮の癖をなほす、撫てつけをやる、然うして出來るだけ自分の美を發揮しやうと努める大勢の女等は、宛然明るい瓦斯の下に浮び出た一幅の裸體畫てある。それが悉く藝者てあるだけに、普通の街の湯やと餘程調子を異にしてゐる。私は此一種變つた色彩に富んだ湯やの光景を見ると、何となく自分の胸に或る華かな賑はしい感じを與へられた。そして一心不亂に美しく／＼と扮り上げる女を、染々暢氣なものだと思つた。

私は茫然してゐて、つひ自分の身體を洗ふとを忘れて歸つた。

Sさんにそれを話したら、私の顔を面白さうに見詰めて、やがて婉然と笑つた。

隣りから三味線の音が洩れて來る。錆のある艶な聲はお内儀さんであると、お舌喋の經師やが云つた。敷金を持つて行つた時に見たら、亭主と云ふのは商賣柄にも似合はず福々しい男で、一寸下つた眼尻に云はれぬ愛嬌があつた。彼亭主のお内儀さん——如何女かと思へば、未だ三十になるかならぬの年で、鐵漿をつけてゐた。其眞黑に艶々した綺麗な齒の中に金の差齒が一枚鮮かに光つてゐた。頭髮は滑り落ちさうな丸髷に結つて、長煙管を玩具にしながら、亭主と差向ひて長火鉢の前に坐つてゐた。彼お内儀さんだもの彼絲に彼聲が當然のやうに思はれた。そして時々亭主の謠ふ低い吟り聲が聞える。

「氣樂な質やだこと。」と思つた。

「梅の家。」

と云ふ近所の寄席へ活動寫眞を見に行つた。青天井の田舍芝居でも見るやうな穢ない寄席で、子供が大勢がや／＼と騷いでゐた。すると私の前に居た七八つばかりの口元の可愛い女の兒が、幕間毎に日の丸の扇子を懷から出して踊りをやつた。妙に嬌態を作る邪氣ない姿が可愛いと云つて、皆で笑つた。私はそれにも長閑な樂しい心持がして、微笑まずにはゐられなかつた。

今日はSさんと大森へ散歩する約束の日である。何か變つた扮裝をしてSさんを驚かせてやらうと云ふ心から、近所にゐる有名な女髮結の許へ朝早くに行つて銀杏返しに結つて來た。私は此銀杏返しと云ふ髮は下女か、さもなくば賤しい業をする女の結ふものだと思つて、今迄心から輕蔑してゐた。素人で——最う私等位の年輩になつた奥さんなどが、たま／＼結つてるのを見ると其の人の趣味の低さや、敎育の有無を想像した位、下等な髪と心得てゐた。それを今日は何となくのんびりした氣持で、自分が其儘

杏返しに結つて來たのである。然うして此邊の女がするやうに、例の可愛い毛筋立を二本さして、直ぐに湯やへ行つた。三助は硝子戸越しに覗いて見た、何やの何子と間違ひたのか、毎時も藝者の席と殆んど定つてる大鏡の前に、湯桶を積み上げてくれた。私は微笑みながら少しは氣取つた積りで、其鏡の前に蹲踞んだ。窓硝子を通して旭が心持よく當つてゐる。庭の楓の葉が。ホロ〳〵と散つて乾いた流し場に陽炎のやうに薄い影をさした。

私は一度熱い新湯に入つて來た、茹蛸のやうに赤くなつて鏡に映る自分の體を眺めた。そして自分とは思はれない位粋な髮を見ると、思はず溢れる笑を抑えきれなかつた。

がらりと格子が開いた。此湯でちよい〳〵見知合の鶴中の福子と云ふ赤襟の雛妓である。福子は着物を脱いで嫣然笑ひながら入つて來た。昨夜の化粧が荒れて首筋に白粉が穢らしくコビリついてゐた。唐人髷も思ひ切り潰れてゐる。

「姉さんは早いわね。」

隣りへ來て湯を浴びながら、私の髮に眼をつけて、

「まあ能く出來たこと、おいくさん？」

と訊く。

「今結つて來たばかりなの、似合つて？」

「えゝ能く似合つてよ。束髮よりか如何に好いか知れないわ。」

と美しい眼使ひをする。

「然う、ではこれから始終結ひませうよ。」

「それが好いわ、そして一遍お遊びに入らつしやいな、」
「〆代姐さんが待つてゝよ。」
「有がたう、其中屹度行くわ。福ちやんも入らつしやいよ。お稽古の歸り道にねっ」
「行きたいけれど、つひお稽古が忙しいもんだから困つちまうわ。」
と口を歪めて頸に石鹸をつけ出した。
「彼處のお師匠さんへ大人の人も來て？」
と訊くと、
「えゝ、大人も子供も來てよ。姉さんも被入るの？」
と横眼を使つた。
「いゝえ。」
私は急いで打消した。そして「潤ひが出たら」と云つた伯母さんの言葉を思ひ出した。
私は銀杏返しを結ふ女を卑しむと同じに、三味線を彈く女をより以上に輕蔑つて、三味線！と云へば直ぐ墮落を聯想した位、酷く見下げてゐた。それが此頃偶と、
「三味線を習ひたい！」
と云ふことを考へ出したのである。其上私はこれ迄殆んど人間！とも思つてゐなかつた藝者と、此様口を利くやうになつたばかりか、何となく彼種の女と友達になつて見たいやうな氣がして來た。
私はそれを思ふて、恥かしくも亦端たないことに考へられた。

Sさんは何時逢つても心持の好い人だ。銀杏返しに結つた私を眺めて、さも自分の趣味に適つたやうに莞爾として見上げた彼美しい晴々した顔が、如何に私の感情を柔げるか知れない。一體繪など書く人は皆彼あ云つた、世間とは沒交渉の、悠然とした調子の者か知ら！ とも考へた。

私は十年前の過去に於いて、悲しい歴史を殘して以來、世の凡ての男と云ふ男を殘らず敵のやうに呪つて來た。然うして心ならずも獨身生活をするの止むを得ない境遇に立つた。僅ばかりの父の遺産恩給のお蔭で大した家政上の心配もなく細々ながら母弟妹と一緒に暮して來た。そして一つは虚榮――今から考へると妙な虚榮から女役人になつた。とは云ふものの世を拗者の私は、決してそれに滿足してゐるのではなかつた。

私は何處か知らに、私を招く或物があるやうに思はれて、表面には淸らかな理想を唱へながら、心窃に其或物を待つてゐた。

私は今になつて思ふ、或物――と云ふのは、Sさんてはあるまいか？

Sさんの彼優しい情愛に接してからの私自身を解剖したら、恐らく、男を呪つたり、銀杏返しや三味線を卑しんだのは、心の矛盾を包む外面の皮に過ぎなかつたらう。

私は今更になつて無惨〱と過した十年の月日が惜しい。彼抹香臭い寺の隅つこに我から好んで住まつて堅苦しい書物や、昔氣質の母の教訓に幾年かを仇に過した。そして女役人に成り澄まして得意がつてゐた。然うした何等の潤ひもない冷やかな生活をして來た過去の生涯を、今はつく〲と忌はしく思ふ。

今の私の眼には苦しいと思つた人世が、色のある華かなものに見える。そして此處に住んでゐる人が

丁度花の下に遊んでゐる小鳥の群のやうにさへも思はれる。

私は三味線を彈いて、骨身に泌み渡るやうな哀つぽい謠が唄ひたくなつて來た。角へ出れば例の稲子が通ふ常盤津の師匠がゐる。此年になつて何だか變な事は變だが、一度樣子を訊いて來やう！

私は然う考へる下から又、今更になつて其樣ことを始めると、中學へ行く弟や、女學校へ通ふ妹等が嘸驚くだらう、或意味に於いて姉として、又現在家の柱に立つてゐる主人としての權威を損なう譯である。それのみか、第一世間の聞えが煩さい、私が三味線を持つ女を墮落したもののやうに考へてゐたと同じに、私を墮落したと云ふであらう、それが辛いと思つた。

私は此頃此樣事にばかり頭腦を惱ましてゐる。然うして私は此上更に〱明るい世界に顔を出したいと焦つてゐる。

Sさんに逢つて、

「私、三味線を習ひたいと思ふの、如何？」

と云つたら、眼を丸くして、

「眞實？　僞でせう。それとも習ふ勇氣がありますか、あるならおやりなさい……」

と擽つたいやうな顔をした。

「えゝ眞實よ。だから貴方は唄をお習ひなさいな。」

「はゝゝゝ銀杏返しに結つて三味線を彈く、其上浮氣をしちや不可ませんよ。」

長閑な笑ひ方をして、別に止せとは云はなかつた。

「眞逆、唯ね、私悲しい唄でも謡つて、しんみりした心持になりたいの……」

私は迫つた調子でSさんの手をとつた。

急に寒くなつた。霜月の冷たい風が裾にヒヤ〳〵する夕方、私は買物に行くと云つて家を出た。例の常盤津の師匠の前へ來ると、家の中は靜かで三味線の音も聞えず、しいんとしてゐた。一寸立停つて耳を澄ましてると、湯歸りの藝者が二人、手拭ひを下げて瞥と私を見て行く。私は去り氣なく素通りした。そしてぶらぶらと田町の狹い通りへ入つた。此處へ來れば何時でも三味線の音が聽かれる。兩側とも藝者やと待合ばかり並んで、艶やかに拭き込んだ玄關の格子を通して態と障子が一枚あけてある。衝立の傍から美しく化粧した顏を半分ばかり出して、横坐りをした女が、ちよいちよいと戸外に注意を拂つてゐた。

何處となく柔かい匂ひが體に染む。

私は藝者と云ふものを何うしても惡い意味に考へたくなかつた。

一廻りして私は歸りに又師匠の前へ來た。幾度か入らうとしては躊躇つてる姿を、若し知人にでも見附かつたたら……………と云ふ懸念が頻りに起る。

「お師匠さん、さやうなら、又明日！」

思ひがけなく中から出て來た者がある。吃驚した。戸が開いた拍子に私は思ひ切つて入つた。顏が赫として俄に身裡が熱くなつた。

――完――

一錢銅貨

永代美知代

「まア伯母さんだ、何時來たの？私些少も知らなかつてよ。」

裏緣の障子を開けるなり、筒拔けた聲を掛けて入つて來たのは、此家の總領の袖子で、本當の歳はまだやつと數へ歳の十一なのだが、身柄が馬鹿に大きくて、知らないものはどうしたつて十四五には見ゑ。ぶりぶりする程發育し切つて、まるで男のやうな體格で、首がすくんで見える程肩が怒つてゐる。おまけに色のさめためりんすの被布の、肩行の短いのを着せられて、肥つた脚を裾からニヨキツと出し、頸と顏と面を被つたやうに日に燒けて、口の兩側に出來した鳥のお灸一つ、眞白くつぱをためた樣子は、餘り可愛らしい方ではない。だが一體の肌理は細かいし、眉は濃いし、黑瞳勝ちの濕ひのある眼元で、娘になつたら案外美人になるかも知れない。

「あゝお袖ちやんかい、御苦勞樣。だがもう學校がひける時分かねえ。」

と小一時間も前から話し込んで居る伯母は、直ぐ横手の柱に掛つた時計を見上げるやうにした。非常に働き者の、氣のせわしない人で、恩給となにがしかの遺產で、母一人、娘一人くらゐ、立派に何不自

由なくやつて行ける、陸軍大尉の未亡人でありながら、始終空手を持つのが嫌ひで、年が年中毎晩のやうに一時二時まで、内職のおはりで夜を更かす。色は白いが、チョッピリ鼻で、容色の好い此家の細君と實の姉妹とは思はれぬ。

「おゝ嫌だ！今日は日曜日ぢやないの、いやな伯母さん。」

「左様だつたね。伯母さんは此頃如何したと云ふのか、馬鹿に忘れぽくなつちやつてね、始終笑はれてばつかり居るんだよ。」

「矢張りいそがしい故爲ですよ。私だつてそりや忘れつぽくなつて、自分で可笑しくなりますの。」

細君は火鉢のいきりで赤く上氣した顔を撫で〳〵、此時初めて袖子の方を見やつたが。

「アレまあ此兒は、何だらう、汚いぢやないかそんな足して、彼方へおいで！」とさも汚なさうに顔をしかめた。

「うそ！いま其處の雜巾で、ちやんと拭いて來たんですもの、土なんぞ、ちつとだつて着いてやしませんからね、へん、うそなら御覧なさいだ！」

いきなり伯母と母との鼻先きへ突出した足を見ると、踵は垢で黒光りに光つては居るが、本當に土だけは着いて居なかつた。

「およしつたら、伯母さんに失禮ぢやないか、つねるよ。」

「知らない！負けたもんだから、へんだ。」

「ねえお袖ちやん、今度お湯で母さんによく洗つてお貰ひ、足の裏が眞黒だよ。」

「えゝ、だつてもね伯母さん、家の母さんたら、そりや甚いのよ、些少も私なんか洗つて呉れやしな

いんですもの、自分ばつかりクラブだの御園だの隨分つかつて、本當どお洒落の癖に甚いの。」

「アレまあ此兒は、何だらう、御覽なさい、あんな憎い口を利くんですよ。」

「お袖ちやんも洗はせないんだねえ。」

「うそよ伯母さん、私奇麗になるの大好きですもの、洗つてさへ呉れりや默つて幾らでも洗はせるわ、芳ちやんにだつて聞いて御覽なさいよ。」

「左樣かい。」

「ねえつたら伯母さん。私芳ちやん大好きさ、お湯につれていくと、乾度私にも白粉塗つて呉れるんですもの、今日何故一緒に來なかつたの、え、伯母さん？」

「芳ちやんはね、音樂會があるつて來れなかつたの。」

「學校？」

「いゝえ上野。」

「アラ芳ちやんたら甚いわ、私も一緒につれてつて呉れゝば好いのに。」

「だつて今日の音樂會はね、小供は駄目なんだとさ。」

「そいだつて芳ちやんだつて、まだ大人ぢやないぢやないの。」

「芳は好いんだとさ。」

「何故？え伯母さん。」

「うるさいねえ、彼方へおいでつたら。」

母は又眉根をしがめて見せた。二十九で五人子持ちだといふのに、平常から兎角小供をうるさがる。

奇麗に髮を丸髷に取りあげて、襦袢の半襟も紅入りのなんぞ掛けて居る。
「好いやねまあ、お前のやうにそんなにうるさがつたつて仕方がない。」
袖子は長火鉢の傍へ寄つて來て、そこいらの茶道具なんぞ見廻して居たが、モジモジした樣子で、伯母の顏を見い〳〵した。
「さあ一つ。」
伯母が菓子鉢から鹿の子としぐれと、二つはさんで呉れるのを、嬉しさうに貰つて、
「どうも御馳走さま！」云ふより早く、むしやむしやと食べ初めた。
「何て御行儀なの！本當に家の子はお行儀が惡くつて。」
「何家だつて小供は皆なだよ、だが氣をつけていやしくないやうにしつけないとね。」
「さう思つてるんですけ共ね、袖だけはもう、本當に私困るんですの。」
「母さん、もう一つ！」
「もう食べたの、早いのね、伯母さんに笑はれるぢやないか、そんな事云ふんぢやないの、好い兒だから彼方へ行つてお遊び。」
「いやだ、もう一つてば。」
「先刻伯母さんに貰つたぢやないの。」
「あんな、たつた二つ位！ようてば母さん。」
「いけません。」
母は取り合つて居られないと云つた風に、わざとそつ方を向いて見せると、

「ぢや一錢頂戴。」
「如何するの？」
と今度は伯母が訊く。
「アラ嫌だ、何か買ふんぢやありませんか、解つてる癖に、好いわ。」
「お錢なんぞ持つて、お袖ちやんは裏店の子のやうだね。」
「だから餅菓子頂戴つて云ふんだわ、それさへよこせばお錢なんぞいらないわ。」
「當り前ぢやないか。」
「だから今一つてば。」
「そんな事云へば尙やれないよ。」
「ぢや一錢！」
「うるさいつたら、本當に此兒は仕方がない、姉さん、私此兒がこんなだから全く情けなくつて、どうしたら好いんでせうねえ。」
「さうさね、お袖ちやん、母さんが心配だつて云つてるから、全くおよしよ。」
「そんな、そんな心配する位なら、たつた一つだ、呉れたつて好いぢやないの、よこしさいすりや、私だつてねだりやしない。」
「あんな憎らしい、姉さん、まあ聞いて頂戴な、どうでせうまあ、本當に困つてしまふ。」
「だからよこせば好いんだつてばさ、解らない母さんだよ本當に。」

袖子は段々母のからだに寄りすがつて、どうしたつて呉れる迄は動かないと云つた樣子だ。伯母は呆れてたゞ見て居る。

「ようてばよう、一つてば、母さんのけちん坊、けちん坊、けちん坊、だから父さんに嫌はれるんだわ咲やだつて左樣云つてた。」

「打つよ！」

「打つたつて好いわ、一つ打つたらそれだけ餘計ねだつてやるから、母さんが損するばつかりだ！」

「本當に如何したと云ふ兒だらう！」

「ようてば母さん、母さんのけちん坊、呉れなけりや大きな聲で、母さんのけちん坊つてどなつてやる、え、母さんてば、それても好い事？」

「好いよ、何とてもお云ひ！」

「母さんのけ――」

袖子は思ひ切り大きな聲で怒鳴りかゝつた。そして母と伯母の顔色を見比べて居る。

「およしつたら、サ、これをあげるから彼方へおいて！」

今の今まで强硬な態度をとつて居た母は、急に折れて、菓子鉢から大福をはさんで渡した。

「いや、こんなもの、私鹿の子が好いんだつてば！」

「だつてこれつきやないんだもの、これて嫌ならおよし。」

「おやこれてもよくつてよ。」

勝ちほこつた袖子を、伯母も母も憎々しさうににらめた。

「又俊ちやんや貞ちやんが歸つて來るとうるさいから、お前彼方へ行つて遊んどいてよ。」
「あゝ」
もう用はないと云つた風で、袖子は次ぎの間へと出て行つた。
「驚ろいた兒だね、芳がよく、お袖ちやん此頃中々きかなくなつたつて云つてたけれど、まさかあんなだらうとは思はなかつたね。」
「だから私困りますの。」
「お前が又おしまひにお負けだからいけないんだよ。」
「だつてうるさいんですもの。」
伯母はいつそはがいつたらしく思つたが、
「春樹さんに叱つて貰ふんだね。」
「えゝ、てすけれども、良人ぢや彼の通り子供なんか構ひつけない方ですから、私一人が氣を揉んですの。」
「だけ共今の内どうかしないと、とても駄目だよ、お錢なんぞ幾らねだられたつて決して持たしちやいけない、良人なんぞ本當に嚴しかつたから子供に些少もいやしいところはなかつたがね、よく春樹さんの氣象て默つて見てると思つて。全く不思議だよ。」
「それがね良人の前ぢやあんなてもないんてすもの。」
「だから告げて叱つて貰ふんだつてば、左樣てもしなけや、お袖ちやんはとても母さんの手におへる兒ぢやないんだから。」

「今から私をこんなに馬鹿にしてるんですものね、いまに芳ちやんのやうに女學校へでもあがるやうになつたら、まあどうでせう、私それを考へると恐くなりますの。」

「うつかり育てちや駄目だよ本當に、芳なんぞも此節きかなくなつた事つたらないからねえ。」

「矢張り父さんがない故爲ですねえ。」

勝氣な伯母は一寸といやな顏をした。

「人樣から後家育ちなんて後指をさゝれないやうに、一生懸命きびしくしてるんだけれどもね、矢張り私が意氣地がないから、つい駄目になつて了ふんだよ。」

「姉さんなんかしつかりしてゝ、そんなこともないんだけど、子供の敎育つて中々むづかしいものね。」

「さうとも、お互に餘程氣をつけないぢや。」

「あゝあ、もうよしませう、考へると私氣がクシヤクシヤして堪りませんわ、それよりかねえ、先刻の話ね、本多さんの口つてのは如何なの？」

「芳の緣談かい？」

「えゝ。」

「月給もかなりだしね、それに會社だから年二季の賞與を入れると、惡くない話なんだがね、どうも私氣が進まないのさ。」

「何故？」

「良人て軍人だつて故爲か、どうも桐田さんの口が好いやうな氣がしてね。」

「桐田さんの口つてのは少尉でせう。」

「少尉だつてお前、まだ學校を出たばつかりだもの、段々昇進して行くわね。」
「そりやさうだけども、それて芳ちやんは如何云ふの？」
「芳はまだ小供だもの。」
「それても芳ちやんのお婿さんですもの、一應相談して見た方が好いでせう。」
「それがね、音樂家が好いなんていつてるんだから――。」
「アレまあ音樂家とは又――」
「自分が音樂が好きなもんだから、只無暗とそんなことも云ふんだらうがね、音樂家でなきあ一生結婚しないんだとさ。」
「オヤオヤ妙ねえ芳ちやんも。」
「何も解りやしないんだよ、私が幾ら云つても聞かうとしないんだもの、春樹さんに話して貰つたら好いかと思つて、實はその相談に來たんだがね、芳は春樹さんの云ふことなら何でもきくやうだから。」
「さうね、良人て丁度留守にしていけないけど、歸つて來たら今晩にも話して見ませう。」
「あゝどうぞね。」
「何しろ早く好いお婿さんがめつかるとよござんすのね。良人ても左樣云つて、紋付の一重位祝ふなんて、芳ちやんと約束してましたつけ。」
「さうだつてね、芳がそんなこと云つたよ。まあま、何しろ早くお婿さんをさがして、安心しないちや。」
「さうですね、これてお婿さんさへ定れや姉さんも大安心だ。」

「又婿て苦勞するかも知れないがね。」
「え、誰のお婿さん？芳ちやんの？」
次ぎの間から突然袖子がこゑを掛けた。
「あゝびつくりした！お前そこで聞いてたの？」
「ねえ母さんてば、芳ちやんのお婿さん軍人さんなの？」
「あゝまだ解らないんだよ。」
「だつて少尉だつて話してたぢやないの、ねえ伯母さん、私軍人さん大好きさ、目の大きい、色の黒い、鼻の高い、ね、村田さんの小父さんみたいな、軍人さんのお嫁になりたいわ。」
「ほゝゝ、此間から頻りに村田さん〳〵つて、お婿さんの話さへ出りや、さう云つてるんですよ、可笑しな兒ねえ。」
「さうかい、お袖ちやんは何故そんなに、村田さんの小父さんが好きなんだらう、餘程好い男だと思つてるらしいね。」
「だつてね私、あの小父さんたら隨分親切なんですもの、そりやあいろんなもの買つて呉れてよ、リボンだの何だの。」
「それて好きなのかい、ほゝゝ」
「うそ、そればつかりぢやないわ。」
「ぢや何故？」
「だつてね私、何だか[illegible]云へやしないわ。」と妙な嬌態(しな)をして、小父さんたらね、私　惚れたんだつて、

何日かの晩泊つて來たてせう、あの時は、私をいろ〳〵戯弄ふのよ、私本當に極りが惡かつたわ。」

「まさか！」

伯母も母も思はず顏を見合せたが、伯母の胸には此時あることが、電のやうにきらめいた。それは市ケ谷八幡のお祭の時、此處の上の方の姉弟三人が、八幡町の祖母さんの家へ招ばれて行つて、泊ることになつたが、他の親類からの來客もあり、店はやつて居る、せまくるしくつて、ごたつくと云ふので、麴町の親類へ小供等をわけて泊らせた。村田は伯母の良人の血續きで、若い頃には可成り放蕩もしたけれど、今ではもう四十へ手の屆かうと云ふ曹長から仕上げた歩兵少尉だ。袖子は伯母と一緒に其處へ行つたが、伯母は祖母を手傳はねばならんと云つて、袖子の面倒を賴むと、直ぐ引返して歸つて行つた。

其翌日八幡町の家へ袖子が歸つたときには、村田の小父さんから買つて貰つたと云つて、リボンだの花かんざしだの、いろ〳〵なものを持つて居た。

「云ふんぢやないよ父さんに、ねえ、お袖ちやん、好い兒だから默つといてよ、可いかい、乾度だよ。」

伯母は自分の緣家だけに尙と氣を揉んだ。

「何故？云ふと叱れるの？え伯母さん！」

「さうともね！父さんに聞かさうともんなら、それこそ大變だ、ね、乾度お云ひてない。」

「あゝ云はない、恐いから。」

「本當てせうか」

「まさかとは思ふけどもね、此樣なことが假りにも春樹さんの耳に入るといけないから、お前出來るだ

け氣をつけて居て、秘密にしなきやいけないよ、お前は何でもうつかり饒舌つちやう方だけれど。」

「えゝ大丈夫ですよ——だけどもまさかねえうそでせう。」

「だけどもさ、春樹さんは一體に氣むつかしやだからさ。」

「伯母さん、私に一錢呉れないことほうづき買ふんだからさあ。」

「アレまあ此兒は、又そんな事云ひ出すの？ いけないつてば！」

「だつて私、ねえ伯母さんてば！」

「仕樣がないね、そいぢやまあ伯母さんがあげようねえ、其代りお袖ちやん、今のこと屹度父さんに内證だよ。」

「えゝ大丈夫、解つてるてばさ。」

伯母は懐から紙入れを出して、袖子の手に一錢銅貨を握らせた。

——完——

人形

野上彌生

秋晴れの日も末になつて、マルウシャは日増に重態に陥つた。我々は彼女を浮き立たせやうとしたが、その甲斐もなかつた。彼女は皆んなが悦ばせやうとするいろ〳〵な企にも露ほども氣がむかずに、どんよりした大きな眼でまじ〳〵と眺めるのであつた。私はあゝ丈けの玩弄物をその丘の上に運んで行つた。けれどもふりむきもしなかつた。

私はいろ〳〵氣を揉んで妹のロンヤに助太刀を頼んだ。ロンヤは桃色の顔をして、亞麻の美しい髮の毛をたれてゐる大きな人形を持つてゐた。これはお母様の贈物なのだ。ある日私はロンヤが獨りぼつちでお庭に居る時にロンヤに話しかけて、暫時の間その人形を貸してくれないかと頼んで見た。私は今まで人形なんか持つた事もない貧乏な子供の事を熱心に說いたものだから、ロンヤは始めはなほ〳〵人形を抱きしめて居たが、とう〳〵私に渡した。そして他の玩弄物で遊んでゐて二三日の間はその人形の事は何にも云はないツこに約束した。此盛裝の貴婦人がマルウシャの上に生じた結果は我々の豫想以上であつた。秋の花の様に凋みかけてゐた子供は俄に勢づいた。彼女はしつかり私に抱きついて樂しさうに高笑ひをして、新らしいお友達とお話をした。まあ此身を落した人形が奇蹟を働いた譯である。當分の間床を離れもしな

かつたマルウシヤが、後に美しい髮の毛の娘を引きづつて、よち〳〵歩き始めた。彼女は足もきかないのに走り廻りさへもした。

けれども人形は私にとつては大變な心配の種となつた。最初私の着物の下にそれを入れて持ち出した時に、私はヤヌウシユ爺に出くわした。彼は鋭ひ眼つきをして思ひ當つた樣に首をふりながら、遠くまで私の後をつけた。

やがて乳母やが人形は如何したんだらうかと方々探し始めた。ロンヤは乳母やを取りなし顏に、人形は散歩に出掛けたのである。ロンヤは行かなかつたが間もなく人形は歸つて來るであらう、と平氣に話してしまつたので、事は面倒になる計りであつた。召使共はこれは何でも盜られたなと云ふ事になつた。お父樣はヤヌウシユが又來たまではその事は何にも知らなかつた。けれども其日私が出かける所をお父樣はさし止めて外出してはならぬと云つた。同じ事が次ぎの日も亦その次ぎの日も起つた。そうして五日目の朝になると私は早朝に起きて垣を乘り越して、お父樣がまだ熟眠してる間に岡の上の友達の處にぬけて行つた。

岡の上は何となく打ち濕めつて見えた。マルウシヤの容體はます〳〵惡かつた。彼女は又寐込んでゐた。顏は熱で上氣せてしまつて、誰かれの見かさひもなかつた。人形は薔薇色の頰とあんけらかんとした眼をしてその側に橫になつてゐた。私はヴアレークに私の心配と懼を話して、マルウシヤの氣のつかぬ樣に人形を取り返そうと二人の間に相談が出來た。けれども旨く行かなかつた。私が病兒の抱きしめて居るのを引き放すそのはづみに、彼女は眼を開いて、二人には目もくれず、又私を見るでもなく、雨しづく泣き出して、しく〳〵聲を立てながら、熱にやつれた顏の上に、云ふに云はれぬ絕望の表情を現はしたから、私

はびつくらして人形を元に返した。少女は涙の中から微笑した、而して氣に入つた人形を抱いたまゝ又すや〳〵と眠つてしまつた。私はこんな様子では、人形を取るのは彼女の短かい生涯に於ける唯一の樂しみを奪ふやうなものだと思つた。

ヴアレークは私の方をおづ〳〵眺めて、

『さア、どうしたらいゝだろう？』と悲しさうに云つた。少女の父のチブルチウスは兩手で頭をかゝへてベンチに坐つてゐたが、彼の目をあげても の問ひたげな様子であつた。私は何でもない事の様にとり繕つてゐた。而して『心配しなくつていゝんです、乳母やはもう人形の事なんか忘れてますよ。』と云つた。

けれども乳母やはその事を忘れてはゐなかつた。私が歸る時に庭の小門のところで又ヤヌウシユに出あつた。ロンヤの目は赤かつた。乳母やは怒つた顔つきを見せて歯の拔けた歯莖の中でブサクサ云つてゐた。お父様は何處に行つてたかと聞いて、熱心に私の返事に耳を傾けて、無斷に外出する事は出來ないと云つた。私は云ひなりになつてゐた。

四日の詰らない長い日がすぎた。私は彼の岡の方を眺めやりながら、私の頭上に破裂すべき嵐を今か〳〵と待ち設けつゝ、あてどもなく庭の上をぶらついて居た。私は何がどうなるか分らなかつた。そして氣が鬱して悲しかつた。私は今まで決して罰せられた事はなかつた。お父様は私に手をかけた事もなければ叱つた事もない。けれども今はどんな目に遇ふかと心配でならなかつた。

終にある朝私はお父様の書齋に呼びつけられた。私は這入つて入り口のところに立ち留つてゐた。靑白い秋の日が室内にさし込んで、お母様の肖像畫の下の大きな安樂椅子に坐してゐるお父様の上にその光線を投げてゐた。私は胸のどき〳〵するのが聞えるほどであつた。終にお父様はむき變つた。私は一寸とゐ

父樣の顏を見上げると恐ろしかつたので、すぐと目を落した。次ぎの瞬間その石の樣なもの凄い顏つきが私を見詰めてる事を感じた。

『お前は妹の人形を取つたね?』

と其言葉は私が震え上るほどな鋭い冷い聲で話された。

『左樣です』と私は低い聲で返事をした。

『あれはお前のお母樣の贈物で、大切に保存しておかなくちやならんと云ふ事は知つてるね?お前はそれを盜んだんだ!』

『盜んだんぢやありません』と私は頭をもたげて云つた。

『いゝや!』とお父樣は椅子から飛び上つて云つた。

『お前は盜んだんだ!而してもち出した――何所へお前は人形を持つて行つた?云ひなさい!』

お父樣はつか〳〵と來て私の肩に手をのせた。私はおど〳〵して見上げた。お父樣の顏は恐ろしく靑ざめてゐた。多年の嘆きと悲しみが額の上に引いた深い皺が、めツきり際立つた樣に見えた。眼には怒りの火が燃えてゐた。これ等の眼、私の親身のお父樣の眼が、憎惡と狂氣とを語つてゐたので私はすくみ上つた。

『云ひなさい!』と肩にかけた手があら〳〵しくつかんだ。

『云ひません。』と私はさゝやいた。

『云はなくちやいかん。』とお父樣は　威す樣な聲で云つた。

『いや―いやい―や!私はいふのはいやです!』と私は再びさゝやいた。私の聲は聞えないほどであつた。

『云はなくちやいかん!云はなくちやいかん!』とお父樣は殆んどヒステリ的に繰り返した。私は彼の下

の震えるのを感じた。彼の胸の中に激しい怒りが煮え返るのを聞いた。私の頭はだん／＼うな垂れて、涙がほた／＼と床の上に流れ落ちた。その間私は『否え、云ふわけには行きません、どうしたつて、どうしたつて云ひはしません！』と繰り返してゐた。

　私の一生の中、これ程お父樣に近づいた樣な且またかけ隔たつた樣な氣のした事はなかつた。いくら苦痛を見ても白狀はしまい。私の心からあの無頼漢の群に深い同情を感じてゐる。而して私自身――淋しい、思ひ違ひをせられてゐる私自身を憐むと同じ樣な情を以て同情してゐるのである。

　お父樣はつく息も苦しそうであつた。私は頰を燃くばかりな熱い涙を流しつゝ、お父樣の忿怒のまへに縮こまつて覺悟をしてゐた。

　お父樣は腹立ちまぎれに度を失つてゐるのである。多分次ぎの瞬間には私の身體は彼の力強い手の中に握み碎かれてるだろうと思つた。けれども私は恐くはなかつた。私はお父樣を愛してゐる。そしてたとへ私の愛は打ち碎かれて、これから先の我等親子は、彼の暗い眼中に今さへ燃えてゐる激しい惡しみを以て相鬩がねばならぬかと直覺的に感じたけれども、今更恐くはなかつた。私は來たるべき大破綻を待ち設けてゐた。而して斯うした方がいゝ、それの方がずつといゝと云ふ樣な事を考へてゐた。

　お父樣は殆んど唸るやうな深い息をついた。其時突然チブルチウスの鋭い呼び聲が開け放つた窓の方で聞えた。

「やあ／＼宜い所に來合したぞ。」

　チブルチュスが來たな、とすぐ分つたけれども、彼が來たつて如何なると云ふのではない。私は恐ろしい最後の大破綻を待つてたのだ。私の肩に置かれたお父樣の手は震えてゐたが、チブルチウスが來たつて

誰が來たつて、それが爲めに今の成行きが變ろうと云ふ樣な事は私には考へられなかつた。

チブルチウスは庭口の戸を手早く開けて敷居の上に立ち止まつて、鋭い猫の樣な眼で凝つと二人を見較べた。私は生涯その光景を忘れはしない。氣味の惡い微笑が一秒間チブルチウスの青い眼と平つたい醜い顏を掠めて閃めいた。たゞ一秒時の間であつた。それから彼は持ちまへの皮肉な調子とは打つて變つた悲しさうな聲で

「やア、お坊つ樣が困つた事になつたな」

と云つた。

お父樣はいかつい顏で彼を見たが、チブルチウスはびくともしなかつた。彼は苦り切つたまゝで眼には悲しみの表情をもつて居た。

「旦那樣、貴君はまつ直なお方でございます。お坊ちやまは勘忍して上げて下さい、お坊ちやまは私共の惡い仲間に交つては入らつしやるが、決してお惡い事はなさらなかつた。お坊ちやまが私の餓鬼共に親切にして下すつたと云ふ事の折檻なら、マリヤ樣にも誓ふが、私の首をしめられてもお坊ちやまをお助けなけりやなりません、さアお坊ちやん、人形を持つて來ました。」と云ひ〳〵包みを解いて、めぐり合せの惡い人形を取り出した。

お父樣の手は私の肩から離れて、「一體どうしたと云ふんだ。」と尋ねた。

「お坊ちやまを勘忍して上げて下さい。」と繰り返して、チブルチウスは彼の大きな手で私の頭を靜かに撫でた。「貴君は決してお坊ちやまを威して何か云はせやうたつて、左樣は參りません、ですから私が何もかも申上げやうと思つて居ます、あちらへお供致しませう。」

お父樣は無言のまゝ呆れてチブルチウスを眺めてゐたが、云ひなりに連れ立つて部屋を去つた。私は又ひとり取り殘されて、腹立しい樣な、もの悲しい樣な、胸の張り裂ける樣な思に一杯になつて、そのまゝ其處に立つてゐると、再び戸が開いて二人が這入つて來た。又私の頭の上に手が置かれた。私はびツくりした。それはお父樣の手であつた。お父樣は私の髮の毛をもの優しく撫でてゐた。

チブルチウスは私を抱いてお父樣のゐる前で、自分の膝の上に私をのせた。

『岡にお出なさい、お父樣はきつと娘にお別れにおよこしになります、娘は——娘は——死んぢまひました。』

彼の聲は物を云ふ時に震えた。彼の瞼も震えた。けれども彼は行きなり立ち上ると、私を床の上に下ろして慌しく立ち去つた。

私は一目お父樣を盜み見た。此瞬間私の前には別人が立つてゐた。其所には私がこれまで見た事のないものがあつた。彼は私の方を思案げに眺めた。彼の表現は次第に和らいて、物を問ひたさうな目をしてゐた。宛も私の頭上を吹きすぎた暴風が、お父樣の心を秘め、親切な愛の眼を蔽ひ隱してゐた、深い霧を吹き晴らした樣に見えた。そして父は今こそ生れて始めて彼自身の子供らしく私をしてくれた。

私はかう云つてお父樣の手を親しげにとつた。

『お父樣は、私があの人形を盜んだんではない事が分つたてしやう、ロンャが自分で一寸と貸してくれたんですよ。』

『分つた〳〵。』と彼は尚思案げに答へた。

『私がわるかつた、全く惡かつた、ねえ、けれどもそれは忘れて吳れるだらうね?』

私はお父樣の手を握つて接吻した。その時私はお父樣が決して恐ろしい眼で私を見ないだろうと云ふ事が分つた。閉ぢ込められてゐた愛の洪水が漲り出た、私はもはや恐しくはない。

『岡へ行つてもいゝの？』と私は急にチブルチウスに誘はれた事を思ひ出して聞いた。

『あゝ、よし、お別れに行つて來るがいゝ。』とお父樣は親切な、けれども稍はつきりせぬ聲で『これ、一寸お待ち、ね、一寸。』と云つた。

彼は數分の間寢室に行つて二三枚の札を持つて來て私に渡した。

『チブルチウスに此金をおやりなさい。どうか此金を受け納めてくれと私が云つたとお云ひなさい。分るだろう、而して彼にこう云つてお吳れ。』とお父樣はためらひつゝ云つた。

『こう云ふんだ、もし折があつて、テドロヴヰチとか云ふ人を此あたりで知つてるなら、テドロヴヰチはすぐ樣此町を立ちのいた方がよかろう、と云ふんだ。さあ急いでお出で。』

私は岡の上でチブルチウスに追ひついて、息もきれ〴〵にお父樣の傳言を上手に傳へた。

『お父樣がねどうか——。』と碌に顏を見もせずに札をさしつけた。

彼はその金を受け取つて、テドロヴヰチの事を氣がかりらしく聞いてゐた。

マルウシヤは穴倉の暗い隅のベンチに橫はつてゐた。『死』と云ふ言葉は子供らしい私の心にも印象をとめた。私は死骸を見てたゞ苦い淚を流した。あはれな小さい友は、端正な、もの悲しい死顏をしてゐた。眼は閉ぢて少しおち窪んで、下に深い黑い輪が出來てゐた。半開いた口はその顏に子供らしい悲しみの表情を與へた。穴住みの人々の中先生（プロフェッサー）はその枕邊に自動機械の如く頭をふりながら立つてゐた。砲兵士官は二人の他の穴住みの人々に手傳はして、教會の屋根から引き剝いで來たよせ集めの板片や木屑で、棺桶を作つ

てゐた。

いつになくしらふて生氣なラフローフスキーは彼が摘み集めた少しばかりの秋の草花をマルウシヤの上に蒔き散らしてゐた。ヴァーレークは悲しくすゝり泣きながら、隅の方に寐轉んで絶えず震えてゐた。

それから間もなく、此奇妙な群の人々は皆ゐなくなつた。たゞ「先生」とツルケエウヰッチのみは殘つてゐたが、先生はその町をぶら〳〵死ぬるまでうろついてゐた。ツルケエウヰッチにはお父樣が時々書きものをさした。

その他の穴住みの人々は何所か他の土地に運試しをしやうとして皆立ち去つた。チブルチウスとヴァレークは不意に影を隠して誰も行衞を知るものはなかつた。又何所から來たのかも知つたものはなかつた。

古い禮拜堂はいやが上に荒れ果てゝ、屋根は落込み圓天井は押しつぶされて、建物の圍周の土地には深い裂け目が入つた。梟が夜に入るとその中で啼いた。而して青い焔が暗い秋の夜を墓の上に飛び廻つた。

けれども一つの小い墓は懇に垣にかこまれて、春が來る度に綠の芝、野の花をもつて蔽はれた。ロンヤと私はしば〳〵その小い墓にお詣りに行つた。お父樣も行く事があつた。我々は榛い木の陰に坐つて足下の市街を見下すのが好きであつた。其處で讀書したり、考へ事をしたり、若き思ひに耽つたりした。而して平和な生れ故郷を去るやうになつた時、最後の日に其岡に上つて小さい墓の上で我々の誓を交換した。

――コロレンコーの「惡き仲間」より――

多事　小栗風葉

（一）

あゝ嫌だ！私は此世へ苦しみに生れて來たのだ！と、正代は然う思ふ事が屢々あつた。そんな時には必ずノートと鉛筆とを机の上に投り出して、兩手で額を押へたものである。シン〳〵と頭の心の疼くやうな、其痛みを考へるやうにじッと目を瞑つて、此頃片方の眼が霞み出した事やら立昏みのする事やらを思ひ合せた。ひよつとしたら、此無理な努力のために體まで碎かれて了ふのでは有るまいかと考へた。

夏の日射しのカッと目も昏みさうな窓障子の下に、眞四角な一閑張の机を据ゑて、正代は其に兩肱ついた。机の上には小形な共蓋の硯石と、孔雀の羽に編針、ものさしまで挿した竹の筆筒とが載つた。四疊半の二方壁になつた、見るから暑くるしさうな狹い部屋の隅に、ギシ〳〵と色々な書物を積込んで、一方口の其窓さへ日射しが甚いので〆切つてある。

二三度も水をくゞつた中形の浴衣に細帯姿の亂次ない正代は、洗ひ髮の束髮が根下りにくづれて、煩さゝうに汗ばんだ頸に縺れかゝた。が、何うやら其を取上げるのも臆劫なやう。ジッと閉ぢた瞼から、

やがて冷たい雫がジリ〳〵滲み出ると、慌てゝ其を拭いて、烈しく頭を振つた。そして又思出したやうに鉛筆を取上げた。

太平記第三十八巻……康安二年二月……彗星は昔皇極天皇の御宇に………と前に開いた本を默讀して、皇極天皇と先づノートへ書く。さて色々な本を引ぱりまはして結局其下へ、敏達天皇の皇孫女、御名はちぬ姫、再祚して齊明天皇と申す。と小書きする。又讀む、又書く、又調べる、正代はこんな事をいつまでも續けて傍目も振らぬのであつた。

時計が十一時を打つのに氣がついて、

「あゝもう坊やが歸つて來る頃だ。」と然う思ひながら、土間へ下りて臺所へ來ると、祖母さんがお午飯の桒ごしらへをしてゐる。

「ちと手傳ひませう。」と言つても、正代は七輪の下を扇ぎはじめた。

「まあ可いわい、こんな事は年寄の爲事に丁度好い。お前はお前の大事な爲事が有るての。」と、祖母さんは言ふ。

「えゝ、でも少しは休まなきや……體も大切ですから。」

「然うとも、お前の體が壯健でなきや此處の家も亂離骨灰だ。」

祖母さんは煮物の加減を見て、鍋の蓋を打つと、腰を伸して氣怠るさうな欠伸をした。

「ですが、私も考へると嫌になつて了ふ。女が――ちやんとした親も亭主も……子まである女が、今更こんな事をするなんて、此位馬鹿げた話しが何處にあるものですか。」と正代は、毎日の極り文句を出して憤慨する。

「然うだともの、無理な話しさ、阿父さんも並の人とは違つてあゝいふ風だし、又忠夫さんも並の人とは違つとるし……そんな間へ挾まつたお前が不運さの。そりやお前の身になつたら親も亭主も立てたからうが……今になんの、何うとかなるにさ。」

祖母さんもこれ以上に慰める言葉が無かつた。

「そりや、私て見れば阿父さんの仰有るのも無理てはなし、又忠夫さんのいふ事も尤もなんてすもの、兩方立てるには何うしても私が獨立しなくつちや……それは覺悟の前てすけれど、考て見れば馬鹿々々しいわ。阿父さんも兎も角多少の財産もあるんだし、忠夫さんにも相當な技倆が有りながら、それてゐて子持の私がこんな獨立の用意をするなんて……」

正代は又かう言つて、心外さうに涙をためた。

「それがそれ、浮世といふものだわの。阿父さんのお金は、ただ積んどくだけのお金だし、忠夫さんのも、家のたそくにやならんお金だ。そこだての、家つきの娘といふものは、嫁にいつた人よりも家の治めがむづかしいだ。親にもそむくな、家も大切、亭主も立てろといふのだもの、の。可いわい、可いわい、神樣は何も彼も御承知だ。」

祖母さんの目にも涙が光つた。暫くしてから、祖母さんが又、

「だが、忠夫さんも何と思つておゐてるらの？」と聞くのてあつた。

「何と思つて居ますか……其は案じて居ませうよ。」

「然うづらか、あんな好い兒もあるでのう。」

母屋の格子戸がガラ〳〵と鳴つた。つづいてカラコロと土間を近づく日和下駄の音、かあちやん、か

あちやんと背中の上に躍りながら來る我子の聲！正代は二足三足姿の見える處まで迎へて、

「お暑うかつたてせう。」と、母にまづ聲かけた。

「なんの、道は暑いけれど、お杜の中はお前寒い位ての、道坊も下りてよう遊んだわの。」と母のお操は其處の椽端に子を下しながら答へた。

「然うてすか。さあ道ちやんお出て。」

正代は半日振の我子を待ち兼ねるやうに抱き取つた。正代の爲事を妨げさせまいと、お操は毎日、午前と午後と道夫を負ぶつては出るのてある。道夫は今年數へ年の三つになるが、遲生れて、まだ一年と少しばかりにしかならぬ。一昨年の冬東京て生れたので、此子一人は本當の江戸ッ子だと、祖母さんが能く皆に話した。

正代は子に乳房を含ませながら、可愛さうに此子まて、半日づゝも親の膝へ來ることは出來ぬ、矢ばり私の運命に連坐になつてゐるのだと考へた。いぢらしい譯だ、其子を犧牲にしてまて自分の意地を通さうとは、われながら殘酷な親だと思ふ。

「お操暑かつつらのう、さあお拭き。」と祖母さんは濡手拭を絞つて來て嫁にわたす。正代は親切な姑だと思つてそれを見てゐた。が、それは自分が爲べき役だつた、毎日／＼自分のために若い目をして子守をしてくれる。濟まぬとも氣の毒とも今更のやうに感じた。

祖母さんは皺だらけの手て、道夫の頰をつゝきながら、

「道夫や、おい、道夫や、乳甘いかい、半日かつえて來て……何うだい、こうれ。」

子は、横目て祖母さんの顏を見ながら、乳に吸付いたまゝくいゝと笑ふ。

「何うだい、嬉しいと見えるのう。」と、祖母さんもニコ〳〵。
「本當に濟みません、皆さんにこんな御心配かけて……道坊にも可愛さうですけれど……」と正代は亂次な事を言つて、
「其代り屹度成功しますわ！そして屹度御安心させます！」と心から誓ふやうに言つた。

（二）

正代の家は○○といふ、質素な小都會の場末にあつた。父は幾らかの地所と家作とを所有して、暮し向きの事は一向仲氣な境遇であつた。が、一體に氣むつかしい性質の父には、祖母さんもお操も正代も可なり苦勞をした。ことに正代の婿を迎へてからといふもの、女二人の苦勞は又別な新しい苦勞を増した。
「他人一人入ればの、何處の家でも皆然うだ。」と祖母さんは案外諦らめてるやうな事を口では言つてたが、其癖「重三（正代の父）ももう少し若い者に眼を開いて遣ると可いだけど……」と嘆ずるやうにかう言ふのも屢であつた。婿は、實利主義の養父とはまるきり反の合はぬ新聞記者であつた。其頃もう幾分か名聲も賣れてゐて、敢へて養子などに行かなくともといふのを、世話好きな人が有つて、强いるやうに橋渡しをした。年は二十六で、名は忠夫と言つた。
　功名心の盛んな、若い文筆の人は、この狹くるしい片田舍の、薄暗い生活には一ヶ月と辛抱が出來なかつた。婚禮を濟ますと間もなく、忠夫は正代を連れて上京した。それから五年にもなる今日まで、一二度歸鄕したつきり、それも落ちついて十日と家に居た事は無い。放縱な開けばなしな夫の生活も見、約しい質朴な田舍の方の生活も見知つてゐる正代は、結局それも調和の上の一策だと思つた。到底何方を何方に化する事もむつかしい。で、正代は田舍と東京との間を年に幾回と往復して、兩方の聯絡に努

めてゐたが、道夫を生むと直ぐに、養生のためにと言つてしばらく田舎へ歸つてゐた。一つは奥行きの無い都の生活にも飽きたのであつた。夫も其を機會として、何とか生活を一新しやうと言つてゐた。けれども、正代の父は其をただ其だけの單純な意味には取らなかつた。「家へ來てから五年にもなるに、家を嫌つて寄りつきもせんやうな男だ、何うせお前も欺されて子ぐるみ追歸されたんだらう。」と言つて、正代の事を馬鹿と罵り、意氣地無しと責めた。正代が甚麽に辯解しても、一轍な重三の心を動かすことは出來なかつた。

正代は自分の家でありながら、何だか他人の家に居候でもしてゐるやうな、妙な肩身の狹い日を送つた。其等の事情を訴へた書面も、度々夫の許へ寄せたけれども、いつも居所不明の附箋つきで歸つて來る。正代も始めは不審にも思ひ、心もとなくも思つた。けれども、たとひ旅行してゐるにしてもお居所位は知らせても可さゝうなものといふ位の恨はあつた。四月ばかりもこんな便無い日が續いた。父には愁らし、夫には便る寄縋も無くなつて、ふと思ひついたのは今度の敎員檢定試驗であつた。少しばかりの素養のあるのを幸ひ、何うぞして獨立の資格を得たら、父にもあゝも言はれまいし、夫の足手まといともなるまいと、然ふ決心したのである。

祖母さんの菜ごしらへて、皆が茶の間へ揃つてお午飯を食べた。默つてモソ／＼御飯を濟ますと、正代は逃げるやうにして自分の部屋へ行く。父の目に逢ふのが、消え入りさうに苦しいのである。重三は無口で常には何にも言はぬ人だ。けれども、言はねば言はぬだけ、正代では其思はくが憚られる。

こんな具合に其年も暮れて、翌年の四月には、正代も思切つて試驗の願書を差出した。試驗は九月中旬といふことに決つたが、正代はいよ／＼といふ期日の前日まで、コツ／＼とノートの反古を造へてゐた。

「何うだらうの、試驗は？」と祖母さんに聞かれたとき、正代は

「大丈夫です！」と大膽に答へた。

「何うか巧く行けば可いのう。」とお操は祈るやうに言つた。

「然うは行かんて、外に出來る人が幾らもある。」と、重三は苦い顏をしてゐた。

もとより正代も口でいふほど大丈夫には決して思つてをらぬ。けれども然う言はれて見ると、又口惜しい。

「なぜ然う行かんのでせう？」鸚鵡返しにかう言つて、父の顏を瞶めたが、母にソッと袖を引かれて、脣を嚙んだ。

（三）

九月十四、五、六の三日間、〇〇市の縣廳で愈よ豫備試驗が行はれた。正代の家から〇〇市までは二十里近くも懸隔てゝゐる。丁度用事を兼ねた父が同行することに決つて、其日の一番で出發した。乳呑兒を三日も打つ捨つて置く譯には行き兼ねるので、それも連れて行くことになつた。祖母さんや母に門口まで送られて、それから汽車に乗つて〇〇市のステーションへ着くまで、正代は全て夢でも見てゐるやうな心持であつた。ステーションではもうスッカリ夜が明け放れて、今日も亦朝から暑さうな日射しである。ステーションから電車に乘つて縣廳前の宿屋へ入ると、八時といふ旣定の時間にはまだ小三十分もある。子持であるから、なるべく便所の近い座敷をと賴んで、兎も角も部屋をきめた。表二階の方には、二三人の男の聲で無駄口まじりに頻りと試驗の話しをしてゐる。正代は直ぐに同じ受驗者であらうと推した。

筆入と硯ばかりを袱紗に包んで、正代は身輕に宿を出た。

縣廳は石の門柱に鐵扉の門構はけは〱しく嚴めしいが、建物は純日本風の屋根が幾棟も續いた。たゞ窓だけは硝子戸にして、白いカーテンがどの窓にも引かれた。

正代は譯も分らずに、其日本風の優雅な處が無上に嬉しかつた。構内の處々に、大きな松が青々と濃やかな陰を作つて、下一面の高麗芝は柔らかい絨氈のやうに廣い場を張りつめた。正面の大玄關へ行くのと、左へ行くのと、右へ折れるのと、三筋の途が芝生の間を灰色の縁のやうに匂を取つて、それには奇麗な小砂利が布かれた。

　門を入ると、正代はまづ嬉しいやうな心配なやうな、妙な、ワク〱した心持になつたが、ジッと息をこらすと、案外氣が落着いた。玄關て受付の老人に聞くと、此直ぐ左が受驗者の控室だと敎へてくれた。其處には最う十人ばかりも男の人が扣へてゐた。正代は隅つこの方の椅子にソッと腰を掛けた。見た所三十位を裾に、中には白髮のまじつた五十恰好の人も見うけた。

「や、君もまた出て來たか、能く飽きもせずに根よく來るね。」

「お互ひだよ、此處に居る人は大抵去年の古顔だ。」

「來年も亦お目にかゝらう。」

「いや、今年は何でも受ける！」

　こんな會話が人々の間に取交された。

　時間がだん〱迫つて來て、總人員は三十人近くなつたが、正代が心待ちに待つた女の受驗者は終ひまで一人も來なかつた。

大勢の中で正代が一番注意を惹いたのは、風采から、服裝から、學士とも博士とも言ひさうな一人の紳士であつた。正代は無論試驗官か何かであらうと思つた。

試驗開始の盤木が鳴ると、やがて鼠セルの古ぼけた洋服の男が出て、一同を階上の試驗室へ連れて行く。場内は、疊ならば五十疊も敷けやうと思はれる洋風の一室で、其處に三十脚ばかりのニスぬりの机が並んだ。名々が思ひ〱に席に着くと、意外にも彼紳士が受驗者の席に着いた。正代は變な氣がして、思はず口尻を歪めた。正代の席は一番後ろの隅の一脚であつたが、活字刷の問題紙が一人〱に配られる間、膝の上に手を措いて、正代は後ろから受驗者の一同をズラリと見渡した。

頒白の人、美髯の人、坊主刈の人、人樣々であるけれども、多くは小學校の先生などが、現在に滿足出來ないで、かうして可い年をしながら何かをつかまうとして手をさし伸べてゐるのだ。餘裕の無い生活と、不秩序な無理な苦學とにやつれた人ばかりだ。と然う思つて見ると、どの人も〱皆痩せて影が薄いやうに見える。氣の毒なとも思はれるし、意氣地なしだとも思はれる。

ふと問題紙の自分の前に置かれたのに氣がついて、正代は我に返つた。もう人の事どころでは無くなつた。問題紙を取上げて一通り目を通す。と、四邊はヒッソリとして了つて、名々の手にある活字刷の西洋紙がガサゴソと厚ぼつたい音を立てた。

正代が宿へ歸つたのは彼此正午近くて、まだ多數の人は場内に居殘つてゐた。宿の女中の話を聞くと、子供が待兼ねて爲やうが無いので、重三は子供を遊ばせながら電車で何處へか見物に出掛けたとの事。もう御歸りになる頃だと言つた。其中に表二階の連中も連立つて歸つて來た。通すがら正代の部屋を覗いて、

「お孃さん、何うでしたな試驗は？」と一番年上らしい男が聞いた。

「何だか一向分りません。」
「貴方は然し大丈夫でせう、あんなに早く出來てお了ひなさるし‥‥それに女の方は何うしても‥‥‥」
割が好いといふのか、と先まぐつて、正代は不快な心持がした。
「調べる事が綿密だから‥‥」と少時してから男は言つて、
「僕はもう三度目です、此方は二人共二度目です。」と後の男を振返つて、
「何しろ僕らのは運が好かつたら、一番當てやうといふのだから駄目でさ。はゝゝ。」
「そんな事はお有りなさいませんわ。」
「いや全く‥‥や、お邪魔をしました。」と氣が付いたやうに會釋をして行く。
其晩、其男は正代父子の處へ遊びに來て、二時間あまりも話し込んで行つた。矢はり此の〇〇市の某小學校に校長を奉職してゐると言つた。試驗の事についても色々話したが、其經驗からいふと、三十人の受驗者中、無事に豫備が通過するのはまづ二三人を出まいといふ。
「僕のやうに職業の片手間に勉强する者は、實際命と釣かへてすな、それでなくちや到底も受からん。だからまあ天運に任せて無理な勉强もせんのです。」と、男は終ひにかう言つた。正代は急に不安の念を高めた、試驗の容易ならぬ事、自分の肉體の事などを考へて。けれども夜はよく睡れた。
明る日も、又其明る日も試驗が行はれた。試驗場から歸る度びに父の重三は、「何うだつたの？」と必ず聞いた。正代は其たび、「大がい可いてせう。」と同じ言葉をくり返してゐた。若し不可なかつたら、其時は又何とか言ひ拔けるつもりだつた。

（四）

其十一月末、試驗の結果が漸と分つた。正代は運よくも合格の一人であつた。其頃丁度夫からも手紙が來てゐた。一年有餘の放浪生活にも飽きた、又東京でこれ〳〵の處へ家を持つたから、是非來てくれといふのであつた。正代は直ちには行かうと決心した。それには來年二月の本試驗も何うせ東京で受けねばならず、彼此丁度好い都合だといふので、正代は自分から其相談を持出した。祖母さんも母も正代の言ふ事なら一も二も無い。たゞ重三だけはちやんと自分一箇の意見を持つてゐて、何をするにも自分の信ずる處を枉げないのである。が、今度の事は重三も快く承知してくれたので、正代はすぐに上京した。無論子供を連れてゞある。家を出る時、

「ずゐ分氣をつけてのう。」と祖母さんが目をうるませて言つた。お操も

「うまく遣つておくれ、私も蔭で信神します。」と鼻をつまらせて言つた。正代は今更のやうに胸が迫つた。何だか行きとも無いやうな氣もした。

東京へ來て見ると、夫の生活は昔の如く荒んでゐた。見知らぬ新顔の書生も來た。女中も變つた。義妹だの義弟だのと、家族はなか〳〵賑やかであつた。

翌年の二月、文部省で本試驗が行はれて、同月の廿六日には愈よ白か黑かの成績が發表されることにきまつた。其方法は、廿六日の朝、文部省裏門前の掲示板に及第者の名前が出されるといふのである。其日は夜の明けるのをまちかねて起きた。朝飯が濟むと、正代は書生を走らせて、自分の名前の有無を見屆けさせた。

「お目出たうございます。」と言つて書生は歸つて來た。

「然う、本當ですか?! まあ好かつた！」

正代は今更に狂喜した。

それから一時間經つか經たぬに、正代は土のやうな顔色をして、茶の間に突伏してゐた。彼女は涙も出ぬほどの悲しい知らせに接した。

あゝお祖母さんは死んだ！

「隨分氣を付けてのう。」と言つた其聲がまだ耳に殘つてゐる。

手は父の手で、手紙の文句は極簡單である。明日は最う初七日になるけれども、お前の試驗を妨げまいと思つて、故と通知しなかつた。知りつゝ死目に合はせぬのは、私も誠に愁かつたが、これも定まり事なら爲方も無い。試驗が濟んだら直ぐ歸れといふのであつた。

正代は行李も早々に慌てゝ田舍へ歸つた。彼女の心には何事も省る暇が無かつた。其身重である事をすら忘れてゐた。まだ二七日も來ぬ中に、正代は果して流産をした。

東京神田表神保町 東京堂
仝 神田裏神保町 上田屋
仝 京橋尾張町 東海堂
仝 京橋元數寄屋町 北隆館
仝 本郷本富士町 盛春堂
仝 京橋西紺屋町 良明堂
仝 日本橋本石町 至誠堂

關西大賣捌所
大阪東梅田町 盛文館
仝 京町堀 太華堂
京都佛光寺 東枝書肆

中央公論 廣告料

一行(五號文字二十四字詰)	一回	金參拾錢
半頁	一回	金八圓
一頁	一回	金拾五圓
表紙の二、三、一頁	一回	金貳拾圓
表紙の四	一回	金貳拾五圓

廣告一手取扱 神田三河町一丁目 博報堂

本號に限り定價金卅錢 郵税金貳錢

郵税拾錢(但清國を除く)

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓七拾貳錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓參拾四錢
以上郵税共		

▲但し特價號は規定以外に代金を申受くべし▼

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし
一弊社振替貯金口座は東京三十四番なりこれにより御送金の方は登記料壹錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし
一郵券代用は必ず壹割増に送らるべし
一前金切の節は帶封に朱書いたすべし次の前金を送られざれば其號限にて發送を止むべし
一領收證を出さず認まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十三年十一月廿九日印刷納本
明治四十三年十二月一日發行
(禁轉載)

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 天野耕一

發行所 東京市本郷區駒込西片町十番地 反省社
振替口座東京三十四番 電話下谷九一九 電信略號ハンセイ

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場